わんぱく公子

山手樹一郎長編時代小説全集＝41

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井冨士弥

住んでいる汚い町、乗っている混雑した電車、それからむちゃくちゃな税金——それらは結局国へ対する無力なわが身へのいきどおりにつながる問題になるだろう。が、もしもあなたが、お大名——ではピンとこないのなら、現代の日本に合ったところで、そう、さしずめ〝総理大臣〟になったとしたら？　そういうゲームを、ただのウソ話のバカバカしさでしらけさせないで、その気にさせて読ませてくれるのが本編だ。

腰に一本〝天下御免〟葵紋散らしの小刀だけの着流し姿で、あなたがこの世の中へ——江戸の巷へブラリと出て、権力に物言わすやつ、グレン隊を無敵に粉砕することができたら、これ以上のたのしさはない。——なにしろ、あなたはいま、天下の〝総理大臣〟なのだ！

山手文学の大きな特長の一つは巧妙老練な語り口にあり、いつの間にか作中の主人公に変身させられたあなた自身を発見していることだろう。——無類にたのしい若さまものの傑作！

山手樹一郎長編時代小説全集＝41

わんぱく公子

春陽堂

わんぱく公子

山手樹一郎長編時代小説全集＝41

春陽堂

春陽堂●定価520円

0193-200441-3066

わんぱく公子

山手樹一郎長編時代小説全集

41

わんぱく公子

山手樹一郎長編時代小説全集

41

春陽堂

春陽堂

わんぱく公子

山手樹一郎長編時代小説全集

41

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
*郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

わんぱく公子

浜町の火薬

「上さま、鶴に五千石ほどの捨て扶持と、手ごろの屋敷を一ついただきたいと思います」

鶴七郎が父家斉にそう願い出たのは、二十一の時であった。

「どういたす気かな」

将軍家斉は年の数ほどある子女の父親だが、そのうちでも優れた気性を持っている鶴七郎の顔をながめながら、またなにを思いついたのかと言いたげに微笑した。

「鶴はこれまで上からばかり世の中を見てきました。こんどは少し下から世の中を見てみたいと思います」

「物好きを申すのう。ただの思いつきならやめにいたせ。おなじことである」

将軍も若いころ、時々そんな夢を見たことがある。血は争われないものだと思った。

「いえ、ただの思いつきではございません」

鶴七郎は若さに輝く目をして、いくぶんはにかむような顔をした。

「ほう、なにか考えがあってのことと申すのだな」

「はい」

「申してみなさい」

「高いところにいる人間より、低いところにいる人間のほうがはるかに多いのです。その人間たちが、なにを考え、なにをたのしみ、なにを苦しんでいるか、自分の目で見てきたいと思います」

「それを見て、どうしようというのかな」

「はっきり申し上げるのは恥ずかしい気がいたします」

「遠慮なく申してみなさい。男の子ははにかむものではない」

「では、申し上げます。上さまを下々ではどう見ているか、上さまのお政治が下々へどこまで行きわたっているか、それを見たいのです」

たいへんなことを考えるものだと、将軍は内心目をみはった。

しかし、よく考えてみると、この子はもう子供ではない。自分の立場から世の中の裏と表を見て、なにかあきたらぬものを感じ、自分の立場をもっと下のほうへ移して、そこから本当のものをつかみたい、本当の世の中の姿を見てみたい意欲に駆られてきたのだろうと気がついた。

――悪いことではない。

自分は将軍たるべき身に生まれてきて、そういう自由は許されなかったが、鶴七郎はいずれ諸侯の家へ押しつけられて、大名の列に加わる身分なのだ。自分にできなかった自由を、望みを、この子に与えてやろうと、将軍は思った。

「鶴、徳川には徳川の祖法というものがあって、一度そういう身分がきまると、また城へもどるということは難しい。それでよいか」

「はい、鶴は一生無位無官、下の世界から上さまをおなぐさめできれば、それでよいと覚悟しております」

「さようか。後悔せぬとなれば、考えておいてつかわそう」

松平鶴七郎が五千石の旗本格となって、浜町に屋敷を得たのは、それから間もなくだった。

が、鶴七郎の本当の目的は、ただ世の中が見たいだけではなかった。当時江川坦庵、高島秋帆らによって新しく紹介された西洋流の砲術の威力を知り、自分で強力な火薬を作ってみたいと思いついたのが、自由の身になりたいそもそもの動機だったのだから、浜町へ移ると間もなく、鶴七郎は江川について、そのほうの勉強をはじめた。

そのすきには、街を一人歩きするには、どうしても自分で自分の身をまもらなければならないから、そのころ小野派一刀流の名人といわれた

浅利又七郎について、十分剣術の修業もした。

「うちの若さまもいいが、火薬いじりだけは困ったものだ。一つ間違うと、主従もろとも屋敷ごと、あっという間に吹っ飛んでしまう」

用人棚橋茂右衛門はよくそう言ってこぼした。茂右衛門は鶴七郎がまだ子供のころからの守り役で、城を出る時にいっしょについてきたのだから、もう六十に近い。

屋敷にはこの茂右衛門老人を筆頭にして、あらたに召し抱えた給人、小者が二十人あまりいるが、女は一人もいなかった。

鶴七郎の生母はお松の方という愛妾で、容色がすぐれている上に、聡明のたちだから、いまだに将軍の寵愛をうけている。

そのお松の方から茂右衛門が聞いたところによると、鶴七郎が城を出たいと言い出した時、将軍はお松の方に、

「鶴は女を近づけたがらぬのか」

と、聞いたそうである。

「はい、御気性からお体つきまで、上さまそっくりでございますが、それだけは――」

後はわざと言わずにわらっていると、

「かたわではあるまいな」

と、さすがに親心で、それを心配した。

「いいえ、お行儀がよろしいのでございましょう」

「さようか、それならよいが、どこまでも変わり種だのう」

将軍はそう言って苦笑していたそうである。

凝り性の鶴七郎にすれば、女いじりより火薬いじりのほうが、そのころはよっぽど興味があったのだろう。

おもしろいのは、茂右衛門は鶴七郎の火薬いじりをあぶながったが、ある役人たちは鶴七郎が城を出た当座、鶴七郎自身を火薬のようにあぶながったことだ。

「下から政道を見たい」

その言葉がどこかからもれて、それをまとも

に取ると、役人の不正、不行き届きは無論、その手腕までさぐられそうだからである。

しかし、それからすでに三年、浜町で火薬はまだ一度も爆発したといううわさも聞かないので、敏感なわりに忘れっぽいのも世の常で、いつの間にか、そんな公子があったことさえ忘れかけていた。

そのころになって、鶴七郎の火薬熱も、いくらか行き詰まりがきた。普通の火薬より強力なものを作るなどということは、だれがやったにしてもそう簡単にできることではないのだ。

梅が散って、やがて花に間もない一日、鶴七郎は一人で庭を歩いているうちに、ふらりと、裏口から外へ出てみる気になった。

黒羽二重の着流しに、わき差しだけを帯し、庭下駄ばきという無造作な姿である。

裏口の外はすぐ大川端で、春の潮が満々と藍をたたえ、かもめが白い翼を昼下がりの日に輝かせながら、幾羽となく飛び交っている。この辺はずっと大名屋敷ばかりだから、あまり人通りもなく、のどかな道である。

鶴七郎は歩くともなく両国橋のほうへ歩いていた。

元柳橋をわたると、左は薬研堀で、まっすぐ行くと川端に水茶屋がならび出し、すぐそこが両国広小路の盛り場になっているから、人通りが急に多くなってくる。

その水茶屋の一軒から、ふいにやくざらしい男が三人、紅たすき赤前垂れの水茶屋女の両手をつかみ、肩を押して、声高にわめき散らしながら往来へ出てきた。

「どうぞお許しくださいまし」

「だからよう、親分の前へ行って、一言あいさつをすりゃいいんだと言っているじゃねえか。わからねえ女だ」

「はい、それはきっとまいりますから、ねえさんのもどりますまでお店が留守になりますから、どうぞ待って――」

「ならねえ。店が留守になろうがなるまいが、そいつはこっちの知ったことじゃねえ。おとなしくいっしょに来ねえと、ためにならねえぞ」
　いやがる女を無理に引っ立てて、鶴七郎が前に立っているのを見ると、
「お武家さん、じゃまだ。どいてくんな」
と、一人がいきなり片手で押しのけて通ろうとした。
「待て――」
　鶴七郎がひょいとその手首をつかみとめる。
「おや、お若いの、お前さん加納徳一家にたてをつく気かね」
　やくざは手首をつかませたまま、ぎろりとすごい目をむく。
「その加納徳一家というのはなんだな」
　鶴七郎がおっとりと微笑する。
「この野郎、てめえはよっぽど、とうしろうなんだな。一体、どこのどぶからそんなのっぺりした顔をしやがって、のこのこはいあがってきやがったんだ」
「そのとうしろうというのは、どぶに住んでいるのかね」
　もう往来ができないほどたかってきた野次馬が、げらげらわらい出す。
「おんや、この野郎め」
　やくざはちょっとあきれた顔をしながら、
「この手を放さねえか、いい気になりやがって」
　ふいに、力一杯つかまれた手を振り切ろうとした。
「静かにせよ」
　鶴七郎はびくともさせず、
「もう一度、その加納徳一家というのから話してみてくれ。その方どもの言うことは、わしには一向わからぬ」
　と、あくまでもおっとりと落ち着きすぎている。
「虎兄い、かまわねえからやっつけちまえ」
「なにをぐずぐずしているんだな。そんな色の

生っ白い若僧の一人ぐらい、なんでもねえじゃねえか」
　うしろで女をおさえている仲間二人が、口々にけしかけてきた。
　おさえられている女は、十七、八でもあろうか、まだ初々しい素人くさい娘で、いまにも泣きそうな顔をして、鶴七郎のほうを見ている。
「これ、そこの両人、娘を放してやりなさい。大の男が二人がかりで、女をいじめるものではない」
「あんなことをぬかしやがる。兄貴、どうしたんだ」
「よし、任せておけ」
　虎やくざは顔を真っ赤にして、
「さあ、この野郎、本気で相手になってやる」
　と、あいた右手でぎらりとふところの匕首を抜いた。
　とたんに、鶴七郎がすかさずつかんでいた左手を逆にねじあげたので、
「あいてっ、こん畜生」
　虎やくざはたわいなくくるりと仲間のほうを向く形になって、思わず悲鳴をあげる。
「おやあ、味なことを――」
「かまわねえ、やっつけろ」
　仲間の二人は、今は娘どころでなく、血相を変えて手に手に匕首を抜いた。
「これ、乱暴をしてはならん。そんなものを抜くと、その方どもがけがをするばかりだぞ」
「なにをぬかしやがる」
「てめえの土手っ腹へ風穴をあけてやるんだ」
　二人は匕首をかまえて突っかけようとするが、その度に鶴七郎が虎やくざの体をそっちへ向けるので、どうにも飛びこめない。
「兄貴、じゃまだ」
「あいてっ、――あぶねえ」
「どけ、兄貴」
「あぶねえ、――あいてっ」
　奴凧のように左右へ踊らせられる虎やくざこ

そ、いい面の皮である。
「そうれ、持ってまいれ」
折を見て鶴七郎が、一人の仲間のほうへ虎やくざの弱腰をけってやる。
「わあッ、あぶねえ」
ふいをくらった二人は、どすんとはち合わせをして、折り重なってひっくりかえる。
「くたばれッ」
それと見た一人が、匕首を胸にかまえて、体ごと猛然とぶつかってきた。
ひらりと身をかわしながら、鶴七郎はとっさに相手の向こう脛をけりつけたので、
「あぶねえ」
そいつは自分で声をかけながら、火の出るように前へ突んのめっていって、急には起きあがれないようである。
野次馬どもがうれしがって、どっと手をたたいている。

「これ、ここはお前の店か」
鶴七郎は娘の前へ行って、やさしく声をかけた。
「は、はい」
「わけが聞きたい。入ってもよいか」
「どうぞ、——どうぞお入りあそばして」
まだ青い顔はしているが、芯はしっかりした娘とみえて、しとやかによしず張りの店の中へ鶴七郎を請じる。
中は土間になっていて、床几を二つばかりおき、一方についたてで仕切って、座って休む床もできている。狭いながらもこぎれいにこしらえてある店だ。
「これが水茶屋というのだな」
鶴七郎は珍しそうに見まわしながら、床几の一つにかける。
「お武家さま、ただいまはあぶないところをお助けくださいまして、ありがとうございました」
娘は土間へひざまずいて、心から両手を仕えようとする。
「いや、立ちなさい。着物がよごれる」
鶴七郎が制しているところへ、
「浪江さん、どうしたの」
入り口ののれんをかきわけて、これはまた二十二、三とも見える、思い切って江戸前の年増が、威勢よく飛びこんできた。
「あら、お武家さま、失礼いたしました。浪江さん、助けていただいたって、このお武家さま」
「はい、おねえさん、どういたしましょう。加納徳の一家が押しかけてまいりまして、なぜ顔出しをしないのかと、あたくしをつれていこうとするのです」
「三人だったんだってね、相手は。虎と、熊と、般若が、いまあっちへ血相変えて逃げていくのを見たから、あの野郎ども、どうしやがったのかしらと思ったら、うちで暴れた帰りだって、おしげさんが教えてくれたんで、いそいで帰ってきたんです。——お武家さま、本当にありがとうございました」
女は改めて鶴七郎の前へ、ていねいに小腰をかがめる。が、その張りのある目は、この辺では見なれない鶴七郎の貴公子然とした顔、姿を、ふしぎそうにまじまじとながめている。
「おねえさんはここのあるじか」
「はい、松葉屋のお蓮と申します」
「お蓮ねえさんは、なかなか強そうだな」
「あんなことを。——若さまはどちらのお方でござんしょう。ついぞお見かけしたことがございませんけれど」
「わしはこの近所の鶴と申す者だ」
「あの、鶴亀の鶴でござんすか」
「うむ、首の長い、羽根の白い鶴だ」
「おつむが赤くございませんのね」
そこは稼業柄、平気でそんな冗談がいえる。
「ああ、丹頂か。あれは屋敷へおいてきた」

鶴七郎はにっこりしながら、これはおもしろい女だと思った。
「ほ、ほ、すみにおけない若さま」
「うむ、わしはこれでなかなかすみにおけぬ。加納徳と申す者も、すみにおけぬ男のようだな」
「あいつは土地の毒虫、悪党でござんす」
「ふうむ、悪党か」
「御存じないんですか。若さまは御近所にいらして」
「知らんな」
「加納徳五郎という浪人者あがりの親分で、この西両国を自分勝手になわ張りにしてしまったんです。前の親分の信濃屋(しなのや)善六さんの時はそんなことなかったんですけど、この世界は強いが勝ちで、腕ずくだもんだから、加納徳は善六親分をやみ討ちにして、ここを自分のものにしてしまったんです」
「そうか、そんなに強い親分か」
「ただ強いばかりでなく、欲張りで、悪どくて、この土地で稼業をする者は日銭を五十文ずつ出せといって、毎日取りにくるんです」
「なるほど――」
「出さないと、小屋をたたきこわされるか、ひどい目にあわされるもんですから、みんな泣き寝入りなんです」
「どうして町奉行所へ訴え出ないのかね」
「そんなことをしたら、それこそ殺されちまいます」
「そういうことを、町方の者は知らずにいるのか」
「さあ、どうなんでしょう。耳へは入ってるんでしょうけど、相手が命知らずですし、それに、そういうほうへは抜け目なく鼻薬がまわってますからね、見て見ないふりをしているほうが得なんでしょ」
「なるほど、損をするのはお蓮ねえさんたちばかりということになるわけか」
「そうなんです。この人はうちの裏の浪人さん

の娘さんで、おっかさんが弱いもんですから、なにか働きたいというんで、今日からお店を手伝ってもらうことになったんですけど、新しく働く者は加納徳のところへあいさつに行って、五十文出さなくちゃいけないことに、このごろきまったんですって。バカにしてるわ。そんな五十文が出せるくらいなら、なにも働きに出やしないし、おっかさんの薬のほうが先じゃありませんか。こんなおかしな世の中ってあると思いますか、若さま」
　浪江は黙って、そでで目をぬぐっている。
「もっともである」
　鶴七郎は大きくうなずいて、
「憎いやつだな、加納徳という者は」
と、どこか言うことがおっとりしている。
「ただ憎いだけなんですか、鶴若さま」
「うむ、奉行によく申し聞かせておこう」
「おあいにくさま。そんなことが、高いところのお奉行さまの耳へ入るまでに、この店の中はたたっこわされて、あたしも浪江さんも加納徳のところへつれていかれちまうでしょうよ」
「なるほど、それは大変だな」
「いいえ、いいんです。あたしはこの人だけ逃がして、こっちから加納徳のところへ押しかけて、火をつけてやります。両国かいわいの人が手をたたいてよろこぶわ、きっと」
　できればそうしてやりたいという加納徳への憎しみが、ついそんな言葉になって出てくるのだろう。お蓮の顔へ、花が咲いたように血の気がさしてくる。
「たのもしいな、お蓮ねえさんは」
「若さまは男のくせに、ちっともたのもしくないんですね」
「なるほど――、あいにく、わしは今日刀を忘れてきているのでな」
「なんでしたら、あたしがちょいと行って、取ってきてあげましょうか」
「そうだなあ」

鶴七郎がまたしてもにっこりした時、
「おい、みんな、ここだ、ここだ」
と、表でだみ声がして、さっとのれんから顔を出したのは、さっきの虎やくざである。
「野郎、まだいやがったな。さあ、表へ出ろ」
「虎か――」
「何をぬかしやがる。出ろったら、早く出ろ。加納徳親分の御舎弟で、人切り伝九郎さまがわざわざてめえの首を切りにお出向きくだすったんだ。ふっ、ふっ、おもしれえことになるぜ、こいつは」
　虎やくざは一人でよろこんで、ひょいと首を引っこめる。
　表はなにかしんとしているようだ。
「たいへんだ、若さま」
　思わずお蓮の顔から血の気がひいたようである。
「どうしたな、お蓮ねえさん」
「人切り伝九郎ってやつは、親分の加納徳より強いんです。今まであいつの手にかかったやつが、何人いるかわからないんですって。若さま、泳げますか」
「うむ、少しはな」
「じゃ、ここから川へ飛びこんでお逃げなさいまし。早いほうがようござんす」
「後でそちらが困らないのか」
「いいえ、わたしどもは女です。なんとか謝ってすませます。若さまはお刀がないし、間違いがあっては、お屋敷で心配します」
　口は伝法だが、いざとなるとちゃんと女心を持っているのが、鶴七郎にはなにかうれしい。
「いや。心配いたすな。そういうやつなら、わしがちょっとしかってつかわそう。そちたちはけがをするといかんから、ここから出ぬがよい」
　鶴七郎はわらいながら立ち上がる。
「大丈夫ですか、若さま」
「大事ない」
「やいやい、なにをぐずぐずしてやがるんだ。

伝九郎さまがお待ちかねだぞ、早く出てこねえか」
　虎やくざがぬっと雁首(がんくび)を突き出して、憎体にわめき立てる。
「せくな。いま行ってつかわす」
　鶴七郎は、虎やくざが首を引っこめると同時に、すっとのれんの外へ出る。
「そら出たっ」
　やくざどもが七、八人ぱっと左右へ飛び散る。正面の材木屋の前へ、着流し雪駄(せった)ばきで突っ立っているのが伝九郎というやつだろう。いかにも世をすねたといったすさんだ面がまえで、じろりと冷たい目をこっちへ向ける。
　鶴七郎も黙ってそやつの目を見かえした。
　遠まきの野次馬どもも、近くのやくざどもも、すわこそと息をのむ。
「お主、どこか旗本のバカさまらしいな」
　伝九郎が低い声で嘲弄(ちょうろう)してきた。
「そちはだれかな」
　鶴七郎がおっとりとやりかえす。
「身共は加納徳の用心棒、大倉伝九郎、人呼んで人切り伝九郎という大すね者だ」
「さようか。棒使いか」
「なにッ」
「棒は持っておらんようだな」
「ふ、ふ、案外いい度胸のようだ。世にめくらへびぐらい怖いものはないでな」
「長虫はあまり好まぬ。生まれつきであろう」
　にっとわらってみせる鶴七郎だ。
　その少しも恐怖というものを感じていない大らかな態度に、伝九郎もいささか勝手が違ったらしい。
「おい、そろそろ抜いたらどうだ。身共は長ぜりふはきらいなたちでな」
「さようか。やはり、長いものはきらいか」
「なにッ」
「あいにく、わしは長い刀は屋敷へ忘れてきた。丹頂といっしょにな」

「忘れてきても遠慮はせぬ。抜け」
伝九郎が柄に手をかける。
「抜くと、けがをするぞ」
「けがではすまぬ。貴様の首だ」
「さあ、どっちかな。その方の獄門首のほうが先かも知れぬな」
「うぬッ」
伝九郎がさっと抜刀する。

両国の自身番

「来るか」
鶴七郎は相手が抜刀するのを見ると、庭下駄をぬいで、きらりとわき差しを抜きあわせた。
その動作が見た目になんとなくゆっくりしているので、野次馬たちはひやりとしながら息をのむ。冷酷無残な人切り伝九郎が、一挙に躍りこんでいけば、それきりの命のように思われたからだ。
が、伝九郎は一刀を青眼につけたまま動かなかった。いや、動けなかったのだ。
――うぬッ。
むろん、情け容赦のある男ではなく、ただ勝ちさえすればいいと考えているやつだから、すきがあれば一気にかたづけたかった。
しかし、動作は普通より多少間のびはしているが、じっとこっちを見すえている鶴七郎の目にも、気魄にも、みなぎるようなものがあって、五分のすきもない。無理に仕かけていけば、いつでも臨機の太刀が応変に出る。うまくいって相打ちだし、へたをすればこっちが切られそうで、どうにも手出しができなかったのだ。
――恐ろしいやつ。何者だろう。
こんなふしぎな剣に出会うのは、伝九郎もはじめてである。まるっきり、常人とは心構えが違うようだ。一尺五寸ほどの小刀でぴたりとつけた青眼の構えは、至極冷静で、少しも恐れというものを知らぬ。言ってみれば、この若さですでに名人の域に達しているのだ。

――くそッ、そんなはずがあるものか。
人切りと人に恐れられ、自分でも真剣を持たせれば天下に恐れる敵なしと自負して、その自負はただのうぬぼれではなく、何十度という真剣勝負の体験から得た自信なのだが、この相手にだけは、たしかに位負けがしている。
二尺一寸の大剣が、一尺五寸の小刀におさえられて、どうにも動けない。
「えいッ」
満身の力をふるい起こして、気合いと同時にぐいと構えをくずしに出たつもりだったが、その実、足は少しも出ていなかった。
むしろ、無言の敵のほうが、すっと半歩前進している。しかも切っ先がぴたりとこっちののどへ吸いついて、いまにもだっと疾風の突きを入れてきそうな気ぐみが目の色でわかる。
「おうッ」
それは敵の気ぐみをくじくための、必死の気合いだった。
若者の目は星のように輝き、またしても無言でじりじりと前へ出てきた。
いまにも白刃が火花を散らしそうな気配に、見ている野次馬どものほうが冷や汗をかいて、息をのんでいる。
すぐそこの広小路から流れてくる猥雑な見世物小屋の囃子さえ空々しく耳につくだけで、この一郭の青白く緊張し切った空気は、音もなく雑念も一切うけつけようとはしない。あるものは火のように燃えさかっているすさまじい死闘の炎だけで、何十人という人の魂がその炎に吸いよせられて、最後の一瞬を恐怖の目で待っている。
五、六人そこにかたまって見ている加納徳の子分たちも、今はまったく我を忘れているようだ。
「おうッ」
伝九郎は刻々と迫ってくる磐石の切っ先に切羽詰まりながら、ついに死に物狂いの太刀をさ

っと振りかぶった。むろん、捨て身の切りこみをかける動作だったが、それより一瞬早く、
「えいっ」
鶴七郎の口から初めて激しい気合いがかかって、飛鳥のごとく躍りこみざま、あざやかに伝九郎の籠手を切りおとしていた。
「わあッ」
伝九郎はたわいもなく、そこへどすんとしりもちをついている。
「あっ、やった」
「それ、たたんじまえ」
それと見た子分たちは、口々に声だけは景気よく騒ぎ出したが、
「その方どももまいるか」
くるりと鶴七郎がそっちを向くと、世の中で一番強いと思っていた人切り伝九郎でさえかなわぬ相手なのだから、みんな青くなって、じりじりとしりごみをし出す。
「これ、早く帰って、加納徳にそう申しておけ。後からすぐわしが掛け合いに参るから、待っておれとな」
「畜生、おぼえてろ」
子分たちが人ごみの中へこそこそと逃げ出すのを見て、鶴七郎は刀をぬぐって鞘におさめ、ぬぎすてておいた庭下駄をはいた。
「若さま」
のれんのかげから、お蓮と浪江が、青い顔をして走り出してくる。
「おけがはございませんでしたか」
「あたくし、どうなるかと思って」
「心配いたすな」
鶴七郎はもうおっとりした顔にかえってわらいながら、
「両人、わしといっしょにまいれ」
と、両国橋のほうへ歩き出そうとする。
「どこへ行くんです、若さま」
お蓮がびっくりして聞く。
「まあ、ついてきなさい。お前たちの身の立つ

ようにしてつかわそう」
「だって、お店をあけっ放しにはできませんもの」
「店より体のほうが大切ではないのか。ここにいると、暴れ者がまいって、こんどは二人ともつれていかれてしまうぞ」
そう言われてみると、このごろのさばりきっている加納徳一家のことだから、そんなことは絶対にないとはいえない。
「どうしよう、浪江さん」
「あの、あたくしお留守番をいたしましょうか」
「なに言ってるんですよう。二人でいてさえあぶないのに、浪江さんだけおいていけますか、――ようござんす、若さま、どこへでも二人でお供いたします」
「それがいい、そう長く手間は取るまい」
鶴七郎は先に立って歩き出した。
「まさか、若さま、三人で加納徳一家へなぐりこみをかけようっておっしゃるんじゃないでしょうね」
お蓮は鶴七郎と肩をならべながら聞く。
「次第によっては、そうなるかも知れぬ。おねえさんは怖いか」
「若さまといっしょなら、怖くなんかありません。若さまは本当にお強いんですね」
「いや、伝九郎とか申す棒のほうが弱かったのだ」
やがて、両国橋の橋たもとへ出て、にぎやかな通りを向こう側へ突っ切っていく。そこに広小路の自身番があるのだ。
「これ、だれかおるか」
鶴七郎はそこの腰高障子をあけて、中へ声をかけた。
「へえ、どなたさま」
顔を出した番太郎が、鶴七郎の変わった身なりを見て、不審そうに小腰をかがめる。
「町年寄りは詰めているか」
「へえ、ちょうど定町回りのだんなもお見えに

なっております」
「さようか、それはちょうどよい。お蓮、浪江、ついてまいれ」
鶴七郎は二人をうながして土間へ入る。
「怖いなあ、若さま」
こんなところはあんまり気持ちのよくない女たちだから、二人はおずおずと鶴七郎についてはいる。
ちょうど北の定町回り同心下条市兵衛がまわってきて、土間の向こうの切り落としの座敷で、町年寄りたちを相手に話しこんでいるところだった。
「これ、年寄りども」
「はい、どなたさまでございましょうか」
鶴七郎は土間へ立って座敷へ呼んだ。
町年寄りの一人が、常人でないと見て、いそいで上がりかまちへ出てきた。
「わしは浜町の鶴だ。存じているか」
「鶴と申しますと——」
「わからなければ、浜町の火薬とおぼえておいてくれ」
「浜町の火薬さまでございますな」
奥で、はてなというように下条が目をみはっている。
「御用はなんでございましょう」
「当地に加納徳一家というものがあるのを、その方ども存じておるか」
「はい、米沢町三丁目に住まいいたします土地の顔役でございます」
「顔役とは無職者のことか」
「はい、俗に申す親分稼業の者でございます」
「親分稼業のなわ張りというものは、だれがきめるのか」
「はい」
改めてそう聞かれると、そんなものは掟書きにも出ていないのだから、町年寄りも答えようがない。
「加納徳は西両国を自分のなわ張りと称し、この土地で稼業をいたす者は一軒につき日銭五十文を出すようにときめ、毎日子分どもが集めにまわっているそうだが、存じているか」
「はい」
「水茶屋などで、新しく働きに出る女は、五十文持参して加納徳の家へあいさつにまいる取りきめもあるそうだな」
「はい」
町年寄りの額へ脂汗がにじんでくる。
「そちを責めるわけではないが、——存じているのか、いないのか、はっきりと申せ」
「はい、どうしたものかと、手前どももいろいろ心配しているところでございますが、なにぶん相手は無法者の寄り集まりでございまして、へたに手をつけますと、なにをやり出すかわからぬものでございますから」
「さようか。世の中に無法者というものは絶えぬものだ。しかし、手がつけられぬからと申して、ほっておいては善良な市民たちが泣くばかりである。いまもこれなる松葉屋のお蓮、浪江の両人が、加納徳一家の者どもに難題を持ちかけられていたから、わしが助けてつかわしたが、このままわしが屋敷へもどってしまえば、おそらくまたいじめられる。天下の法をもってしても手をつけかねるやつなら、いっそわしが成敗してつかわそうと存じ、一応自身番へことわりにまいった。わかったであろうな」
「はい」
「それでは、これから加納徳のもとへまいるから、その方案内せよ」
あっと町年寄りは目を白黒させて、急には返事ができない。
「しばらくお待ちを願います」
もう黙っている場合ではないから、下条市兵衛がそれへ進んで両手を仕えた。
与力の出世頭は吟味与力、同心の出世頭は定町回りといわれ、十年から十五年の年季を入れなくては江戸の定町回りにはなれない。それだ

けに、定町回りは一口に八丁堀のだんなといわれ、みんな目から鼻へぬけるような利け者ばかりだ。
「高いところから失礼いたします。手前は北の配下にて定町回りを相つとめます下条市兵衛と申す者、お見知りおきを願います」
「うむ、見知りおくぞ」
「ありがたき仕合わせに存じます。つきましては、おしのびと存じあげ、わざとあれに控えおり、委細うけたまわって赤面いたしておりました。ただいまの儀は、まったく手前どもお役をおおせつけられております町方の者の過怠、まことに申し訳ございません」
「さようか。気がついてくれれば、庶民のためにもなによりである」
「恐れ入りました。加納徳の儀は、下条市兵衛役目にかけて、必ず仕置きつかまつります。今日のところはなにとぞお見のがし下しおかれますよう、いくえにも懇願つかまつります」
「相わかった。しからば、そちに任せよう」
「かたじけのうござります」
「手にあまることがあったら、いつでもわしの屋敷へ駆けこめ。助太刀してつかわすぞ」
たかが一博徒の親分の仕置きに、町奉行所を笠にきている定町回り同心が手を焼くことなどありえないが、加納徳がどんなことでもっと上の役人に引っかかりがないとはかぎらない。そういうことで困ったら、いつでも来い、口をきいてやるという心だ。
相手が公子松平鶴七郎なのだから、この一言は市兵衛にとって、百万人の味方を得たのとおなじになる。
「身にあまるお言葉を下しおかれ、市兵衛冥加至極にございます」
「うむ。——お蓮、浪江、まいれ」
鶴七郎は女どもをうながして、そのまま自身番を出てきた。
ふだん客なれているお蓮にも、鶴七郎の身分

だけはどうにもわからなくなってきた。普通の旗本の若殿などでは、八丁堀のだんながあんなにまで小さくはならない。
——この人、大名の若さまなのかしら。しかし、大名の若さまなら、こんな町へ一人で出てくるはずはないのだ。
見ると、肩をならべている浪江も、なんとなく体中をかたくして歩いている。
「どうしたの、浪江さん」
そっと声をかけると、
「おねえさん、あれ、あれ——」
と、一足先を歩いている鶴七郎の腰を指さす。
「なにさ」
「葵の御紋——」
なるほど、わき差しの鞘は金梨地に葵の紋散らしだ。しかし、着物の紋は四ツ目である。
「きっと、拝領物かも知れないねえ」
「拝領物でも、普通はふだん差しにできません」
武家の娘だけに、そういうことはよく心得ている浪江のようだ。
「じゃ、よっぽど身分の高い家の若さまなんだね」
「そうだと思います」
「どこの若さまなんだろうね、一体」
わからないとなると余計聞いてみたいし、このまま別れてしまうのも本意ない気がする。
鶴七郎はさっき来た広小路の雑踏を突っ切って、水茶屋横町へ入りながら、ふっと振りかえって、
「浪江、そちの家はどこかな」と、聞いた。
「はい、薬研堀でございます」
「母が病気だと申したな」
「はい」
「ちょっと見舞ってつかわそう。お蓮もいっしょに来い」
「おねえさん、あたくし困ります」
浪江は当惑したように言って、お蓮のたもとをつかむ。貧乏長屋だから、恥ずかしいのだろ

う。
「いいわ、浪江さん。あたしからよく話してあげる」
お蓮はそれと察して、鶴七郎に肩をならべていった。
「若さま、浪江さんは困るんですって。あんまりきたない裏長屋だから、きっと若さまに見られたくないんでしょ」
「いや、長屋を見に行くのではない。病人を見舞ってつかわそうというのだ」
「それはまあそうでござんしょうけれど、正直なところ、本当にひどいんですよ」
「かまわぬ」
鶴七郎はわらっている。
「若さまのお屋敷は、浜町だとおっしゃいましたねえ」
「うむ」
「浜町の火薬って、なんのことなんです」
「つまり、浜町の鶴のことだ」
「火薬ってのは、鉄砲の火薬のことですか」
「そうだ」
「鶴と鉄砲では、敵同士ですけれどねえ」
お蓮は、なんとかして鶴七郎の口うらから、正体を見破りたい下心だ。
「なるほど、鶴と鉄砲では、敵同士のようなものだな。それで、わしの火薬いじりもうまくいかぬとみえる」
「あら、若さまは火薬をおいじりになるんですか」
「うむ」
「あぶなくございませんかしら」
「あぶないなあ。うっかりいじると、ばあんと爆発する」
「ああ、わかりました」
「なにがわかったな」

天下の証文

「若さまが火薬なんです。伝九郎のやつは、う

っかりいじったもんだから、片手を吹き飛ばされてしまったし、八丁堀のだんなもあぶながって青くなっていましたね」
「おもしろいことを言うなあ。世間でわしのことを浜町の火薬というのは、そんな意味もあるようだ。しかし、わしは正しい人間には決して爆発はしないから、安心しなさい」
「じゃ、正しい人間には浜町の鶴なんですね」
「まあ、そういうことになるかな」
「あっ、若さま、浜町の火薬になってください」
「なにッ」
いつの間にか元柳橋のたもとまで来ていて、そこを右へ堀端のほうへ曲がったとたん、五十がらみのでっぷりと太ったいかにも強欲そうな男が、地まわりらしいやくざっぽいやつを二人つれて、せかせかとやってくるのにぱったりと出会ったのだ。
「ああ、並川のお嬢さん、いいところで出会った。いまお宅へあがったら、今日から水茶屋へ手伝いに行っているとご新造さんがいうもんだから、そっちへ出向くところでね」
太った男は、そういいながら、鶴七郎をかきのけるようにして浪江のほうへつかみかかっていこうとする。
「おねえさん——」
浪江が真っ青になって、お蓮にすがりつく。
「待ちなさい」
鶴七郎は女たち二人を背にかばうように前へ立ちふさがる。
「じゃまをしちゃいけねえや、お武家さん」
五十男は濁った目をぎろりとさせながら、恐れ気もなく鶴七郎をにらみつける。
「まあ待て。——その方は何者だ」
「大きなお世話ですよ。お武家さんの知ったことじゃありません。天下の往来を用足しに歩いているのに、いちいちお前は何者だなどととがめられていた日にゃ、用がはかどらなくてこっちは迷惑だ」

「なにか浪江に用のようだな」
「そうだったら、どうだって言うんです」
「浪江はわしの連れだ。用があるなら、そこで言いなさい」
「おれは連れのお前さんなんかに用があるんじゃない。お嬢さんの浪江さんに用があるんだ。引っこんでいておくんなさい」
「わからぬ男だな。浪江はわしの屋敷の腰元だと申したら、なんとする」
「冗談いっちゃいけませんや。こっちはちゃんと金で縛ってあるんだ。おれに無断で屋敷奉公なんかできない娘なんだ。つまらないことをいうと、お前さん、天下の往来で赤恥をかくよ」
「赤恥をかいてみたい。そこで用向きを言いなさい」
「お前さん、どうしてもおれのじゃまをする気かね」
「じゃまをするのではない。用向きを言えと申しているのだ」
「よし、こうなればおれも意地だ。用向きをいうから、大枚五十両、耳をそろえてここへ出してもらおう」
　五十男はぬっと大きな手のひらを鶴七郎に突きつける。
「すると、浪江に用というのは、五十両の金子をかえせということか」
「そうだよ、五十両かえせなければ、娘の体をもらっていく。そういう天下の証文が、ちゃんとこっちにあるんだ。お奉行さまだって証文には勝てないことになっているんだ。さあ、五十両かえすか、娘の体をよこすか、どっちにしてくれるんだね」
　言わぬといった用向きを、とうとう自分からしゃべってしまったのだから、頭はあまり利口なやつではないらしい。
「浪江、この男に五十両借用いたしたのは本当なのだな」
「はい」

　もう一杯に人だかりがしているから、浪江は真っ赤になりながらうなずく。
「違うんですよう、若さま」
　お蓮が承知しない。
「借りた金ははじめ二十両で、それも浪江さんが借りたわけじゃなく、兄さんの清太郎さんが借りたんです。この男はもと浪江さんの家へ下郎奉公をしていたことがある岩造ってやつで、いまでは高利貸しだもんだから、一年とたたないうちに二十両の利子が三十両もついてしまって、先月証文を五十両に書き換え、それがひと月たって払えなければ浪江さんの体でかえしてもらうと、無理押しつけにそんな文句まで書き入れてしまったんです。貧乏人泣かせの鬼なんです、この野郎は」
「おい、ねえさん、つまらないことをよくべらべらしゃべる女だ。鬼だろうと蛇だろうと、貸した金は貸した金、こっちはいそがしいんだから、黙って引っこんでいてくれ」
　高利貸しの岩造はせせらわらって、
「お武家さん、話の筋はもうわかったろう。さあ、五十両の金をわたしてくれるか、娘の体をわたしてくれるか、早いところ返事をしておくんなさい」
と、鶴七郎のほうへ詰め寄る。
「浪江、兄の清太郎はいま家におらぬのか」
　鶴七郎は浪江に聞く。
「はい、少し子細がございまして」
「さようか。――これ、鬼」
「おれのことかね、だんな」
　ぎろりと岩造が目をむく。
「そうだ、金子五十両はわしが下げてつかわす。いっしょにきなさい」
「どこへ行くんだね」
「これから浪江の家へまいる。清太郎の母からもう一度子細を聞いて、必ずわしが下げつかわす」
「よしましょう、バカバカしい。子細なんか何

度聞いたって、なんの足しにもなるもんじゃない。こっちは天下の証文を持っているんだ。証文にはお奉行さまだって勝てないんだよ。さあ、ここで五十両かえしてくれるか、娘をよこすか、きっぱりときめてもらいましょう」

岩造はてこでも動きそうもない面魂だ。

「どうあっても、わしとまいるのはいやだと申すのか」

「いやだと言ったらどうするね、おれを切るかね。切ったって、天下の証文は消えてなくならないんだよ。おれのいうことはもうこれっきりだ、五十両かえすか、娘をよこすか、どっちかにきめてもらわないうちは、一寸もここを動かないから、そう思ってもらいましょう」

鶴七郎はあきれて岩造の顔をながめている。

加納徳切り

「お前はまったく度しがたい男だな」

この男は生来こういうわからず屋にできているのか、それとも世渡りのためにわざとがんこを売り物にしているのか、どっちなのだろうと、鶴七郎はもう一度岩造の醜悪な顔を見なおす。

うしろに立っているお蓮は、さっきから憎悪の目で岩造をにらみつけ、若い浪江は当惑の目を伏せたまま、どうしていいかわからないという風情である。

「だんな、御託はもうたくさんだ。おれはこれでいそがしい体なんだから、五十両くれなければ、ここから娘さんをもらっていくから、そう思っておくんなさい」

岩造は恐れ気もなく浪江のほうへ手を出そうとする。

「ならん、高利を貸すのは天下の法度である。あまり無法を申すと、その分には捨ておかぬぞ」

「おかしなことをいうねえ、だんな。なにもおれは好き好んで人に金を貸しているんじゃありませんぜ。どうか金を貸してくださいとたのむ

人間があるから、おれの金は利子が高いが、それでもいいかねと、ちゃんとことわりをいって、それでも結構ですというから、相対ずくで金を貸してあげるんだ。それがなんで天下の法度なんだね」

「金貸しを業とする者は、その筋へ願い出て許しをうけなくてはならん。公儀では金利に一定の標準をおいて、それ以上の高利は禁じておる。心得ておるか」

「知ってますよ。けど、それは千両万両と大きな金を動かす人のことだ。おれたちみたいに近所づきあいの相対ずくで、一分貸してくれ、一両用立ててくれと、小金を貸借するのに、いちいち公儀のお許しをうけているやつがあるもんか。世間を見なせえ、町の貸借はみんな相対ずくでやっているんだ。第一、もともと自分の金を人に貸そうがくれてやろうが、それは自分の勝手で、なにも公儀のお世話はうけませんや」

バカバカしいといわぬばかりの岩造の顔つきだ。が、高利を貸してはいけないということぐらいちゃんと知っていて、おれの金だからおれの勝手だと、ずるい理屈で逃げようとする。こういう図太い人間は、なまじ無知だけに、手がつけられない。

結局、そういう図太い根性は、腕力でおさえるほかはないのではないかと、鶴七郎が思案している時、

「どいた、どいた」

急に薬研堀のほうの人立ちが左右にくずれて、つかつかとこっちへ進んでくるのは、まわし合羽にさんど笠、いずれもきりっとした股旅姿の六人づれで、あっという間にばらばらっと鶴七郎たちを取りまいてきた。

「あれえ、若さま」

「加納徳一家かも知れません」

お蓮と浪江はびっくりして、鶴七郎の背へすがりつく。

「おやあ、お前さんたちはだれだ。いきなり人

を取りかこんで、どうしようっていうんだ」
さすがに岩造はびくともしない面構えでくってかかる。
「じゃまだ。てめえに用があるんじゃねえ、あっちへ行け」
先頭の一人が笠で顔をかくすようにして、横柄にいう。
「冗談いうもんじゃねえ。おれは用があるから、いまこのだんなと掛け合いをやっているんだ。こっちの用が片づくまで、ちょっと待ってもらいたいね」
「なにをッ」
「第一、お前さんたち、人に物をいうんなら、かぶり物を取ったらどうなんだ、物を知らない人たちだ」
「うるせえ、バカ」
一人がいきなり躍り出してくるなり、思い切り岩造の胸をどすんと突き飛ばす。これはまた岩造に輪をかけたような無法者たちで、この無法には岩造の無法も歯が立たず、うしろは薬研堀だから、
「あっ、なにをする」
と、わめいた時には、もう半分そっちへよろめいていって、ひとたまりもなくどぶんと堀(ほり)の中へ水しぶきをあげていた。
岩造についていた地まわりたちは、相手が悪いと見たか、二人ともこそこそと逃げ出してしまう。
堀を背にして、六人のやくざたちの半円陣の中に残ったのは、鶴七郎とお蓮、浪江の三人だけになった。
「やい、若僧、おれは加納徳五郎だ。さっきは舎弟大倉伝九郎がとんだ世話になったな」
真ん中のやつがぱっと笠とまわし合羽を同時ににぬぎすてる。三十七、八とも見える凶暴な面構えのやつだ。
「お前か、加納徳という不埒者(ふらちもの)は」
鶴七郎は涼しい目をして、顔色一つ変えていない。

「そうよ。どこの馬の骨か知らねえが、てめえのおかげでおれたちは急に江戸を売らなけりゃならなくなった。ここで会ったをちょうど幸い、礼をしていくからそう思え」
「よくよく命運のない哀れなやつだ」
「ぬかしやがったな。それ、早いとこやっちまえ」
「合点――」
加納徳といっしょに、五人が笠と合羽をぬぎすてたが、それを待ってはいなかった。六人にいっせいに長わき差しを抜かれてからでは、自分はとにかく、うしろにふるえている女たちがいやでも傷をうける。
はじめからちゃんとそれを計算に入れている鶴七郎だから、加納徳が真っ先に長わき差しを引き抜いたとたんに、静から動に豹変(ひょうへん)した鶴七郎は、
「えいっ」
庭下駄(にわげた)をぬぐなりだっと躍りこみざま、加納徳の胴を抜き討ちにして、二の太刀がつばめがえしに左をはらい、ひらりと往来の向こうへ飛びぬけていた。
「わあッ」
「ううッ」
二人が同時に悲鳴をあげながら、がくんと両ひざをついた時、
「やった」
「それ、たたっ切れ」
後の四人は、やっと長わき差しを引きぬいて、夢中で鶴七郎のほうへ向きなおった。
真ん中の二人が倒れたから、その右と左に二人ずつ、
「えいっ、とうっ――」
鶴七郎の長身は、ちょうのひるがえるように軽く右の二人へ躍って、右を払い、左へなぎかえしている。
狼狽(ろうばい)しきっているやくざ剣法の二人では、手

も足も出ない。
「ううッ」
「わあッ」
一人はのけ反り、一人は前へつんのめっていく間に、すっと立ちなおった鶴七郎は、もう残る左の二人のほうを向いている。
ぎょっと棒立ちになった二人は、あっという間に味方四人を失ってしまったのだから、真っ青になって、どっちからともなく、ばたばたと元柳橋のほうへ逃げ出す。
遠まきに見ていた野次馬たちも、すぐそこに抱きあうようにして立っているお蓮も浪江も、息をのんだまま、急には声が出ない。
しいんと明るい春の真昼の太陽が、なにかそらぞらしい気さえする。
四人が四人とも、たった一太刀ずつで息が絶えているようだ。
「お蓮、懐紙を――」
鶴七郎は庭下駄のほうへ進みながらいった。
自分の懐紙は、さっき伝九郎の籠手(こて)を切り落とした時、使ってしまっているのだ。
「は、はい」
お蓮がいそいで帯の間から懐紙をぬいてわたす。わき差しをぬぐって鞘(さや)におさめた鶴七郎は、下駄をはいて、
「さあ、まいろうかな」
ゆうゆうと先に立って歩き出す。落ち着いた足どりで、たった今あんな乱闘をやった人とは、どうしても見えない。
「浪江さん、お供しましょう」
年上だから、お蓮は浪江の手を取って後を追ったが、二人ともまだひざががくがくしていて、自分のものとは思えなかった。
「おねえさん、どうしましょう」
鶴七郎の足は、どうやらやっぱり自分の家のほうへ向いていると気がついて、浪江がすがるようにお蓮に聞いたのは、やっと人がきを通りぬけてからであった。

「もうかまやしない。あたしにまかせておくといい」
お蓮は浪江にそっといっておいて、
「若さま、どうしても長屋を見舞ってくださるんですか」
と、鶴七郎のうしろから聞いた。
「うむ。岩造のような男に、いつまでもいじめられていてはかわいそうだ。あれは女では手におえぬ。ついでに、わしがなんとかしてつかわそう」
「あ、そうそう。あいつ堀へ突き落とされて、どうしたでしょうねえ」
「そうだな、水の中はまだ冷たいぐらいはわかったかも知れんな」
鶴七郎はそんなのんきなことをいって、苦笑していた。

金の亡者

浪江の家はそこから程近い路地の奥にあって、それは三畳一間きりの、見るかげもない裏長屋であった。
この辺はどこもそういう貧乏長屋ばかりなのだから、さすがに鶴七郎もびっくりしたらしく、ぽかんとあたりを見まわしながら歩いている。
「若さま、どこを見てもいいながめでござんしょう」
先に立って案内するお蓮が、ふりかえってわらう。
「大工というものは器用だな」
「あら、どうしてです」
「よくこんな小さな家が建てられる」
「ふ、ふ、さすがに若さまはお上手ですこと」
「なにがだね」
「本当は、よくこんな小さな家に住めるもんだと、感心しているんでしょう」
「まあ、それも感心しているようだ」
うしろからついていく浪江は、もとはちゃんとした家に暮らしていただけに、悲しいような、

恥ずかしいような、どうしても顔をあげて歩けなかった。

　長屋の女房たちは、顔見知りのお蓮と浪江が、この辺には見かけない高雅な若侍をつれて帰ってきたので、みんなふしぎそうに見送っているようだ。

「ここですよ、若さま」

　お蓮は浪江の家の門口に立っていうと、まるで自分の家ででもあるように戸をあけて、土間へ入り、

「今日は、おっかさん、若さまをつれてきましたよ」

　と、そこの障子をあけた。

「これはこれは、おねえさん、どこの若さまでございます」

　浪江の母は、おどろいて床の上へ起きあがりながら聞いた。病にやつれてはいるが、まだ五十前とも見える浪江によく似た母で、言葉づかいも正しい。

「浜町の鶴さまという若さまなんです。そうですね、若さま」

「うむ。――老母、加減はどうかな」

　三畳一間に布団がのべてあるのだから、お蓮と浪江があがってしまうと、鶴七郎のあがって座る場所はない。土間に立ったまま、やさしく声をかける。

「はい。――浪江、これはどうしたことなのです」

　母は判断のしようがなかったらしく、娘に聞いた。

「はい、浪江は若さまに、あやういところを、お助けいただきました。母さまからもお礼を申し上げて下さいませ」

　浪江は、事のいきさつを、かいつまんで母の耳に入れる。

「浜町の若さまはね、おっかさん、鶴になったり火薬になったりするんです。いまそこで、あの毒虫の加納徳と子分を三人まで、火薬になってお

手討ちになすったんですけれど、本当にお見事でした。あたしたちはもう怖くて、浪江さんと抱きあってぶるぶるふるえちまいましたけど」

　お蓮がそばから口をそえて、もう一度ぶるぶるとふるえるまねをしてみせる。

「それはそれは――。浪江の母、信（のぶ）と申します。かようなむさくるしい姿をお目にかけまして、まことに恐れ入りますが、今日は娘があやういところをお助けいただき、お礼の言葉もございません。ありがとうございました」

　母は改めてそこへ両手をついて、心から礼をのべる。

「いや、その礼には及ばぬこと。――世の無法を一つでも取りのぞくことは、武士のつとめだ。そちたち親子は、岩造という男に苦しめられているようだが、さしつかえなくば子細が聞きたい。苦しければ、遠慮なく横になるがよいぞ」

　そういう鶴七郎は、まだ土間に立っているのである。

「若さま、どうぞお上がりくださいと申し上げても、こんな狭いところでかえって失礼ですから、まあここへお掛けくださいまし」

　お蓮が気をきかせて、上がりかまちへ座布団をすすめた。

「さようか」

　鶴七郎はすすめられるままにそこへ掛ける。

「それでは、お言葉に甘えまして、身の恥ではございますが、一通りお聞きくださいませ」

「うむ、それがよい。一人で思いあまることでも、三人寄ればと申すことがある」

「あら、あたしもその三人のうちの一人なんですか、若さま」

「そうだ。お蓮は威勢がよくて、なかなかたのもしい仲間だからな」

「ありがとうございます。では、おっかさん、なにもかも話しておしまいなさいまし」

「はい。あたくしの亡くなりましたつれあいは並川清兵衛と申し、浜松の松平河内守（まつだいらかわちのかみ）さまの御

藩中にて、江戸詰めのお納戸役をつとめておりました。先年それが亡くなりまして、せがれ清太郎が跡をゆるされ、やはりお納戸役をつとめておりましたが、昨年の春、宿直の折、手入れのため袋ごとおあずかりいたしました波ノ平行安のおわき差しを、ちょっとの間に中身をすりかえられましたとかで、そのお刀詮議のため、浪人させられましてございます。これにはまたなにか子細がございますとかで、清太郎には行安の行方もほぼ見当がついているらしく、その後あまり家へも寄りつかず、苦労いたしているようでございます」

「その子細と申すのは、清太郎でないとわからぬのだな」

「はい、あれは女の知らぬことだと申しまして、私どもには少しも話してくれません。そのころ、もと中間に使っておりました岩造が、刀詮議にはお金がいるだろうと申して、金二十両ほどせがれに立て替えてくれました。世間なれません私どもは、昔の恩義を忘れずによくしてくれると、その親切をよろこんでいたのでございますが、それが去年の夏になりまして、娘浪江をどなたかのおめかけに世話をしたいと、突然そのような話を持ちこんでまいりました。あたくしがはっきりとことわりますと、急にお金のことを持ち出して――」

「その浪江さんをおめかけに世話したいって先は、松平家の御家老さんだって話でしたね、おっかさん」

お蓮がそばから口をそえる。

「はい、そうではないかと存じます。前にも、まだ浪人いたしております前に、一度そんなお話のありましたのを、これは清太郎がおことわり申し上げたとか聞いております」

「その家老の姓名はなんと申すのか」

「それは、あの、少しはばかりもございますので、お許しくださいませ」

母は後の迷惑でも恐れているのか、辞退しようとする。

「大事ない。行安紛失のことも、なにかそれにからんでいるように思われる。決してそちたちに迷惑はかけぬから、家老の名を申してみなさい」

「おっかさん、かまわないじゃありませんか。こうなったら若さまにおすがりして、なんとかおさまりをつけてもらいましょうよ。それでなくてさえ、岩造に五十両の証文を取られて、その金がかえせなければ浪江さんの体をつれていかれることになっているんでしょう。あの岩造ってやつは、とてもあたしたちの手じゃどうしようもありません。ねえ、若さま、きっと浜町の火薬になってくださいますねえ」

お蓮は一人で躍起になっている。

「よし、お蓮と二人で、こんどは松平家六万石の江戸屋敷へなぐりこみというやつをかけるかな」

鶴七郎がのんびりとわらい出す。

「うれしいわ。若さまとなら、どこへだって行きます。けど、若さまは六万石よりもっと大きいお大名の家の若殿さまなんでしょうねえ」

お蓮はまたしても、それとなく鶴七郎の素姓をさぐり出そうとかかる。

「いや、わしはあいにく大名ではない」

「じゃ、お旗本なんですか。それだと、ちょいと心細いんじゃありませんかしら」

「どうしてだね」

「大名とお旗本じゃ、大名のほうが強いんじゃないかしら」

「そうだなあ、大名のほうが家来も多いねえ」

「なぐりこみをかけて、勝つ見こみがあるかしら」

「なに、大名だって火薬にはかなわない」

「じゃ、本当に六万石の松平さまへなぐりこみをかけてくれますね」

「きっとかける。武士に二言はない」

「いつかけてくれます」

「その家老の名さえわかれば、今からでもよい」
本気かしらと、お蓮はまたわからなくなってきた。
「ごめんなさいよ」
その戸口へぬっと顔を出したやつがある。頭からぬれねずみになったままの岩造だった。しかも、足袋はだしである。
「やあ、いたね、だんな。おれはまたお嬢さんをつれて逃げられやしないかと思って、いい心配をしちまった」
「なにしにきたんだな。そんなかっこうをして、寒くはないのか」
さすがの鶴七郎もあきれざるをえない。
「寒い暑いは暇人のいうこった。金もうけに夏も冬もあるもんか。御新造さん、またあがりましたです。今日はなんでもお嬢さんをもらっていきますでな、そう思ってもらいます」
はくしょんとくしゃみを一つして、ぶるぶる身ぶるいをしながら、土間へ入ってくる。これはまったく金の亡者なのだ。
「岩造、松平さまの家老はなんと申したかな」
「岩淵杢右衛門さまですよ。どうしてだね」
「お前はその杢右衛門のところへ、浪江を売りに行く気らしいな」
「大きなお世話さ。五十両で買ったおれのお嬢さんを、どこへいくらではめこもうと、おれの勝手だからね」
「お黙りッ。川へ突き落とされても、よくそれだけは忘れなかったんだねえ」
お蓮も岩造の亡者ぶりにいささか気おされ気味である。
「あんなやくざどもは話にならねえ。そんなやくざどもを何人切ったからって、おれが怖がると思ったら間違いだぞ。おれは天下の証文でものを取って、まじめに働いているんだからな。おれを切ると、自分の首が飛ぶから、そう思うがいい。お嬢さん、さあ行くべえ」
亡者は鶴七郎をかきのけて、浪江のほうへ手

を出そうとする。
「待て――」
鶴七郎はその手をおさえつけ、
「五十両はわしが払ってつかわす。浪江をわたすことはならん」
と、さとすようにいった。
「それなら文句はねえ。さあ、ここで五十両受け取ろう。待ったなしにしてもらいたいね」
「よしよし、そこに控えておれ」
「そうはいかねえ。おれはぬれねずみで寒くていかねえ、早くしてもらおう」
「金もうけにわがままを申してはいかん。控えておれと申したら、控えておれ」
おだやかな言葉のうちに、なんとなく凛としたものがある。
「そうかね。しばらくならしようがねえ、控えていよう」
岩造はふんと鼻の先でわらって、土間へしゃがみこむ。どうせ五十両は持っているはずはないんだからという腹なのだろう。
「お蓮、ここの家主を呼んでまいれ」
「はい。でも、家主さんの家に五十両あるかしら」
お蓮は家主を呼んで、鶴七郎が五十両借りるのかと思ったのだ。
「まあよい、ちょっと呼んできてくれ」
「かしこまりました」
お蓮がともかくも立ち上がった時、
「ああ、親分、ここだ。いやすぜ」
いかにも岡っ引きの手先らしい若い男が、戸口からひょいと土間をのぞきこんで、路地のほうへ呼んだ。
「そうか――」
かわってぬっと戸口へ顔を出したのは、四十がらみとも見える岡っ引きの親分である。
「おう、おめえここにいたのか。さっきはありがとうよ」
親分はひょいとそこにいる岩造を見て、礼を

いって、
「お武家さん、失礼いたしやす。あっしは薬研堀の藤吉っていう岡っ引きですが、いま堀端で加納徳一家の者六人をお切りなすったのは、お武家さんだそうでござんすね」
と、鶴七郎のほうへ小腰をかがめる。
「うむ、わしだが――」
「加納徳一家は決していいことばかりはしてないんで、切られたって切られ損ということにはなりやしょうが、切ったのはお武家さんだと知らしてくれた者がありやすと、十手をあずかる手前、そのままにもいたしかねやす。お手間は取らせやせん。ちょっとそこの番屋までおはこびを願いやす」
藤吉のいうことは筋がとおっている。
が、鶴七郎がここにいると教えたのは、どうやら岩造らしい。すると、鶴七郎が番屋へ行った留守に浪江をつれていこうという腹だったに違いない。
――憎いやつ。
と、鶴七郎はこらえかねてきた。

五十両のかわりに

「お蓮――」
鶴七郎は病人のそばでじりじりしているお蓮を呼んだ。
「はい。家主さんを呼んでくるんでしょう。若さま」
お蓮は気が早い。
「いや、家主のほうは後でよい。お前は米沢町二丁目の質両替商棚倉屋善兵衛の店を存じているか」
「棚倉屋さんのお店なら知っています。あたしたちの行けるような質屋じゃありませんけど」
棚倉屋は親質を取る大店で、資産百万両といわれ、本業は諸侯の御用達である。
「御苦労だが、この印籠を持っていってな、主人でも番頭でもよい、浜町の鶴が金子五十両入

用だから、至急持参するようにと伝えてくれ」
鶴七郎は葵の紋散らしの印籠を腰から取ってお蓮にわたす。
「そんなこと、あたしで大丈夫かしら」
町人とはいえ、相手があんまり大きすぎるので、お蓮はそんなことを言っていっても気ちがいあつかいにされるんじゃないかと、なんだか怖い。
薬研堀の藤吉も、それとなく鶴七郎の顔を見ていた。
「心配ない。その印籠を見せれば、すぐにわかる」
「これ、葵の御紋でしょう、若さま」
「うむ」
「あたしなんかが持って歩いて、お役人さまに見つかったら、縛られやしませんかしら」
「その時は、浜町の鶴からあずかってきたのだと、正直に言えばよいのだ」
「わかりました。では、行ってまいります」
お蓮はやっと納得して、印籠を帯の間へ大切そうに押しこみ、下駄をはいて、
「みなさん、ごめんなさいまし」
と、土間にいる人たちに会釈をしながら出ていった。
ぬれねずみの岩造は、またしてもはくしょんとくしゃみを一つして、
「だんな、おれはあのねえさんが棚倉屋から帰ってくるまで待たされるんかね」
と、不平そうに鶴七郎に聞く。
「そうだ、おとなしく待っておれ」
「待てっていうんなら、待たねえでもねえが、おれは寒くっていけねえ。もし棚倉屋さんからあのねえさんが手ぶらで帰ってきたら、その時はもう待ったなしに、お嬢さんをもらっていってもいいだろうね」
「勝手なことを申すな。金もうけに暑い寒いはないと、いまその方は自分の口でいったばかりではないか。しかも、その方は二十両の金子を

旧主である当家へ貸しつけて、それを五十両の証文に書きかえるまでまる一年の間、気長に待っておったのだ。ここへきて、たった一刻や半日待てぬという法はあるまい」
「そりゃ、たしかに返してくれるっていうんなら、待たねえこともねえがね。いくら棚倉屋さんだって、印籠一つで五十両貸すかどうか、あぶねえもんだ、その時になって、こんどは金座の後藤だ、駿河町の三井だと、そのたんびに待たされたんじゃ、こっちはたまったもんでねえからね」
ずけずけと、そんな憎まれ口をきく岩造である。
「藤吉、その方をむだに待たせておくのも本意ない、わしが加納徳を切った子細を話しておこう」
鶴七郎はもう岩造にはかまわず、岡っ引きのほうを向く。
「へえ、お願いいたしやす」
「わしは今日、両国の水茶屋の前を通りかかって、これなる浪江が加納徳の子分どもに引っ立てられていこうとするところを目撃した。子細を聞いてみると、加納徳は西両国一帯の盛り場をおのれのなわ張りと称し、小屋掛け芸人、水茶屋などから日銭を取り立てている。新しくそこで働く者は、なにがしかの銭を持って加納徳の家へ顔出しということをしなければならん。つまり、浪江は、その顔出しをしていないから引っ立てていくのだという。――藤吉、その方は当地で十手をあずかる者として、さような事実のあることを承知していたか」
「へえ、恐れ入りやす」
知らないと言えばお役怠慢だし、知っていたと言えば不法を黙認していたことになるから、藤吉は思わず赤面して、頭があげていられなくなる。
「庶民の分際で、住民に日銭を課するなどとはまことに僭上の沙汰、それを世間が泣き寝入り

にしているのは、加納徳の暴力を恐れてのことと聞いたゆえ、わしが成敗してくれようと思い、ちょうど北の定町回り同心下条市兵衛と申す者がきあわせていて、役目にかけて必ず加納徳を処分するから任せてくれと申す。その言葉に相違なくば、任せようと堅く申しつけて、そこの薬研堀までもどってまいると、これなる岩造と行きあい、いまも聞くとおり、五十両の金子のかわりに浪江をよこせという。金子はわしがかえしてつかわすと押し問答のところへ、加納徳一家六人が旅支度で通りかかり、わしに意恨をふくんで無法にも切りかかってまいったから、四人まで切ってすてたのだ。察するに、徳五郎は下条が召し捕りに向かう前に、身の危険を早くも聞き知って、逃亡するところであったとみえる。どうだ、藤吉、これにて納得がいったか」
「へえ、よく相わかりましてございます。つきましては、恐れ入りますが、殿さまのお名前をうけたまわらせていただきとうござんす」
「もっともである。浜町の鶴とおぼえておくがよい。くわしく知りたければ、下条に聞きなさい」
「へえ」
「おれはねえ、親分」
岩造がぬけぬけと寒そうな顔をあげて、
「加納徳のように、ただで人の金を取ろうっていうんじゃねえんだ。ちゃんとおれのためた金を人に貸して、日限がきたから、それを返してくれと言っているのさ。だれが聞いたって当たり前のことだろう。だからよう、浜町の鶴っていったって、たとえばどなたさまでも、おれは少しも怖くねえのさ。こっちには天下の証文てものがあるんだからね」
と、聞こえよがしに話しかける。
「若さま、行ってまいりました」
そこへお蓮が派手な裳裾をけとばすようにして、いきおいこんで駆けこんできた。興奮した

目を生き生きと輝かして、息をはずませている。
「御苦労であった。すぐに話はわかったか」
「はい、わかりました。あたしびっくりしちまって。いま、大番頭さんが見えます」
まじまじと鶴七郎の顔を見ているのは、その大番頭からなにか聞き出しているのだろう。
「ごめんくださいまし」
こんなことは珍しいので、さっきからのぞきにきている長屋中の人たちをかきわけながら、もう年輩の立派な大番頭が門口で小腰をかがめ、
「これはこれは、浜町さま、棚倉屋の番頭杉右衛門(すぎえもん)にござります」
と、丁重に頭をさげる。
「杉右衛門か、面倒をかけたな」
「どうつかまつりまして。――さっそく主人善兵衛がまかり出なければならぬところでございますが、ちょうど他行中でございまして、手前かわりましてお申しつけの品、持参つかまつりましてございます。失礼ながら、お受け取りくださいますように」
杉右衛門はふところから重い袱紗(ふくさ)包みを取り出して、土間へ入り、ひざまずいて鶴七郎の前へさし出す。
「過分である」
「五十金とうけたまわりましてございますが」
「うむ、これでよい。たしかに受け取ったぞ」
鶴七郎は二十五両包み二つを無造作に左手に取って、
「これはもどしておこう」
と、袱紗を大番頭にかえす。
「恐れ入りましてございます。ほかに御用がございませんようでしたら、手前はもどらせていただいてもよろしゅうございましょうか」
「うむ、御苦労であった。棚倉屋に過分であると申し伝えておいてくれ」
「かしこまりましてございます。それでは、これにて失礼つかまつります」

杉右衛門はもう一度ていねいにおじぎをして、さすがに物慣れているからむだごとは一言も口にせず、静かに土間を出ていく。
「岩造、五十両返しつかわすによって、天下の証文というのを見せよ」
「へえ」
岩造にすれば金より娘のほうがほしかったのだから、妙に仏頂面をしながら、胴巻きの中から大きな革財布を取り出し、水にひたって少々ぬれたところのある証文をより取って、鶴七郎の前へ出す。
型のとおり五十両の借用証文で、違っているのは、右金子期日までに返済いたしかね候節は、娘浪江儀を相渡し申すべく候の一文が添えてあることだ。
署名は並川清太郎となっているが、筆は女文字だから、おそらく母の信が、岩造に脅迫されるままに、そのとおり証文にしたものなのだろう。
「母御、この証文に相違ないか」
鶴七郎は証文をそっちへひろげてみせる。
「はい、それに相違ございません」
「さようか」
軽くうなずいた鶴七郎は、
「岩造、金を受け取れ」
かたわらに置いた二十五両包み二つを、ずしりと岩造のひざの前へ投げてやる。
「へえ。もったいねえことをする人だ」
岩造がふてぶてしくつぶやきながら、五十両拾って、しっかりと胴巻きの中へ入れるのを見て、
「岩造、たしかに五十両うけ取ったな」
「へえ、たしかに返してもらったです」
「よし、――藤吉、それなる岩造を召し捕れ」
と、きびしい声になる。
「なに言うだ。なんでおれが縛られなけりゃならねえだ」
「黙れッ。その方は天下の法の下をくぐって高利を貸し、庶民の膏血(こうけつ)をしぼる不届き者、あま

つさえ旧主の恩義を忘れ、女ばかりと侮って、二十両の元金を一年の間に五十両の証文に書き換えさせたばかりか、その証文で主人の娘を縛り、他人に売って金もうけをたくらむ、極悪非道の行いとは思わぬか」

「違いますだ。この貸借は相対ずくで、金がかえせなければ娘をつれていってくれと、御新造さんのほうからおたのみになるで、その証文をこしらえたです」

「もうよい。その方の言い分が世間にとおるかとおらぬか、この証文を証拠にいたして町奉行所の裁きをうけてみよ。五十両の金をつかわさずに奉行所へ送っては、わしが金を惜しんで無理なまねをいたすと、その方の心に恨みが生じる。よって、五十両はつかわしたのだ。その五十両をふところに抱いて、牢屋の中で静かにおのれのしたことを反省してみよ。愚鈍の名にかくれて、その方がどれだけ人を泣かせてきたか、その方といえども、おのれの良心は偽れまい。――藤吉、かまわぬ。岩造を召し捕れ」

「へえ。――野郎、神妙にしろ」

大体の事情は聞いていてものみこめるから、藤吉はいきなり躍りかかって、岩造に早なわを打つ。

「なにするだ、親分。おれはなわを打たれるようなそんな、そんな悪いことは――」

「黙らねえか。言い訳ならお白州へ行ってしろ」

一喝されて、岩造はうらめしそうに黙ってしまう。

「藤吉、この証文をその方にあずけおく。二十両の元金をわずか一年足らずで五十両に書き換えさせた罪も軽くはないが、岩造が貸し金にことよせて脅迫したこれなる並川清太郎の母は、もと岩造が下郎奉公をしたことのある旧主である。しかも、最前わしを加納徳切りの下手人として、その方に居どころを教えたのは、わしを自身番へ引き立てておいて、その留守に娘浪江をつれ去ろうという憎い心であったに相違

ない。岩造は、五十両の金より、むしろ旧主の娘を手に入れて、それ以上の金もうけにしたい野心があったのだ。それらの点をきびしく吟味いたしてくれるよう、浜町の鶴が申していたと、町奉行所へ必ず伝えてくれ。よいな」

鶴七郎は証文を藤吉にわたして、かたく申しつける。

「かしこまりましてございます」

「岩造、天下の証文が町奉行所でどう口を利くか、自分の目でよく見てまいれ。――藤吉、引き立てよ」

「へえ。岩造、立てっ」

藤吉になわじりを引き立てられて、岩造も今はかえす言葉さえなく、寒さにがたがたふるえながら、悄然と土間を出ていった。

「母御も浪江も、もう心配ないぞ。いま見るとおり、金は岩造にもどした。安心して養生するがよい」

「ありがとうございます。なんとお礼を申し上げてよろしいのか、言葉もございません」

母親と浪江は、ただそこへ平伏するばかりである。

「よいよい。後刻、薬をとどけてつかわそう。大事にせよ」

鶴七郎はすっと立ち上がる。

「あの、若さま、もうお帰りでございますか」

お蓮がいそいで聞く。

「うむ、もどる。浜松の屋敷へお蓮となぐりこみをかける約束だったが、わしに少し考えもあるから、それはまた明日のことにしよう。じゃまをしたな」

鶴七郎はわらいながら土間を出る。

お蓮も、もう後を追おうとはしなかった。

烏松という男

翌日――。

鶴七郎は一日中屋敷におとなしく引きこもっていた。

「あなたさまはそういうお気軽なまねがしたくて、お城を出たのでございますから、茂右衛門は別におとめはいたしませんが、黙って裏口からおしのびはいけません。後で手前が困ります」
　昨日、老用人棚橋茂右衛門から、無断外出を禁じられてしまったからだ。
　もっとも、茂右衛門にすれば、あぶない火薬いじりに熱中されるより、町を出歩いてくれたほうが安心だろうから、むろん無理に外出をとめる気はないだろう。しかし、これから出かけるといえば、さようでございますかと出してはくれるが、そのかわり必ず陰供がつく。それが今までの例なのだ。
　陰供というやつは、気にしなければそれでもすむが、ひもがついているとわかっていると妙に窮屈で、なにをしてもおもしろくない。外出は無断にかぎるのだ。
　しかし、そう毎日茂右衛門を心配させてもかわいそうなので、今日は屋敷におとなしくしていた。
　ちょっと気になるのは、お蓮との約束を黙って破ったことだが、これとて理由がないわけではない。
　昨日の並川親子の話で、浜松の江戸家老岩淵杢右衛門になにか私曲のあることはほぼわかっている。それを問いただしていけば、おそらく並川清太郎の帰参はかなうことになるだろう。
　が、これは浜松藩の中の、いってみればどこにもありがちな小さな事件であって、松平鶴七郎が正面から乗り出していくにしては、あまりにも小さすぎる。そんなお節介まで焼いて、万一松平家に傷でもつくと、ほかの家来たちがとんだ迷惑をすることになるのだ。
　藩のことはなるべく藩の中で始末する方がいい。昨日すでに岩造というやつを町奉行所へ送らせてあるから、鶴七郎が並川親子を助けたという事実は、もう浜松家の耳に入っているだろう。

　後は黙っていても、いそいで藩のほうで手を打つ。それでいいのだと鶴七郎は考えていたのである。
　しかし、この考え方は、どうやら少し甘かったようだ。
　夜になって、やがて宵をすぎようとするころ、鶴七郎が居間で書見をしていると、
「殿さま。浜町さま」
　ふっと窓障子の外から、低い押し殺したような声で呼ぶ者がある。
「だれだ、そんなところからわしを呼ぶのは」
「だれだと聞かれると、返事に困るんですが、薬研堀からきた者なんです。すんませんが、ちょいとお庭までお顔が拝借したいんですがねえ」
「薬研堀――」
　すると、屋敷の者ではない。外から入りこんできたやつだ。無論、門から入ってきたのではなく、黙って塀でも乗り越えてきたのだろう。
「その方はどろぼうか」
　大名屋敷をおもに荒らしまわったねずみ小僧という賊が処刑されたのは去年のことだ。
「人聞きが悪いや。よしておくんなさいよ。あっしはそんな者じゃありやせん」
「しかし、その方は、屋敷の者にことわって入ってきたのではあるまい。どこからここへ入ってまいったのだ」
「けっ、案外野暮だなあ、殿さまは。昨日の様子じゃ、もっと話のわかる浜町さまかと思ったんだが、鶴じゃなくてあひるだったんかな」
　そんな憎まれ口をきいて、ぺろりと赤い舌を出しているような気配だ。
「そうか。昨日のわしを見ていたのか」
「見ていやしたとも。だから、友達になりてえと思って、わざわざやってきたんでさ」
「よし、いま庭へ出る」
　鼠賊の一人や二人、別に恐ろしいとも思わないが、なにかわけがありそうなので、鶴七郎は本箱の中から短筒を取ってふところへしのばせ、

例のわき差し一本の姿で廊下へ出た。
　幸いまだ雨戸があいているので、庭下駄を突っかけ、あたりを見まわすと、
「殿さま、こっちですよ」
　そこの植え込みのかげから、手招きをしているやつがある。
　庭は春らしいおぼろ月夜になっていた。
「どこへまいるのだ」
「家来どもに見つかるとうるさいから、あずまやのほうへ行きやしょう」
　黒っぽい身なりをしたそやつは、たくみに木かげを縫って、林の中のあずまやのほうへ行く。敏捷な体つきで、少しも足音を立てない。これはどう見ても盗賊の歩き方のようだ。
「お前はどろぼうではないと申したな」
「どろぼうじゃありやせん。あっしはその上を行く捜し屋でさ」
「捜し屋――」
「殿さまは、権兵衛が種まきゃ、からすがほじくるって歌を知っていやすか」
「うむ、三度に一度は追わずばなるまい」
「へえ、お城ん中でもそんな歌がはやるんですかねえ」
「別にはやりはせんが、家来どもの口からいつか耳に入る」
「さあ、もうここまでくれば大丈夫だ。どうぞお掛けなすって」
　あずまやへきて、その男は手ぬぐいで床几の一つを払ってくれる。そして、自分は床几にかけようとはせず、少し離れたところへひざまずくのを見ると、案外平凡な顔をした、二十七、八とも見える男だ。
「お前の名をまだ聞かなかったな」
「殿さまとあっしが並ぶと、二十札になるんでさ。松といいやす、殿さまの御生母さまはお松の方、おんなじ名前ですんませんが、あちらさんはべっぴん松、あっしのは烏松、悪く思わないでおくんなさい」

　人なつこい顔をして、松はわらっている。
「その方はなんでもよく知っているとみえる」
　鶴七郎は苦笑せずにはいられない。
「へえ。おかげで、知っていなくちゃならないことはなんにも知らねえんで、知っていなくてもいいことばかりよく知ってるもんですから、まっすぐな道を歩きそこねちまいましてね」
「どろぼうの上を行くんだと申したな」
「さいで。――どろぼうが種まきゃ烏がほじくる。つまり、どろぼうのかくしておく金をほじくり出して、それをもらって歩くのがあっしの稼業なんでげす。自慢にゃなりやせん」
「ふうむ、どろぼうは盗んだ金をかくしておくものか」
「みんながみんなそうとはきまっちゃいやせんが、どろぼうばかりはいくら大どろぼうでも、まさか蔵を建てておくわけにゃいきやせんからね。ちょいと人目につかないような場所へかくしておくことが多いんでさ」
「この屋敷にも、そんなかくし場所があるのか」
「御冗談で。――もっとも、お屋敷あたりへかくしておきゃ、どろぼうも安心していられるな」
「どうだ、こんどまいる時まで、わしがこの庭のどこかへ金をかくしておくが、一つ、烏をやって見せてくれぬか」
「ありがとうござんす。なるべくたくさんかくしておいておくんなさい。助かりまさ」
「それで、今夜はなにをしにまいったのだ。お前はさっき薬研堀からきたと申していたようだな」
　鶴七郎はふっとそれを思い出して、改めて、烏松の顔を見なおす。
「なにか思い当たりやしたか、殿さま」
「並川親子に間違いがあったのではなかろうな」
「偉い。すぐそうぴんとくるところは、やっぱり鶴だ。あひるじゃねえ」
「ふうむ。浜松の屋敷のほうからでも手を打っ

てきたのか」
「そうなんです。実は、あっしはあの近所に巣を持っているんですが、殿さまが今日お蓮といっしょに浜松の屋敷へなぐりこみをかけると約束していなすったんで、こいつまたおもしろい芝居が見られると思いやしてね、たのしみにおいでを待っていたんでさ。すると、もう夕方近くなりやしてね、立派な侍が一人、中間小者をつれて、並川のおふくろさんをたずねてきたんでさ。おふくろさんの親戚の者らしいんです。今日、奉行所から呼び出しがあって、お前さんたちのことがわかった、まさかこんなに貧乏しているとは知らなかったとかなんとかうまいことを言って、とにかく奉行所から注意をうけたのでは、このままにしておけぬ、すぐに屋敷へ引き取るようにという重役たちのいいつけで迎えにきたと、こうなんです」
「親子の者は承知したのか」
「それがね、おふくろさんは、せがれの不始末がまだ片づいていない、貧乏は覚悟の前だからと、一度はことわったんですが、それはそれ、これはこれ、こんなことをしていては屋敷の外聞にもかかわるからと、とうとうおふくろさんを説き伏せて、親子の者を駕籠に乗せてつれていっちまったんです」
「さようか。家主によく申しつけておかなかったのは、わしのうかつであった」
「そうでござんしょう。殿さまだって、こいつはくさいとお考えになるでしょう。今まで親子をほっておいて、刀の詮議もつかないうちに、駕籠でわざわざ迎えにくる、こいつはあんまり親切すぎまさ。どうも変だと思ったんで、あっしはそっと駕籠のあとをつけたんでさ」
「二人はどこへつれていかれたのだ」
「小梅の下屋敷なんです。向こうへ着くころは、もう日が暮れていたんで、こっちは仕事がしやすい。大名の屋敷なんてものは、用心がいいようで不用心なもんでさ。第一、用心するにしち

ゃ少し広すぎまさあね。あっしは大手を振って塀を乗り越えてやった」
「当家もその不用心の中に入るらしいな」
鶴七郎が苦わらいをすると、
「そんなことありやせん。ただ、お屋敷の御家来さんたちは、塀が高いから大丈夫だろう、と安心しているだけなんでさ」
と、烏松は、けろりとしてわらっている。

小梅の下屋敷

烏松という男は、言うこともすることもひどくけた外れなところがある。自分も少し変わっている鶴七郎には、それが妙におもしろかった。
「烏、それでお前はその小梅の下屋敷で、並川親子に会ってまいったのか」
「そいつは、殿さま、ちっと無理でさ。塀だけは大威張りで乗りこえられても、人に見つかりゃ、あっしはやっぱりぬすっとに間違えられやすからね」
「なるほど——」
「それに、こっちはあっちをよく知っていても、あっちはこっちを知っているかどうか。あっしはあの長屋へ昨今越していったばかりなんだから、ふいに顔を出して、きゃあなんて言われた日にゃ、それこそやっかいなことになりやす」
「そう申せばそうだな」
「けど、そこはまあ自慢じゃありやせんが、これでも忍びの名人ですからね、様子だけはすっかり見たり聞いたりしてきやした。あの親子は、下屋敷へつくと、内玄関のそばの座敷へつれていかれましてね、おふくろは病人だからすぐに横になったが、そのまくらもとで親類のやつってのが、いよいよ本音を吐きやがったんです」
「どんなことを申した」
「浪江、お前はどうしても御家老のところへあがるのはいやか、とね。娘さんがびっくりして、伯父さま、それはどういうわけでございますと、開きなおりますとね、なんの因果か、お前は御

家老に見こまれているのだ。お前たちも知っているとおり、近年岩淵さまはすっかり殿さまに取り入ってしまって、あの方ににらまれた者は、だれ一人御奉公がつとまらぬ。清太郎が浪人させられたのもそれだ。あの時、お前さえ目をつむって、御家老のもとへあがっていれば、こんな苦労はせずにすんだ。今日お前たちをここへつれてきたのも、奉行所から話があったので、ほっておいては屋敷の恥辱になるとは口実で、御家老の腹の中は、それをいいことに、お前たちをここに軟禁しようというのだと、その伯父さんてのが、さすがにしめっぽい声を出しやしてね」

「ふうむ」

「まあ、その伯父貴にしてみりゃ、親子の者は身内だからかわいそうにはかわいそうだが、家老のいうことをきかないと、こんどは自分の身があぶなくなる。背に腹はかえられないから、岩淵って野郎の指図どおり、並川親子を小梅の下屋敷へつれていったってことになるんですね」

「つまり、岩淵はどうしても浪江を意にしたがわせようというのだな」

「結局はそうなんでしょうがね、もう一つ悪いことには、浪江さんの兄貴の清太郎さんね、これがやくざに姿を変えて、岩淵の命をねらっている。お家のために悪人を刺そうって覚悟なんでしょう。紛失した波ノ平行安も、たいがい岩淵の差し金と見当がついている。ところが、岩淵のほうでも、並川清太郎が自分の命をねらっているらしいと、だんだんわかってきた。あぶなくてしようがないから、母と娘をおとりにして清太郎をおびきよせ、うまく始末をしてしまおうという魂胆もあるんだそうです」

「憎いやつだな、岩淵杢右衛門と申すやつは」

鶴七郎の目が次第にけわしくなってくる。

「憎いのなんのって、悪盛んなるときはなんとやらで、きっとのさばりかえっているに違いねえんでさ」

「それで、並川親子はどういたした」

「どうしたって、女二人きりじゃどうしようもありませんや。お前たちが妙なまねをすると、一門一族がみんな迷惑をする。もし清太郎がきたら、あぶないことは思いとまるように、よく意見をしてくれ。その上で、後のことはなんとかわしたちが御家老にたのんで、並川の家名が立つようにしてやるからと、伯父貴のやつは脅したりすかしたりして、自分も泣きっ面をしながら帰っていきやがった。親子の者にとっちゃその座敷が座敷牢もおんなじで、もう逃げ出すわけにゃいかねえ。第一、逃げようたって、岩淵の野郎から見張りの人数が詰めているから、病人のおふくろをかかえて、どうすることもできやせんや」

「さようか」

「なんとかなりやせんかねえ、殿さま。悔しいが、あっし一人じゃどうにもならねえ。こんな時にゃ、殿さまにたのんで、ぜひ浜町の火薬になってもらいたいと思って、まっすぐここへ駆けこんだんですがねえ」

「よし、まいってつかわそう、小梅へ案内せよ」

鶴七郎は気軽に立ち上がった。うっかりすると、浪江は切羽詰まって自害する虞れがないとはかぎらぬ。ふっとそこへ気がつくと、もうぐずぐずしていられなかったのだ。

「ありがてえ。行ってくれやすか、殿さま」

「うむ、まいる」

「一人でいいかなあ。あっちには侍だけでも十五、六人は詰めていやすぜ」

「心配いたすな。一人でよい」

鶴七郎はそのまま裏木戸のほうへ歩き出すのだ。

「さあ、おもしろくなりやがった。殿さま、お蓮をさそってやりやしょうか」

裏木戸から大川端へ出てくると、もうこっちのものだというように、鳥松はそんなことをいい出す。

「いや、今夜はそれにも及ぶまい」

「だって、殿さまはお蓮とあの屋敷へなぐりこみをかける約束があったんでしょう。一人で出しぬいちゃ、後で恨まれますぜ」
「まあよい、また明日という日もある」
おぼろ月夜にしっとりとぬれている大川端は、また一刻千金ともいいたい風情があるが、今夜の鶴七郎には、その風流をたのしんでいる暇はなかった。
「烏、その辺で駕籠を二丁ひろえ」
「駕籠なら、殿さま、薬研堀へ出りゃ駕籠安っていう駕籠宿がありやす」
「さようか。では、それへまいろう」
元柳橋をわたって左へ切れると、昨日加納徳を切った薬研堀へ出る。堀の前は米沢町三丁目になっていて、角から三軒目が駕籠安だった。
「若い衆、本所業平橋まで二丁たのむぜ。酒手ははずむから、うんと飛ばしてくんな」
烏松が中へ入ってたのむと、
「あれえ、親方、あれは浜町の火薬さまじゃありやせんか」
と、若い衆の一人が表に立っている鶴七郎を見て、目を丸くしながらそっとささやく。
「よく知ってるなあ。昨日のを見ていたのか」
「見ていやしたとも。すぐそこの鼻先ですからねえ。すごいのなんのって」
「実は、今夜もなぐりこみなんだ。たのむぜ」
烏松はいささか得意である。
「親方は御家来さんで」
「なあに、兄弟分さ」
「御冗談を――」
てんで相手にしてくれない。
格が違いすぎるからなあと、ちょいとがっかりしたが、そのかわり駕籠安の若い衆も張り合いがあるとみえて、駕籠は威勢よくすっ飛ぶように本所へ走った。
――待てよ。
駕籠にゆられながら、烏松はふっと心配になってきた。殿さまは一人で大丈夫だとのんびりかまえていたが、こっちは二人きりだし、一体どうするつもりなんだろう。正面から入っていったんじゃ、いくら浜町の火薬が強くても、人数にはかなわない。

浜町さまだってかまうもんか、おしのびなんだから素浪人として片付けてしまえと、敵が腹黒く出て二人とも切られてしまい、屋敷のすみへでも埋めて知らん顔をされていると、ほかにだれも見ている者はないのだから、それっきりの話になってしまう。
――こいつは少し考え物だぞ。
烏松は少々心細くなってきた。
そのうちに、駕籠は待ったなしに本所業平橋へ着いてしまった。
駕籠屋は酒手をはずんでそこから帰し、業平橋をわたると右手が松平家の下屋敷である。この辺は百姓地で、屋敷のまわりはずっと麦畑になっていた。ところどころに菜の花畑があって、おぼろ月にそこだけあかるくかすんで見えるのが夢のように美しい。
「殿さま、あれが松平の下屋敷でさ。正面から乗りこむんですかい」
橋をわたりながら、烏松は聞いてみた。
「いや、とにかく裏へまわってみよう」
下屋敷の土塀の角までくると、そこの青麦畑のかげにしゃがみこんでいた怪しい男が、ぶらりと立ち上がって、なんでもない振りをしながら、橋のほうへ通りすぎようとする。
やくざっぽい着流しで、豆しぼりの手ぬぐいをぬすっとかむりにしている若い男のようだ。
この辺は宵をすぎるともう人っ子一人とおらないところである。
「これ、ちょいと待て」
やりすごしておいてから、鶴七郎は立ち止まって呼びとめた。
――あれえ、どうする気だろう。
烏松は、ぽかんと鶴七郎の顔を見ている。
「あっしかね」

ぬすっとかむりの男は、しぶしぶ立ち止まってこっちを向く。

「かぶり物を取ってみなさい」

「別に怪しい者じゃありやせん」

怪しいといえば、庭下駄(にわげた)ばきでわき差し一本という着流しの鶴七郎のほうが、見た目にはよっぽど怪しく見える。

「よいから顔を見せなさい」

「へえ」

しようがないというように、男はぬすっとかむりの手ぬぐいを取る。二十三、四とも見える、なかなかきりっとした男前だ。

「お前は清太郎だな」

男はぎょっとしたようにこっちを見ながら、返事をしない。

――ちげえねえ。

と、鳥松は思った。どこか浪江によく似た面差しなのである。やっぱり殿さまは目が高いやと、感心してしまった。

「お蓮という女を存じておるか」

「へえ」

「では、お蓮から様子をきいてまいったのだな」

「恐れ入ります」

清太郎は急に形を改めて、小腰をかがめる。

「いや、そう改まらなくともよい。わしは浜町だが、わしのことも聞いておるか」

「はい」

「よし、いっしょにまいれ」

鶴七郎はなんと思ったか、いま渡ったばかりの業平橋を、もう一度ゆっくりと引きかえしはじめる。

「鳥――」

橋を渡りきってから、鶴七郎は呼んだ。

「なんです、殿さま」

「お前はどろぼうではないが、忍びの名人だったな」

「いやなことを言うねえ、殿さま。そういちいちどろぼうでないのを、ことわらなくてもいい

じゃありやせんか」

「いや、人が間違えるといかんから、はっきりさせておくのだ。御苦労だが、その忍びの術を使ってな、この品を浪江にとどけてやってくれ」

鶴七郎は今日棚倉屋(たなくらや)からとどけてきた例の葵(あおい)の紋散らしの印籠(いんろう)を腰から取って、鳥松にわたした。

「へえ、これをあっしがとどけるんですか」

「そうだ、その品は浪江もよく存じておる。それをわたして、鶴がついているから案じるな、必ず短慮をおこしてはならぬと申しておいてくれ」

「ちげえねえ、娘っ子なんてのは了見がせまいもんですからねえ」

鳥松はやっとそこへ気がついたようだ。

「じゃ、今夜は殿さまは、なぐりこみをかけねえんですね」

「うむ、なぐりこみは明日でよい。お前は、あまりあわてて、失敗せぬようにいたせよ」

「そいつは大丈夫でござんす。さるは木から落ちることはあっても、鳥は決してそんなへまはやりやせん」

「さようか、たのみおく。わしはここをまっすぐ歩いて、吾妻橋(あずまばし)で待っている」

「わかりやした。じゃ、ちょいと行ってきやす」

鳥松は印籠をしっかりとふところへ入れて、もうすたすたと業平橋のほうへ引きかえしていく。

千鈞(せんきん)の言

「清太郎、まいれ」

鶴七郎は吾妻橋のほうへ、ゆっくりと歩き出す。

「遠慮なく肩をならべるがよい」

「はい」

「今日はな、実はお蓮をつれて、浜松の上屋敷へなぐりこみというやつをかけるつもりであった」

「申しおくれましたが、昨日は親子の者がお助けいただきましたそうで、冥加至極に存じます。清太郎感泣のほかはございません」
　清太郎は立ち止まって、改めて丁重に頭をさげる。
「そう堅くるしいことはいらぬ。街へ出れば、わしはもう一介の素浪人浜町の鶴だ。そのつもりで付き合うがよい」
「恐れ入ります」
「やくざが、さようなロをきいては怪しまれるぞ。言葉をくずせ」
「へえ」
「もうよいから、手ぬぐいをかぶれ。その方が気が楽だろう」
　鶴七郎はわらいながらまた歩き出す。
「では、お言葉に甘えやして――」
「うむ、それがよい」
「あの烏って男は、お供でござんすか」
「あれは烏松といってな、近ごろ浪江の住む長屋へ住みついたようだ。自分ではどろぼうのかくしておく金をさがして歩く捜し屋だと申しているが、街にはなかなか変わった人間がいるようで、おもしろいな」
「あっしはまさか殿さまがあんなところへおしのびになるとは思いもかけないんで、びっくりいたしやした」
「いや、烏松が今夜ふいに屋敷へ忍んでまいってな、委細を聞いた。浪江が思案につきて、自害でもしてはあわれだと思ったので、出てまいったのだ」
「お心にかけていただきまして、――手前がふがいない兄でございますので」
「いや、相手が悪すぎたのだ。町奉行所から問い合わせがまいって、わしの名が出れば、重役どもがなんとか考えるであろう。藩内のことはなるべく藩内で始末をするがいいと考えていたのだが、岩淵と申す家老は、よほど思いあがっているとみえる。藩内に意見をしてやる者はお

らんのか」
「へえ、なにぶんにも藩主に深く取り入っておりますので」
「わしもその口ではあるが、大名育ちというものはのんびりしすぎていて、気の毒なものだ。家名が断絶するまで、悪人と善人の区別がつかず、うっかりすると一服盛られてしまう」
「はい」
「そちは杢右衛門の命をねらっているそうだな」
　さすがに清太郎は口をつぐんで答えない。
「そちとしてはやむをえない手段であろうが、その考えはまだ浅いぞ。杢右衛門一人を倒しても、世の中の悪人は絶えない。また第二の杢右衛門が出ないとはかぎらぬ。そうは思わぬかな」
「はい」
「まず、藩主の目をさましてやることだ。藩主に善悪の区別がつくようになれば、悪人に惑わされることもなくなる。第二には、杢右衛門を反省させてやることだ。悪知恵の働くような者は、心を入れかえると、ずいぶん物の役に立つことが多い。そちには少し無理な注文かな」
「浜町さまのお肩入れにて、それが実現できますれば、浜松六万石の一藩これに越したよろこびはございません」
「ずるいぞ、清太郎。わしにそれをやってみせろと申すのか」
「お情けにすがりまして、なんなりとお指図をいただけば、清太郎一命は惜しみませぬ」
「よいよい。下世話に、口ぐそをたれると申す。わしが言い出しておいて、やらぬと申したら、なんだ、口先だけかと、そちはわらうであろう。乗りかかった舟であるから、なんとか手をつけてみよう」
　――気まぐれ公子。
　鶴七郎はあっさり引きうけてしまった。
　清太郎から見れば、そうとしか思えないのである。多少常人とは変わっているようだが、悪

人を善人にたたき直す、果たしてそんなことができるであろうかと、内心疑わずにはいられない。
「殿さま、行ってきやした」
いつの間にか烏松が追いついてきた。やがて吾妻橋へ出ようとするあたりである。
「烏か。案外早かったな。どうであった」
「お嬢さんもおふくろさまも、とてもよろこんでいました」
「そうか。御苦労であった」
「清さん、お前のこともついでに耳に入れておいたぜ」
烏は心やす立てにそんなことをいう。
「兄い、すんません」
こっちもその気になってあいさつはしたが、本当にこの男は妹に会ってきたのだろうかと、いうことがあまり簡単すぎるので、なんとなくふに落ちない。
「兄い、参考のために聞いておきてえんだが、忍びの術でどんな風にやってきたんだね」
「どんな風にやってきたか、わからねえか、清さん」
烏松はちょいと得意そうである。
「うむ、おれにゃどうも見当がつかねえ」
「殿さまはどうです」
「そうだなあ」
鶴七郎はのんびりとわらっている。
「あれえ、殿さまは見当がついているね」
「およそこうではないか、ぐらいはわかる」
「おもしろい。話しておくんなさいよ、参考のためにってやつでね」
「そうか。座興に申してみようか」
「たのんます」
「下屋敷は広くて無人だから、その道の者なら座敷へ入りこむのは、さほど手間はかかるまい」
「そのとおり」
「座敷へ入ったら、押し入れから天井裏へ出る」
「すみにおけねえなあ、殿さまは」

「天井裏づたいに浪江の座敷の上へ出て、押し入れの中へおりる」
「殿さま、御殿でやったことがあるな。その手で、好きなお腰元かなんかのところへ忍びこんだことがあるに違いねえ」
「そうかも知れぬな。——押し入れの中から、まず印籠（いんろう）を出してみせたか」
「薄っ気味が悪いな。見ていたようなことを言いなさる」
「いや、見てはおらんが、悲しみのどん底にいる者は、助けを待つ心になる。浪江でも信（のぶ）でも、こんな時思い出すのは、昨日のわしのことだろう。印籠を出して見せるのが、一番手っ取り早い。びっくりはしても、決して声は出さぬからな」
「偉いなあ、殿さまは。あっしはそこまでは考えなかったが、きゃあなんて言われたら大変ですからね、とにかく印籠を見せてやれと思ったんでさ」
「さようか。その道の者というものは、別に考えなくても、事にあたると、とっさに一番いい手段が頭にうかんでくる。大したものだな」
清太郎は聞いていて、なにか気恥ずかしくなってきた。ろくに考えもしないで人を疑う、こういうのを俗人というのかも知れぬ、おれの負けだと、反省せずにはいられない。
「烏、今夜はこの辺に泊まることにしよう」
吾妻橋をわたりながら、鶴七郎がいった。
「お屋敷へかえらなくてもいいんですかい」
「うむ、屋敷へかえると、また出てくる時が面倒だ」
「それもそうですねえ。あっしだって、また迎えに行くのが大変でさ」
「どこへ泊まるな」
「旅籠（はたご）はいけねえな。こう三人とも人間が変わっていちゃ、宿改めがくるとうるさい。どうです、あんまりきれいなところってわけにゃいかねえが、山谷（さんや）あたりの船宿でのみあかしっての

は」
　そこならすぐ近くに、新吉原という雑多な人間が集まる不夜城があるから、妙な組み合わせでも目につかずにすむ。
「よかろう、それにいたそう」
「合点だ。まかせといておくんなさい」
「時になあ、烏」
「なんです、改まって」
「お前にさっき駕籠賃を払わせたな」
「おきなせえ、今夜はあっしが殿さまをつれ出したんでさ。勘定は一切あっしが賄いやす」
「それではない。賄ってやりたくても、実は、わしは今夜紙入れは持っておらぬ」
「昨日だって持っちゃいやせんでしたね」
「うむ、そうであったな」
「だから、まかせておきなせえ。二晩や三晩は心配させやせんや」
　烏松は、ぽんと自分のふところをたたいてみせる。
「実は、そのことなのだ」
「あれえ、まだ文句があるんですかい」
「文句はこれからだ」
「おどろいたなあ。一体、どんな文句があるんです」
「お前のその金は、やはり権兵衛のをほじくってきたやつか」
「いやなことをいうなあ、殿さまは。これはそんなんじゃありやせんや。あんまり自慢にもならねえが、ばくちでころがりこんだ金なんです」
「さようか。それならまあ我慢することにいたそう」
「けっ、ごあいさつだなあ、文なしのくせに」
「わしもお前も、今夜は人助けにまいっているのだ。人を泣かせた金で、人を助けてもなんにもならぬ。だから、念のために、いやなことを聞いたのだ。悪く思うな」
　あたりまえの声でおだやかに言っているのだが、烏松の胸には千鈞の重みになってこたえた

らしい。しばらくは返事をしなかった。やがて、吾妻橋をわたり切ろうとしている。
　つかつかと欄干のそばへ寄っていった烏松は、ふところから財布をつかみ出すなり、ぽんと隅田川へ投げこんでしまう。
「殿さま、ばくちの金だって、女房子を泣かせていやさあ。人助けにゃならねえ」
「うむ。そこへ気がつけば、二十札の松だな」
「けっ、おだてっこなしさ。あっしはこれで一文なしになっちまった」
　そういいながらも、烏松の声はどこか明るい。
　――これは常人ではない。
　清太郎は、じいんと胸が引きしまってきた。

駄々姫さま

　山谷の船宿で一夜を明かした鶴七郎は、翌朝清太郎と烏松を連れ、山ノ宿から竹屋の渡しをわたり、向島へ出てみることにした。
　今日もうらうらと日ざしのあたたかい春日和である。
「花見にゃまだちょっと早いし、向島へ行ってどうしようっていうんです、だんな」
　昼間は忍びの術もあまり役に立たないので、烏松はいつもたいてい盛り場で日を暮らすことにしている。花見どきでもないかぎり、向島をぶらつくなどという趣味はほとんど持っていない男なのだ。
「天気がよいから、向島へまいって、三人で摘み草でもいたそうと思ってな」
　鶴七郎はそんなのんびりとしたことをいう。
「御冗談で。女の子じゃあるまいし、野郎が三人で摘み草をして、ままごとをしたってつまりませんや」
「そうか。では、捜し屋というやつでもやってみるか」
「よしやしょう。こっちは人助けってやつを控えているんでさ。人を泣かした金で人助けでもありやせんや。なあ、清さん」

　鳥松はゆうべのことを思い出して苦笑する。
「松兄いの前だが、わしが今朝船宿へ払ってきた勘定も、あまり人をよろこばせている金ではないようだ。それも今ははなはだ心細く相なった」
「あれえ。じゃ、昼飯代にも心細く相なっているんかね」
「いささかな」
「こいつはおどろ木桃の木だ。渡し賃は大丈夫かね」
「やっとこさでござろう」
「さあいけねえ。すると、だんな、やっぱり向島へわたって、草でも摘んで昼飯がわりってことになりそうです」
「それもまた風流であろう。唐に伯夷叔斉の先例もある」
「とうもろこしがありゃ、なにも煎じてのまなくたって焼いて食いまさ。摘み草の草っ葉じゃ、第一腹の足しにするまで摘むのが大変ですからね。情けないことになりゃがったなあ」
「まあ心配いたすな、なんとかなる」
　鶴七郎はわらっている。
　むろん、相手が浜町の鶴なのだから、なんとかなるには違いないが、やがてもう昼に近いのだ。さしあたって、さあ飯を食おう、銭がないでは、大の男が三人もそろっていて少し能がなさすぎる。
「ねえ、だんな、なんでしたら今のうちに、あっしが一っ走り両国の棚倉屋さんへでも行って都合してきやしょうか」
「あいにく、あの印籠は、昨夜、浪江にあずけてしまったから、今日はそうもいくまい」
「なあるほど、そうでござんしたね」
「まあ、任せておけ。実はな、わしはこれから小梅の下屋敷へなぐりこみをかけようと思っている。昼飯は向こうに出させよう」
「そ、そりゃ本気ですか、だんな」
「とにかく、向こうへ渡るとしよう」

　鶴七郎はさっさと渡し船へ乗りこんでしまう。
　船には乗り合いの者がいるから、うっかりした話はできない。それでなくてさえ、差し添え一本で、ぞろりとした着流しの、しかも庭下駄ばきの貴公子は人目に立つから、乗り合いの目がそれとなく鶴七郎にばかり集まっているのだ。
　――殿さまは本当になぐりこみをかける気なんかなあ。
　鳥松は心中はなはだおだやかでなくなってきた。
　考えてみると、浜町さまがこれから小梅の下屋敷へなぐりこみをかけようという気持ちは分からないことはない。いまにも、もし上屋敷から狒々家老の岩淵杢右衛門が小梅へ乗りこんでくれば、浪江はまったくへびににらまれたかえるで、どう身を逃れようもなくなる。
　それがあるから、これから小梅へ行ってみようというのだろうが、三人きりでは、いざという時なぐりこみのかけようがない。ことに、真っ昼間では忍びの術がきかないだけ、鳥松としてはよけい心配になってくるのだ。
　渡し船はやがて中流にかかって、藍色の潮をたたえた隅田川は川下に吾妻橋をながめ、花に間もない向島土手が次第に近くなってくる。
「船頭さん、あそこに屋形船がついて、お腰元衆が土手で摘み草をしているようだが、あれはどなたさまの船だね」
　乗り合いの一人がはるか川上の土手の方を指さしながら聞いた。
　鳥松が振りかえってみると、なるほど岸に立派な屋形船がついて、その辺の河原から土手のあたりまで、まるで草原へ花が咲いたように、腰元たちが散らばってなにか摘んでいるのが、あざやかに見えた。
「ああ、あれかね。なんでも、尾州さまの駄々姫さまが摘み草をなすっているんだそうで、お

かげであの辺の土手は通行止めになってるってことだ」
「へえ、尾州さまの駄々姫さまっていうと、中村座へ行列で乗りこんで芝居見物をしたっていう派手なお姫さまだね」
「なんでもそんな話だ。見なせえ、お供の船をあんなにつれて、川も土手も通行止めにして摘み草をするなんて豪勢なまねは、いくら御三家さまでも、駄々姫さまでなくちゃできなかろうて」
「なるほどねえ」
烏松も駄々姫のうわさは耳にしていた。尾州家の姫君で、本当の名は忠姫というのだが、恐ろしくきかない気でわがままときている。一度いい出したら、わがままを通さないうちはおさまらぬ性分だから、家来たちから駄々姫とかげでいわれ、どこかの帰りに行列のまま中村座へ寄って芝居見物をしたことが江戸中の評判になって、今では尾州さまの駄々姫でとおっている。
今年はもう十八で、絶世の美人だが、こういう派手な姫君を夫人にしては金がかかってしようがないので、いまだにどこからも縁組みの口がかかってこない。
三家の威勢でこっちから口をかけても、みんな体よくことわられてしまうのだ。
父の大納言が不憫がって、
「持って生まれた気性ならやむをえぬ。好きにさせておけ。まさか、尾州六十一万石を食いつぶしもすまい」
と、一言も小言をいったことがないので、
「忠のわがままはお父君からおゆるしが出ているのです」
と、おおっぴらで駄々をこねとおしている。
いわば、天下御免の駄々姫なのである。
それが今、向島土手で天下御免の摘み草をやっているというのだから、
――どんな面をしているのか、一度見てやりてえもんだな。

と、烏松はついそっちへ気を取られているうちに、渡し船は向島へ着いてしまったようだ。
舟をおりた乗り合いたちは、土手の道はふさがれているというので、みんな三囲稲荷のほうへ土手を越していってしまう。
清太郎が心細い財布から渡し賃を払ってあがってくるのを待っていた鶴七郎は、
「清太郎、財布はもう空になったか」
と、聞いてわらった。
「へえ、もう一人分のうどん代にも足りやせんようで」
清太郎が苦わらいする。
「しからば、我々も嫁菜でも摘んで煮て食うよりほかはないな」
「だんな、ちょうどいいや。尾州の駄々姫さまが向こうで摘み草をしているそうですから、摘んだのをもらうことにしちゃ」
「そうだな、あっちは大勢で摘んでいるのだから、もうだいぶたまっているかも知れぬな」
鶴七郎は土手へあがると、そのまま足をそっちへ向けようとする。
「だんな、だんな、冗談じゃねえ、本当に嫁菜をもらいに行く気ですかい」
烏松があきれて聞く。
「うむ、背に腹は替えられぬ。ひとつ、駄々姫にかけあってみよう」
「だめですよう。あっちの土手には、家来が往来止めをしてるって話ですぞ。そりゃだんなは名前をいえば通してくれるか知れやせんが、あっしたちはそうはいきやせんや。六尺棒かなんかで追っ払われたんじゃ、娘っ子が大勢見ている前で、あんまり体裁がよくねえ。今日はよしにしやしょうよ」
「心配するな。下世話にも、当たってくだけろと申すことがある。まあ、ついてまいれ」
鶴七郎は足をとめようとしない。
牛ノ御前の前を通りすぎて、土手が東のほうへひとくねりして、桜もちで有名な長命寺の前

あたりへかかると、果たしてその門前に第一の関所があった。
「待て、その方どもは何者か」
御三家筆頭の尾州家の家来だから、なかなか威張っている。
「おまえたちは駄々姫さまの供の者か」
鶴七郎が恐れ気もなく聞きかえす。
「なにッ、お手前はだれだ。何者だ。名を名乗らっしゃい」
相手も身なりこそ変わっているが、どこか常人とは違う人柄に気がついて、いささか面くらっているようだ。
「わしは浜町の松平鶴七郎である。存じているかな」
「はあ。先年お城を出られました松平鶴七郎さまのお名前は、よく存じていますが」
「わしがその浜町の鶴だ。途中で駄々姫が摘み草をしていると耳にいたしたので、わざわざごあいさつにまいった。実は、お目にかかって、少しお願いしたいこともある。姫君に取り次いでみてくれぬか」
「はあ」
家来たちは顔を見あわせている。これが本物の鶴七郎かどうか、名前だけは聞いているが、だれも見たことはないのだから、急には返事ができないのだろう。
そこへ長命寺の境内から、年輩の立派な侍が出てきて、鶴七郎の顔を見ると、はっとしたように目礼し、
「これ、いかがしたのか」
と、警固の侍たちに聞いた。
「はあ、ただいまこの方がみえられて、浜町の松平鶴七郎さまだと申され、姫君さまにあいさつがしたい。少したのみたいこともあるとおっしゃるのですが、我々はまだお目にかかったことがございませんので、本物かどうか――」
「ひかえろ。失礼なことを申してはならん」
年輩の侍は、若侍たちをたしなめて、

「失礼つかまつりました。手前は今日の供頭を相つとめます野々山弥太夫と申します。御用のおもむきを、改めてうかがいとう存じます」
と、丁重に小腰をかがめる。
「野々山はわしを存じておるようだな」
「はい、浜町の鶴七郎さまと存じあげております」
「それは幸い。わしは今も申すとおり、駄々姫さまにお目にかかって、たのみたいことがあるのだ。長くじゃまはせぬ。取り次いでみてくれぬか」
「かしこまりました。出さきのことでございまして、なんと申しますか、しばらくお待ちを願います」
さすがに供頭をつとめるだけあって、わかりが早い。野々山はおじぎをして、ずっと向こうの土手下の姫君のほうへ小走りにいそいでいく。

気にいった短筒

間もなく弥太夫が引きかえしてきて、
「お待たせいたしました。お目にかかりますそうでございますから、御案内申しあげます」
と、告げた。
「過分である。――清太郎、烏、ついてまいれ」
鶴七郎が声をかけてくれたので、烏松はしめたと思った。
警固の侍たちは、苦い顔をして、二人の身なりをじろじろ見まわしている。
「鶴七郎さまに申しあげておきます。お聞き及びでもございましょうが、姫君さまは少々変わっております。なにとぞ、お含みの上、よろしくお願いいたします」
土手の上を案内しながら、弥太夫が如才なく小声でいう。あまり気にさわるようなことは言ってくれるな、また、なにを言っても気にかけてくれるなと、あらかじめ念を押しているのだ

ろう。
「いや、心配いたすな。世間の目から見れば、この鶴七郎などもだいぶ変人のように見えるそうだ。なに、これでそれほどでもないのだから、駄々姫さまもおなじことであろう」
あんなことを言っていると、烏松は清太郎を小突きながら、あぶなく吹き出すところであった。
「あれにおられますのが、姫君さまでございます」
三十間ばかり向こうの土手下に、緋縮緬のたすきをかけた豪華な姫君が、腰元たち四、五人に取りまかれて、澄まして摘み草をしている。だれもこっちを見ようともしない。
その近くの緋毛氈の上に、茶器が用意してあって、搔取りを着た老女らしいのが座ってこっちを見ている。
――こいつはすごいながめだ。
烏松が思わず目をみはったとたんに、
「清太郎、烏、その方どもはここに待っておれ。奥は男禁制だからな」
と、鶴七郎がふりかえって注意した。
「へえ」
烏松は、なんだ、つまらねえ、と思ったが、それから先には、なるほど、警固の侍の姿は一人も見えないのだ。
「これこれ、そんなところに立っておってはお目ざわりだ。そこへ座っておれ」
反対側の土手の桜の木の下にひざまずいている侍が、いきなりしかりつける。
「へえ」
二人はびっくりして、そこへ座ってしまう。助からねえなとは思ったが、ここなら向こうのすばらしい本舞台がよく見える。まあ我慢するよりしようがないと、あきらめるほかはなかった。
鶴七郎は弥太夫の後について、そこから土手をおり、姫君のほうへ近づいていく。

緋毛氈の上の老女は、こっちが近づくと、出迎えるようにそこへ両手を仕えたが、姫君も、そのあたりの腰元たちも、まだこっちを向こうとはしない。おそらく、平気で摘み草をしているようにという、駄々姫の命令なのだろう。
かえって遠くに三々五々散らばっている腰元たちのほうが、みんなそれとなく物珍しげにこっちを見ているようである。
「姫君さま、松平鶴七郎さまを御案内いたしましてございます」
数間こっちの草の上へひざまずいて、弥太夫が姫君のほうへ取り次ぐ。
駄々姫はやっと摘み草をやめて、ゆっくりと立ちあがり、恐れ気もなく鶴七郎のほうへ正面を切った。
全体にきつい感じはするが、すらりと上背があって、なるほど輝くような美貌である。なによりも満々たる覇気といったようなものが若さといっしょにあふれているのが、鶴七郎には好ましい。
「姫君、せっかくの御遊山中、おじゃまいたす」
鶴七郎は声をかけて、ゆっくりと前へ進みながら、
「わしは浜町の鶴七郎です。どうぞよろしく」
と、軽く会釈をした。
姫君はにこりともしない。
「駄々にどんな御用があるのでございます」
「実は、ぜひ人助けをしていただきたいと思ってきたのだが、姫君はそういうことはおきらいですか」
「だれを助けろとおっしゃるのです」
「この近くのある大名の下屋敷へ、かわいそうな娘とその母親が監禁されているのです。監禁したのはそこの家老なんだが、これがなかなか悪い家老らしいのです」
「鶴七郎さまは、浜町の火薬といわれるお方でございましょう。どうしてお一人で助けてあげられないのです」

「それは、火薬を使えばなんとかなるんですが、それではその大名の家に傷がつく。家がつぶれては、罪もない多くの家来が路頭に迷って気の毒です。なんとか穏便にすませてやりたいと思って、いろいろ考えてみたが、わしだけの力ではどうもうまくいきそうもない。困っていると、いまそこの渡し船で、姫君がここで摘み草をしているという話が耳に入った。そうだ、駄々姫さまにいっしょに行ってもらえば、事は簡単だと気がついたのです」
「駄々がいっしょにまいると、どうなるのです」
駄々姫はだんだん話につりこまれてきたようだ。
老女が心配そうにこっちを見ている。
「姫君はこれからお弁当をつかわれるのでしょう。それを口実にして、その下屋敷へ押しかけていき、しばらく座敷が借りたいと申し入れるのです。ことわるはずはないから、座敷へ通してくれる。座敷へとおってしまえば、もうこっちのものです。わしがおもしろい芝居をして、きっと親子の者を助け出してみせます」
「どんな芝居をするのです」
「それは、相手の出ようによって、臨機応変にやる。わしはこれでもなかなか知恵というものがあるから大丈夫です。これは生きた芝居ですからな。中村座の芝居などよりずっとおもしろい。どうです、やってみませんか」
いかにもおもしろそうに持ちかける鶴七郎だ。
「駄々はただ座ってみていればよいのですか」
「そうです。座頭はただ座っていても芝居になるのです。しかも、それで人二人の命が助かるのですからな、摘み草などよりたしかにおもしろい」
「鶴七郎さまは鉄砲の名人だと聞きました。鉄砲も撃ってみせてくれますか」
姫君が物騒な注文を持ち出す。ただではうむと言わないのが、駄々姫の駄々姫たるゆえんな

のだろう。
「お望みとあれば、鉄砲も撃ってみましょう」
「きっとですね」
「きっとです。姫君は鉄砲が好きですか」
「好きです。大きな音がしますね。鶴七郎さまに飛んでいる鳥が撃ち落とせますか」
「わけはありません。ただ、生き物を撃つのはかわいそうですからな、わしは銭を空へ投げさせて、それでけいこをした」
「そんなことができるのですか」
「できますとも。姫君だって、なれればすぐできる。しかし、鉄砲は重いから、姫君には短筒のほうがいいかも知れないな」
「撃ってみたい。鶴七郎さま、教えてください」
駄々姫の目が星のように輝き出す。なんとなく挑戦しているようだったさっきの意地悪さは、もう跡かたもなく消えて、子供のような邪気のない顔になっている。
「よろしい、もし姫君が親子の者を助けてくれたら、その礼に短筒の撃ち方を教えてさしあげる」
「本当ですね」
「わしは、姫君をだますような、そんな人の悪い男じゃありません」
「短筒は屋敷にありますかしら」
「天下の尾州家に、短筒ぐらいないことはないでしょう。しかし、最近オランダから入った短筒は、かなり離れたところでも撃てますからな。それをさしあげてもいい」
「うれしい。ぜひ、ください」
「お別れする時にさしあげます」
「まあ、そこにお持ちなのですか」
「持っています。ここに」
鶴七郎は自分のふところを上からおさえてみせる。これはたしかに利いたらしい。
「弥太夫、駄々は鶴七郎さまと人助けにまいります。用意をなさい」
興奮に顔を輝かしながら、きっぱりと言いつ

けたが、すぐに気がついたように、
「鶴七郎さま、その下屋敷は船で行けるところですか」
と、いそいで聞く。
「行けます。小梅の業平橋まで行けばよいのです」
「弥太夫、わかりましたか」
「はっ」
弥太夫は返事はしたが、当惑したようにちらっと老女のほうを見ている。
「浦路、駄々は船へかえります」
「あの、姫君さま、今日は船遊びのために、お屋敷へもそう申しておいて出てまいりましたのでございますから、お模様がえはおひかえあそばしませんと——」
三十がらみとも見える老女浦路が、物静かに引きとめようとする。
「大事ありませぬ。業平橋までは船ですから、船遊びです。鶴七郎さまもいっしょですから、お席をこしらえてください。短筒のお話をうかがいたいのです」
一度言い出したら思いとまるような駄々姫ではない。
家来たちには少し気の毒だと思ったが、こっちはその気で短筒でつったのだから、
「弥太夫、わしの家来二人に、一足先に業平橋へまいって待っているように申しつけておいてくれ」
と、鶴七郎は澄ましていいつける。
「はっ」
駄々姫さまのところへ飛んだ駄々っ子が舞いこんだと、家来たちはさぞ迷惑だったろうが、それから腰元どもを集めて屋形船に乗せ、警固の士は三隻の伝馬船に分乗して、ともかくも舟をこぎ出す。
吾妻橋の少し手前まで下って、そこから水戸の下屋敷の南がわを流れる源森川へ入り、やがて右折すると、間もなく業平橋へ出る。

その船の中で、駄々姫はどうしても短筒を見せてくれとせがむのである。しょうがないから、弾をぬいてわたすと、こんどは撃ち方を教えてくれという。
「鶴七郎さま、大丈夫でございましょうか」
腰元どもが青くなっているので、浦路が何度も心配して聞く。
「弾がぬいてあるから、心配はない」
そういって聞かせても、姫君が銃口を向けて引き金をかちっとひくたびに、みんな耳をおさえている。
「お駄々どの、本当はそんなかっこうで撃つと、短筒でも反動というものがあるから、うしろへ体がのけぞるようになる。はじめは立ちひざになって、左の腕へ銃身をあてがってねらう。こういうかっこうになるのです」
形をしてみせただけではうまくいかず、しまいにはうしろへまわって、いちいち手を取って教えてやらなくてはならなかった。
男にそんな風に体をさわられても、駄々姫は女ということを忘れてしまったように、短筒にばかり夢中になっている。まったく勇ましい駄駄姫だった。
「鶴七郎さま、一発だけ弾を入れて撃ってみたい。いけませんか」
とうとうそんな無茶なことをいい出す。
「それだけは我慢なさい。御府内で発砲すると、重罪ときまっているんだから」
「姫君さま、どうかおやめくださいませ。おけがをなすっては大変でございます」
浦路ははらはらしながら、もう短筒を取りあげてくれるようにと、いそいで鶴七郎に目くばせをする。
「たった一発だけなのですもの。いいでしょう、鶴七郎さま」
熱にうかされたような目をして、駄々姫はどうやらいよいよ本当の駄々姫になってきたようだ。

腰元たちはしいんと鳴りをしずめてしまう。
船はちょうど業平橋の下をくぐりぬけていた。

夢ものがたり

「いずれへお船をお着けいたしましょうか」
艫（とも）にいた家来の者が聞いてくる。
「そこの左手の桟橋（さんばし）へ着けてくれ」
鶴七郎がいいつける。そこが浜松家下屋敷の前の桟橋なのだ。見ると、北の麦畑のほうへ向いて建っている門が、今日は珍しく八文字にひらいている。
——案の定、悪家老が藩主を誘い出して、なにか小細工をたくらんでいるらしいぞ。
鶴七郎は早くもそう見て取る。
「鶴七郎さま、あの屋敷ですか、かわいそうな親子の者が監禁されているというのは」
駄々姫はまだ短筒をおもちゃにしながら聞く。
「そうです」
「あれはどなたのお下屋敷です」
「浜松の松平河内守の屋敷です」
「門があいていますね。河内どのがまいっているのでしょうか」
「そうかも知れません。とにかく、野々山をつかわして、しばらく座敷を借りたいと申し入れてみていただきたいな」
「あの屋敷を借りたら、これを一発撃たせてくれますか。屋敷うちなら、一発ぐらい撃ってもかまわないでしょう」
駄々姫はどうしても実弾を一発撃ってみたいらしい。
「それはかまわんでしょう。ただし、監禁されている親子をもらいうけてからでないといけません。母親の名は並川信、娘は浪江というのです」
「駄々がその親子の者をもらいうけるのですか」

「そうです。この役は、お駄々どのにかぎるのです」
「なんといってもらいうければよいのです」
「昨夜夢を見たというのです。摘み草をしているところへつるが舞いおりてきて、世にも珍しい孝行娘がいるから、もらいうけてぜひ腰元にするようにとすすめられた、といえばよろしいでしょう」
「鶴七郎さまはずるい」
駄々姫がわらい出す。
「ずるい——？」
「座頭はただ座っていればいいという約束だったのでしょう」
「しかし、ただ黙って座っているより、せりふのある座頭のほうが立派に見えます」
「後できっと短筒を撃たせてくれますね」
「よろしい、きっと約束します」
鶴七郎は並川親子さえ無事に助ければいいのだし、駄々姫はなんとかして実弾を一発撃ってみれば気がすむのだから、話し合いはすぐにつく。
供船から供頭野々山弥太夫が桟橋まできて、さっきから待っているのだ。
「弥太夫、浜松家へまいって、駄々がしばらく休息する間、お座敷を借りうけたいとたのんでみてください」
「かしこまりましてございます」
弥太夫は心得て、さっそく浜松家の門を入っていった。
「姫君さま、あちらへまいりますまで、その鉄砲は鶴七郎さまにおあずけあそばしませ。浜松家の御家来衆が妙に取りますといけません」
老女浦路がそばからすすめる。
「かまいません。これを見てびっくりするような侍では、物の役に立ちません」
「浦路、心配いたすな。弾さえこめてなければ、おもちゃもおなじで、あぶないことは少しもない」

鶴七郎はなるべく駄々姫の肩を持っておく。いまつむじを曲げられては大変だからだ。

「姫君さま、行ってまいりました」

弥太夫が帰ってきて、

「下屋敷のことで、なんのお構いもできませんが、どうぞお使いくださいますようにとのことでございます」

と、返事を告げた。

「御苦労でした。——さあ、まいりましょう、鶴七郎さま」

もう警固の家来たちが、桟橋から表門までの間の両側にならんで、ちゃんと人がきを作っている。

その中を、駄々姫は鶴七郎と肩をならべ、手に物騒な短筒を持ちながら、弥太夫の先導で、堂々と下屋敷の門をくぐっていくのだ。後から浦路以下十数人の腰元たちがつづくのだから、まことに派手な行列である。

「弥太夫」

鶴七郎が思い出したように呼ぶ。

「はっ」

「後で、わしの供の者にも、玄関で待っているように申しつけておいてくれ」

清太郎と烏松のために、鶴七郎は声をかけておいやてる。

「心得ましてございます」

玄関へ着くと、まだ五十前とも見える立派な家来が、乗馬姿で、小侍をしたがえ、式台まで出迎えていた。これが悪家老岩淵杢右衛門らしいと見ていると、果たして、

「尾州家姫君さまにはようこそお立ち寄りくだされました。手前は当家の家老職、岩淵杢右衛門と申す者、お見知りおき願わしゅう存じます」

と、両手をつかえたまま名乗った。

「尾州の駄々です。突然迷惑をかけます」

「どうつかまつりまして。——突然のこととて、なんのお構いもできませぬが、どうぞごゆるりと御休息をお願いいたします」

如才なくいいながら、少し顔をあげて、まず駄々姫の手の短筒に目をみはり、少しさがって立っている鶴七郎の着流し姿に不審そうな目を向ける。

「過分です」

駄々姫が鷹揚にうなずいて、澄ましているので、まさか、そちらはどなたさまでしょうとも聞きかねたのだろう。黙ってついていれば家来には違いないのだから、

「御案内つかまつります」

と、杢右衛門は先に立って広書院へ案内した。

正面に姫君の座がこしらえてあって、そこまでついてきた弥太夫は、一同の座がきまるのを見とどけて、廊下から引きかえしていった。姫君が中食をとるのだから、ここはむろん女たちばかりのはずだ。

が、たった一人、鶴七郎が平気で姫君とならんで座ってしまった。老女も腰元どもも当然のような顔をしている。

尾州家の奥にはこんな習慣があるのか、それとも音にひびいた駄々姫のことだから、わざとこんな風変わりな家来をつれて歩いているのか、さすがに悪知恵の働く杢右衛門も、相手が相手だけに、うっかりした口もきけなかったのだろう。

杢右衛門は改めて姫君にあいさつをのべ、

「お女中衆、今日は御苦労に存じます」

と、女たちにも如才なく会釈してから、

「ちょうど手前主人河内守も、今日は遠乗りのついでに当下屋敷へ立ち寄り、別間に休息いたしております。お目どおりくだされればしあわせに存じます」

尾州家の姫君と近づきになっておけば、後でなにかにつけて損はないから、河内守を引きあわせようとする。

「どうぞと申し上げてください。駄々も今日はしのびの遊山ですから、かまいませぬ」

それこそこっちののぞむところなので、駄々

姫はきげんよく答える。
「それでは、お言葉にしたがいまして」
李石衛門はすぐに座を立っていった。
駄々姫は、これでいいのでしょうというように、鶴七郎のほうをちらっと見てわらっている。
これはなかなかすみにおけないお姫さまだと感心して、鶴七郎もわらいながらうなずいてみせる。
間もなく李石衛門が、これも乗馬姿の河内守を案内してきて、座に着くと、
「主人河内守にござります」
と、披露した。
二十四、五とも見える若い河内守は、一目見た時から、駄々姫の生き生きとしたすばらしい美貌に、すっかり気をひかれてしまったらしい。
「姫君にはようこそお立ち寄りくだされ、河内祝着に存ずる」
と、あいさつをしながら、鶴七郎のほうなどはまったく見ようともしない。
「突然おじゃまをいたします。河内どのも今日はお遠乗りだったそうでございますね」
「さようです」
「駄々は今日摘み草でした。お馬に乗れると駄々もお供するのですけれど、お馬はおもしろいでしょうね」
「それはおもしろいものです。なに、おとなしい馬ならすぐ乗れるようになりますから、お教えしてもよろしい」
「本当ですか。駄々は乗ってみたい。おとなしい馬をつれてきていますか」
さっと目を輝かしているので、おやおや、気の多い駄々姫だと、鶴七郎はあきれていると、
「わしの馬はおとなしい名馬です」
と、河内守もしめたというように、ひとひざ乗り出してくる。
「ああ、お馬のおけいこの前に、河内どのにお願いがあります」
「どんなことです」

「駄々、お土産にいただいて帰りたいものが一つあります」
「なんなりとさしあげましょう。馬ですか」
「いいえ、おわらいになってはいやですよ」
「わらいません。なにがほしいのです」
「駄々、ゆうべ夢を見ましたの」
なにげなく持ちかけていくので、これはまったく大した姫君だと、鶴七郎は感心してしまった。
「乗馬のけいこの夢ですか」
河内守は馬にばかりこだわっている。
「そうではありません。駄々が摘み草をしていますと、空からつるが一羽舞いおりてきて、駄々姫さま、明日はよいものを授けてあげましょうといいます。どんなものを授けてくれるのです、と聞くと、親孝行な娘です。その娘をもらいうけて腰元にすると、とてもしあわせな良縁が得られます。それはどこにいる娘なの。美男の殿さまのいるあるお屋敷に奉公している娘です。後は御自分でおさがしなさいといって、つるはまた空へ舞いあがってしまいました。そこで夢がさめました」
浦路が心配そうに駄々姫の顔を見ている。うまくいくだろうかと、気をもんでいるのだろう。
「ふしぎな夢ですなあ」
河内守は美男の殿さまというのが気に入ったらしく、熱心に相づちを打っている。
ひそかに目を光らせているのは、そばについている悪家老李石衛門だけだ。あまり利口そうでない河内守を手玉に取って、浜松六万石をわが手でかきまわしている奸物だから、なにか胸にぴんとくるものがあったのだろう。
「本当にふしぎな夢でした。今日はこの辺へ摘み草にくることになっていたのですが、意地の悪いつるは、その娘のいる肝心なお屋敷の名を教えてくれないのです。駄々はいろいろ考えてみました。つるが舞っていたのは、美保の松原のような、とてもいい景色のところでした」

駄々姫はうっとりした目になって、しきりに夢を思い出しているような顔をしてみせる。なかなかお芝居がうまい。
「なるほど。——それからどうなされましたな」
「いくら考えてもなぞはとけませんでしたが、さっき船がこの前へかかった時、はっと思いあたりました。あの橋は業平橋だとだれかが申していたのが耳に入ったからです。業平朝臣は美男だったそうですね。その孝行娘の奉公しているお屋敷は、きっとこの近所に違いないと思い、あの下屋敷はどなたの屋敷ですかと聞きますと、浜松侯のお屋敷ですと、腰元が教えてくれました。そういえば、美保の松原は浜辺で、松があります。おたずねしてみますと、河内どのは御美男ですし——」
さすがに駄々姫のほおがほんのりと桜色になる。
「杢右衛門、この屋敷に親孝行な娘が奉公しているか」
河内守はすっかり乗り気になって、杢右衛門に聞く。
「さようでございますな。下屋敷のことで、ここにはふだん女中はおきませんが」
杢右衛門があいまいに答えて、小首をかしげるのへ、
「波がとてもきれいでしたから、浪江という名かも知れません。河内どの、駄々にぜひ浪江という娘をください」
と、ここまでくると駄々姫は急に強引になってきた。
波がきれいだから浪江と、名前まできめてしまうのは少し無理だが、
「おお、並川の娘のことであろう。あれは母親おもいだと聞いている。姫君の良縁のためとあれば、さしあげてもよい。浪江をここへ呼べ」
と、駄々姫の美貌に魂を奪われている河内守は、一も二もなく話に乗せられてしまったようである。

扇の的

「つかぬことをおうかがいいたしますが、姫君さまには珍しいものをお持ちでございますな」
苦い顔をしていた杢右衛門が、駄々姫のひざの上の短筒をながめながら聞く。
「これはオランダわたりの一番新式の短筒です。いまは弾がぬいてありますからあぶなくありませんが、ずいぶん遠くまで弾が飛びます」
駄々姫はうれしそうに短筒をひねくりまわして自慢する。
「そのように短筒を一寸もおそばからお放しにならぬところを見ますと、姫君はよほど火術のほうは名人でいらせられましょうな」
「それは名人です。いまに一発撃ってみせましょう」
「たのしみでございますな。ぜひお手並みを拝見させていただきます。しかし、弾はお持ちでございますか」
「弾は鶴七郎さまにあずけてあります。心配ありません」
駄々姫は無邪気に鶴七郎のほうを見る。
「はて、鶴七郎さまと仰せられますと、浜町の松平鶴七郎さまでございますか」
ずばりと言い当てたところを見ると、老獪な杢右衛門には、そうではないかと、すでに見当がついていたのだろう。
「杢右衛門、わしはいかにも浜町の鶴七郎だ。今日はお駄々さまのお供でな。——河内どの、失礼いたした」
のんびりと会釈をする鶴七郎だ。
河内守はただ会釈をかえしただけで、駄々姫にばかり関心を奪われているようだが、
「これはこれは、存ぜぬこととは申せ、御無礼つかまつりました。手前は岩淵杢右衛門、なにとぞお見知りおきくださいますように」
杢右衛門は丁重にあいさつをして、もうのがれぬところと観念したのだろう。

「ただいま、浪江をお目にかけますでございます」
と、悪びれた様子もなくさがっていった。
「お駄々さま、お馬のおけいこにはおはかまがいりますな。取り寄せておきましょうか」
河内守はどうしても馬のけいこをさせるつもりらしい。
「河内どのは馬術の名人でございましょう」
「そうですな。大抵の馬は乗りこなせます。馬は乗り手の心をよく知っているものですからなあ」
「では、おはかまなしでもおけいこさせていただけるようにしてください」
駄々姫がまたそんな無茶なことをいい出す。
「承知しました。なに、姫君さえよろしければ、おはかまなしでも、いくらもおけいこはできます」
河内守は心得顔にそんなことをいう。
困ったことだといいたげに、浦路がそっとまゆをひそめていた。
杢右衛門が浪江をつれて座につき、
「姫君さま、浪江を召しつれましてございます」
と、披露した。
「御苦労でした」
駄々姫は鷹揚にうなずいて、
「そなたは並川浪江ですね」
と、末座に平伏している浪江に声をかける。
「はい」
浪江はあわれにも、一夜のうちに面やつれが目立つようである。
「姫は尾州のお駄々です。今日そなたを河内どのからもらいうけましたから、屋敷へつれてもどります。母もいっしょですから、心配しませぬように」
「はい、ありがたきお言葉を下しおかれまして——」
浪江はもう涙声になって、顔があげられないようである。

「駄々姫さまに杢右衛門お願いがございます」
「なんです」
「駄々姫さまは短筒の名人でいらせられます。那須与市は壇ノ浦におきまして、扇の的を見事に射ましたとか。これなる浪江に扇をかざして庭に立たせ、ぜひお手並みのほどを拝見させていただきたく存じます」
杢右衛門が駄々姫をおだてながら、底意地の悪いしっぺがえしに出てきた。
「杢右衛門、一つ間違うと浪江の命がなくなりますよ」
駄々姫が思わずまゆをひそめる。
「万さようなことはなかろうかと、杢右衛門は存じあげます。浪江は姫君さまがつるのお告げによって、良縁を得るために当家へ求められたものでございます。その夢が正夢でございますように、なにとぞここにめでたくおあかしくださいますよう、お願いつかまつります」
言ってみれば、こっちにも夢で一杯くわせたひけ目があるから、駄々姫もそれはできないとはいえない立場へ追いこまれてきたわけだ。
「杢右衛門、たっての所望なら扇の的を撃ってみせてもよいが、浪江には母がおります。老いたる母にしばらくの間でも心配をかけては気の毒ですから、こういたしましょう。駄々が扇をかざして庭に立ち、鶴七郎さまに撃っていただくのです。鶴七郎さまに夢のつるになっていただくのですから、それならそなたも納得がいくでしょう」
駄々姫としてはうまい逃げ方だったが、あっと顔色を変えた浦路が、
「姫君さま、それはなりません」
と、必死に進み出た。
「姫君さまに申し上げます。浪江は少しも短筒を恐しいとは思いませぬ。どうぞ、浪江に扇をお持たせくださいませ」
浪江も一生懸命に進み出る。
杢右衛門はどっちが出てもいいのだから、河

内守がなにかいおうとするのを、いそいで目でとめて、図太い顔をしている。

「浦路、鶴七郎さまは本当の名人なのですから、気づかいありません」

「いいえ、姫君さま、これは間違いがあるないのことではございません。姫君さまにさようなあぶないまねをおさせしたということが、浦路をはじめ、今日の供の者一同の責任になるのでございます。これだけはたっておとどまりくださいませ」

それでも強情を張れば、今日ばかりは浦路も自害しかねまじき顔色である。

「浦路も浪江も心配いたすな」

鶴七郎はわらいながら声をかけて、

「杢右衛門、お駄々どのの手にした扇を、わしが一発で撃てば、それで納得いたすか」

と、改めて杢右衛門のほうへ聞いた。

「はい、浜町さまの妙技が拝見できますれば、冥加(みょうが)至極にございます」

「さようか。お駄々どの、扇をお持ちかな」

「持っております」

「では、その短筒をちょっと拝借」

鶴七郎は駄々姫の手から短筒を取りあげて、

「さあ、お駄々どのもいっしょに庭へ出てください」

と、気軽に立ち上がる。

「どうするのです、鶴七郎さま」

「いま、おもしろいことをしてお目にかけます」

二人は庭下駄(にわげた)をはいて、庭へおり立った。泉水のほうへ十足ばかり歩いていく。

一同の目は、なにがはじまるのかと、おもいおもいに息をのんで、二人の姿を追っている。

春のあかるい日ざしを一杯にあびた駄々姫の姿は、咲きほこる緋ぼたんにもまさるまったく豪華な美しさだった。

「お駄々どの、そこに立って、扇を半分ひらき、わしが声をかけたら、思いきり空へ投げるのです」

「それで――」

「わしがこの短筒で、扇がまだ地におちないうちに、一発撃ちぬいてお目にかけよう。それなら、手にあるうちに撃ったのとおなじでしょう」

なるほど、それなら姫君の体は安全だが、そのかわり空に舞う扇をねらうのだから、撃ち手のほうはずっとむずかしくなる。

「鶴七郎さま、大丈夫ですか」

駄々姫はちょっと心配そうだ。もし失敗すれば、二人ともわらいものにされなければならないのだ。

「心配御無用。わしは飛んでいる鳥が撃ちおとせる腕ですからな」

「まあ、すてき――。空へ投げればよいのですね」

「そうです」

鶴七郎は五、六歩姫君のそばを廊下のほうへ引きかえして離れ、

「よろしいか、お駄々どの」

と、声をかけた。

「はい」

駄々姫は、表が金地、裏が銀地の、要(かなめ)のところへ赤いふさのさがっている小扇を半分ひらいて身がまえる。

「要のほうを上にして投げないと飛びませんぞ」

「はい」

「さあ、一、二、三でまいろう」

鶴七郎は短筒に弾をこめ、別に身がまえるでもなく、

「そら、一、二、三」

と、無造作に号令をかける。

「えいっ」

駄々姫が力一杯空へ投げあげた小扇、ちょうのようにひらひらと舞いあがり、あがり切ったところで要を下にひらりと落ちかかる。

だあん。銃声一発、あっと腰元たちが耳をおさえた時には、小扇はひらりと宙で一度角度を

かえ、泉水のほとりへすっと落ちていった。

勇ましい姫君が素早く身をひるがえして、あざやかな裳裾を風に散らしながら泉水の方へ走り出す。

「まあ、お見事――」

扇をひろいあげた駄々姫は、うれしそうに声をあげて、花が咲いたような微笑を輝かせながら、その扇をこっちへかざしてみせ、そのまま走りもどってくる。

その扇の地の真ん中に、ぽつりと穴があいているのがはっきりと見て取れるのだ。

「本当にお見事――」

腰元たちが口々にいって、思わずどっと手をたたきはじめる。

「鶴七郎さま、駄々にも一発撃たせてください」

駄々姫がいきなり鶴七郎の手から短筒を奪いとろうとする。

「それがなあ、お駄々どの、弾は一発しか入れてこなかったのだ」

「いやっ、いやっ。それでは約束がちがいます」

駄々姫は身をもんで、駄々をこねはじめたようだ。

朝のあいさつ

鶴七郎が尾州家の駄々姫を相棒にたのんで、小梅業平橋の浜松家の下屋敷からうまく浪江親子を助け出してから、いつの間にか半月ほどたって、江戸は若葉の季節に入ってきた。

その後、清太郎は薬研堀の長屋に落ち着いて、烏松といっしょに毎朝一度、浜町の屋敷へ鶴七郎のごきげんうかがいに出ることになっていた。つまり、二人とも鶴七郎の家来になって、月月の手当をうけることにきまったからである。

むろん、清太郎は浜松家の家来で、浪人しているとはいえ、それはともかくも紛失した主家の重宝波ノ平行安の行方をたずねるための浪人なのだから、無断で鶴七郎の家来になるわけにはいかない。

が、その点、鶴七郎ははっきりしていた。あの日、扇の的の派手な一幕があった後で、

「河内どの、鶴七郎にも一つ無心があるが、聞いていただけまいか」

と、苦い顔をしている家老岩淵杢右衛門をそばにおいて、河内守に掛け合った。

「どんな御無心でござろうか」

「ほかでもないが、浪江の兄並川清太郎がなにか子細あって当家を浪々中とうけたまわっている。その清太郎を、わしの家来にいただけまいか」

「あ、それはせっかくの浜町さまの御無心ながら、おうけいたしかねるかと存じます」

杢右衛門が苦々しげにそばから口を出す。

「なぜかな、杢右衛門」

「清太郎はただ当家を浪人させておくのではございません。あれがあずかっておりました家宝波ノ平行安の名刀が紛失いたしましたため、責任上刀の行方を詮索させておりますので、行安が当家にもどりませんかぎり、清太郎の責任は相すまないのでございます」

「杢右衛門、浜松家の波ノ平行安は、たしかお品書きにもあがっている拝領品であったな」

「さようでございます」

「拝領品はただ紛失したではすまぬ。場合によっては家名にもかかわる重大な過失だぞ。さような大切な詮索を、清太郎ただ一人の責任にして、後の家来たちは知らん顔をしているのか」

「はい」

「過失ということはどこにでもありがちなことで、深くとがむべきでない場合もあるが、さような怠慢は公儀の約束を軽んずるものとして、その罪が重い。承知いたしているか」

あっと杢右衛門は色を失ってしまったようだ。相手は浜町の火薬だし、しかも、そばには尾州家の姫君がちゃんと聞いているのだ。

実は、こんな席で拝領品の紛失などをうっかり口にしたのが、そもそもの間違いなのである。

「杢右衛門、事が表へ出て老中どもの耳に入り、拝領品がどこでどういう具合いに紛失したかを、いちいち取り調べられるようなことにでも相なると、家老たるその方の責任はとてものがれきれぬぞ。刀の詮議は一清太郎などにまかせておかず、そちが先頭に立って一日も早くさがし出すのが本当だと思うが、どうだな」

「恐れ入りましてございます。年がいもなく、ついうかつなことをお耳に入れまして、赤面つかまつります」

　もうあやまってしまうにかぎると覚悟したのか、杢右衛門はそこへ平身低頭してしまう。

「もうよい。話がわかれば、それでよいのだ。そちは老巧の者にて、河内どのにはなくてはならぬ忠義者だと聞いている。今後とも、若い河内どのをよく補佐して、一藩をおさめてくれるよう、わしからたのみおく。いらざるお節介と思うかな」

「どうつかまつりまして……お言葉肝に銘じましてございます」

「清太郎をな、わしがもらいうけて帰っても、行安詮議をやめさせるつもりはない。わしは知ってのとおり自由に街が出歩ける身分、むしろ清太郎の苦衷あわれと思うゆえ、いっしょに刀をさがしてつかわそうと思うのだ。納得してくれるであろうな」

　末座で聞いていた浪江が、懐紙でじっと目頭をおさえ、肩で激しく泣いていた。

　その浪江が、供頭野々山弥太夫につれられて、清太郎と鳥松の待っている玄関先へ出てきたのは、それから間もなくのことであった。

「これ、これ、浜町の供の者はおるか」

「はい、ここにおります」

　清太郎と鳥松がそれへ出てひざまずくと、

「このお女中が、お前たちになにか用があるそうだ。内玄関のほうへまわれ」

　ということだった。

　そこで、二人は浪江から鶴七郎の話をくわしく聞かされ、

「兄さん、浜町さまは母上を清太郎におぶわせて、一足先に尾州さまのお船へまいっているようにとの、ありがたいお言葉です」

と、告げられたのである。

　その日以来、母の信と妹浪江は、尾州家の築地の駄々姫屋敷へ引きとられ、清太郎は薬研堀の裏長屋へそのまま残って、別々に住むようになるのだから、この鶴七郎の計らいは、母子兄妹当分の別れをするように、特に清太郎は病母信に安心させるようにという深い考えから出ているのだとは、だれにもわかる。

「清太郎、この母のことは忘れてもかまいませんから、浜町さまの御恩は決して忘れてはなりません」

　せがれの肩を借りて、二度と生きては出られまいと覚悟をしていた小梅の下屋敷の玄関わきの部屋から、尾州家の供船へ移された母親は、兄と妹をひざの前へならべて、くれぐれも清太郎にいいきかせていた。

「おっかさん、ようござんしたねえ」

　人ごとながら、鳥松も目頭が熱くなるほどうれしい。

「親方にもいろいろお世話になりました。この後とも清太郎のことはくれぐれもお願いいたします」

　母親は鳥松にも改めてあいさつをする。

「なあに、あっしなんかただ殿さまのいいつけで、手足になっただけのことでさ。どうせろくなことはできやしません。そこへいくと、清さんはお侍だからな、明日から大威張りで二本差しになれるってわけだ」

「いや、おれはもう侍はやめるつもりだ」

「どうしてだね」

「おれは下郎で浜町さまに奉公する。岩淵のために浜松は浪人したが、お主さまには父祖の代からの恩がある。他家へ行って侍で出世しては殿さまに申し訳ない」

「偉い。気に入ったよ、清さん。ああいう話のわかる殿さまだから、浜町さまもきっと承知してくださらあ」
　清太郎のその望みが入れられて、二人は勝手勤めということになり、日に一度浜町の屋敷へ顔を出すだけで手当がもらえることになったのである。
　母の家へ入って寝起きするようになった清太郎は、男やもめのことだから、とかく筋向かいに家のあるお蓮にやっかいになりがちになる。
　そのお蓮も、去年の秋母親に死なれて、今のところ一人暮らしなのだ。そして、清太郎の家の一軒おいて隣が鳥松の家で、これもひとり者なのである。
「清さん、浜町へ顔出しをする時刻ですよ」
　お蓮は毎朝店へ出がけに、清太郎の家の前で声をかける。
「いま行くよう」
　家の中から答えて、清太郎は草履を突っかけて表へ出ると、
「おうい、松つぁん、出かけるよう」
　と、鳥松の家のほうへ呼ぶ。
「おうい、いま行くぜ」
　鳥松がいそいで草履を突っかけて飛び出してくる。
　路地は狭いから、二人並んでは歩けない。水際立った水茶屋のねえさんが先頭で、次が清太郎、しんがりが鳥松の順で、ぞろぞろと路地口から薬研堀の通りへ出る。
　そこでお蓮はきまって清太郎と肩をならべてしまうのである。
「お蓮ねえさん、毎朝お気の毒さまですねえ」
　一足うしろから、にやにやしながら、鳥松がいった。
「あら、なにが気の毒なんです、親方」
「あっしがいなけりゃ、お二人きりで歩けるのに、毎朝じゃまをしてすんません」
「どういたしまして――。そんなにひがまなく

たっていいんですよ。あたしは別に、人さまなんか気にはしないほうなんですから」
「そうでござんすか。それなら助かりやすが、なにしろ、あっしは浜町さまと、清さんのおふくろさんのお二人に、清さんのことはくれぐれもたのまれていやすんでねえ」
「なにをたのまれているんです」
「いいえね、清さんはまだひとり者だし、悪い虫がつかないようにってね」
「そんな心配なら大丈夫よ。こうしてあたしがちゃんと悪い虫よけについて歩いているんですから」
　稼業柄（かぎょうがら）、男などには少しも負けていないお蓮なのである。
「なるほどねえ、物もいいようだなあ」
　鳥松は目をぱちくりさせている。
「清さん、築地からその後まだなんともいってこないの」
「うむ、別に――」
「もう半月になるでしょう。浪江さんうまくいっているかしら」
「なんともいってこなければ、無事に御奉公しているんだろう」
「だって、駄々姫さまって方、相当癇（かん）が強いって評判だし、それに御殿女中なんてのは、よく新参いじめをするもんだっていうじゃありませんか。浪江さんはおとなしいほうだし――」
　なあるほど、こいつは気がつかなかった。さすがに女だなあと、こんどは鳥松も感心させられる。
「一度殿さまにお願いして、様子を聞いてもらったら」
「そりゃお蓮さん、そうはいかないんだ。こっちは家来なんだからね」
　清太郎は苦笑したようである。
「ああ、清さんは家来になっちまったのね。じゃ、殿さまをお店へ誘ってらっしゃいよ。あたしからお願いしてあげるから」

「それもちょいと難しいなあ」
「あら、清さんはそんなにあの人の前で小さくなっているの」
街に出てきた時の鶴七郎しか知らないお蓮は、ちょっと意外そうである。
「家来というものは、御主人には頭のあがらないものさ」
「宮仕えって情けないもんだな」
元柳橋のたもとへ出て、左へ行けばお蓮の店、屋敷は右へ橋をわたっていくのだ。
「じゃ、行ってらっしゃい。殿さまによろしくね」
「うむ」
「親方、この人に悪い虫がつかないようにおたのみします」
「あれだ、おれはまるであほう鳥みたいなもんだな」
「男は愚痴なんてこぼすもんじゃありません」
お蓮はわらいながら、店のほうへ別れていく。

「なあ、清さん」
橋をわたりながら、鳥松は肩をならべていくと、
「築地(つきじ)のほうは本当に大丈夫なんだろうな」
と、やっぱりそれが気になる。
「うむ、うまくいっていると思うんだ」
「おれもそうだろうとは思うんだが、御殿女中ってやつは妙に意地が悪いって話だからな。といって、いくらおれでも、女ばかりの長局(ながつぼね)へ忍びこむのは気がさすしな」
「松つぁん、それだけはやめてくれ。どんなことで、殿様の名でも出ると、それこそ申しわけないことになる」
清太郎はあわててとめた。
「なあに、おれがそんなへまもやりゃしねえが、――時に、どうだ、清さん、あのお蓮てあねごは、あばずれのように見えるが、おれの見たと

ころじゃ、あれでなかなか情の深いところがある。そろそろ女房にしてやっちゃあ」
鳥松はそんなことまで気にかけている。
「まあよそう」
「どうしてだね」
「女房は御奉公のじゃまになる」
「あれえ、おかたくおいでなすったぜ。じゃ、女房持ちは御奉公ができないってことになるんかね」
「そういうわけじゃないが、おれの場合はちょいとほかの者とはわけが違うんだ。知ってのとおり、浜町さまには親子三人があぶない命を助けていただいている。そんなことがあっちゃならないが、もしもの場合は、おれはいつでも浜町さまの身がわりになる覚悟だし、とにかくなにか一つ、御奉公らしい御奉公をしないうちは、おれは女房を持つまいと心にきめているのさ」
「そうか。さすがだなあ、清さん。感心したぜ」
鳥松もちょいとしんみりとなって、
「よし、そういうわけなら、一度折を見て、おれからお蓮あねごによく話しといてやろう。当人はいつ手を握ってくれるかと毎日待ちかねているのに、恋わずらいでもしちゃかわいそうだからな」
と、これも本気のようである。
「そんな心配はいらないやね。あねごはおれのことなど、それほど気にしているもんか」
「うんにゃ、そうでもなさそうだ。年が年だから、白ばっくれちゃいるが、毎朝二人でならんで歩いてるのをうしろから見ていると、あねごの体つきは、いまにも清さんのほうへよりかかっていきたくてたまらないのを、やっと我慢してるってかっこうに見える。うそだと思ったら、清さん、明日そっと手を握ってみな。ねこがかつお節を見つけたように飛びついて、もう雷さまが鳴っても放しっこねえから」
「けしかけっこなしさ、松つぁん」
浜町河岸を半分ほど行くと、右へ曲がる横町

があって、そのどっちも大きな武家屋敷の長い塀つづきだが、その南側の屋敷が鶴七郎の屋敷で、そこに中門がついている。

　烏松がこの間の夜黙って乗り越えたのは、河岸っぷちのほうにある裏門つづきの土塀だが、今は二人ともれっきとした松平家の家来なのだから、堂々と中門から入っていけばいいのである。ただし、士分ではなく中間なみの小者奉公だから、玄関から座敷へあがっていくわけにはいかない。庭づたいに一度用人棚橋茂右衛門の御用部屋へ顔を出して朝のあいさつをして、それからまた庭づたいに鶴七郎のいる書斎の廊下先へ進むのである。

「殿さま、おはようございます」

　くつぬぎ石のところまで行って声をかけると、

「おお、まいったか」

　鶴七郎はいつも自分で立ってきて、廊下の障子をあけてくれる。

「まあ、そこへ掛けろ」

「へえ、ありがとうござんす。いいお天気でござんすねえ、殿さま」

「そうのようだなあ」

「あれえ、こんなに明るくおてんとうさまが照っているのに、そうのようだなあってことはねえでしょう」

「いや、わしはまだ今朝から一度も庭へ出てみぬ。家の中にいると、天気のことはそう気にならんでな」

「なあるほど、居職は照り降りに関係ありやせんからね。そのかわり、手間がいくらか安い」

「ふうむ、居職は手間が安いのか」

「そりゃ殿さま、飾り職とか、印判屋とか、家の中でできる仕事は、雨が降ったって毎日できやす。大工だとか左官だとかは出職で、雨の日は仕事を休まなくちゃならない。手間が高くなくちゃ割にあいませんや」

「すると、きんちゃく切りだとか、捜し屋など

も出職だから、手間の高いほうだな」

「けっ、皮肉だねえ、殿さまは」

「大名なども居職のほうだな」

「そうでござんすよ。こじきは出職のほうでござんしてね、大名なんかよりずっと手間は高い」

「なるほど。それで、こじきは三日やるとやめられぬと申すのだな」

「まあそうでござんしょうね。こじきは大名なんかよりずっと大きな屋敷に住んでいやすからね、青天井っていう」

「そのかわり、ふすま障子がない」

「御冗談で——。東に筑波、西に富士、ちゃんと大きなついたてを持ってます」

　鶴七郎の話し相手はもっぱら烏松で、清太郎はいつも黙って控えていればいいのである。

「清太郎——」

「はい」

　珍しく鶴七郎が声をかけてきた。

「昨日、浜松侯から使者があってな、拝領の波ノ平行安は、さる古道具屋へ出ていたのを、無事に買いもどしたから安心してくれと申してまいった。もう心配はいらぬぞ」

「ありがたき仕合わせに存じます。殿さまのおかげにて、杢右衛門もすっかり恐れ入ったものと見えます」

　この間の晩、悪人を切ろうというのはまだ考えが浅い。目をひらいてやることだと、公子はいっていた。

　そんなことができるものかと、その時清太郎は内心せせらわらっていたが、鶴七郎はそれをちゃんとやってのけたのである。身分に大きな相違があるからとはいえ、凡庸な者にはやっぱりできないことなのだ。

「もう一つおもしろい話がある。浜松侯は駄々姫さまがすっかり気に入ってな、なんとか夫人に迎えられぬものかと、杢右衛門に相談したそうだ」

「六十万石と六万石では、ちといかがなもので

ございましょう」
　清太郎は思わず微笑が出る。
「まあそれもあろうが、それよりもな、杢右衛門ははっきりと申したそうだ。ああいう駄々姫さまでは、とても六万石では賄いきれませぬ。それに、事あるごとに短筒を振りまわされましたら、殿さまはどうなさいますとな」
「こいつは杢さんのいうことが本当だ。六十万石のしりへ敷かれた日にゃ、たいていの殿さまはぺしゃんこにされちまいますからね」
　鳥松が無遠慮にわらい出す。
「まずそういうことになろう」
「ところで、殿さま、もし駄々姫さまが、ぜひ殿さまのおかみさんになりたいと言ったらどうしやす」
「それは駄目だろう」
「なぜでござんす」
「わしは六万石の十分の一にも足りない五千石の身の上だ。鯨を池の中で飼えというようなもので、第一茂右衛門が承知すまい」
「ところがねえ、殿さま、好きだなんてやつは妙なもんで、殿さまがはあっと一つ息を吹っかけてやると、鯨がたちまち緋鯉（ひごい）になって、結構五千石の池の中できれいな尾をふって泳いでみせるんじゃありやせんかね。それに、殿さまなら短筒はこっちが本家で、びくともしないでしょうからね」
「さあ、どういうものかな」
「たった一つ気になることがあるんですがねえ」
「なんだ」
「そんな荒っぽいお姫さまのところへ行って、浪江さんうまく御奉公がつとまっていましょうかね、殿さま」
　鳥松が如才なく機会をつかまえてくれる。親切な男だなあと、清太郎は感謝せずにはいられない。
「それは心配あるまい。駄々姫さまは気性は荒

っぽいようだが、弱い者を困らせるようなことは決してせぬと、わしは見ている」
「そうでござんしょうかね。御殿女中のほうはどうでござんしょう。新参いじめをしてよろこぶ意地の悪いのが多いって話じゃありませんか」
「駄々姫さまの目が光っているから、その心配もなかろうと思うが、一度様子を聞きあわせてみてつかわそうかな」
　公子はさすがに察しが早いようだ。
「どうぞ、たのんます、殿さま」
「よしよし――。ついでだから申しておくが、清太郎一代は士分は好まぬようだから、並川の家は浪江にでもしかるべき養子を迎え、尾州家で家名が立つようにたのんでつかわそうと存じている。――それでよいな、清太郎」
「は、はい」
　あっと清太郎は顔があげていられなくなってしまった。そこまでの心づかいを公子がしていてくれるとは夢にも思いがけなかったし、それではあまりにも冥利（みょうり）につきすぎるような気がする。
「もったいないお言葉にて、清太郎ただただ感泣のほかはございません」
「まあよい。下世話にも、仏作って魂入れずということがある。そうなっては本意ない」
「殿さま、もう一つ魂を入れてもらいたい仏があるんでござんすがねえ」
　鳥松がまたしてもひざをすすめようとする。
「松つぁん、いけねえ。それだけはまだ本当にいけねえ」
　清太郎はあわてて、必死な目になった。
「いけねえって、清さん、どうせお前、いつかは――」
「いいんだ、いいんだ。まだ早すぎるんだ」
「そうかなあ。おれの心配するのはな、清さん、人間なんて口では強いことをいっても、情にもろいもんなんだ。言いにくくなっちまってから、

二人で気をもむより」
「ありがとう。松つぁんのその親切はうれしい。けど、さっきも言うとおり、それじゃおれの気がすまねえ」
「そうかなあ」
ちょうどそこへ、小侍が廊下をこっちへいそいでくるようだ。
清太郎と鳥松は、借りていた縁先からそっと庭へすべりおりて、そこへひざまずく。
「申し上げます」
「なんだな、善吉」
「ただいま玄関へ、尾州家駄々姫さまよりのお使いとして、お腰元浪江さまとおっしゃる方が、駕籠(かご)にてまいられ、殿さまにお目通りしたいと申しておりますが、いかが計らいましょうか」
「なに、浪江と名乗ったのか、その者は」
「はい」
「さようか。かまわぬから、ここへ通しなさい。ここで会おう」
「承知いたしました」
小侍はすぐに引きかえしていく。
「清太郎、うわさをすれば影ということがあるが、浪江がお駄々どのの使いにまいったそうだぞ」
鶴七郎がわらいながら清太郎にいう。
「はい、どんな御用でまいりましたか」
こんどはそれが心配になってくる清太郎だ。
「まさか、お暇が出たなんていうんじゃないでしょうね、殿さま」
まるっきりないとも言えないことなので、鳥松もちょいと気になる。
「いや、そうではあるまい。わしに思いあたることもある。まあ、見ていなさい」
間もなく小侍に案内されて、廊下の角へ浪江が姿を見せてきた。
「あれえ、いいお腰元になったなあ。清さん、見ろよ」
鳥松が隣の清太郎を小突いていう。

紫(むらさき)矢絣(やがすり)に黒繻子(くろじゅす)の帯をやの字にしめて、初初しい高島田髷(まげ)、上背があるだけに、それは目もさめるような浪江の腰元姿だった。

兄と妹

「殿さまにはいつもごきげんよくいらせられまして、浪江慎んでおよろこび申し上げます」
浪江は鶴七郎の前へ出ると、まず作法どおりにあいさつをのべた。
「うむ、そちもかわりないようだな」
「おかげをもちまして、無事に御奉公いたしております」
「結構である。今日はお駄々どのの使いか」
「はい」
「その後、お駄々どのもごきげんのようかな」
「はい、おかわりもなくいらせられます。あの、姫君さまにはこれなる品を、殿さまに差しあげてまいるようにと仰せつかりまして、持参いたしました。なにとぞごらんくださいませ」
浪江はかたわらにおいた四角な小ふろしき包みを正面になおして、ふろしきごと恭しく前へすすめる。
「わしにあけてみよと申すのか」
「恐れ入りましてございます」
「お重のようだな」
鶴七郎が引きよせて、わらいながらふろしきを解くと、果たして見事な金蒔絵(きんまきえ)をした重箱で、図柄は千羽づるである。これはこっちが鶴七郎という名だから、鶴さまへというほどのしゃれだろう。
ふたをとってみると、中には黒い飴玉(あめだま)が一杯詰まっている。
「浪江、これは飴玉のようだな」
「はい、栄太楼の飴玉でございますが、もしおたずねがありました折は、下世話にそれを鉄砲玉と申しますと御返事申し上げるように、仰せつけられてまいりましてございます」
浪江は顔を赤らめながら、一生懸命にいう。

「うまいうまい。お駄々どのにしては、なかなかやるなあ。つまり、この間の短筒の弾をよこせという催促なのだな」
　鶴七郎がわらい出す。
「はい、さようかと存じます」
「お駄々どのはいまだにあの短筒をおもちゃにしているのか」
「片時もおそばをお放しあそばさないようでございます」
「しかしなあ、浪江、正直に申してどうなのだ。家来どもは弾のないほうが安心なのではないかな」
「はい。浪江が今日こちらへうかがいます時、御老女さまにそっと呼ばれまして、なるべく弾はいただいてこないほうが姫君さまのおためと思います。そなたのつらいのは一時のこと、間違いは一生のさわりになりがちなものですと、注意されてまいりました。姫君さまのがっかりあそばすお顔を見るのもつろうございますし、浪江はどうすればよろしいか、困ってしまいます」
　まったく当惑しているような浪江の顔だった。新参者の浪江にしては、初めてつとめる使者のことではあるし、どっちを立てればいいのか、一層つらいものがあるのだろう。
「そうであろうな。今から考えてみると、小梅で一発お駄々どのに撃たせておいたほうが、気がすんでかえってよかったかもしれなかった」
　鶴七郎はちょっと考えてから、
「まあよい。屋敷へもどったら、お駄々どのにこう申すがよい。あの短筒には直伝があって、弾だけわたしても初心の者には撃ち方がわからぬ、ぜひ近いうちにお駄々どのが自分で浜町へ足を運ばれるように、――その折、直伝を伝授して、いくらでも弾をさしあげるとな」
「はい」
「よし、そちが口でいうより、わしが一筆書いてつかわしたほうが、納得がしいいだろう。いま手紙にしてやるから。――庭へ清太郎がまいっている。廊下へ出て話していなさい」

　いつもながら親切でよく気のつく鶴七郎だった。
「かたじけのうございます。お言葉に甘えまして、しばらくお廊下を拝借いたします」
「うむ、清太郎も、なにかそちに聞きたいことがあるようだ。久々でゆっくり語るがよい」
　鶴七郎はそういって、気軽に机の前へ立っていく。
　そのうしろ姿へ心から両手をつかえておじぎをした浪江は、いそいそと廊下へ出てくる。
「兄さん――」
「おお、浪江か」
　そこの庭先に待ちかねていた清太郎が、そっと縁先へ寄っていく。
　烏松は兄妹（きょうだい）のじゃまをしないように、少し離れたところにひざまずいている。
「母上の具合いはどうか。お前といっしょにいられるのかね」
「ええ、長局（ながつぼね）にお部屋をいただいて、いっしょに暮らしています。安心しましたせいか、このごろとても元気になりました」
「そうか、それはよかった。わしは今日、殿さまからうかがったのだが、波ノ平行安は無事にお家へもどったそうだ。知っているか」
「いいえ。――お母さま、きっとよろこびますわ。兄さんもこれで安心でしょう。本当によかったわ」
「なにもかも殿さまのおかげだ」
　清太郎はしみじみといってから、
「お前、本当にいいお腰元になったなあ」
と、改めて妹の姿を見なおす。
「やっとこのごろ少し慣れてきたんです」
「どうだ、御殿づとめはうまくいっているのか」
「はい、姫君さまがお目をかけてくださいますので、いつもありがたく思っています」
「朋輩（ほうばい）のほうはどうなんだ。意地の悪いことを

される、そんなことはないのか」
「大丈夫です。それは、人それぞれにいろいろな人はいますけれど、浪江は一度死ぬほどのつらい目にあってきています。いつもそれを思い出して、ちゃんと覚悟をきめていますもの」
「そうかそうか、それでいいんだ。いつまでもその覚悟でな、母上のことをなにぶんたのむぞ」
浪江は思ったよりずっとしっかりしているようなので、これなら安心だと、清太郎はうれしかった。
「兄さん、お蓮ねえさんは御無事なのでしょうね」
「うむ、無事だ。今朝も、お前から少しもたよりがないようだが、新参いじめをされているんじゃないかと、心配していてくれた」
「あたくし、さんざんお世話になっていながら、こんどのことは急だったものですから、ごあいさつもしないで、御奉公にあがってしまいました。それが心残りで、兄さんからどうぞよろしくおっしゃっておいて下さい。浪江は、おねえさまの御恩、一日だって忘れてはいませんのよ」
目をうるませながらいう浪江だった。先の目当てとてつかないつらい一年あまりの長屋住まいの間じゅう、親切に心から力になってくれたお蓮の心づくしは、世間知らずだった浪江にとって、どんなにかうれしかったに違いない。
「うむ、わかった、わかった」
「浪江さん、今日は」
もういいだろうと思った鳥松が、のこのこと縁先へ進んでいった。
「おじさま、ごきげんよろしゅうございます」
浪江はいそいでそこへ行儀よく両手をつかえる。
「おじさんもこのごろは、ぐんとごきげんがいいが、浪江さんもぐんとお立派になんなすったんで、おじさんすっかり安心しちまった」
「先日はひとかたならぬお世話になりまして、ありがとうございました。母といつもおうわさ

をしております」
「おっかさんもおいおい元気になんなすったそうで、よかったねえ」
「みんなおじさまたちのおかげです」
「なんの、浪江さんやおっかさんがしあわせになって一番よろこぶのはお蓮あねごさ。いま聞いていると、浪江さんもあねごのことは忘れちゃいない、世の中はたのしいもんだと、おじさんうれしくなっちまった」
「兄さんがまた、おじさまにお世話になっているのでございましょう」
「そいつは、世話をしたり、世話をされたり、おたがいっこだが、――浪江さん、おめえさん今日鉄砲玉をもって帰らないと、お姫さまにしかられやしないかね」
心配そうに鳥松が聞く。
「いいえ。がっかりはあそばすかもしれませんけれど」
「そいつがいけねえんだ。なにしろ、ああいう駄々姫さまだからね。がっかりしたとたんに、ちっとも役に立たない娘だなんて思いこまれちまうと、後の御奉公がしづらくなる。だから、殿さまにお願いしてな、一発だけ弾をもらって、そっと帯の間へ入れてかえるんだ。そして、お庭へつれ出して、だれにもないしょで一発だけ撃たせておあげする。なあに、一発撃ちさえすれば虫がおさまるんだから、そうしちゃどうだね」
鳥松がうまいことを教えてくれる。
「駄目ですわ、おじさま」
「どうして」
「姫君さまもあたくしも、弾をこめることを知りませんもの」
「そうか、だめか。そいつはがっかりだな」
「でも、おじさま、大丈夫でございます。殿さまからお手紙をいただいてもどりますから、きっとしかられるようなことはございません」
浪江の顔は案外あかるい。

「ふうむ、殿さまの手紙が虫封じになるのかね」
「はい」
「ああ、わかった。鯨が緋鯉になるんだな」
「それ、なんのことでございますの、おじさま」
「なあにね、六十万石とたった五千石では、海と池ほども違うって殿さまがおっしゃるから、そんな心配はいらねえ、はあっと殿さまが息一つ吹っかければ、鯨姫が緋鯉姫になって、この池で尾をふってよろこぶだろうって、いまおじさんが冗談をいっていたところなんだ」
「まあ――」
浪江がほおを赤らめてわらっているところを見ると、鳥松の想像はまんざら外れていないのかもしれぬ。
「鳥、つまらぬ冗談を申すと、浪江が本気にするぞ」
鶴七郎がわらいながら、文箱を持って出てきて、
「浪江、これをお駄々どのにさしあげてくれ」
と、浪江にわたした。
「恐れ入りましてございます」
「殿さま、その文箱の蒔絵は、松のようでござんすね」
鳥松がのびあがるようにして見ながら聞く。
「うむ、お松の方の持ち物だ」
「なるほどねえ。山吹きの絵だといいんですがねえ」
「なんで――」
「実の一つだになきぞ悲しき」
「あは、は、鳥はうまいことを知っているなあ」
「なあに、落語でおぼえてきたんでさ」
「浪江、飴玉はありがたくちょうだいしたと申しておいてくれ」
鶴七郎はそういいながら、手をたたく。
さっきの小侍が、いそいで廊下へ出てきた。
「使者を玄関まで送ってつかわせ」
「はい」
「浪江、体を大切にして、老母に孝養をつくす

がよい」
「お言葉かたじけのうございます。それでは、おいとまつかまつります」
浪江はていねいに鶴七郎におじぎをして、庭へさがった兄と鳥松のほうへ目で会釈する。
家来たちの前で口をきくのはなるべく遠慮している清太郎と鳥松は、黙ってうなずいただけだ。
そして、浪江は小侍に案内されて、玄関のほうへ去っていった。

甘い飴玉

「清太郎――」
「はい」
「浪江はおとなになったな」
鶴七郎はあかるい顔をしていった。
「ありがたきしあわせにございます」
妹のことをこんなに心にかけていてくれると思うと、いつものことながら清太郎はじいんと目頭が熱くなってくる。
「ねえ、殿さま――」
「なんだな」
「早くいいお婿さんを世話してやりたいもんですね。だれかいませんかねえ」
「まあ、そういそがずともよい。清太郎もまだ一人だ」
「そりゃまあそうでござんすがね、清さんはいつもいってるんでさ。自分のことはどうだってかまわねえが、妹だけはしあわせにしてやりたい、それがおふくろさまへの一番孝行の道だってね」
いつになく鳥松がしみじみという。
「松、そのつもりで、お前、骨を折ってつかわせ」
「へえ」
「母親というものはな、子に兄と妹が二人あれば、そのどっちもしあわせになれるようにと、心配しているものだ」

「ちげえねえ、たしかにそうでござんした」
「どれ、今日は久しぶりで出かけてみるかな」
鶴七郎はそのまま庭下駄をはく。きげんのいい証拠だ。
「お供いたしやす」
烏松は急にうれしくなってくる。
「清太郎――」
「へえ」
「座敷に浪江の持参した飴の重箱がある。あれをそのまま持ってまいれ」
「かしこまりましてございます」
清太郎は座敷へあがって、まだそのままになっている重箱を手早くふろしきにつつんで持ってきた。
「殿さま、鉄砲玉をしゃぶりながら歩こうっていうんですかい」
「それも風流だな」
例によって屋敷へはなにも言わず、裏門のくぐりからぶらりと大川端へ出る。
そういうわがままがしたいばかりに、五千石の捨て扶持をねだって城を出た鶴七郎なのだから、家来たちも黙って見ているほかはない。
ただし、清太郎と烏松は、鶴七郎が街へ出た時の付け人として月々手当をうけているのだから、これは責任が重い。
季節は暑くなく寒くなく、ぶらぶら歩きにはちょうどいい若葉どきだった。
鶴七郎の足はゆっくりと元柳橋のほうへ向いている。
「殿さま、もし駄々姫さまが短筒を撃たせろといって、浜町の屋敷へ押しかけてきたらどうしやす」
「山吹きの花を用意しておこうかな」
「さあ、あのお姫さまじゃ、山吹きなんかじゃ承知しそうもありやせん。なにしろ、鯨姫でござんすからね」
「そうかもしれんな。なに、その時は二、三発撃たせてみよう。たいていそれでこりる」

「へえ、どうしてでござんす」
「短筒だと思ってバカにして撃つと、あれでも相当反動があるから、手にこたえる。お姫さまが人形いじりをするように自由にはならんものだ」
「へい、そんなもんでござんすかねえ。じゃ、一発帯の間へしのばせていって、そっと撃たせるなんてのは、あぶないわけですね」
「まあ、あぶないな。ねらったほうへ弾が飛んでくれればいいが、初心のうちはどこへ飛ぶかわからん。それが一番怖いのだ」
「あぶねえ、あぶねえ。浪江さんにとんだ知恵をつけるところだった」
いまさらのように烏松は首をすくめずにはいられなかった。
元柳橋をわたって、水茶屋町へかかった鶴七郎は、先に立ってすっとお蓮の店へ入っていく。
「まあ、いらっしゃいまし、殿さま」
お蓮がびっくりして顔を輝かせながら、
「あら、松おじさんもいっしょなの」
と、その目は、烏松のうしろから大切そうに重箱のふろしき包みをかかえて入ってきた清太郎のほうへ、うれしそうな火花を散らしている。
「けっ、お蓮ねえさんがそんなやぶにらみだったとは知らなかったなあ」
「おじさん、晩におかず持ってってあげませんよ」
その間に鶴七郎は珍しく赤毛氈の敷いてある桟敷へすっとあがっていく。
両国橋から大川が一目で見晴らせるながめが、なかなか捨てがたい。藍をたたえた潮の上を、白いかもめがすいすいと船の間をかすめて飛び交っている。
「松も清太郎も、こっちへあがれ」
「へえ」
「お蓮、そこへ座れ」
「はい」
程よく座布団をならべたお蓮が、鶴七郎の前

へひざまずく。
「清太郎、その包みをここでひろげるがいい」
「かしこまりました」
　清太郎が鶴七郎のひざの前で、ふろしきをとき、見事な千羽づるの重箱のふたをあける。
「あら、鉄砲玉ですね、殿さま」
　なあんだと言いたげなお蓮の顔である。
「あは、は、お蓮にもこれが鉄砲玉に見えるか」
「じゃ、違うんですか、これ」
「いや、飴玉の鉄砲玉には違いないが、これはな、さっき浪江が尾州のお駄々どのの使いにきて、わしに贈ってきたものだ」
「まあ、浪江さんがですか」
「うむ、奉公してはじめて使者に出された。浪江もこれで一人前の奉公人になったのだ。その浪江がな、お蓮にひとかたならず世話になっていながら、急なことであいさつもできずに尾州家へ引き取られてしまった。それが心残りである。一日も恩は忘れているわけではないのだと、清太郎に述懐しているのを、かげながら聞いた。その心根をあねごにも伝え、この飴玉をみんなでここで賞味して、かたがた浪江の初役を祝ってやりたいと思い、こうして出てまいったのだ」
「もったいない、殿さま」
　お蓮が赤い前垂れで、じっと顔をおおってしまう。
　清太郎は指の先で急いで目をぬぐっていた。
「殿さま、茶はあっしがいれてきます」
　ひょいと立ち上がった鳥松は、水屋のほうへあわてて駆けこみながら、
「けっ、殿さまが人情ばなしまでやるたあ気がつかなかったなあ」
　と、握りこぶしを目にあてる。
「清さん、浪江さんにあのこと聞いてくれましたか」
　涙をぬぐってからお蓮が聞いた。
「うむ、聞いた。姫君さまがお目をかけてくださる。新参いじめなどは少しもないから、安心

してくれと言っていた」
「よかったわねえ、本当に。おっかさんはどうなのかしら」
「おふくろさまは、長局（ながつぼね）にお部屋をいただいたから、いっしょに暮らしているそうだ。おかげで安心したせいか、一日ごとに元気になってきたって話だった」
「浪江さんもおっかさんも、苦労するだけ苦労してきたんだから、少しは楽をさせてあげなくちゃ。——本当によかった。安心したわ、あたし」
「へえ、お待ち遠さま」
　鳥松が器用に茶をいれてきて、まず鶴七郎へくばってから、
「ねえさん、親というものはな、子に兄と妹が二人あるとすれば、その二人がしあわせになるようにって考えているもんだってことを、知っていなさるかね」
　と、お蓮に聞く。
「そりゃそうでしょうねえ。それが親心というもんでしょうからね」
「それで、殿さまは、あっしが早く浪江さんにいいお婿さんをさがしてやらなくちゃっていうと、そういそぐことはない、清太郎もまだ一人だとおっしゃるんだ」
「おじさん、お願いですから、婿や嫁の心配だけはしないでくださいな。これだけは縁もので、余計なお世話をやかれると、かえって迷惑になることがありますからね」
「はあてね、あしはなにもお蓮ねえさんのお婿さんの心配をしようって言ったおぼえはないんだがなあ」
「ふ、ふ、そうでしたっけねえ。あたし、なにをあわてているのかしら。浪江さんや清さんのことだと、つい自分のことのように思っちまうもんですから、——ごめんなさい」
　お蓮の顔がひとりでに赤くなってくる。
「さあ、一同、飴玉を取れ」

鶴七郎がまず一つつまんで口へ入れる。
「次はねえさんだ。あめ降って地かたまるというから、仲直りだ」
烏松が如才なく重箱をお蓮のほうへすすめる。
「浪江さんのお祝いのために、遠慮なくお先へいただきます」
お蓮も神妙に会釈をして、一つ取って口に入れる。
「そうそう、そういういい子なら、おじさんがいまにいいお婿さんを世話してやるからな」
お蓮はなにかやりかえそうとしたが、飴玉が入っているので口がきけない。
「次は清さん」
「いや、わしは後でいい」
「まあ、そういいなさんな。これは殿さまのお声がかりなんだ」
「そうか、では一つ」
清太郎がわらいながら、一つ口へ入れる。
「さて、御一同の口がふさがったところで、やつがれから一言談じこみたい儀がござる」
烏松が座り直そうとしたとたん、清太郎が飴玉を一つ取って、いきなり烏松の首をかかえこみ、無理に口の中へ押しこんでしまう。
「ううっ、こいつめ」
後は口がきけなくなって、みんな口を結んだまま目でわらっている。
だれの目もたのしそうだ。
川風に送られて、対岸の東両国の盛り場の笛太鼓が、手に取るように聞こえてくる。
鶴七郎の目が大川へ誘われていく。
清太郎も、烏松も、その視線を追っている。
お蓮の目だけが、うっとりと清太郎の横顔に見とれていた。
ひょいと烏松がそれを見つけて、にっと目でわらうと、お蓮はまたしても顔が赤くなって、烏松をにらみつける。
だれもかも、口の中がとろりと甘い。

急に鶴七郎がさっと指をあげて、両国橋のほうをさしてみせた。
「あっ」
まだ十六、七とも見える前髪立ての若僧が一人、ひらりとその欄干の上へ飛び乗ったと見る間に、思い切りよく両手をさしのべて川の中へ身を躍らせたのである。
それを追うように、きらっときらめいた侍の刀が、空を切ってがっと欄干へ切りこむのと、青い川面がどぶうんと水しぶきをあげて若僧の体をのみこんだのと同時だった。
たちまち、そのあたりの欄干へ、人の顔、顔、顔がかさなるようにならんで、みんな川面をさがしているようだ。
鶴七郎がすっと立って、手すりのところへ進んだ。清太郎と烏松がつづいて立って、鶴七郎を中にして立つ。
――芳公じゃないかしら。
お蓮は座ったまま思わずつぶやいていた。

疾風の芳公

「おお、あんなところへ頭を出した」
手すりによってしきりに川面を目でさがしていた鶴七郎が、ひょいと足もとのほうを見て、意外そうに言った。
川っぷちにずらりとならぶ水茶屋の、二、三軒川下にあたるあたりの杭につかまって、さっきの小僧がぽっかり顔を出し、口にふくんでいた潮をぷうと吹いたのである。
なかなか利かなそうな面魂をした小僧で、じゃまになる着物は水の中にもぐっているうちにぬいだらしく、帯といっしょにくるくると丸めて、ちゃんと左のこわきにかかえている。泳ぎは相当達者なのだろう。
「あら、やっぱり芳公だわ」
鶴七郎の声にうながされたように立ってきたお蓮が、そっちを見て思わず口走る。
「お蓮はあの者を存じているのか」

「はい、よく知っています」
「ここへ呼んでみよ。なかなかたくましそうな小僧のようだ」
　鶴七郎はひどくその小僧に興味をひかれたようである。
「呼ぶのはかまいませんが、あの子口が悪いから、殿さまがお怒りになるといけません」
「その心配ならいらぬ。ここにいるあねごも、烏松も、あまり口のいいほうではない」
「あら――」
　お蓮は逆をとられて、ちょっと肩をすくめながら、
「それなら呼んでみます。――おうい、芳ちゃあん」
　と、芳公のほうへ呼ぶ。
　杭につかまって首だけ出して、両国橋のほうを見ていた芳公が、くるりとこっちを向く。
　お蓮がおいでおいでをして、そっちからまわっておいでというように手まねをしてみせると、芳公はこくりとうなずいてみせて、もう一度両国橋のほうを気にするように見あげてから、そこから近い川下の桟橋のほうへゆっくり泳ぎ出す。
　両国橋にまだ大勢野次馬が立っていて、なかには芳公を見つけた者もいるらしく、しきりにこっちを指さしている者もあった。
「あねご、あの小僧はきんちゃく切りのようだね」
　元の席へかえりながら、烏松がずばりと聞く。
「ええ、疾風の芳といって、気の毒な子なんです」
「ふうむ、どう気の毒なんだね」
「あの子の姉さんはお菊さんといって、やっぱりここの水茶屋の女だったんですが、きりっとあかぬけのした江戸前の利かん坊で、あたしとはいい相棒でした。松つぁんは本所割り下水の太田原玄蕃っていう悪旗本を知らないかしら」
「ああ、あいつか。まだお目にぶらさがったことはないが、妹がお側衆の利け者、林肥後守の御愛妾になっているとかで、やくざ旗本やならず者を大勢集めて、相当悪どいまねをしているって話だね」
「相当なんて、なまやさしいもんじゃなさそうよ。ねらうのは大どこばかりで、まああたしたちみたいな貧乏人のほうへはあんまり飛ばっちりはかかってこないけど、三百石のお屋敷うちに立派な賭場ができていて、かなりテラがあがるんだそうですけど、取り巻きが多いから、そんなことじゃなかなかやっていけない。そこで、江戸中の大金持ちを一軒一軒調べあげておいて、少しでもなにか落ち度のある家があると、そこへ手下どもをつれて堂々とゆすりに乗りこむ、一度見こまれたが最後、安くても千両、三千両から五千両はざらで、一万両持っていかれた家さえあるって話なんです」
「そこで、あだ名が千両玄蕃か。このあいだ殿さまのお手にかかった加納徳なんか、玄蕃にくらべると大名と足軽ほども違うわけだな」
　烏松はどうやらむらむらっと敵愾心を感じてきたようだ。
「大名と足軽ほど違っても、おんなじなのは、両方とも人さまに迷惑をかけて、飯の種にしている悪党だってことよ」
「ずばりとおいでなすったな。うまいうまい。あねごは女にしておくのは惜しいや」
「いいえ、あたしは女でたくさん。男だと、おじさんにお嫁の口を世話していただけませんもの」
　ちらっと隣の清太郎の顔を見て、うれしそうにわらってみせるお蓮だ。
「驚いたなあ。女もあねごほどになると、でえんと肝っ玉がすわっておいでなさる。おっしゃることに一言もむだがないから感心なもんだ。そこで、千両玄蕃の大名悪党が、お菊さんとどんな話になるんだね」
「めかけになれとくどいたんです。男なんてみ

んならぬぼれが強いから、二つ返事だろうと思ったところが、あたしは旗本と坊主は性にあいませんからと、ぽんとけってしまった。言うことが気に入った、それではめかけ話は水に流して、ぜひ一献つかわしたいからと、無理に誘って駕籠にのせて、行く先は八百膳だとちゃんと約束しておきながら、割り下水の屋敷へつれこみ、やることが悔しいじゃありませんか、大勢の手下どもになぶり物にさせてしまったんです」
「なにっ」
鶴七郎の顔色がさっとけわしくなる。
「利かん坊のお菊さんだから、そんなまねされては生きちゃいません。すきを見て庭へのがれ、そこの松の木で首をくくって死んでしまったんです。去年の秋のことなんです」
お蓮はそっと胸のところで手をあわせている。
「それで、その死骸はどうしたんだね」
「お上へは、賭場へ遊びにきていて、すっかり取られたんで逆上して首をくくったと届け出て、死骸は手下の者に家へかつぎこませたんです。家は姉弟二人っきりで、そのころ芳公は本郷のほうの大工の棟梁の家へ弟子入りしていたんですが、相手がそういう札つきの悪旗本では、町内の人たちもどう力になってやりようもない。へたなことをやると、向こうにちゃんと殺し屋というのがいて、いつの間にか死骸にされているんですから、結局は泣き寝入りにするよりしようがないんです。それから芳公がぐれ出したって、ちっともふしぎはないでしょう」
「ふうむ。千両玄蕃ってのは、そんなけちな悪党だったのか。女に振られて女に仇をする、そいつは男の腐った色きちがいのやることだ。けっ、千両玄蕃が聞いてあきれらあ。今日からおれはこじき玄蕃と呼んでやる。――なあ、清さん」
烏松も鬱憤の持っていき場がないように、目ばかりぎょろつかせている。

「お蓮ねえさん、おれになんか用か」
土間へ入ってきた芳公が、ついたての向こうから大きな声で聞いた。
「ああ、来たの、芳っちゃん」
いそいで立っていったお蓮が、
「芳っちゃんに会いたいって人があるんだけど、裸じゃしようがないね。まあ、これで頭をおふきよ。滴がたれているじゃないか」
と、自分の手ぬぐいをわたしてやったようだ。
「お蓮、裸でも苦しゅうない。これへ呼びなさい」
鶴七郎がこっちからおだやかに声をかける。
「ふ、ふ、苦しゅうないっておいでなすったぜ。どこの大名がきているんだ、ねえさん」
平気でそんな口をきく芳公だ。
「まあいいからお上がりよ。いま雑巾を持ってきてあげるから。――ああ、そのぬれた着物をお出し、かわかしといてあげるから」
「すまねえなあ」
お蓮はぬれた着物をうけ取って水屋へ入り、雑巾をしぼってきてやったようだ。
「御一同さん、今日は。――裸でごめんこうむりやす」
間もなく芳公は悪びれもせず、裸のままあがって、そこへあぐらをかく。
初夏に入ったとはいえ、まだ冷たい水の中にしばらくいたのだから、くちびるの色が真っ青だ。いかにもやくざらしく、胸から腹へきりりと巻きつけてあるさらしのあいだへ匕首を一本のみ、そのわきのほうへずしりと重そうな紙入れがのぞいているのは、それがさっき両国橋から飛びこむようになった時の獲物なのだろう。いくぶんほっそりとはしているが、まるで若竹がすくすくと伸びてきたような、柔軟そうな生き生きとした体つきである。
「お前は疾風の芳というきんちゃく切り小僧だそうだな」
鶴七郎は親しげな微笑をうかべながら、鷹揚

に声をかける。
「さいでござんす。殿さまはたしか浜町の火薬さんでござんしたね」
「わしを存じているか」
「知っていやすよ。殿さまなら、苦しゅうないってのたまわっても、おかしくねえな。それが生地なんだもんな」
　芳公の面魂に、浜町の火薬だって負けるもんかという、向こう見ずの底意地がはっきりと見える。
「いまここから見ていると、お前は両国橋から飛びこんでいた。そのお前を追いかけるように、だれかが切りつけていたようだが、あれはどういたしたのかな」
「ちょいとうかがいやすが、殿さまは本所割り下水の太田原玄蕃って野郎を知っていやすか」
「うむ、いまお蓮から聞いて、悪旗本だということはわかった」
「なあんだ、お蓮ねえさんから聞いているんか」
　じゃおれの話も知っているんだなというような顔をして、
「その玄蕃のやつが、四天王の家来をつれて、さっき米沢町の棚倉屋へ乗りこんだんだ。棚倉屋さんを知っていやすか、殿さまは」
　と、これはまた意外なことを言い出す。
「棚倉屋は存じているが、玄蕃はなにしに棚倉屋へまいったのかな」
「なにしにって、どうせあの野郎は銭もらいだもの、ゆすりにきまってまさ。殿さまは棚倉屋のお嬢さん、つまり末娘のお千恵さまってのが、今朝早く舟で猿若町の芝居見物に出かけて、向こうへ着くと間もなく人さらいにさらわれちまったっていう大騒動を聞いていやすか」
「あら、本当なの、それ、芳っちゃん」
　芳公の着物の始末をしてあがってきたお蓮が、びっくりしたように、そこへ座る。
「それは初耳だが、すると、玄蕃はそれをゆすりの種にしたのか」

　鶴七郎が思わずまゆをひそめると、
「そうなんです。どこで聞いてきやがったか、あの野郎、さっそく棚倉屋へ押しかけていって、どうだ、三日のうちにおれがきっと娘をさがし出してみせるが、無事にもどったら千両出すかと、大番頭に掛け合ったんだ。相手が悪いんで、大番頭もどうぞよろしくお願いいたしますというと、人を動かすには金がいる、手つけとして百両出せとぬかしやがった。人の弱みにつけこみやがって、ふてえ野郎でさ。それに、おれはあの野郎には生かしちゃおけねえ恨みがあるし、よし、やっつけろと思って、両国橋の上で待っていて、いま、棚倉屋からゆすってきたばかりの百両を、紙入れごと野郎のふところから、これこのとおり、抜いてやったんです」
　と、芳公は得意そうにぽんと腹巻きの上から紙入れをたたいてみせる。
「では、あの刀で追いかけたのは玄蕃だったのだな」
「さいでござんす。真っ昼間、正面から勝負するんだから、こっちも命がけでさ。百両からの金じゃ重みがあるから、きっとすぐ気がつく。気がついたってかまやしねえ。紙入れさえ抜いて、うまく逃げてしまえばこっちの勝ちでござんすからね。だから、わざと両国橋の上で待っていたんでさ」
　芳公の顔には、真剣勝負で勝ってきた勇士のような誇りがましいものが、昂然と燃えているようだ。
「芳っちゃん、お前そんなまねをして、もし玄蕃に命をねらわれたらどうするのさ」
　お蓮が心配そうにそばから口を出す。
「大丈夫さ。野郎の命をねらっているのは、おれのほうなんだ。いまに見ていてくんな、きっと野郎の生き肝を引き抜いてみせるから」
　芳公は平気でせせらわらっている。
　——おもしろい小僧だなあ。
　烏松は自分の血の中にもそういう野性をたぶ

んに持っているので、小気味のいい芳公の図太さが妙にうれしくなってくる。

三日の勝負

ふいに、どかどかと土間へ押しこんでくる足音がして、

「あっ、御前、ここにいやした、あの小僧が」

やくざ風の男が、いきなり上がりかまちのついたてをぐいとわきへ押しのけた。

そこにぬっと立っているのは、三十がらみ、五分月代、ぞろりとした茶羽二重の着流しに朱鞘の大小という、いかにもにらみのききそうな冷たい目をした千両玄蕃である。うしろに四天王といわれる用心棒が、いずれも一癖ありげな面をそろえている。

「もし、ここはお客さまの座敷なんですから、乱暴をしないでくださいよ」

お蓮がしゃっきりとそっちへ向き直って、たしなめた。

「ふうん。てめえ、あの小僧をきんちゃく切りと知っていてかばう気か」

露払いのやくざは、とらの威を借るきつねといったかっこうで、いまにも土足で桟敷へ踏んごみそうな意気ごみである。

素早い芳公は、もうさっと立って、いつでも大川へ飛びこめるように手すりへ片足をかけながら、

「なにをぬかしやがる。おれがきんちゃく切りなら、てめえたちは銭もらいのこじきじゃねえか、わらわせやがらあ」

と、思い切った悪態だ。

「ぬかしやがったな、小僧。本所割り下水の御前にそんな悪態をつくと、口がひん曲がるぞ」

「なに、本所割り下水の御前だと。――うそをつきやがれ。そこに突っ立っている野郎は、人間の皮をかぶった本所の畜生玄蕃じゃねえか。やい、三下、よく聞いておけ。その畜生玄蕃って野郎はな、おれの姉のお菊に振られたのを根

に持ちやがって、だまして姉を屋敷へつれこみ、そのうしろにあほうづらをして突っ立っている四天王とかいう野良犬どもに手ごめにさせて見物していやがった畜生なんだぞ。てめえそれを知っていて、そんなやつを御前御前とありがたがっているところを見ると、てめえもやっぱり犬仲間だな。おお、くせえ、犬のにおいがぷんぷんしてきやがった」

「野郎、勘弁ならねえ」

犬やくざが、いきなり土足を上がりかまちへかけようとしたとたん、

「下郎、さがれ」

と、鶴七郎が一喝した。

「なんだと――」

変な野郎がそこにいると知ってはいたろうが、声をかけられて改めて顔を見て、あっと思わずしりごみをしたのは、はっきり鶴七郎とわかったからだろう。

「御前、どうしやしょう」

犬やくざは、そっと千両玄蕃の顔色をうかがう。

玄蕃も、そこに妙なやつがいる、ひょっとしたら、これがうわさに聞いた浜町の火薬ではないかと見たから、今まで黙っていたのだろうが、犬やくざにそう聞かれると、もうそのまま逃げ出すわけにもいかなくなったらしい。

「そこの御仁、身共は本所割り下水の太田原玄蕃だが、尊公の御姓名をうけたまわりたい」

「わしは浜町の鶴だ」

「紋が少し違うようだが」

鶴七郎は今日も四つ目の紋をつけている。そこが玄蕃のつけ目で、葵の紋でなければあくまで偽公子としてあつかってしまえばいいのだ。

「わしは浜町の鶴と名乗ったはずだ」

「なるほど。――しからば、浜町の鶴どのに申し入れる。それなるきんちゃく切り小僧を申しうけたい、さしつかえござるまいな」

「ならぬ」

「ほう、なぜでござるな」
「うそかまことか知らぬが、この者がいまここで人にあるまじき恐ろしいことを口にいたしたのを、その方もしかと耳にしているはずである。事実さようなことがこの江戸で行われているとすれば天下の一大不祥事、真偽のほどをたしかめぬうちは、何人にもこの者は相わたすことはならん」
　鶴七郎は面を正してきっぱりと言い切る。
　さすがの千両玄蕃も、痛いところを突かれて、ちょっとかえす言葉が出なかったようだ。
「玄蕃、そちは今日米沢町の棚倉屋へまいったそうだな」
　すかさず鶴七郎がたたみこむ。
「それがどうしましたな」
「棚倉屋の娘千恵を必ず三日の間につれもどしてやるから、百両出せと申して金子を受け取ってきたそうだが、きっと三日の間につれもどす自信があるのか」
「はばかりながら、玄蕃は腕と頭の男、身分を笠にきてのほほんと世渡りをしているどこぞの御仁とは違う。必ずつれもどしてお目にかけよう」
　こんどは玄蕃がずばりと言い切る。
「誓言できるのだな」
「刀にかけても」
「もし、誓言が果たせぬ場合は、人の不幸につけこむふらちなかたりとして、打ち首にいたすぞ」
「よろしい。そのかわり、誓言を立派に果たした場合は、浜町どのの首をちょうだいいたすが、いかが」
　玄蕃はだんだん図太くなってくるようだ。
「そちにわしの首は打てぬ」
「そんなことはございますまい。身分を去って裸になればおなじ人間と人間、あとは腕と頭の勝負ですからな」
「笑止なことを申す。身分を去って裸になって

も、わしとそちでは雲泥の相違がある。そちは裸になっても悪党、わしは裸になっても善人。そちはいかに悪党の腕と頭を誇っても、たかだか百人たらずのごろつきどもを手下に持って、天下を取った気でいる小人。わしはいながらに日本国中の善人を味方に持って、共にたのしみ、共に働いて生きる市井の君子。そちは常に人を恐れおののき、わしは常にわらって人生を人と共にたのしむ。そこに身分の差などがあると考えるのは、愚もはなはだしいとは気がつかぬか」
「立派なお言葉ですなあ。言うはやすく行うは難しで、口だけのことならなんとでも広言は吐けるものだ。よろしい、あなたにそれほど自負するものがあるなら、三日の間にあなたの善人どもを使って、棚倉屋の娘をさがし出してみせていただきましょうかな」
　玄蕃がせせらわらいながら挑戦してきた。
「その方ごとき小人どもの指図はうけぬ。善人というものは、人の災難を決してよそに見てはおらぬものだ」
「結構です。裸の人間の腕と頭の勝負なら、天下に怖いもののない千両玄蕃だ。いずれ戦場でまたお目にかかるといたそう」
「昼間は怖いやみ大名か。よかろう、三日とはっきり日が切ってある。大手を振って歩けるのもあと三日と心得て、十分腕と頭を働かせてみるがよい」
　それは、世にはばかっていられる悪運もあと三日だけの命だぞと、金縛りにかけたもおなじ痛烈な宣告だった。
　いかに悪たれて大口はたたいても、天下の法の重圧には抗しきれぬ。玄蕃もこの一言はあっと胸にこたえたようだが、
「三日の命、賽の目がどっちへころがるかは時の運、ここが御同様に関ガ原というところでしょうかな。――さらば」
　自分の首に気をつけろと言わぬばかりに、あくまでふてくされて、ゆうゆうと引きあげよう

とする。

「ああ、しばらく待て」

「まだなんぞ御用でござるかな」

「これ、芳小僧、これへちょっとまいれ」

鶴七郎はまだ手すりへ片足かけている芳公を呼ぶ。

「殿さま、なんか用かね」

芳公はそこへ座った。もうあぐらはかけなくなったのだろう。

「お前はな、さっき両国橋の上で、千両玄蕃と真剣勝負をやった。腕と頭を誇るこの男も、お前には見事にしてやられたようだ。今日の勝負は、たしかにお前の勝ちだ。勝負に勝ちさえすれば、お前は犬のにおいのしみついた紙入れなどはほしくはあるまい。その紙入れはこの男にかえしてやりなさい。どうだな」

鶴七郎はさとすように言う。

「わかりやした、殿さま。人間は裸になっても悪党は悪党、善人は善人でござんすね」

「そのとおりだ」

「おれは人にきらわれる悪党にゃなりたくありやせん。こいつはかえしてやりやす」

芳公はずしりと重い紙入れを腹巻きの間からぬいて、

「おい、こじき玄蕃、こんな犬のにおいのする紙入れは、人間の持つもんじゃねえ。けえしてやるから、ありがたく持ってけえんな」

どしんと土間へ投げてかえす。

「野郎、ぬかしやがったな」

犬やくざがたちまちほえつこうとしたが、

「政、やめろ」

玄蕃はしかるように制して、

「くちばしの黄いろいぴよぴよ小僧、しゃべれる間にたくさんさえずっておくがいいぞ」

じろりと芳公をにらんで、そのままずっと土間を出ていく。

「おぼえてろ、ぴよぴよ小僧」

犬政も悪態をつきながら、如才なくさっと紙

入れをひろい取って、玄蕃の後を追う。

「なんと言われても、金だけはひろっていきやがる。こじき野郎め、ざまあ見やがれ」

芳公はせせらわらって、いい気持ちそうである。

「芳っちゃん、お前あいつらに命をねらわれてしまったんだよ。大丈夫かねえ」

さすがにお蓮は心配そうな顔をかくし切れない。

「違うぜ、お蓮ねえさん。あいつの生き肝をねらっているのは、おれのほうなんだ」

「ぴよぴよの兄いは、すごくいさましいんだなあ」

そばから烏松がわらいながら感心する。

「あれえ、おじさんはどこの馬の骨だえ」

「おじさんはな、烏の松といって、浜町さまの家来のうちでも用人格の利け者なんだ」

「本当か、おじさん」

「本当さあ、うそだと思ったら、殿さまにおうかがいしてみるがいいや」

「なあ、用人格の利け者のおじさん」

「なんだ」

「おじさんが本当に用人格の利け者なら、たのみが一つあるんだがなあ」

「どんなことだな」

「おれを一つ殿さまの家来にたのみこんでみてくれねえか。おいらこのとおり素っ裸だけど、これでも今日から善人の仲間入りがしてみてえんだ。いけねえかなあ、おじさん」

「どうしようなあ、清さん」

なかなか抜け目のない芳公である。

「そうだなあ、いきなり家来というわけにもいくまいが、当分我々があずかって様子を見た上で、それから殿さまに推挙する、これではどうだろう」

清太郎がうまいことを言う。

「まずその辺のところかな。——どうだ、ぴよ公、それでいいか」

「うむ、それでいい。物には見習いってことがあるからな。――御用人格さま、どうぞよろしくお願いいたします」
芳公は改めて烏松の前へ両手をつく。
「うむ、なかなか感心なもんだ」
烏松はうれしそうに清太郎の顔を見て、それから鶴七郎のほうへ、
「殿さま、お聞きのとおり、ぴょ公は当分の間あっしどもがおあずかりいたしやす」
と、改めてあいさつをする。
鶴七郎から許しが出た。
「うむ、それでよい。いたわってつかわせ」
「よかったねえ、芳っちゃん」
お蓮がうれしそうにいいながら、その目にみるみる涙がたまってくる。

脅迫状

間もなく鶴七郎は、烏松、清太郎、ぴょぴょ小僧の芳公たち三人をつれて、米沢町二丁目の棚倉屋善兵衛の店をたずねた。
棚倉屋は取りこみの最中だったが、ほかならぬ浜町の鶴七郎では、善兵衛も会わないわけにはいかなかったのだろう、すぐに奥座敷へ案内して、大番頭杉右衛門といっしょにあいさつに出た。
――どうでえ、やっぱり殿さまは大したものだなあ。
初めてこんな供をしてきた芳公は、まだ半乾きにもならない着物から湯気を立てながら、末座にちんと座って、うれしくてたまらない。第一、こんな立派な座敷へ、ともかくも客として通されたことなど一度もないのだから、見るもの聞くものが珍しい。
「これはこれは、浜町さまにはいつもごきげんうるわしく、善兵衛大慶に存じます」
もう六十に近いと思われる善兵衛は、さすがに大家の主人だけあって、顔色こそ胸の心痛にさえないが、取り乱したところは少しも見えな

かった。
「善兵衛、見てのとおり、わしは今日はしのびで、かような気軽な風をしている。改まったあいさつには及ばぬことだ」
「恐れ入りましてございます」
「娘千恵が芝居見物にまいって、何者かにさらわれたそうだな、さぞ心痛であろう」
「はい」
「わしもさがしてつかわそう。決してただの物好きから申すのではない。江戸にさような不祥事があっては、天下の政道が立たぬ。諸人のために悪と闘うのは、鶴七郎が城を出た時からの素志だ。そのつもりで、一応子細を聞かせてみてくれ」
鶴七郎の若々しい目は、闘志に燃えている。
「お心にかけていただきまして、まことにかたじけのうございます。まったく突然降ってわいたような災難でございまして、なにからお耳に入れていいやら、――なあ、大番頭さん」
善兵衛の老いの顔に、こらえかねるような苦痛の色が、はっきりと見えてきた。
「浜町さま、主人にかわりまして、手前から一通りお話し申し上げます」
それと察して、大番頭の杉右衛門が律義そうに居ずまいをなおす。
「うむ、聞こう、杉右衛門」
「お千恵さまは今朝まだ暗いうちに、舟で堺町の中村座へお出かけになりました。供は乳母と女中が二人、番頭が二人、それに日ごろ出入りの女師匠が二人、八人づれでございました。無事に中村座へ着きまして、いつもの竹屋という芝居茶屋から小屋へ入り、三幕ほどすみまして、ちょっと幕間がございますので、ひざをのばしに茶屋のほうへもどりました。その時、お千恵さまが用に立ちましたそうで、おすみと申す女中がついてまいりました。十六になります女中で、廊下で待っていましたが、いつまでたってもお千恵さまが出ておいでになりません。ごた

ごたしておりますので、もしや先に座敷へおもどりになったのではないかと、いそいできてみましたが、まだ帰っていない、それから大騒ぎになりまして、小屋中から楽屋まで調べてもらいましたそうですが、どこにもいないことがわかりました。平造という番頭が、とにかく駕籠を飛ばして店へ知らせにまいったという次第でございまして、手前どももまったく途方にくれております」

要するに、厠へ立ったきり、姿が消えてしまったということになるのである。

――そんなバカな話ってあるもんか。ぼやぼやしてやがる。

芳公は大番頭の顔を見すえながら、なんだか腹が立ってきてしようがない。

「千恵は何歳になるな」

「当年十七歳になります」

こんどは善兵衛が答える。

「日ごろ性質はおっとりしているほうか、それとも、はきはきしているほうかな」

「末っ子で、つい甘やかしておくものでございますから、わがままではございますが、性質はおとなしいほうでございます」

「おすみという女中と座を外している間じゅう、ほかの六人はずっと座敷にいたのだな」

「はい、みんなおりましたそうで――」

「騒ぎになったのは、何刻ごろか」

「四ツ（十時）少し前でございましたそうです」

「千恵の履物は茶屋にあったか」

「はい、それは乳母が持ってもどりました」

「話は違うが、本所割り下水の太田原玄蕃が、三日の間に娘をさがしてやると申して、さきほど百両持って帰ったそうだな」

「もうお耳に入っているのでございましょうか。――手前が主人にかわりまして応対に出て、たしかに百両わたしましてございます」

かわって杉右衛門が答える。

「玄蕃は千恵のことをどこで聞いてきたと申し

ていたな」

「さあ、それはついうっかりして、聞きもらしましてございます」

「三日と日を切って、千恵をさがし出した節は千両出すかといって掛け合ったそうだな」

「はい」

「少しおかしいと杉右衛門は思わぬか。それとも、人の弱みにつけこんでの口から出まかせと取ったか」

「実は、そのことでございますが――」

杉右衛門はひとひざ乗り出して、ふっと気がついたように、

「だんなさま、いかがでございましょうな」

と、善兵衛のほうへ聞く。

「さあ、それは――」

善兵衛はなんとなく当惑そうである。

「殿さま、御主人はあっしたちを気にしているのかも知れません。しばらく別間へ遠慮しましょうか」

さすがに鳥松は察しが早い。

「いや、待て。こんどのことでわしの手足となって働いてくれるのは、お前たち三人だ。立つには及ばぬ」

鶴七郎はきっぱりと引きとめて、

「善兵衛、杉右衛門、この三人は、松、清太郎、芳と申して、わしの腹心のものである。決して間違いなどする男たちではないが、しかし信用できぬとあれば、もうなにも聞かぬでもよい。今までの話で、およその見当はついた。わしはわしの力で、三日の間に必ず千恵をさがしてつかわそう」

と、平然といい切る。

――おれは殿さまのために死んでもいいや。

芳公はかっと体中が熱くなってしまった。

「恐れ入りましてございます。――大番頭さん、なにかも申し上げてな」

善兵衛は決心がついたようである。

「かしこまりましてございます」

大番頭はうなずいて、ふところの紙入れの中から結び文のようなものを取り出し、
「浜町さま、これをごらんくださいまし。手前が店で玄蕃と応対をして帰りまして、主人の前へ出ますと、たった今この結び文が内玄関のほうへ投げこんであったそうだと申しまして、見せられたものでございます」
と、鶴七郎の前へおく。
手に取って解いてみると、普通の半紙一枚に、
今夜九ッ（十二時）金一万両なりを舟にて橋場の渡しまで運ばれたし。引きかえに娘千恵は無事にわたす。この儀他人に漏らし候節は覚悟あるべし。舟は船頭一人のほかに、大番頭杉右衛門、小僧一人のこと。
と、かなりきちんとした字で書いてある。あて名も署名もないが、文中に千恵と杉右衛門の名が出ているから、むろん主人棚倉屋善兵衛にあてたものに相違ない。
「脅迫状だな、杉右衛門」
「はい。これを見せられますまでは、手前も玄蕃が怪しいと考えておりましたが、一万両と千両とではだいぶ違いますし、玄蕃は三日といい、こっちは今夜九ツといってきています。下手人はまったく別人ではないかと思いますが、いかがなものでございましょう」
「うむ」
鶴七郎は、見ろというように、結び文を烏松にわたして、
「善兵衛はこの文面どおりに、今夜舟を出すことに腹をきめたのか」
と、主人に聞く。
「はい、娘の命にはかえられません」
「しかし、この手紙は鶴七郎が見てしまっているぞ」
「はい、お見せいたしましたからには、手前も覚悟いたしました。娘はかわゆうございますが、

かような悪党をほっておきましては、この上何人もの親がおなじ悲嘆にくれるようになりましょう。できれば手前一人で終わりにしたいものでございます」
善兵衛はそういって、がくりとうなだれてしまう。覚悟はしても、娘ふびんさが痛いほど胸をえぐってくるのだろう。
「よく申してくれた。鶴七郎決してあしくはせぬ。まかせておいてくれ」
火のような闘志があふれてくる鶴七郎だった。
千恵は悪人のために人質に取られたのだと、はっきりわかった。それにしても、下手人は人目の多い芝居茶屋から、どんな風にして十七にもなる娘を誘拐（ゆうかい）し去ったのだろう。
「烏、そちならどうして、芝居茶屋から、だれにも気づかれずに娘をつれ出すな」
鶴七郎はまず烏松に意見を求めてみる。
「そうでございますね。こんな筋書きはどうでござんしょう。お嬢さんは用たしに行って、女中さんは廊下で待っていた。あいにく、その間に女中さんも用がたしたくなる。入れちがいにお嬢さんが廊下へ出てくる。日ごろよく顔を知った者、男じゃいけやせん、この役は女にかぎりやす、その女がうまく話しかけて、ちょいと表へ出てみませんか、と誘う。芝居町はひと町内が小屋のつづきのようなもんだ、長い幕間には客がよく茶屋の草履を突っかけたまま町へ出て、土産物などを買っていやす。女はどこかの店へお嬢さんをつれて入る。その店に下手人が待っているという寸法です。これなら、お嬢さんも声一つ立てるすきはありやせんからね」
烏松は自信ありげに、すらすらといってのける。善兵衛も杉右衛門もびっくりしたような顔をしていた。
「杉右衛門、おすみという女中は、廊下に待っている間に、ちょっとその場を外したようなことはないか、たしかめてみたかな」

鶴七郎が大番頭に聞く。
「はい、当人はそんなことはないと申していますが、いまそちらの親方が申しましたとおりかと存じます。なにぶん、おすみはすっかり度を失っておりまして、死んでおわびをいたしますなどと口走りますので、いまのところはそっとほかの女中どもに見張らせてあるような始末でございます」
「よし、それで相わかった」
鶴七郎はうなずいて、
「杉右衛門、今日芝居小屋へ供をした女師匠は別として、日ごろ出入りの女で、千恵に親しく口のきける者を残らず書き出してみてくれ」
と、いいつける。
「かしこまりました」
「ぴよ――」
「おれかい、殿さま」
「うむ、お前は当家の小僧の仕きせを借りて、大番頭が書き出した女の家を一軒一軒当たってみてくれ。今朝から外出している女、ことに中村座へ出かけた女があるかどうか、それを聞き出してくるのだ。できるな」
「ここの小僧さんに化けて、どこへ出かけたかうまく聞き出してくりゃいいんですね」
「そうだ」
「わけなしでさ。殿さまはそれまでここに待っていてくれやすか」
「そうだな、わしのいるところは、お蓮に知らせておくことにする」
「合点だ。殿さま、奉公はじめってやつですからね、きっとうまくやるから、見ていておくんなさい」
芳公は目を輝かして勇み立ちながら、
「大番頭さん、よろしくたのんます」
と、杉右衛門に頭を下げる。

第一の刺客

「善兵衛、芝居茶屋のほうへはだれかまいって

いるのか」
杉右衛門が芳公をつれて別間へさがると、鶴七郎は思い出したように善兵衛に聞いた。
「はい。この辺は薬研堀の藤吉が持ち場でございまして、今朝娘の供をした番頭といっしょに、そっちへ出向いております」
「藤吉なら存じておる。そっちはそっちで、なんとか手がかりをつかんでまいるだろう。――烏」
「へえ」
「そちはな、玄蕃のほうをさぐってみてくれ。玄蕃が下手人でなければ、その下手人の当てが玄蕃にはおよそついているはずだ。それでなければ三日と日はきらぬし、口から出まかせならすぐに千両持っていく気になるだろう」
「おっしゃるとおりでござんす。すると、今日中には玄蕃のやつ、その下手人と会って掛け合う気にならねえとはかぎりやせんね」
「うむ、それがこっちのつけ目だ。しかし、相手も千両玄蕃だからな、十分気をつけてかからぬと、命がないぞ」
「おまかせなすって。烏は羽根を持っていやす」
にやりと不敵なわらい顔を見せる烏松だ。
「たのむぞ。すぐに飛ぶがよい」
「殿さま、今夜の段取りが気になるんでござんすがねえ」
「心配いたすな。幸い、鶴も翼を持っている」
「ちげえねえ。――清さん、おめえはおそばを離れちゃいけねえよ。たとえだれがなんといってもな」
「必ず心得た」
烏松は念を押すことを忘れない。
無論、そのつもりの清太郎だった。
「きっとたのんだぜ。――殿さま、ではあっしは飛びやす」
烏松は鶴七郎と善兵衛におじぎをして、すっと立っていった。
「善兵衛、これで一応打つ手は打った。金舟は

四ツ（十時）を打ってから出せばよい。それまでにはこっちから沙汰をするから、もうあまり騒がずに落ち着いていることだな」

「なにからなにまでお心にかけられまして、お礼の申し上げようもございません」

「あまり心痛いたすな。また出直すぞ」

鶴七郎は清太郎に目くばせして、座を立った。時刻はすでに八ツ（二時）に近いようである。

「清太郎、二間ばかりさがって、わしの後をつけてきてみろ」

棚倉屋の内玄関を出る時、鶴七郎はそっと清太郎に耳うちをした。

「はっ」

清太郎にはその意味がすぐにものみこめたようである。

こんどの下手人は、これだけの手を打って、一万両からの大金を要求してきている。鼠賊などのやれることではない。おそらく、幕府に不平のある浪人どもが結社を作って、なにかの目的のために資金を集めはじめたのだろう。

しかし、今日の時勢では、慶安の由比正雪のような陰謀はほとんど不可能だ。人と金とを集めて集団でできることといえば、大船を用意して南蛮あたりへ渡航し、そこに新天地を作る以外にはない。

いずれにしても、そのくらいの結社だとすれば、首領に立つやつはかなりの人物でなければならない。脅迫状をつけた棚倉屋をそのままほっておくはずはないから、もうちゃんと家のまわりには彼らの目が光っているはずだ。

そっちばかりではない。千両玄蕃のほうも、お前の命は三日だぞと、さっきくぎをさしておいた。これもすでに何人かの刺客を用意して、自分をねらわせている。

——大きな勝負になってきた。

鶴七郎は十分覚悟しながら、表面はまったく八方破れの構えで、ぶらぶらと両国広小路の雑踏の中へ出てきた。この盛り場はもうひとしきり人の出さかる盛りだから、見世物小屋は笛太鼓で人を呼び、人の流れは肩と肩とをふれあわんばかりにごったがえしている。

——かわいそうなことをした。清太郎がさぞ困っているだろう。

こんな雑踏の中で人をつけるということは容易なことではない。鶴七郎はそう気がついたので、なるべく早く水茶屋横町へ出てやるつもりで、やっとそこの角まで近づいてきた。

すっとうしろから、鶴七郎の右がわを通りぬけようとした女がある。ひどくあだっぽい年増だった。

「あっ」

女はびっくりしたように小さく叫んで、ぴたりと鶴七郎と肩をならべてしまう。鶴七郎が、腰の印籠をねらった女の手首を、とっさにしっかりとおさえつけたからである。

「お武家さん、冗談はおよしなさいまし」

女はもう度胸をきめたらしく、じろりと横目で鶴七郎をにらみながら、たしなめるようにいう。

「いたずらをしてはいかんな」

鶴七郎がおだやかにいう。

「あら、いたずらをしているのはお武家さんのほうじゃありませんか。早く手を放さないと、大きな声を立てますよ。いやらしい」

「お前は、わしを知っているようだな」

「ふうんだ、うぬぼれてるわ」

「千両玄蕃にたのまれたのか」

「そんなんじゃありませんてば。よしてくださいよ、いきなり女の手なんか握って」

女の声がやや強くなる。

「いい度胸のようだ。大きな声が立てたかったら立ててごらん」

「人殺しぃッ、——助けてえ」

全くやけっぱちな女だった。ふいに、身もがきしながら、ありったけの金切り声をあげたのである。

ちょうど水茶屋横町へ曲がろうとする角で、一瞬人々があっと息をのみながら一度に足をとめた。とたんに、
「くたばれッ」
鶴七郎の背後からぬすっとかむりの遊び人風の男が、匕首を胸にかまえて、だっと体ごとたたきつけてきた。
「あぶないッ」
鶴七郎の体がひらりと右へかわって、女をかばうようにくるりと向きかえる。
その目の前を、見事すかをくらったぬすっとかむりの男の体が、どっと前のめりになりながら、自分から往来へいやというほど突んのめっていった。
が、それがまた驚くほど敏捷なやつで、突んのめったと見たとたんに、ばね仕かけのようにさっと飛びおき、後をも見ずに両国橋のほうへ走り出す。
「うぬッ」
清太郎が真っ青な顔をしながら、後を追いかけようとする。
「やめい、清太郎」
「は!」
「女、お前も早く逃げろ」
鶴七郎はわらいながら、女の体を両国橋のほうへ向けて、とんとその肩を押してやった。
「ふん、恩にゃきませんからね」
きっとふりかえって、そんな捨てぜりふをたたきつけながら、女はもう澄まして足早に橋のほうへ去っていく。
「殿さま——」
「そんな顔をいたすな。まいれ」
鶴七郎はなんにもなかったように、ゆっくりと水茶屋横町のほうへ歩き出す。
つむじ風がおこったような、ほんのあっという間のできごとなので、見ていた野次馬は、ぽかんと目をみはったまま、声さえ立てえずに鶴七郎を見送っている。その鶴七郎の腰にぶらぶらさがっている葵の紋散らしの見事な印籠に、何人気がついた者がいたか。
「殿さま、申しわけございません」
すぐ後から歩きながら、清太郎があえぐようにいった。
「清太郎、それでは少し近すぎるようだな」
「いいえ、二間では遠すぎます。間にあいません」
清太郎はもうなんとしかられても、後へはさがらない気だ。わきの下へぐっしょりと冷や汗をかいている。
鶴七郎もそれ以上後へさがれとはいわず、黙ってお蓮の店へ入っていった。
「ああ、殿さま、おかえりなさいまし」
いそいそと出迎えたお蓮は、後につづく清太郎の青ざめた顔を見て、ぎょっとしたようだ。
「またじゃまをするぞ」
鶴七郎は一人でさっさとついたての向こうの桟敷へあがっていく。
「清さん——」
お蓮は体で清太郎をさえぎって、
「どうしたの。殿さまにしかられたんですか」
と、小声で聞きながら、じっと顔色をうかがう。
清太郎は首を振ってみせて、鶴七郎の後を追おうとしたが、お蓮はしっかりと男の腕をつかんで放そうとしない。
「どうしたんですよう、その青い顔——。どこか具合いでも悪いの」
「いまにわかる。心配しなくてもいいんだ」
「心配します。話してくれなくちゃ」
「殿さまにうしろから匕首で突っかかったやつがあるんだ」
「なんですって、——どこでさ」
「すぐそこの角なんだ。もう少しのところで、わしは生きていられないところだった」
「おじさんはどうしたんです」
「ほかへ使いに行っているんだ」

「芳っちゃんは――」
「あれも殿さまの御用中だ。それだけに、わしの責任は重い」
ほっと清太郎がため息をつく。
「清さん、おそばにいなかったの」
「二間ほど後から離れてこいとおっしゃるもんだから」
「じゃ、しょうがないじゃありませんか」
「なにッ」
さっと清太郎の顔がけわしくなる。
「すみません。堪忍して。――そ、そんなつもりでいったんじゃないんです」
「もういい」
清太郎は押しのけるようにして通ろうとしたが、
「いやだ、そんなに怒っちゃ」
お蓮は夢中になって、男の胸にむしゃぶりついていた。
「怒ってやしない。通してくれ」
「いやッ、いやッ、怒ってるんだもの」
お蓮はどこにそんな力があるのかと思うほど、必死にしがみついてくる。
「もうわかったというのに――」
「清太郎、まだ日は長い。そういそがんでもよいぞ」
ついたての向こうから、鶴七郎がわらいながら声をかけた。
「はっ、ただいま。――お蓮」
清太郎がたしなめるように、お蓮を胸から引っぺがす。
「じゃけんねえ、清さんは」
さすがにお蓮も赤くなって、いそいで鬢を気にしていた。
「殿さま、お恥ずかしゅうございます」
清太郎は端近へ座って、遠くからおじぎをした。体中にお蓮のにおいがまつわりついていて、ちょっと正面へは出られない気持ちである。

蘭学書生

鶴七郎より一足先に棚倉屋を出た烏松は、まず本所割り下水の千両玄蕃の屋敷へ行ってみる気で、米沢町から両国広小路へ出ようとする角まできた。そこでふっと気が変わったのである。
というのは、そこの角にぼんやり立って広小路の雑踏をながめているのは、剃刀お仙という下町一帯のすり仲間ではあねご株のすごい女だった。
――あまめ、またかもをねらっているな。
はじめはなんの気もなくそう考えて、すたすたと通りすぎてしまったが、待てよ、間もなく殿さまもここを通ってお蓮の水茶屋へ行くはずだ。千両玄蕃のまわし者か、お千恵をさらった賊の仲間かが、ひょっとすると人ごみにまぎれて殿さまをねらっていないとはかぎらない。
――そうだ、よそながら殿さまがお蓮の水茶屋へ入るまで様子を見とどけてから、玄蕃のほうへかかってもおそくはなかろう。
烏松はそう考えたので、これも雑踏の中にまぎれて、米沢町の角のほうをそれとなく見張っていた。
間もなく鶴七郎がその角へあらわれると、驚いたことには、剃刀お仙がその後をつけ出したのである。
お仙のやつ、殿さまの印籠をねらいやがったな。
そう思って見ていると、水茶屋横町へ曲がろうとする角で、お仙は鶴七郎に手首をつかまれ、その横あいからぬすっとかむりの遊び人風の男がいきなり鶴七郎に匕首を突っかけていった。
見事に二人とも失敗はしたが、こうなると、この二人はぐるであると見るほかはない。いくら悪党でも、ただで人の命をねらうはずはないから、遊び人のほうは千両玄蕃の息のかかったやつじゃないかという疑問が出てくる。
――よし、ぬすっとかむりの後をつけてみろ。

烏松は本気になって遊び人のほうの後をつけだしたのである。

一度両国橋の上へ逃げたぬすっとかむりの男は、そこでぬすっとかむりの手ぬぐいをとって、ほっとしたように橋の欄干の前へ行って立った。二十七、八の、なかなかきりっとした男前である。

「忠公、やっぱりあたしのいったとおりだったろう」

すっと男のそばへ寄っていって話しかけたのは、剃刀お仙である。

「すまねえ、あねご、とんだどじを踏んじまった」

忠公は川のほうを向いたまま苦わらいをしている。

「どじを踏んだのはあたしだっておなじだけど、あの浜町の鶴だけはちょいとけた外れなんだから、しょうがないさ。それで、どうする。もう一度やってみるだけの度胸があるかえ」

これも川のほうを向いたまま聞く。こうして話していると、通行人からは話しているとは見えないから、注意をひかずにすむのだ。

「おれも男だからなあ。一度引きうけてしまったからにゃ、いまさら後へもひけねえや」

「負け惜しみはおよしよ。また一人相撲を取って、自分ですっころがるだけだよ」

忠公は返す言葉がないようだ。

「それより、これから玄蕃のところへ行ってさ、これこれだからとてもわたしの手にはおえません、あやまりますと、いさぎよく頭をさげてしまったほうがいいと、あたしは思うな」

「二度と割り下水の賭場へ出入りができなくなるからなあ」

「いいじゃないか、あそこばかりが賭場じゃあるまいし。第一、あたしは千両玄蕃って野郎があんまり虫が好かない。振られた女をだまして屋敷へつれこんでさ、子分たちのなぶり物にさせるなんて、男のすることじゃない。そんなやつに、なにもこっちだけで男を立てることはないじゃないか」

「けどなあ、あいつにたてをつくと、命があぶない。いつ消されちまうかわからないんだ」

どうやら、忠公はそれが怖いらしい。

「しっかりおしよ。かなわないものはかなわいんだから、しょうがないじゃないか。正直にそういってあやまっても、それならお前の命を取るなんて無理をいうんなら、あたしにも考えがある」

「どんな考えだ、あねご」

「それはその時になってのことさ。さあ、あたしが行ってあげるから、玄蕃のところへ行ってあやまっておしまいよ」

「そうかなあ」

「あたしのいうことがきけないのかえ、忠公」

「そう怒るなよ、行けばいいんだろう」

どうやら二人はただの仲ではないようだが、お仙のほうが気が強くて、忠公は男めかけにされているのかも知れない。かせぎもお仙のほうがあって、いつも忠公は小遣いをあてがわれている組なのだろう。

忠公は、しょうがないというように、先に立って歩き出した。後からお仙が澄ましてついていく。

二人は広小路のほうへ引きかえして、もう一度雑踏の中を通りぬけ、床屋横町のほうへ曲がった。

柳橋をわたって少し行くと、右手に『青柳』という料亭がある。忠公はその門の前まできて、また立ち止まってしまったが、すっとうしろからそばへ寄っていったお仙に、いきなりしりっぺたをつねられたらしく、

「いてえなあ。行きゃいいんだろう」

と、渋い顔をして、すごすごと玄関のほうへ入っていった。

千両玄蕃は、四天王の大東綱右衛門、小西金助、北部季之助、南川貞五郎の四人と、中盆の

犬政をつれて、さっきから『青柳』の川に面した二階座敷に陣取って、酒宴をひらいていた。ただし、忠公がその座敷へ出た時は、小西金助は使いに出てその座にはいなかった。
「そうか、失敗したか。お前には少し荷が勝ちすぎたかもしれないな」
忠公がおそるおそるそこへかしこまって、ありのままを告げると、玄蕃は案外きげんよくうなずいてそういったが、
「なんだ、忠公、お前お仙と二人でかかって、それでもしくじったのか。少しだらしがねえようだなあ」
と、頭から浴びせかけたのは犬政である。
「だらしがねえったって、かなわねえものはしようがねえだろう。そんなことというんなら、政兄い、お前かわってやってみな、浜町はまだたしかお蓮の茶屋にいるはずだぜ」
おべっか使いの犬政なんかに負けるものかという腹があるから、忠公はつい食ってかからずにはいられない。
「ふん、負け犬がこんなところで啖呵を切ってやがる。帰ったらお仙の雌にそういってくんな。お前の剃刀もこのごろは少しさびがきているんじゃねえかとな」
「なあに、少しぐらいさびても、兄貴の帯ぐらいはいつでも切ってみせるとよ」
犬政はお仙をくどいて、帯を切られ、往来中で裸にされたことがあるのだ。
綱右衛門が苦い顔をしながら、
「やめぬか。仲間げんかは見苦しい」
「忠公、負けてきて威張るやつがあるか。もういいから、さがれ」
と、忠公をたしなめた。
どっちへまわっても、負けたやつはいい顔をされるはずはない。
「御前、どうしましょうな、浜町のほうは」
忠公がすごすごと帰っていくと、綱右衛門は改めて玄蕃に聞いた。

「いや、身共にいい知恵がある。心配いたすな。そのうちに金助も帰ってまいるだろう」
玄蕃は使いに出た小西金助の帰りを心待ちにしているようだ。
「御前は、正直にいうと、神保隼人という青二才を少し買いかぶっているんじゃないでしょうかな」
四天王のうちでは一番年長で、知恵者だと自認している綱右衛門は、なんとなく苦々しげである。
神保隼人は米沢町三丁目あたりの裏長屋にごろごろしている自称蘭学書生で、色の青白い彫りの深い面立ちがひどく人目をひく上に、いつもこざっぱりとした紺がすりに小倉の袴、朱鞘の大小というのが江戸では少し野暮ったいが、ぴったりと当人の身について、濶達なうちにもどこか知的なにおいのするのが妙に女心をひくのだろう、そういう女たちが夢中になって入れ揚げてくるだけでも、始終小遣い銭にはことかかないというふしぎな男だった。
この神保が、一度千両玄蕃の賭場へ遊びにつれられてきて、柄にもなくたちまち五十両ほど負けてしまうと、
「ばくちというものは、思ったほどもうからんもんだな」
と、別に悔しそうな顔一つしないで、さばさばと帰っていった。
玄蕃がおかしな男だと思って、子分の者に後をつけさせてみると、あまり豊かな生活はしていない裏長屋の蘭学書生だとわかった。
そんな書生っぽに五十両などという大金が自由になるはずがない。どうもくさい男だと玄蕃はにらんでいた。
すると、今朝になって、子分の一人が中村座から飛んで帰ってきて、棚倉屋の娘が芝居茶屋から何者かに誘拐されて、いま大騒ぎをやっていると知らせた。
棚倉屋は米沢町二丁目で、神保の巣にしてい

る家は三丁目だ。こいつくさいなと、そこは蛇(じゃ)の道はへびで、すぐ人をやって神保の家をさぐらせてみると、果たして神保は留守で、最近神保に血道をあげている近所の女髪結いのお富が、中村座の芝居見物に出かけていることまでわかった。

しかも、お富は棚倉屋へ出入りの女髪結いなのである。

「しかし、御前、ただそれだけで神保をお千恵誘拐の下手人と見るのは、少し早計じゃありませんか。書生っぽと女髪結いでは、たとえ娘をさらっても、かくし場所に困る。いや、かくし場所へ運ぶだけでも大変だ。色仕かけということになれば、こりゃお富のほうで承知しないでしょうからな」

綱右衛門はそういって、自説をまげようとしないのだ。

「まあいい。この勝負は、金助が帰ってくればはっきりわかることだ」

玄蕃は玄蕃で、いかにも自信がありそうである。

小西金助は米沢町の裏長屋へ神保隼人を迎えに行っているのだ。

橋の上の舌戦

その金助が柳橋の青柳へ駆けもどってきたのは、やがてもう座敷へあかりが入ろうとするたそがれどきであった。

「御前、ただいまもどりました」

「どうした、金助、お前一人か」

玄蕃はちょっとまゆをひそめる。

「いや、やっと神保が帰ってきたところをつかまえましてな、いっしょにつれてきました。神保は柳橋の上で待っています」

「どうしてここへつれてまいらんのだ」

「それが、わしは書生っぽで、青柳などへ迎えられる身分じゃない。太田原さんがたって用があるというんなら、ここで話を聞くから、ここ

まで出向いてくるように伝えてもらいたいといいましてな、なんとすすめても橋の上から動かんのです」

「おかしな男だなあ。気おくれがしたのかな」

北部季之助がけいべつしたようにいう。

「いや、そうじゃあるまい。用心しているんだ。橋の上なら、いざとなれば川の中へ飛びこんで逃げることもできるからな」

綱右衛門はさすがにうがったことをいう。

「どうだ、綱、そんな用心がしたくなるのは、怪しい証拠だとは思わんかな」

玄蕃がにやりとわらってみせる。

「なるほど、それは理屈ですな」

綱右衛門もどうやら納得してきたようである。

「とにかく出かけてみよう。金助、案内してくれ」

玄蕃はゆっくりと立ち上がった。

座敷をいそぐ妓(おんな)たちが褄(つま)を取って、ちらほらと行き交う宵(よい)の色街を通りぬけると、柳橋へ出て橋手前の河岸っぷちにならぶ船宿は、もう軒並み掛け行灯(あんどん)に灯(ひ)を入れている。

神保隼人は例の紺がすり姿で橋の欄干のそばに、浅草橋のほうを向いて立っていた。気のせいか、そのきりっとした横顔は不敵とも見える。

「神保うじ、待たせたようだな」

玄蕃はすっと近づいていって、鷹揚(おうよう)に声をかけた。

「やあ、太田原さん、わしに用があるそうだが、どんな話なんだね」

神保はくるりとこっちを向いて、いきなり聞いてきた。言葉も面がまえもまるで友達づきあいで、いやしくも公儀直参三百石の旗本に対して、一介の素浪人が取れる態度ではない。

玄蕃はむっとしたが、ここで怒ってしまっては話にならないし、こっちの腹の浅いのをただ青二才にわらわれるだけだと思いなおして、

「これ、橋の上下を見張っておれ」

と、四天王にいいつける。
「はっ」
四人は二人ずつに分かれ、上下の橋たもとまでさがっていく。
二人きりになった橋の上には、十日ばかりの月があかるい。
「神保、おぬし棚倉屋の娘お千恵をどこへかくしたな」
玄蕃はずばりと切り出してみた。
「棚倉屋の娘――」
ぽかんとした神保の顔つきだ。
「うむ、今朝おぬしが情婦の女髪結いお富にいいつけて、中村座から誘拐していったお千恵だ。目的はいずれ金だろう。身共は棚倉屋から泣きこまれたんでな、しからば千両出すかと棚倉屋に掛け合い、百両だけうけ取っておいた。どうだ、その百両をそっくりそっちへわたすから、なにもいわずにお千恵を身共にわたしてくれぬか。生き物は足がつきやすい。早く見切ったほうが、おぬしのためだと思うんだがなあ」
「なんの話だか、わしには少しもわからん。棚倉屋の娘がだれかにさらわれたというのかね」
神保はまったくけろりとしている。
本当になんにも知らないのか、それとも図太く空っとぼけているのか――こいつ一筋なわではいきそうもないと見たので、
「おぬしはお富をうまくまるめこんで、いい仲になっているんだろう」
と、そっちのほうから引っかけていこうとする。
「いや、あれはわしがまるめこんだわけじゃない。体が男のほしい年増盛りだからな、女のほうから夢中になっているだけの話だ」
にやりともしないで神保はいってのける。
「どっちにしたって、情を通じていることはおなじじゃないか。そのお富が、今朝中村座へ出かけて、お千恵がいなくなるといっしょに中村座から姿を消している。――身共はおぬしにあ

しかれと思って、骨を折っているんじゃないぞ。どうだ、これでもまだ話に乗る気はないか」
「太田原さん、わしはさっきから、棚倉屋のことはなんにも知らんといっているはずだが」
「そうか。これほどいっても、おぬしはあくまで白を切ろうというのか」
「わしはあまりくどい話は好まん男だがなあ」
神保の冷たい目に、はっきりとけいべつしたものが出ている。
「大した度胸だな、おぬし。浜町の鶴七郎もすでにこの事件に手をつけて、お富をねらっているぞ」
「わしは他人のことに気をつかわんことにしている」
「お富はおぬしの情婦じゃないのか」
「体に用のある時だけはね」
「そうか、おぬしは女をおもちゃにしてよろこんでいる冷血漢なのか」
「それも、太田原さん、考え方が違う。男のおもちゃになってよろこんでいるのは、女のほうだ。わしは女の情におぼれるほどあほな男じゃないつもりだ」
勝負はまったく千両玄蕃の負けのようだ。
「よかろう。今日から千両玄蕃はおぬしの敵だと思ってくれ。お千恵は今夜を入れて三日のうちに、きっと身共がもらいうけてみせるぜ」
精一杯のすごみをきかせたつもりだったが、
「じゃ失礼、――わしには無縁の話だ」
なんだ、つまらないというように、神保は軽く会釈をすると、さっさと床屋横町のほうへ歩き出す。
「北部、貞――」
玄蕃が低い声で呼ぶ。
「なんです、御前――」
「野郎の後をつけろ。のがすなよ」
「はっ」
「おれは青柳で待っている。いいつけたぜ」
玄蕃は怒りに全身の血をたぎらせながら、

「綱、金助、こい」
と、青柳のほうへ引きかえし出す。
　今まで往来をせかれていた人たちが、急に柳橋をわたり出す。
　あたかもそこにしゃがんででもいたように、ひょいと橋の北たもとから立ち上がった男が、足早に床屋横町のほうへ、人々を追いぬいていった。烏松である。
　実は、橋たもとにしゃがんでいたのではなく、橋桁にはりついて、神保と玄蕃の立ち話をすっかり聞いていたのだ。
　——玄蕃は青柳とわかっている。まず神保のほうをつけてみよう。
　口はきいたことはないが、烏松の住んでいる長屋とは背中合わせになっているので、松は二人のうわさは時々耳にしている。
　——神保って書生っぽは、そんなにすごいやつなのかな。
　玄蕃が口にしたように、お富が今朝中村座へ行っていたとすれば、神保はたしかに怪しいことになる。
　が、橋の上での今の掛け合いぶりから見ても、どうもあの神保がそんなすごいまねをやる男とは思えない。
　——しかし、人は見かけによらぬものってこともあるからな。
　いそいで広小路へ出てみたが、一足おくれているので、神保の姿も、神保を追った北部と貞五郎の姿も、もうどこへ行ったかわからなかった。
　——待てよ。
　神保はよく米沢町の横町にあるなわのれん魚十へのみに行く。
　神保という男が本当にすごいやつなら、玄蕃の尾行がつくぐらいはもうちゃんと見ぬいているはずだ。そんなものを引っぱってどこへも行くはずはない。何食わぬ顔をして魚十で一杯やりながら様子を見る。まずその辺のところだろうと、烏松はすぐに見当をつけた。

　手ぬぐいをぬすっとかむりにして顔をかくし、ぶらりと魚十の横町へ入っていくと、案の定、そこの路地口に二手にわかれて、北部と貞五郎が立っているようだ。
　——やれやれ、いつもこうちょぼ一がうまく当たってくれると、損はしねえんだがなあ。
　烏松は何食わぬ顔をして、魚十のなわのれんをくぐり、油障子をあけて店へ入っていった。
　ちょうど時分どきだから、魚十はひどく立て込んでいて、ちょいとあいた樽がなさそうだ。
　——どこへ割りこむかな。
　と見ているうちに、二人づれの客が立ち上がった。しかも、その隣に神保が腰をおろして、ちょうしのくるのをぼんやり待っている。
　——しめた。
　烏松はぬすっとかむりを取って、すっと神保の隣へ行って座りこむ。
「お待ち遠さま」
　小女が神保のちょうしとつまみ物を運んできて、台の上へおいた。
「ねえさん、酢だこで一本たのむよ」
　烏松は小女に注文を通して、さあこれからが一勝負だと思った。
　隣の神保はもうむっつりと手酌ではじめている。年増なら、ふるいつきたくなりそうな、まったくいい男ぶりである。

お蓮の家

　神保はゆっくりと一本のちょうしをたのしんでいるようだったが、やがてその酒も残りすくなになったと思うころ、
「おじき——」
　ふっと桜色になった顔を烏松のほうへ向けて、声をかけてきた。
「今晩は、だんな」
　どきりとしながらも、そんな顔色は少しも見せずに、烏松はぺこりと一つおじぎをする。
「おじきとは時々あう顔だな」

「へえ、だんなとはおなじ町内ですからね」
「岡っ引きか、おじきは」
「御冗談で——そんな人の悪いんじゃありやせん」
「どうだかなあ、——人には各自それぞれの生き方があるもんだ。あんまり岡っ引きみたいに他人のお節介はせぬもんだぞ」
「あっしはなにも他人のお節介なんて——」
「まあいい。それが本当なら、ここでゆっくりと飲んでいることだ」
冷たい目でにやりとしながら、神保はすっと立ち上がった。ちゃんと膳の上に自分の飲んだだけの勘定がおいてある。
——畜生、気がついていやあがる。
烏松はなにかぞっとしながらも、そんな風にこっちを気にするようなら、もう棚倉屋のお千恵をさらっていった下手人の一味に違いない、野郎逃がしてたまるもんかと、急に敵愾心が起こってきて、自分もいそいで勘定を膳の上へおいた。
神保はいま油障子をあけて、表へ出ていったところである。
が、いきなり飛び出していくようなまねをすれば、あれだけのことをたくらむ男のことだから、この客たちの中にも一味の者が入れてあるかもしれない。それと目立ってはじゃまをされると気がついたので、
「ねえさん、勘定はここへおいたよ」
と、わざと声をかけておいて、ゆっくりと立ち上がった。
客のあいだを通って土間をぬける、油障子をあけて外へ出た。
——右か、左か。
鋭く勘を働かせながら、両国広小路のほうへ出る道を見ると、その角あたりが妙に人でごたごたしているようだ。
——あれだ。
神保はすでに千両玄蕃の四天王北部と貞五郎

につけられているのだから、あそこでなにかあったのだと、烏松は手早く手ぬぐいをぬすっとかむりにして、そっちへいそいでみた。
案の定、そこの角に一人、広小路へ出て両国橋のほうへ二、三間歩いたところに一人、長々とぶっ倒れて気を失っているやつを、野次馬がこわごわと見ているのだ。
風体から見てたしかに北部と貞五郎に違いないのだが、それにしては、二人とも刀を抜いていないようだ。
「どうしたんです。てんかんですか」
たぶん魚十あたりへ飲みに行くくらしい二人づれの職人に、今かぶったばかりの手ぬぐいを取りながら空っとぼけて聞いてみると、
「二人そろっててんかんはないやね。すごいのなんのって、なあ、定」
「ありゃたしかに当て身ってやつだな。相手も侍でね、——侍が一人この角を出て両国橋のほうへ曲がった。その後からあそこに倒れている侍が出てきて、またそっちへ曲がった。そこへ軒下からひょいと別の侍が出てきたかと思うと、あっ、ばたり、それっきりなんだ。当て身をくれた侍は、澄まして両国橋のほうへ歩いていく。おいはぎかなと思って、びっくりして見ていると、また一人そこに倒れている侍が、いそぎ足で角から出てきた。そこの軒下から別の侍がすっと出てきて、えいっ、ばたり、その侍もさっさと両国橋のほうへ行ってしまやがった」
「別に紙入れをぬいていったって風もなかったな、定」
「どうもわからねえ。けんかってわけでもなさそうだし」
「おかしな話ですねえ」
それだけ聞けばもうたくさんなので、烏松はそんな相づちをうちながら、ふらりと両国橋のほうへ歩き出す。
水茶屋横町の角までいそいでみたが、むろん神保の姿も、神保の一味らしい二人の当て身侍

の姿も、もうどこへ行ったか見あたらなかった。
——こうなっちゃ、おれ一人の手にゃおえねえ。
　とにかく、一応鶴七郎に今までのことを耳に入れて、指図をあおぐにかぎると思い、烏松はその足で、薬研堀のお蓮の家へいそいだ。
　おなじ長屋でも、お蓮の家のほうの側は三尺の玄関がついて、格子がはまっている。部屋も一間きりではあるが、四畳半で、押し入れと台所がついていた。
　烏松が、がらりと格子をあけると、
「清さんなの」
と、いきなり腰をうかしたようなお蓮の声が聞いてきた。
「気の毒だったなあ、あねご」
　わらいながら障子をあけて顔を出すと、差し向かいの長火ばちの前には、棚倉屋の小僧姿の芳公が行儀よく座っていた。
「あら、おじさんだったのか」
　お蓮は本当にがっかりしたような顔だ。
「こいつはごあいさつだ。すると、清の字はずっと殿さまのお供かね」
「ええ、殿さまはお屋敷へ帰るんだからお供にはおよばぬと、気を利かしてくだすったんですけれど、そうはいきませんと、あの人義理がたすぎて、いやになっちまう」
「ああ、そうか。昼間水茶屋横町で殿さまの命をねらった女と男があるんだ」
「そうなんですってね」
「聞いたか、女は剃刀お仙、男のほうは忠公というんだ。忠公のほうが千両玄蕃に、殿さまを眠らせろといいつかったらしいな」
「二人ともおれは知ってるぜ、おじさん」
　芳公がそばから口を出す。
「うむ、もとのぴよちゃんのお仲間らしいな」
「職にかけちゃお仙のほうが一枚上なんで、忠公は亭主になれないのさ」
「そうだろう。口のきき方も、お仙のほうが威

張っていた。とにかく、二人がかりだったんで、おれも冷やりとしたが、清の字は真っ青になっていた」
「あたしそのことで、すんでのこと離縁になるところだったんです」
「離縁——」
「殿さまが二間ほど離れて歩けっておいいつけになったんなら、しょうがないじゃありませんかって、つい口が滑っちまったんです。なにっと、あの人顔色を変えて——」
「そいつは、あねご、ちょいとまずかったな。清さんはいつでも殿さまの身がわりになって死ぬ覚悟でいるんだ。——で、もう仲直りはしたのかね」
「あいにく、ずっと殿さまの前だったもんだから、あの人もうなんでもないとはいってくれたんだけど、口のきき方が変に冷たいんです。あたし、それが心配で」
「なるほど、それで清の字の来るのを待ちかねているってわけか」
「それに、六ツすぎごろここへくるから、みんなを待たせておけって、殿さまのお言葉もあるんです」
「じゃ、もうおいでになるだろうよ。——そういえば、ぴよ公うじのほうはどうだったんだね」
　思い出したように烏松は芳公に聞く。
「今もお蓮ねえさんに話していたんだけど、殿さまはやっぱり頭がいいや。ちゃんとお蔵に火がついたんだから、おれもびっくりしちまったんだ」
「髪結いのお富だろう、ぴよちゃん」
「なあんだ、おじさんももう知っているのか」
　芳公はちょいとがっかりしたようである。
「それで、どうなんだ。お富は朝出たっきりで、一度もうちへは帰ってこないようかね」
「さっきまではまだ雨戸がしまっていたが、もう一度見てこようか」
「いや、たぶんまだ帰っちゃいまい。あねごは

お富の近所にいる神保隼人って書生っぽを知らないか」

「知ってるわ。お富さんが夢中になって貢いでいる人でしょう」

「む。その神保が、どうやらこんどの事件の張本人らしいんだ」

「なんですって、おじさん。それ、本当」

お蓮は目をみはりながらも、ちょいと信じられないようである。

「実はおれも驚いてるんだが、蛇の道はへびで、こじき玄蕃も神保に目をつけたんだな。さっき柳橋の橋の上へ呼び出して、千両積むから千恵をおれに渡してくれと掛け合いやがったんだ」

「へえ、それでどうしました」

「神保のやつは、なんの話だかわしにはわからんと、とうとう突っぱりぬいてしまやがった。まるで、こじき玄蕃を三下あつかいなんだ。玄蕃のつけた値は千両、神保が棚倉屋へ吹っかけているのは一万両だからな。こいつは玄蕃のまる負けということになる」

「驚いたなあ。おじさんはもうそんなことまで聞き出しているんか。やっぱり、殿さまの御用人さま格だけあらあ」

芳公はすっかり感心してしまったようである。

「ところがなあ、ぴよ公うじ、その御用人さまが神保にはまんまと一杯食わされているんだから、正直な話、あんまり威張れた義理じゃないのさ」

「本当か、おじさん」

「おっと待った。殿さまがおいでになったようだぜ」

烏松がひょいと路地のほうへ聞き耳をたてる。

果たして、間もなくお蓮と芳公の耳にも、静かにどぶ板を踏んでくる草履の足音がきこえてきた。たしかに二人らしい。

足音は家の前でとまって、がらりと格子のあく音がした。

「清さんなの」

人前もなくお蓮がはっと中腰になって、そっちへ呼ぶ。

障子があいて顔を出したのは、いつもの姿の鶴七郎だった。

「あら、殿さま」

「清太郎もいっしょだから、安心しなさい」

鶴七郎はわらいながら答えて、

「烏もぴよもまいっていたか」

と、ゆっくり上がってくる。

「殿さま、どうぞこちらへ」

お蓮は長火ばちの前をいそいで立って、座布団を裏がえしにした。そこがこの座敷では一番上席になるからでもあるが、お蓮のねらいはほかにあったようだ。

清太郎があがってきて、障子ぎわへ座ると、さっさとその隣へ行って座って、

「御飯すんだの、清さん」

と、顔をのぞきこんでいる。

烏松があきれて、

「ぴよ公うじ、腹がすいても我慢しろ、あねごはどうせ清さんしか飯は出してくれねえつもりなんだからな」

と、わざと芳公にいってきかせる。

「いいえ、清さんがすんだ残りのおこげでよかったら、おじさんにもさしあげます」

お蓮は負けずに、澄まして答えていた。

その夜の手はず

「烏もぴよも、今日は御苦労だったな」

座がきまると、鶴七郎は改めて二人をねぎらうことを忘れなかった。

「殿さま、おれより烏のおじさんは大手柄があるんですぜ」

芳公は黙っていられないように、さっそく吹聴する。

「そうか。烏、聞かせてくれ」

鶴七郎はまじめにそっちへ向き直る。
「お恥ずかしゅうござんす。結局はどじを踏んじまったんですから、手柄にもなんにもなりゃしません」
烏松はそんな言い訳をしながら、自分の探ってきたことをくわしく鶴七郎の耳に入れた。
「なるほど、神保隼人という男は怪しいな」
聞き終わった鶴七郎は、ぽつりといって、しばらく考えている風である。
――そうら、殿さまのいい頭が働き出したぞ。どんなすばらしい知恵が出るだろうな。
芳公はかたずをのみながら、鶴七郎の彫りの深い顔を見つめていた。
さすがに、しばらくはだれも口をきかない。
「烏、神保はお千恵をどこへ監禁しているんだろう」
ふっと鶴七郎が聞いた。
「そうでござんすねえ、橋場の近くのどこかの寮、そんな見当はどんなもんでござんしょうね」
今夜九ツ、金舟は橋場の渡しまで出向くことになっているのだ。どうもその辺がくさいと烏松は思う。
「すると、神保は一万両をうけ取る時、その寮からお千恵を舟で運んでくることになるな」
「順当に行けばそういうことになりやす」
「受け取った一万両は、どう始末するね」
「なるほど、こいつが一番急所だ」
川の上で受け取った一万両は、舟で運ばなければならない。こっちの金舟にはちゃんとひもがついていると、神保のほうでも覚悟しているだろうから、そのひもをまいて無事に一万両を運ぶ手段、神保はちゃんとそれを考えているはずなのだ。
「烏なら、受け取った一万両を、どううまく運んで、どこへかくすな」
「あっしはね、だんな、かくしてあるやつをほじくるほうなんで、運んだり、かくしたりするほうは、あんまり得意じゃないんでさ。なにし

ろ、一万両といや千両箱で十だ。そんな大金は、これまで一度も扱ったことがねえんです」
烏松は正直にいってかぶとをぬがざるをえない。
「一万両となると、おれも考えてみたこともねえ大金だなあ」
芳公も思わずため息をついている。
「そこをもう少し考えてみろ。棚倉屋のような大町人なら知らぬこと、浪人者が一万両などという大金をねらって、一体なんに使おうというのか。この時勢に、まさか慶安の由比正雪でもあるまい」
「なるほど、一万両なんて大金は、普通じゃちょいと使い道がありやせんね」
烏松はいよいよわけがわからなくなってくる。
「もう一つ、別のほうから考えてみよう。お千恵は中村座からお富につれ出されて、近くの土産物屋の家へ一度つれこまれ、そこで一味の者に荷造りにされたか、あるいは姿をかえられたかして、舟へ運びこまれたのだ。運ぶのにやっかいな荷物だから、そう方々引っぱりまわすわけにはいくまい。そのまま舟において、お富にきげんをとらせておいたほうが、どうせ今夜九ツまでのことだから、一番安全ということになる」
「ちげえねえ。舟にきまりやした、殿さま」
ぽんと烏松がひざを打つ。
――やっぱり頭が違わあ、殿さまは。
芳公はまたしてもため息が出てくる。
「順当に行けば、神保は橋場の渡しで金舟をうけ取る時、お千恵と引きかえにするはずだが、おそらくそうはしないだろう。まず金舟を改めて、正金（しょうきん）がつんであることをたしかめ、それから金舟をお千恵の舟が待っているところまでつれていく。そして、こっちの者をお千恵の舟に移して、その舟といっしょに大川の川口までこぎ下るのだ。そこまで行けば、金舟はひもがつ

いているかいないか、十分に見とどけることができるから、大丈夫と見ればそこからお千恵の舟はかえして、神保たちは親舟の待っている品川沖へ出ていくのだ」

「へえ。すると、神保は海賊なんですかい」

「いや、これから海賊になって、一味といっしょに海外へ無人島でもさがしに行く気なんだろう。蘭学書生の考えそうなことだからな」

「考えることが憎いほど大きいねえ。なるほど、一万両ほしいわけだ」

「殿さま、お富さんはどうなるんです。神保といっしょに行く気なんでしょうか」

さすがにお蓮は女らしい心配をする。

「当人はいっしょに行く気かも知れないが、そういう舟に女はじゃまだ。災いの種になる。置いていかれるか、へたをすれば切られるか――」

「まあ、かわいそうに。あたしはそういう手前勝手だから男なんかきらいなんです」

「でも、清太郎さんだけは別口なんだろう、お蓮ねえさん」

からかうというのではなく、芳公がまじめにお蓮のほうを見た。心配しているのである。

「そりゃ、この人は別だけど――」

お蓮もうっかり本音が出て、

「よしな、ぴよちゃん。当てられるだけ損だぜ」

と鳥松に冷やかされると思わず首をすくめている。

「おじさん、おれは少しぐらい当てられても、お蓮ねえさんがしあわせになったほうがいいんだ。おれの姉さんは、あんまりみじめだったからなあ」

「まあ、芳っちゃんたら――」

お蓮の顔が急に泣きべそをかいて、鳥松も清太郎も一瞬しいんとなってしまった。

「ぴよ、姉のうらみは鶴がきっと晴らしてつかわすぞ」

いたわるような鶴七郎のまなざしだった。

「たのんます、殿さま。そのかわり、おれ、今夜はきっと働きます」

「うむ、ぴよには今夜は大役があるのだ」

「すげえなあ。勇み立っちまうなあ」

芳公のほおにみるみる血の気がさしてくる。

「ちげえねえ。それで、だんな、今夜のこっちの手はずはどういうことになりやすんで」

鳥松も思わずひざをのり出していた。

「今夜はな、四ツ（十時）を合図に棚倉屋から千両箱を十個荷車に積んで、元柳橋の桟橋から舟へつみこむ」

「本物をつむんですかい、殿さま」

「うむ、本物のほうがよい。棚倉屋はすでに、こじき玄蕃の組と、神保の組の者の目が光っているはずだ。どっちも千両箱がたしかに本物だとわかると、それぞれにいそいで手を打ちはじめるだろう。それからが三つどもえの勝負になるんだが、神保組はさっき申したような手を打つとして、こじき玄蕃はどう出てくると思うか」

「そのことだ。玄蕃もあれだけ書生っぽ神保になめられたからにゃ、ただ引っこんでいられやせんからね」

「うむ、一万両とわかると、こじきはいっそう血眼になるだろう」

「大川から橋場までは、陸つづきでも金舟の後がつけられやす」

「後手にはまわるが、まずそれだろう。こじき組は千両箱はいずれ陸あげされるものと見るだろうからな」

「すると、お嬢さんを監禁した舟と出会うあたりで一戦ということになりやせんか」

「と、神保組のほうでもちゃんと計算に入れているだろう」

「こいつはまるっきりこじき組に勝ち味がありやせん」

「しかし、人数はどうせ烏合の衆にしても、こじき組のほうははるかに多いと見なければなるまい」

「そういやそうでござんしょうね」

「もう一つ考えに入れておかなくてはならんのは、金舟には杉右衛門とぴよが乗っていくことだ。どっちにけががあってもならん」

「そいやあ、殿さまは陸でござんすか、それとも舟になさいやすか」

「まず、舟にしようと思う」

「月夜でござんすからね、舟だとあんまり近寄れやせんぜ」

「いや、こっちはなにも金舟の後をつけるには及ぶまい。行く先はわかっているのだ」

「一本まいりました。そうでござんしたね」

「お千恵をのせた舟は、たぶん両国橋と吾妻橋の間、その辺で神保の合図を待つことになるはずだ。わしと烏とで、一足先にそれを洗ってみることにしよう」

「こいつはすばらしいや。あっしは捜し屋でござんすからね、だんな」

「清太郎は、元柳橋で金を舟につむのをひそかに見張っていて、金舟が大川へ出たら、あたりの動きを見きわめて、陸を蔵前の首尾の松まで走ってくれ。そこにわしの舟が待っていることにする」

「かしこまりました」

「さあ、これで手はずはついた。ぴよはこれからわしと棚倉屋へ行く。烏は舟の支度をして、五ツ半（九時）すぎに柳橋で待っていてくれ。舟は猪牙がいいだろう」

「ちょいとうかがいやすがね。殿さま」

烏松が変な顔をしながらいう。

「どうした、烏」

「こっちの人数は、殿さまと、あっしと、清さんと、ぴよ公うじを入れてもたった四人でござんしょう」

「うむ」

「そりゃうまくいけばお嬢さんぐらいは助け出せないこともありやせんが、敵は大勢、しかも二組だ。一万両のほうまで手がまわりやすか、まさか、金はほしいやつにくれてやれってわけ

にもいかねえ大金ですからね」

「心配いたすな。舟はひとりでほっておいても、沈まないかぎり、川に浮いているものだ。後からゆっくり拾いに行けばよい」

鶴七郎はわらっている。

「さあ、わからねえ。後から拾いに行くったって、その前に人に拾われちまったらどうしやす」

「まずその心配はないから、わしに任せておきなさい」

「そうでござんすか」

烏松はなんともふに落ちないようだ。

「そこで清太郎だが、お前は四ツ（十時）まで別に用のない体だ。お蓮に飯でもよばれて、ゆっくりここで休んでいるがよいぞ。――ぴよ、まいろうかな」

鶴七郎はすっと立ち上がる。

「はい、お供いたしやす」

「あ、殿さま、清太郎もせめて棚倉屋の前まで」

「いいよ、清さん。その陰供は、どうせおれの体があいているんだから、烏にまかせておきなせえ。かわいそうに、あねごがべそをかいているじゃないか」

「清太郎、遠慮いたすな」

鶴七郎はもう玄関へおりていく。

「ぴよ、早く露払いをつとめるんだ」

烏松がそばから注意する。

「心得たよ、おじさん。――清太郎さん、本当に遠慮はいらねえぜ。殿さまのお許しなんだもんな」

芳公はそういいのこして、いそいで草履を突っかけると、もう路地へ出ている鶴七郎の後を風のように追っていった。

玄蕃組の追跡

その夜、米沢町の棚倉屋からむしろづつみにした千両箱らしい重そうな箱を、一台の荷車に五個ずつ積んで二台、人足が数人がかりで引き出したのは、回向院の鐘がちょうど四ツ（十時）

を打ち出した時だった。
宵から棚倉屋を見張っていた千両玄蕃の子分の一人が、すぐに柳橋の青柳へ走る。
第二の注進は、その二台の荷車は間もなく元柳橋のたもとへ着き、千両箱十個はそこの桟橋へつないであった荷足へ移され、大川へ出て舳を上へ向けたというのだ。
「その舟の人数は——」
玄蕃がいそがしくささやいた。
「棚倉屋のちょうちんを持った小僧が一人、風よけ頭巾をかぶった番頭が一人、二人きりでござんす」
「よし、舟へ移ろう」
そんなこともあろうかと、玄蕃は青柳の裏の桟橋に舟を三隻用意しておいたのだ。
一隻に五人ずつ乗って十五人、船頭二人も子分のうちから選んであるから、味方は総勢二十一人ということになる。
神保がこっちの尾行北部季之助と南川貞五郎の二人を両国広小路で倒した手口から見ると、敵にも相当の仲間がいると見なければならないが、精々多くても十四、五人、二十人は越えないだろうという玄蕃の見こみだった。それに、相手はたかがくちばしの黄色い書生っぽ浪人、こっちはいざとなれば、一人一人が腕も度胸も人なみ以上に悪党ずれのしている一流の剣客ぞろいなのだ。
——こんどこそ痛い目にあわせて、ひとあわ吹かせてやる。
柳橋の上での小生意気な神保の応対が、なんとしても腹にすえかねる玄蕃でもあった。
「御前、棚倉屋の今夜の金舟というのは、むろん娘お千恵の身の代金でしょうな」
綱右衛門がそっと玄蕃にささやいた。
「たぶんそうだろう。それでなければ、そんな大金を運ぶ舟に、番頭一人ということはない」
「つまり、そうしろという神保からの脅迫状が行っていたことになりますな」

「うむ」
「敵もさる者、その金舟にはちゃんと見張りがついていやしませんか」
「それはついているだろう」
「今夜は月があかるいから、川の上ではこっちも見えないように金舟をつけるということは困難ですぞ」
「そんなことはかまわぬ。こっちが怖くて神保が出てこられないようなら、こっちは金舟だけをもらって引きあげればいい」
「なるほど——」
「しかし、できれば金舟といっしょに娘も手に入れたい。一応、金舟の行くところまで、なるべくうまくつけて見ることにしよう」
「そうですなあ」
「身共の見こみでは、おそらく神保も今夜は後へはひくまい。必ず死に物狂いで打って出る。こっちもその覚悟でいるように、一同によく申し渡しておいてくれ」
「かしこまりました。しかし、書生っぽ浪人のくせに、一万両とは、思い切って大きく出たもんですなあ」
綱右衛門はいまさらのように感心しながら、さっき柳橋の上で、親分玄蕃は、百両やるから娘をかえせと神保に掛け合っていた。あれはたしかに親分の負けだったと苦笑せざるをえない。
川面には多少もやがただよっているようだが、月があかるかった。
粋客を乗せた屋根船も、もうほとんど引きあげた時刻だから、このあたり川幅も広々として、右手に九十六間の両国橋が黒い帆のように夜空へ高くそびえて見える。
その橋の下をくぐりぬけて、やがて舟が一隻ゆっくりとこっちへこぎのぼってきた。舳に近いほうの胴の間にちょうちんが一つ、積み荷の具合いから見てもたしかに棚倉屋の金舟らし

い。
「それ、行け」
青柳の桟橋に待機していた三隻の舟は、玄蕃の舟を先頭にして、なるべく西河岸づたいに金舟を追い出した。
知るや知らずや、金舟は川の真ん中あたりを普通の舟脚でこぎのぼっていく。その金舟の行きついた先に、たぶん敵が棚倉屋のお千恵をつれて待っているはずだと思うと、さすがに玄蕃も体中が緊張してくる。
「御前、こっちのほかにつけている舟は、見あたらないようですな」
綱右衛門が、あたりを目でさがすようにしながらいう。
「神保のほうから絶対に他言無用の申し入れがある。娘の命にはかえられないから、棚倉屋もいうなりになっているのだろう」
「それにしても、浜町の鶴が黙って見のがしているとは考えられませんがねえ」
「いや、いくら下情に通じているようでも、ああいう育ちの者は、いざとなるとどこか抜けたところがあるんだろう」
陸から見張っているという手がないでもないが、今夜は舟戦になるのだから、陸からでは間にあわない。あわてて舟を仕立ててこぎ出すころには、こっちはもう一仕事すませてどんな手でも打てると、玄蕃はたかをくっていた。
つまり、今夜の玄蕃は、浜町の鶴七郎を用心するより、目の前の一万両という金舟にすっかり気を奪われていたのだ。
金舟には、大番頭杉右衛門と、小僧一人が乗っていた。小僧は、いうまでもなく、鶴七郎から一策をさずけられてきたぴょぴょ小僧の芳公である。
「大番頭さん、やっぱり舟が三隻後をつけ出しましたよ。青柳の裏あたりだから、こじき玄蕃の組ですね」
ちょうちんを持って座っている芳公は、じっとこっちを見ながらいう。
「芳どん、気がつかないふりをしているがいい」
「はい、でもねえ、大番頭さん、あんなまねをすれば、神保のほうの見張りが、もう神保のところへ知らせに飛んでいると思うんです。玄蕃のやつはそれに気がつかないんですかねえ」
「さあな。それほどうかつな玄蕃でもなかろうが、今夜は正面から一戦する気でいるのかもしれないね」
「あんな悪党たち、どっちが勝ったって負けたって、おれの知ったことじゃないが、いまに見てやがれってんだ」
芳公はつい地金が出て、ぺろりと赤い舌を出してみせる。今夜は両方を戦わせておいて、浜町の殿さまがすばらしい計略を立てているんだと思うと、うれしくてたまらない芳公である。
金舟は蔵前の米蔵を左に見て、やがて厩の渡しから駒形へかかり、吾妻橋が墨絵のように近づいてくる。
大番頭の杉右衛門は、さすがに芳公のように安心はしていられなかった。主家の一大事だから腹はすえているが、
――果たして浜町さまの考えどおり、うまくいくものだろうか。
と、親子ほど年が違うだけに、若い鶴七郎を頭から信用もしかねるのである。
といって、一度鶴七郎の手立てを納得して、こうして金舟に乗って出てきた上は、命にかけて自分の持ち役は果たさなくてはならない。それは覚悟の上だが、その手立てというのが、一つ間違えば、自分の命はともかくとして、主家の娘お千恵の生死にかかわってくる危ない命の綱渡りなのだから、不安になり出すときりがなかった。
「大番頭さん、やってきたようですよ」
芳公が声を殺してそう告げたのは、吾妻橋の下をくぐりぬけて、舟がいつか今戸の沖へかかってきた時だった。右手には葉桜の向島堤が黒

黒とつづいている。

見ると、なるほど、橋場の渡しのほうから、猪牙らしい小舟が一隻ぐんぐんとこっちへこぎよせてくるところだ。

乗っているのは二人で、黒覆面黒装束に身をかためているからには、むろん脅迫状の主に違いあるまい。

それにしても、この時はもう玄蕃組の三隻は大っぴらに横列を敷いてこっちを追ってくるのだ。小舟一隻にたった二人きりで金を受け取りにくることは、少し大胆すぎるようである。

と見ているうちに、黒覆面の一人がすっと舳に立ってこっちへ手を振りながら、小舟の船頭はすばらしい腕っこきらしく、たちまちすっと滑るように舷をよせてきた。

「おい、棚倉屋の舟だな」

「はい、手前は大番頭の杉右衛門でございます」

「一万両積んできたか」

「いいえ、これは偽金でございます」

「なにッ」

「ごらんのとおり、本所割り下水の千両玄蕃が後をつけております。たぶんこんなこともあろうかと、本物の金舟は別のところへつけてあります。そこへ御案内いたしますから、手前どもをそっちの舟へ人質におとりください」

杉右衛門はもうすっかり落ち着いていた。

黒覆面は、よく光る目で、じいっと杉右衛門を見すえていたが、

「よし、わかった。ともかくも、こっちの舟へ移れ」

と、自分でこっちの舷へ手をかけて、ぐいと引きよせてくれる。

「あぶないから、気をつけろよ」

「はい」

杉右衛門は、芳公を先に、自分は後から小舟に移り、

「船頭さん、あぶないようだったら、かまわず川へ飛びこんでしまうがいいよ」

と、金舟の船頭に注意しておく。

小舟はもうすっと金舟を離れていた。

水いくさ

「おうい、その舟待てえ」

玄蕃組の舟三隻は、すでに七、八間のところへ迫ってぐんぐんこっちを追ってくる。

「船頭、舟を橋場河岸へむけろ」

黒覆面の首領が舳に立ったまま命じた。

「へえ」

「杉右衛門も小僧もじっとしていろよ」

「はい」

舳が急に橋場河岸のほうへむいたので、こっちの胴の間から追ってくる敵の舟がよく見えるようになった。

敵の一隻はいま金舟へ舷をつけたところで、こっちを追っている二隻はあわてて舳をこっちへ向けようとしているところだ。

「撃て」

驚いたことには、こっちの供の黒覆面は最新式らしいオランダ銃を持っていて、首領の命令と同時に、

だあん。

ねらい撃ちに銃口から火を吹いて、

「わあッ」

敵の一隻のほうの船頭が悲鳴をあげながら、どぶんと川の中へ水しぶきをあげていた。

「それッ、鉄砲だ。気をつけろ」

「伏せろ、みんな伏せるんだ」

敵の二隻は狼狽しながら、みんな頭を伏せてしまう。

「杉右衛門、この舟は上か下か、どっちへ行けばいいんだ」

「下でございます」

「よし、船頭、下だ」

「へえ」

こっちの舟は、まごまごしている敵の舟の前七、八間のところで舳を川下へむけ、ぐんぐん

吾妻橋のほうへこぎ出す。
「それ、逃がすな」
「鉄砲は一発だ。追え追え」
　敵の二隻もいそいで舳をこっちへむけてくる。
　やや川下で金舟にかかっていた一隻も、この時、舳を立てなおして、これは斜め前からこっちの進路を断ちきってくることになる。
　――ちょうどぶつかりそうだな。
　杉右衛門が息をのんで見ていると、だあん。
　その敵の舟のうしろのほうから、銃声一発とどろいて、
「わあッ」
　どぶんと、これも船頭がやられたらしく、その舟はぐらぐらと舳をあらぬ方へむけてしまう。
だあん。だあん。
　銃声はまた追ってくる二隻の後方からもおこって、むろん船頭をねらっているらしく、みるみるこっちの舟との距離がひらきはじめる。
　――これは恐ろしい連中だ。
　杉右衛門は身がすくんでくる思いだった。
　この連中は水軍になれている一団らしく、見ると、おなじような小舟におなじ黒覆面黒装束の武士が二人ずつ乗りこんで四隻、いずれもオランダ銃を手にして、玄蕃組の三隻を取りかこみ、まず敵の船頭からねらい撃ちにしているのだ。
　さすがの玄蕃組も、今はみんな舟底に伏せたまま、まったく手も足も出ないようだ。
　――こんな調子でやられたんでは、いくら浜町さまでもどうしようもあるまい。
　杉右衛門はただそれが心配だった。
「杉右衛門、金舟はどこへつけてあるんだ」
　吾妻橋の下へかかろうとして、玄蕃組のほうはもう大丈夫と見たのだろう、首領は舳へ腰をおろしながら、ゆっくりとささやいた。
「はい、この近くでございますが、お千恵さま

はどこへまいっているのでございましょうか」
「娘か――」
　首領はじろりと杉右衛門を見なおすようにして、
「娘は金舟と引きかえにわたしてやる。無事でいるから安心しろ」
　と、冷たくいい切る。
「こんなことを申し上げて、御立腹では困りますが、手前は主人の使いでございます。お嬢さんの無事なお顔を見ないうちに、金舟をわたしたといわれましては、番頭の分が立ちかねます。いかがでございましょう。まずこの舟へお嬢さんを呼んで、一目会わせていただくわけにはまいりませんでしょうか」
　ともかくも、そうするようにという鶴七郎のいいつけなのだから、杉右衛門も今は必死だった。
「ならんといったら、どうする」
「やむをえません。小僧の儀はおゆるしを願いまして、手前を御成敗願います」
　首領はすぐには返事をしなかった。鋭い目をじっと杉右衛門にむけている。
　何かたくらみがあるのではないか。いや、たしかにそうに違いないと見ぬいているような目だ。
　しかし、娘をこの舟へのせるということからおこる味方の不利は、何もないはずだ。むしろ、金舟のほうに役人のひもがついていればいるのだが、それは鉄砲で防ぐことができると、計算がついたらしい。
「よし、娘はこの舟へ呼んでやるが、金舟はどの辺へきているのだ」
「はい、蔵前のあたりまで出むいているはずでございます」
「そうか。ことわるまでもないが、妙な小細工をすると、娘もお前も命がない。わかっているな」
「よくわかっております」

「小僧、お前のそのちょうちんをちょっと貸してくれ」
「はッ」
舟はちょうど蔵前の一番蔵から一番堀(いちばんぼり)のあたりへかかろうとしている。
首領はよっぽど決断のいい男らしく、芳公の手からちょうちんを受け取ると、
「櫓(ろ)をゆるめろ」
船頭にいいつけておいて立ちあがり、後から四隻の小舟が舳をならべてくるほうへ、ちょうちんを振って何かあいずを送った。
四隻のうち、いちばん蔵前河岸に近いほうにいた小舟が、急に舳を河岸のほうへ向ける。
そこの桟橋には、幾隻となく米舟がとまりについている。
――なるほど、浜町さまのお見こみどおりだ。お嬢さんは、あの舟のどれかに監禁されているのだろう。
杉右衛門がひそかに目をみはっていると、案の定、その小舟は、三番目の米舟のかげへ入っていく。ほかの二隻はそれをまもるように少し離れたところへ舟を進め、残る一隻は首領の舟をまもる位置へきている。
四隻の供舟が、首領のちょうちんのあいず一つで、まるで手足のように動くのだ。しかも、みんな鉄砲を持っているのである。
――浜町さまは敵の鉄砲に気がついていなさるだろうか。
杉右衛門は気が気ではない。
間もなく米舟のかげから出てきた小舟は、ぐんぐんこっちへこぎ出したようだ。
たしかにお千恵をのせているようである。
「ああ、お嬢さま」
杉右衛門は思わずつぶやかずにはいられなかった。
お千恵はおびえきっているようにがっくりとうなだれたまま、どこを見ようともしない。
そのわりに髪も乱れてはいないし、衣紋(えもん)もきちんとしているのは、大切にあつかわれてもいたし、当人もまたおとなしくいうなりになっていたのだろう。
お千恵の小舟は、やがてみるみるこっちの舷(ふなばた)へ横づけになってきた。
「お嬢さん――」
杉右衛門の声に、はっと青い顔をあげたお千恵は、
「ああ、大番頭さん」
よっぽどうれしかったらしく、いきなり両手をのばして、こっちへすがりついてこようとする。
「あぶない。落ち着いてこっちの舟へ移りなさい」
首領がきびしい声で注意した。
「はい」
お千恵はふらふらと立ち上がって、杉右衛門が手を取ってやると、それにつかまってこっちへ移り、子供のように胸へしがみついてきた。
「助けて、大番頭さん」
「もう大丈夫ですから、御安心なさいまし」
「杉右衛門、すぐ金舟を呼べ」
首領が冷たくいいつける。
「はい、もう少し川下、首尾の松のあたりでございます。そのちょうちんを拝借願います」
杉右衛門は首領からちょうちんをうけとったが、お千恵が胸へしがみついていて離れようとしない。
「芳どん、これを持って立っておくれ」
しようがないので、ちょうちんを芳公にわたす。
舟は、首尾の松のあたりから、五番堀の沖へかかろうとしていた。次は六番堀から七番堀、八番堀まである。

火と水

「芳どん、お蔵のほうへちょうちんを振ってみておくれ」

杉右衛門はしっかりとお千恵の肩を抱きながら、いよいよ勝負だと思った。

「はい」

芳公は蔵前河岸のほうへ、大きくちょうちんを振りはじめる。

鋭い首領の目が、河岸のほうと、お千恵を抱えている杉右衛門とを、油断なくかわるがわる注意している。

艫にいる手下の銃口は、芳公のわきからぴたりとこっちへ背を向けている杉右衛門の背中をねらって、首領の合図を待っている。

供舟四隻は、それぞれの位置から、これも八方へ監視の目を光らせているようだ。

杉右衛門は次第に顔から血の気のひいていくのが自分でもわかった。

——これでうまくいくだろうか。

「あっ、大番頭さん、舟が出てきましたよ」

芳公のはずんだ声が告げた。

なるほど、六番堀のあたりから荷足が一隻こっちへこぎ出して、舳のほうからだれかがしきりに棚倉屋のちょうちんを振って、こっちのちょうちんに答えている。

その金舟に乗っているのは、船頭と、ちょうちんをふっている番頭と、二人きりのようだ。

二隻の小舟が、いそいでそれをたしかめるように、金舟のほうへ進んでいく。

その二隻が中ほどで金舟に出あうあたりまで、両方からこぎ寄った時、突然金舟から、しゅうっと一条の煙が空高く吹きあがり、

だあん。

中空で見事に花火が大きなぼたんの花をひらかせた。

つづいてもう一発、こんどは緑の柳である。

「あっ」

まったく思いもかけない深夜の花火で、だれもの目が空へ向き、一瞬、川一面が真昼のようにあかるくなった。

さすがの首領でさえ、我にもなくぎょっと空へ目を奪われていたが、とたんに舟に異様な動揺を感じて、

「あっ、しまった」

はっとそっちを見た時は、杉右衛門がお千恵を抱いて思い切りよく川へ飛びこんでいくところで、同時に芳公が銃を持った手下を力いっぱい川へ突き落として、自分も舷をけったところだった。

どぶうん。

どぶうん。

激しい水しぶきがあがって、空の花火が消え、立っていた首領は、とっさに舟の中へしゃがんで、あやうく水へほうり出されることだけはまぬがれる。

次の瞬間、金舟に近づいていた味方の二隻と、金舟との間に、

だあん。

だあん。

と、物々しい銃火が飛び違い出した。

それもつかのま、先に撃ち出したのは金舟のほうらしく、味方の一隻はもう二人とも舟の中へ撃ち倒され、船頭一人が必死にこっちへこぎかえしてくる。

つづく一隻も味方の不利と見たのだろう、銃を持った二人は舷へ身をかくして、舟はどんどんこっちへ逃げかえってくるところだ。

「船頭、川下へ力漕——」

それを見た首領は、船頭にそう命令しながら、味方の舟へ大きく手を振った。

今の花火が合図で、敵に捕り物陣を敷かれると、それを破って逃げるだけでも精一杯ということになるのだ。ぐずぐずしていられないのである。

先頭の舟の首領は、短筒を手にして、じっと行く手をにらんでいる。つづいて、四隻が鶴翼に陣形をとって、みるみる両国橋のほうへこぎ去っていく。

この時、蔵前沖では、すでに五隻の小舟が棚倉屋のちょうちんをつけて、杉右衛門たちが水へ飛びこんだあたりへ急行していた。

金舟の舳に立って、じっとそれらの小舟の動きを見ているのは、浜町の鶴七郎である。そばに番頭姿の清太郎がちょうちんを持ってひかえ、櫓を握っているのは船頭姿の烏松だ。

清太郎の足もとに、オランダ銃が五丁そろえてあって、二丁は撃った銃だが、あとの三丁はまだ弾をこめたままのはずだ。

花火の筒は、千両箱の積み荷に取りまかれて、外からではちょっと見えないように作られていた。

「殿さま、あっしも飛びこんでみましょうか」

櫓をこいでいる烏松が、たまりかねたようにいい出した。

「いや、もう少し待て。お千恵にはぴよがついている」

そう答える鶴七郎の顔にも、なにか必死のものがあった。ここまでうまく事を運びながら、お千恵と杉右衛門を殺してしまっては、すべて徒労に終わるばかりでなく、こういうあぶない手段を取った鶴七郎は、無謀のそしりをまぬがれなくなるのだ。

「おうい、こっちだよう」

思ったよりはるか川下から、芳公の呼ぶ声が、川面にはねっかえってきた。

「それ、あそこだ」

「今行くぞう」

五隻の小舟が我先にとそっちへこぎ出す。

「お嬢さんがいたぞ」

「大番頭さんも無事だぞう」

だれからともなく、わあっという歓声があがり、川一杯にあかるさがよみがえってきたようだ。

お千恵と杉右衛門は別々の舟に助けあげられ、杉右衛門は意識があったが、お千恵はすでに息がなかった。

お千恵をのせた舟は、死に物狂いで六番堀へこぎかえしていく。

「今なら息を吹きかえす」

鶴七郎がほっとしたようにいった。

「大丈夫ですって。ただ気を失っているだけさ」

烏松は急に気ぬけがしたように、櫓の手が留守になっている。

「殿さまあ」

その舟のほうの水面へ、芳公がむっくりと首を出して、潮を吹きながら呼んだ。

「おお、ぴよ、どうした」

「つまらねえのさ。おいらはだれも舟へあげてくれねえんだ」

「そうか。みんなお千恵にばかり気を取られていたんだろう。それにしても、思ったより下へ流されていたな。水の中は流れが強いのか」

「あれえ、殿さまがそんなことというの、少しどうかと思うな」

「なぜだな」

「やつらは鉄砲を持っていまさ。いきなりそこで首を出せば、どかんと一発やられねえともかぎらないでしょう。だから、できるだけ川下へ引っぱっていったんでさ」

「なるほど。――これはわしの負けだ」

「おかげで、大番頭さんだいぶ水をのんで、もう少しで目をまわすとこだったでしょうよ。やっぱり年ですからね」

「早くあがれ、ぴよ兄い。風邪をひくぞ」

烏松がわらいながら声をかける。

「あっ、いけねえ。おいら脱いだ着物をどこかへ落としてきちまった」

艫のほうから、のこのこ舟へあがってきた芳公は、水の中で着物をぬいだらしく、ふんどし一本になっていた。

「お前、まるでかっぱの子みたいだな。さあ、早く体をふいて、これでも着ていな」

烏松は手ぬぐいをわたして、いそいで自分のはんてんをぬいでやる。

「わあ、寒い。助かりやす、おじさん」
急にがたがたふるえ出す芳公を舳のほうから見やりながら、
「鳥、引きかえそう。ぴよが風邪をひくといかん」
と、鶴七郎がやさしくいった。
清太郎が黙って羽織をぬいで、芳公のほうへ立っていく。
今はだれの顔もあかるく、お互いにいたわりあいながら、よくみんな無事ですんだとよろこびが胸一杯にあふれていた。

千両強盗

江戸はやがて初夏に近く、今朝もからりと晴れたあかるい青空だった。
あれ以来、松平鶴七郎の家来にしてもらったぴよぴよ小僧の芳公は、鳥松にあずけられて薬研堀の家へいっしょに寝泊まりしているから、浜町への毎朝のあいさつは、鳥松、清太郎、芳公の三人づれで出かけることになる。
毎朝この三人に声をかけるのは、これも西両国の大川端に水茶屋を持っていて、そこへ出かけなければならないお蓮である。
お蓮は早く清太郎を自分の家へ引き取って長火ばちの前にすわらせたいのだが、侍あがりの清太郎には妙に片意地なところがあって、なかなかうんといってくれない。
つまり、鶴七郎に自分の命ばかりでなく、母と妹まで助けられている清太郎は、いつでも鶴七郎の身がわりになる覚悟だし、なにか、それだけの恩返しがすまない間は、家も女房も持たぬと心にきめているのだろう。
「水くさいわ、清さんは。あたしは決してあんたのじゃまなんかする女じゃないのに」
この間もお蓮は、二人きりの時、うらめしそうにそうなじったことがある。
「いや、これはおれという男の心の誓いなんだ。第一、殿さまでさえまだ男やもめでいるのに、

家来が先に女房を持っちゃ義理が悪いからな」
清太郎はそんなうまい口実を見つけて、逃げようとした。
「じゃ、殿さまが奥方をおもらいになったら、きっとあたしをおかみさんにしてくれますね」
お蓮はすかさず食いさがっていってみた。それでも逃げを打つようなら、もう死んじまうよりしようがないと決死の気持ちだったが、
「うむ、お前さえその気なら、おれはお蓮のほかに女房は持たないと、これだけは約束しておいてもいい」
と、やっと本音を吐いてくれた。
「うれしいわ。きっとですね」
「おれは二枚舌を使うような男じゃない」
お蓮はかっと体中が熱くなって、その一言さえ聞けばもう夫婦になったもおなじことだと思った。
そういう二人の仲だから、今朝も長屋の路地を出ると、お蓮は大っぴらで、さっさと清太郎と肩をならべてしまう。
「芳公うじ、目の毒だから、おれたちは前を歩くことにしようぜ」
鳥松はわらいながら、芳公をさそって一足前へ出る。
「おじさん、なんなら明日からべつべつに家を出ましょうか」
うしろからお蓮が冷やかすようにいう。
「いいとも。そっちがそういう了見なら、こっちにも少し考えがある」
「あら、どんな考えなんです」
「そっちはそっち、こっちはこっち、清さんがだれにねらわれようと、別々じゃどうしてやりようもないからな。後でうらまないでくんな」
「清さんがいったいだれにねらわれるっていうの」
「男は、家の敷居をまたげば七人の敵がいるってくらいだ。おれたちは、この間神保党にひとあわ吹かしたばかりだし、本所割り下水の千両

玄蕃だって、あれっきりになっている。昨日も、殿さまから、三人はなるべくいっしょに出て歩くようにと、注意されたばかりなんだ。なあ、芳公うじ」

あっとお蓮は顔色をかえてしまった。そういう心配はたしかにあるのだ。

神保隼人(はやと)の一味は、あの夜以来どこへ姿をかくしてしまったか、まだ一人もつかまっていないし、みすみす一万両の金をふいにした上に、人質の娘までまんまと取りかえされている。きっと、こっちを恨んで、どんな仕返しをたくらんでいるかわからない。しかも、鉄砲の用意まであったというすごい一味なのだから、まったく油断のできない敵である。

公儀でも、その後やっきになって行方をさがしているが、いまだになんの手がかりさえ得られないのだ。

一方、千両玄蕃のほうは、鶴七郎ににらまれて今こそ鳴りをしずめているが、これはすでに一度鶴七郎の命をねらったことがあるくらいで、鶴七郎の目が光っている間は安心して眠れない立場にあるのだから、いつどんな手を打ってくるか、しょせんは敵と味方なのである。

「そういえば、おじさん、ここしばらく殿さまは街へお出かけになりませんけど、やっぱり用心していなさるんでしょうか」

「そうだなあ。そんなことはおれたちに聞くより、あねごのそばには清さんがついているんだから、そっちへ聞いたほうがお手近だろう。なあ、芳公うじ」

烏松は意地悪く突っぱねて出る。

「いいわ、おじさんがそんな意地の悪いことをいうなら、あたしのほうにもちゃんと覚悟がありますからね」

「怖いなあ。どんな覚悟だ」

「今晩からもうおかずのおすそわけはしてあげないことにします」

「参った、そいつは一番痛手だ。仲直りをしや

しょう」

「早いな、おじさん。もう少しがんばればいいのに」

芳公がわらいだす。

「いや、兵糧攻めは苦手だ。芳公うじもうまい飯を食おうと思ったら、女にはお世辞を使っておくにかぎるぜ」

「おじさん、食い気にばかりはまっていないで、いまの話、神保党かこじき玄蕃のほうでなにか仕返しをやってきそうな気配でもあるんですか」

お蓮はもう冗談口どころではなかった。

「なあに、今のところはそんな気配なんてなんにもありゃしないが、けど、だれが考えたって、やつらがつかまるか、この世の中から消えてしまわないかぎり、なんにも仕返しをやらないなんてことは、あんまりおかしすぎるからね。だから、油断は禁物だと殿さまはおっしゃるのさ」

「じゃ、もしやつらが仕返しをするとしたら、どんなことをやりそうかしら」

「ちょいとうかがいやすがね、あねご、今夜のおかずはなにを差し入れてくれやすんで」

「あら、どうしてさ、おじさん」

「そのおかずのいかんによって、こっちにも返事のしようがありやすんでね」

「いやだなあ、ひとがこんなにまじめに聞いているのに――」

「わかっていやすとも――。あねごのは、烏松や芳公なんかどうなってもかまわない。清さんだけは無事で達者で残ってくれるようにって、一生懸命なのさ」

烏松はまっすぐ前を向いたまま、ぺろりと赤い舌を出す。

「お手の筋――。おじさんは察しが早いから、あたし本当にたのしみにしているんです」

「やれやれ、とんだ忠臣蔵のお軽だ。おじさんが死ぬのは年の順、勘平さんは三十に、なるやならずで――」

「おじさん、変な声を出すのはよせよ、子守っ子がびっくりしてらあ」
芳公があきれてとめた時、ちょうど元柳橋の橋たもとへかかってきて、
「やあ、松つぁんたち、いいところで出あった」
と、水茶屋横町のほうから、いそぎ足できかかった岡っ引き、薬研堀の藤吉が目を光らせながら立ちどまった。
「はあてな、おれたち、なにか親分にしかられるようなまねをやったかな」
烏松がわざと空っとぼけた顔をすると、
「違う違う、それどころじゃねえんだ。えらいことが始まりやがってね」
と、藤吉は冗談口には乗ろうとせず、妙に殺気立った顔つきなのである。
「親分がえらいことっていうと、またどこかの娘でもさらわれて、一万両よこせの脅迫状が舞いこんだんかね」
「いや、こんどのはもっとすごい。ぜひお前さんたちの口から浜町さまのお耳に入れてもらいたいと思って、いまうちをたずねていくところだったんだ」
「ふうむ、あれよりもっとすごい事件ね」
烏松はやっと本気になりながら、
「清さん、朝のごあいさつは後まわしにして、親分の話を聞いてみようじゃないか」
と、うしろの清太郎に相談する。
「そうしよう。――お蓮、お前の店をちょっと借りてもいいかい」
「いいわ。親分、いますぐ店をあけますから」
お蓮は心得て、いそいで店のほうへ駆け出していく。
「ねえさん、おいらも手伝うよ」
芳公がすぐに後を追う。
「親分、浜町さまのお耳に入れたいこととなると、天下の一大事ってことになりそうだな」
「天下の一大事は少し大きすぎるかもしれないが、江戸中の一大事にはなりそうだと、おれは

踏んでいる」
「そうか。じゃ、立ち話もできねえな」
そこは年の功で、烏松はそれとなくあたりへ気を配りながら、そこからほど近いお蓮の店へはいるまでは、もうその話は口にしなかった。
お蓮の店の桟敷は、朝の大川を目の前にして、相変わらずあかるいながめだった。
すぐそこに目の高さに見える両国橋は、行き交う人でもう絶え間のない人の流れであった。
「さあ、親分、その江戸中の一大事って話を聞こう」
座がきまると、烏松はさっそくうながした。
聞き手は自分と清太郎で、お蓮と芳公は土間のほうを向いて切り落としへ腰をかけ、店番というかっこうである。
「松つぁんたちは、おとといの晩、新橋のそばの質屋松田屋へ強盗が押しこんで、千両持っていったって話を聞いているかね」
「いや、そいつはまだ初耳だ」
「そうだろうな。ここからは少し遠すぎるからね」
「千両から持っていくようじゃ、一人や二人の仕事じゃないな」
「家へ押しこんだのが五人、外に見張りに立っていたのがまだ何人かいたそうだ。しかも、それがみんな二本差しだったそうだ」
「なるほど――。松田屋はあの辺では三代つづいた金持ちだ。五人も押しこんで、よく千両ですんだねえ」
「話ってのはそこなんだ。なわ張り違いでおれがじかに調べたわけじゃないが、時刻はまだ九ツ前、つまり寝入りばなをねらったんだな。賊は庭の方からはいって、雨戸へはしごをかけ、これへ二、三人が乗って雨戸を押し倒す。どかどかと踏みこんできて、三人は店の方へ行き、二人は奥へきて、声を立てると切るぞと抜き身で脅しながら、寝ぼけ眼の家中の者を、店は店、奥は奥とひとところへ集めて縛りあげる。それ

から三人で主人夫婦の寝所へ押しこんできたそうだ」
「五人がかりで、しかも外に見張りがついていたんじゃ、どうしようもないわけだな」
「松田屋の主人というのは、まだ三十五前だそうだが、日ごろからなかなか腹のすわった切れ者だそうで、変に騒ぎ立てるとかえってけが人が出ると見たから、女房に落ち着いているようにいい聞かせて、床の上へすわって強盗のくるのを待っていた。そして、強盗の顔を見るなり、こっちもおとなしく話を聞くから、けが人は出さないでくれとたのんだそうだ」
「ふうむ。立派なもんだなあ」
「強盗のほうでも、よろしい、決して手荒なまねはしない。われわれはぜひ入用があって、千両だけ借りにきたのだ。それ以上の金は持っていかぬから、千両だけここへ出してくれという。主人が自分で案内して、金蔵から千両箱を一つ出してやると、賊は中身だけ出して三人で分けてふところへ入れ、騒がせてすまなかった。しばらく静かにしてくれるようにと言い残して、風のように出ていってしまったというんだがね」
藤吉は、一息ついて、腰のタバコ入れを取り出す。

種を明かせば

「手口はいかにも素人くさいところがあるが、どうもただの食い詰め浪人の集まりじゃないようだな」
烏松はなにか頭にぴんとくるものがあるのだ。
「うむ。とにかく、十人からの大がかりの浪人強盗なんてのは、赤穂浪士の討ち入りじゃあるまいし、江戸はじまってまだだれも聞いたことがあるまいと思うんだ」
「首領はどんなふうのやつか、わからないかね」
「ひどく落ち着いているやつで、年は若そうだが、背のすらりとした、宗十郎頭巾の中の目が

切れ長で、氷のように光っていたそうだ」
「やっぱりねえ」
もう神保隼人とその一味に違いないと、烏松には見当がついてきた。とたんに、急に体中が痛いほど緊張してくる。
「そのおなじ浪人強盗が、昨夜はそこの森田町の質両替商伊勢屋九兵衛の家へ押しこんでいるんだ」
「なんだって――」
森田町といえば、ついそこの蔵前である。しかも、おなじ強盗が二晩つづけて江戸をあらすというのも前代未聞のことである。
「持っていったのは、やっぱり千両かね」
「うむ。金は千両だったそうだ。ところが、主人の九兵衛というおやじは、かげで高利を貸しつけているだけに、強欲な性分だ。ただ千両持っていかれるのがなんとも悔しかったんだろう。強盗が引きあげるとすぐ、よせばいいのに、一人でその後を追って、裏口からそっと表通りへ出てみた。そこの角に、敵はまだ見張りを残しておいたんだな。いきなり抜き打ちをかけられて、胴へ深く切りこまれ、ひとたまりもなく息が絶えていたそうだ」
「なるほど。こいつは江戸の一大事だな、親分」
「そうだろう。災難にあってしまった松田屋と伊勢屋はあきらめてもらうよりしようがないが、二度あることは三度で、千両強盗は今夜も出るんじゃないかと、八丁堀のだんな衆もそれをひどく心配していなさるんだ」
「浜町さまのお耳に入れたいってところを見ると、親分には、もうだいたい、その千両強盗の当てはついているんだね」
烏松は念のために聞いてみる。
「わらいっこなしだよ、松つぁん。この間、神保隼人っていう蘭学浪人は、棚倉屋さんから一万両物にしてそこなっている。やつらはどうしても一万両の金がいるんで、こんどは手口を変えて、千両ずつ十軒から集めにかかったと、おれ

は踏んだんだ。どうだろうな」
「おれもおんなじだ。しかし、思い切ったことをやりやがる。神保はこんどこそ公儀をしり目にかけて一万両の金を集め、浜町さまにひとあわ吹かせてやろうって腹があるに違いない」
「なるほど。——そうかもしれねえな」
　藤吉は思わず目をみはったようだ。
「おじさん、神保はついでに浜町さまに仕返しをするつもりなんだわ。どうしよう、あたし」
　お蓮がむこうから顔色を変えながらいう。
「むろん、そいつもあるだろう、清さん、どうしたものかなあ。浜町さまのお耳に入れたもんか、おれたちだけでぶつかったもんか」
　こんな話を耳に入れれば、むろん黙って引っこんでいる鶴七郎ではないのだ。
「そうよなあ。お耳に入れずにすめば、これに越したことはないんだが、これほどの事件だから、ほかからきっとお耳にはいってしまうだろうと思う」
「なるほど、それじゃおなじことだな。お耳に入れることは入れて、なるべくあぶないことはおとめする。これよりしようがないってことになるかな」
「大丈夫だよ、おじさん。殿さまにはいつもおれたちよりずっとすばらしい知恵ってものがあるんだ。男がけんかを売りつけられて、後へひくって手はないと、おれは思うな」
　そばから芳公が力んでみせる。
「なまいってるわ。そんなことをいって、もし浜町さまに間違いでもあったら、どうするつもり——」
　お蓮は浮かない顔である。
「お蓮ねえさんのは、浜町さままでなくて、清さんにもしものことがあったらと、それが心配になるんじゃないのか」
「ぶん殴るよ、芳公」
「心配しなくたっていいぜ。清太郎あにいは、おいらの読み書きのお師匠さまだからね。もし

ものことがあったら、おいらがいつでも身がわりになってやらあね」
　あっさりといってのけながらも、それが芳公の本心だけに、じいんと胸へしみてくるものがある。
「偉いぞ、芳公。なあに、おじさんの目の黒いうちは、だれにもけがはさせねえ。仕かけられたけんかだ、みんなでいさぎよく買って出ることにしようや」
　烏松の腹はきまったようだ。
「しかしなあ、松つぁん、おれは悪いことを耳に入れちまったんじゃないかな」
　藤吉は岡っ引きだけに、鶴七郎の身分を考えると、急に二の足を踏みはじめる。
「親分、その遠慮はいらぬ、浜町さまは御自分のことより、江戸市民のことを先に考えられるお方なのだ。わしたちはただ浜町さまの手足となって働く、それでいいんだ。人の生死は天にある。天は決して不正不義には味方しないものだ」
　清太郎がおだやかにいう。侍の家に育ってきているだけに、また違った覚悟を持っているようだ。
「立派だわ、清さん。あたし、見なおしちまったなあ」
　お蓮はわざと手放しでのろけるように言いながら、われにもなく目に涙をためていた。
　——あたしだって覚悟をしなくちゃあ。
と、胸に悲壮なものがうずいているのだろう。それがはっきりわかるから、烏松も芳公も冗談口がきけない。
「松つぁんたちはうらやましい」
　藤吉が心からつぶやいていた。
「あれえ、殿さまだ」
　いきなり、芳公が立ちあがった。
　よしず張りの入り口から　鶴七郎がいつもの気軽なかっこうで、ふらりとお蓮の店へはいってきたのである。

「おお、ぴよもまいっていたか」
鶴七郎の顔はいつも晴れ晴れとあかるい。
「まあ、殿さまお一人で――」
　お蓮もあっけに取られて、いそいで涙をふきながら立ちあがる。
「いや、家来どもは一足先にここへきておる」
　声を聞きつけて、いそいで出てきた清太郎は、
「殿さま、申しわけございません。ついこんなところで道草を食っておりましたものですから――」
　と、思わず顔色を変えている。
　一人での外出はあぶないといさめたいところだが、当然供をすべき自分たちがこんなところで遅参しているのだから、どうにもそれが口に出せないのだ。
「清太郎、お蓮の目が赤い。また泣かせていたのか」
「恐れ入ります」
「藤吉がまいっているようだな」
　鶴七郎は桟敷へ通りながら、ちらっと藤吉の顔を見る。
「これはこれは、浜町さま、お先へ失礼しております」
　藤吉はいそいで下座へさがって、両手をついた。
「烏、気むずかしい顔をしているようだが、どうかいたしたか」
「へえ」
「藤吉がまいっているところをみると、ここでも千両強盗の詮議がはじまっていたのか」
　あっと烏松は清太郎と顔を見あわせてしまった。
「殿さまは、もう森田町のうわさを御存じなんでございますか」
　藤吉がおそるおそる聞く。
「うむ、わしは地獄耳というやつを持っているでな」
　鶴七郎はわらいながら座について、

「本当のことを申せば、今日は屋敷の庭へ植木職がはいっている。その者たちが話しているのを耳にいたしたのだ」
　と、あっさり種明かしをした。
「殿さま、やつらはたぶんこの間の神保党だろうって、いまここでみんなで話していたんですが、殿さまはどう思います」
　芳公は目を輝かせながら、遠慮なくたたみかけていく。
「そうだな。まず神保党と見てよいだろう。彼らはわしに挑戦してきたのだ。不敵なやつらである」
「じゃ、殿さま、こっちも負けちゃいられないってことになりますね」
「負けるとか勝つとかいうより、盗賊は早くつかまえてやらぬと、江戸中の者が迷惑をする。それに、神保党がうまくやっているとなると、ほかにかならずこれをまねるやつが出てくるのだ」
「こじき玄蕃なんか、さっそくまねをしたがるやつじゃないでしょうかねえ」
「こじき玄蕃は神保党に恨みがあるから、どっちみち張りあうことになるだろう。――藤吉、八丁堀はもう如才なく手をまわしているのだろうな」
「へえ」
「どうだ、神保の情婦で、棚倉屋事件のおり、手先に使われていた女髪結いのお富はどうなったか、その後なにか手がかりはあったようかな」
　お富はこの間、蔵前で神保党がお千恵を小舟へ移すまで、米舟の船房にいっしょにかくれていた。鶴七郎が芳公を舟へ助けあげて、その舟ですぐ米舟を襲った時は、もうどこへ逃げたか、お富の姿は船房から消えていたのだ。
「残念ながら、そっちのほうは、まだなんの手がかりもあがっていないようでござんす」
「お富が中村座からお千恵をつれ出して、土産物屋のせんべいやの二階へつれこんだ。これも

神保の情婦だったそうだが、せんべい屋の後家お秋のほうはどうだ」
「そっちもまだのようでござんす」
藤吉はまるで自分が責められているように、冷や汗が出てくる。
「そちを責めるわけではないが、神保にせよ、お富お秋にせよ、はっきり人相書きがわかっている者どもだ。しかも、昨夜の森田屋の強盗が神保党だとすれば、一味の者はおそらく江戸市中にひそんでいるに違いあるまい。ことに、お富お秋は女なのだから、人目につきやすいはずだ。あれ以来すでに十日あまりもたつのに、なに一つ手がかりがつかめないようでは、八丁堀のだんな衆もあまり大きな顔はできないことになるな」
鶴七郎はそういって苦わらいをしたが、これ以上皮肉をいうと、身分が身分だけにけが人が出るので、
「烏、一味のかくれ家はどの辺か見当がつくかな」
と、話題をかえた。
「さあ――」
突然そう聞かれても、烏松にはちょっと返事ができない。
「神保党が荒らしたのは、一昨日は新橋、昨夜は森田町、――清太郎、今夜はどの辺をあらすだろうな」
鶴七郎はまるで人物試験をしているようだ。
「はっきりとはわかりませんが、新橋も森田町も川に近いところです。やはり、舟の便のあるところへ出るのではございませんでしょうか」
「うむ、それが一つの手がかりになるだろう。舟の便の近いところで、しかも、かならず千両箱がある家、――棚倉屋などもそういう家の一軒にはいりはせぬかな」
「あっ」
一同はまたしても顔を見あわせてしまった。

門出の夕飯

浪人強盗は、いつ、どこへ出るかわからない。
しかし、浪人強盗がもし神保党一味の仕事なら、かならず一度は棚倉屋へ押し込むだろう。それでなければ、こっちへの挑戦にはならない。
「とにかく、今夜から三人で棚倉屋を張り込んでおるがよい。そして、彼らの姿を見かけたら、一人はすぐ屋敷へ知らせにくるように」
鶴七郎はそう言いおいて、浜町へ帰った。
その日、烏松、清太郎、芳公の三人は、夕飯をお蓮の家でよばれることになった。戦の門出なんだから、ぜひそうしてくれと、お蓮のほうからたのんだのである。
それだけに、夕方三人でお蓮の家へ押しかけてみると、膳にはちゃんと、たいのお頭つきから吸い物までついているという豪勢さだった。残念なことには、これから張り込みという大役があるのだから、酒はついていない。あらかじめ清太郎がことわっておいたのだ。
「ありがてえなあ。これでお酒が出れば、まるで御祝言のごちそうみたいだな、おじさん」
芳公は大よろこびである。
「芳ちゃん、あたしたちの御祝言のときは、こんなんじゃない。もっとどっさりごちそうしてあげるわ」
お蓮はわざと明るくいう。
「本当か、お蓮ねえさん。その御祝言はいつなんだ」
「さあねえ、明日かもしれないし、来年になるかもしれないし」
「なあに、今夜かもしれねえ」
烏松がまじめな顔をして口を入れた。
「あら、どうして、おじさん」
「もし、おれたちの手で、今夜やつらを退治することができたら、おれは殿さまに申しあげて、どうしても御祝言にしてもらうつもりなんだ」
「そうだそうだ、ぜひそういうことにしようや、

おじさん。おれも殿さまにそうたのむことにする」
「ふ、ふ、芳ちゃんのはごちそうが目あてなんでしょう」
「違うよ。おいらはねえ、お蓮ねえさん、死んだ姉ちゃんの分まで、早くお蓮ねえさんにしあわせになってもらいたいのさ」
「まあ、この子ったら」
じいんと胸を突かれて、お蓮は思わずそでロに目を当ててしまう。
「でかした、ぴよ公。そういわれちゃ、清あにいも奮発せざあなるめえ。なあ、清さん」
わざと、そうおどしゃをかける烏松の目も、うるんでいた。
「奮発するとも――」
清太郎も素直にうけて、
「そこで、松つぁん、今夜の持ち場をきめておこうじゃないか」
と、話をそっちへ持っていく。
「よかろう。やつらが押し込むのは、おとといの晩も、ゆうべも、九ッ(十二時)前だ。つまり、町中の寝入りばなをねらっているんだろう。四つ(十時)をすぎたら気をゆるしちゃいけねえ。そこで、持ち場だが、棚倉屋さんの前へ出るには三つの道がある。一つは広小路から名倉へ曲がる角、その道を突き当たった横町が右からも左からもはいってこられるんだ。清さんにはその横町の薬研堀口(やげんぼりぐち)を受け持ってもらう。芳公うじはその反対の角、おれは広小路口を見張ることにしよう」
棚倉屋は名倉の前で、角店になっているのだ。店は名倉と向かい合っているが、内玄関はその道を突き当たって左へ折れた横町にある。その横町をまっすぐ行くと二丁目と三丁目の四つ角へ出て、それを突っ切ると薬研堀へ突きあたるようになる。
神保党が舟でくるとすれば、この薬研堀口が一番の要所になるわけだ。

――おじさんは清さんに手柄を立てさせたいんだわ。
お蓮にはそれがすぐわかったが、そのかわり、危ないことも一番危ない場所ということになるのだ。
「おじさん、もしやつらがきたら、どうすれば一番いいんだろうな」
芳公が目を光らせながらきいた。
「やつらはこそどろと違って、十人ぐらいで押し込むんだから、やってくればすぐわかる。おじさんの考えじゃ、たぶん内玄関のほうの塀(へい)を乗り越えて、庭から押し込むだろうと思うんだ。むろん、外に見張りが立つだろうから、そいつに見つからないように、気をつけなくちゃいけねえ。で、やつらを見かけたら、芳公うじはすぐに米沢町(よねざわちょう)の番屋へ走って、そのことを注進して、それから浜町のお屋敷へ駆けこめばいい。おれと清さんは、べつべつにやつらの様子を見ていて、もし捕り方が間にあわないようだったら、どこまでもやつらの後をつけて、巣を突きとめることにする。それでいいだろう――清さん」
「心得た。それで行こう」
清太郎はうなずいてみせる。
「じゃ、おいらは番屋へ走って、それから殿さまのところへ行けばいいんだね」
「そうだ。やつらに見つからないように、うまくやらなくちゃいけねえぜ」
「安心してくんな。これでもおいら疾風(はやて)の芳公っていう肩書きがあるんだからな」
「見そこなってすんません。たのむぜ、芳あにい」
烏松はわらいながらぺこりとおじぎをして、
「清さん、間違っても途中で手は出しっこなしだよ。今夜の役目は、どこまでも後をつけるのが仕事なんだ。どんなことがあっても、我慢しなくちゃいけねえぜ」
と、改めて清太郎に念を押す。

「わかった。ほかのことは、きっと辛抱することにする」
この鳥松の行きとどいた注意が決してむだでなかったことを、清太郎は後にして思いあたったのだった。
酒ぬきの門出の夕飯は、そう長くはかからない。また、いつまでものんきに食い気にはまっていられる場合でもなかった。
「あねご、ごちそうさま。――さあ、出かけようぜ」
鳥松がまっさきに立ちあがると、
「合点だ。――お蓮ねえさん、御祝言のごちそうはきっと約束したよ」
と、芳公がわらいながらすぐ後につづく。
「清さん――」
一番後から黙って立った清太郎の背へ走り寄って、お蓮がうしろからしっかりと手を握ってきた。
「みんなにわらわれるぜ、お蓮」
「薄情ねえ。そういう口で、なにか一言ぐらいやさしくいってくれたらどうなの」
「これっきりどこかへ行ってしまうっていうわけでもあるめえし、――夜があけりゃ、またここへ帰ってくるんじゃねえか」
「きっと、きっと帰ってくださいよ」
「おれにゃここよりほかに、どこへも帰る家はありゃしねえんだ」
「うれしい。――じゃ、行ってらっしゃい」
やっと安心して、格子口まで送り出してくれるお蓮だった。
鳥松と芳公は、もう路地の曲がり角まで行って待っている。
「清さん、あんがい早かったじゃないか」
鳥松がからかうように軽口をたたくと、
「よせよ、おじさん。お蓮ねえさんがかわいそうじゃねえか。おじさんにも早く一人世話してやらなくちゃだめかな」
と、芳公がまじめにたしなめる。

「すまねえ、すまねえ。つい、口がすべったんだ、堪忍しな」
鳥松は頭をかきながら、正直にあやまっていた。
表はもうすっかり宵になって、今夜は曇り空だが、月夜まわりだから、町はおぼろにほのあかるい。
「さあ、いよいよ戦場だ。二人ともしっかりたのむよ」
三丁目と二丁目の四つ角までくると、鳥松はそう小声でいって、ふらりと広小路のほうへ曲がっていく。
「おいらは向こうの角だな、清あにい」
「うむ、うまくやれよ」
「合点でござんす。さいなら」
芳公は棚倉屋のほうへまっすぐ駆けだす。
清太郎は棚倉屋の板塀のこっち角までゆっくり歩いて、そこから路地口を二つばかり引きかえして、まず薪屋の横へ身をかくした。あまりいつまでも一つところへ立っていては、人に怪しまれるかもしれない。ときどき場所を移しながら、だんだん棚倉屋の近くへ行ってやろうという腹だった。
張り込みというやつは、ただじっと立っていればいいのだから、ちょっと考えると造作もなさそうだが、さてやってみると、なかなか気骨の折れる仕事だった。第一、近所の者や通行人に怪しまれ出したら、もうおしまいである。その点、幸い夜のことで、更けるにつれてほとんど人通りがなくなってくるから、清太郎は気が楽だった。
そのかわり、だれにも気兼ねがいらないとなると、こんどは自分の退屈を持てあましてくる。しかも、神保党が果たして今夜棚倉屋をねらうかどうかは、だれにもわからないことなのである。
――そんな文句をいっていた日にゃきりがない。やつらは今夜きっと出てくるときめて辛抱

することだ。

清太郎は三度ばかり場所を変えて、薪屋とは筋向かいの路地口へ身をひそめた時、ちょうど四ツの鐘を耳にした。これから一刻、九ツまでがいよいよ勝負なのである。

凶悪な浪人強盗が二晩つづけて出たということはもう江戸中へ知れわたっているから、むろん、どの町内でも相当用心はしているはずだが、この辺は二人一組の火の用心がいつもより回数を増しているというだけで、特に警戒が厳重だとも思えない。

それは番屋には町方が詰めてはいるだろうが、かならず今夜この町内へ強盗が出るとはかぎっていないのだから、やっぱりそうむきにはなれないのだろう。

――はてな。

今、火の用心が二人、棚倉屋と名倉の横町へ曲がっていった。まだその金棒が耳につく。もうこの通りにはまたしばらく人の往来はないはずだと、なにげなく棚倉屋とは反対の四つ角をのぞいてみた清太郎は、どきりとした。

家数にして七、八軒向こうの往来へ、いつのまにどこから出てきたか、頭巾をかぶった侍らしい男が二人立ち止まって、じっと棚倉屋のほうを見ているのだ。

そして、なにかうなずきあったと思うと、くるりときびすをかえして、ゆっくり薬研堀のほうへ引きかえしはじめたのである。

――様子を見にきたんだな。

そう直感した清太郎は、もうするりと路地をぬけ出して、片側の人家の軒下づたいに、二人の後をつけ出した。

時刻からいえばまだ少し早すぎるので、どこかに神保党は待機しているに違いない。そう遠いところではあるまい。

清太郎は見当をつけて、体中がかっと汗ばんできた。

仙台堀の空き屋敷

二人の頭巾の男は、まっすぐ薬研堀へ突きあたると、そこの桟橋をおりていった。下に猪牙舟がもやってあって、一人がもやいを解くと、一人が艪を取って、すぐに大川のほうへこぎだしはじめる。

――どこへ行く気だろう。

清太郎はちょっと当てが違って立ちどまった。

が、舟を利用している点、二人とも頭巾をかぶってわざわざ棚倉屋の近くまできて引きかえした点、どうしても神保党一味の物見としか考えられない。

――よし、どこまでもつけてみろ。

なまじちゅうちょしていては機会を逃す。むだ足に終わったところで、それまでの話だと、清太郎はとっさに度胸をきめた。

舟は舟でつけるほうが都合がいいが、その舟を借りている暇がない。とにかく、行けるところまで陸をつけてみようと、元柳橋のほうへ歩きだす。川と陸だから尾行しやすいようなものの、川から陸はあんがい目につきやすいから油断はできない。

大川へ出た舟は、舳先を新大橋の方へ向けていた。艪はどんなにいそいでも、人間の足ほどは早くないから、その点は楽だが、猪牙はしだいに深川河岸のほうへこぎ寄っていくようだ。

もし、その辺の岸にでも舟をつけられると、こっちは新大橋をわたらなくては向こうへ出られないのだから、とうてい間にあわないことになる。

――とにかく、新大橋まで走ってみよう。

新大橋の真ん中へ行って舟を待っていれば、どっちへでも自由がきくのだ。

清太郎は先まわりをして、新大橋の上へ出た。猪牙は深川河岸寄りをゆっくりこぎくだってきて、新大橋の下をくぐりぬける。

——ことによると、小名木川へはいるかな。

そっちへはいられると、しばらく両岸が人家つづきで見とおしがきかなくなるから、どうしても舟が必要になってくる。

清太郎はまた万年橋の上へ先まわりをした。が、舟は小名木川へははいらず、そのままこぎくだっていく。

次は仙台堀へはいる上ノ橋だ。それから先は佐賀町になって、永代橋まで、また川の見とおしがきかなくなる。

——しかし、仙台堀へはいるんじゃないかな。どっちにしても、もうそう遠くはあるまい。あれが神保党の物見で、今夜棚倉屋へ押し込むための下見だとすれば、時刻からいっても、この辺で本隊と落ちあわなければ、九ツに間にあわなくなる。

——しめた。

案の定、猪牙は上ノ橋の下をくぐって、仙台堀へはいってきた。

手前は松平陸奥守の下屋敷から伊勢崎町、向こう岸は今川町、そのどっちも、川っぷちに往来がある。

舟はなんとなく今川町寄りにこいでいるので、清太郎はそっちの往来をつけることにした。

舟はまもなく松永橋の向こうの桟橋へついて、二人は往来へあがると、前後に人目のないのを確かめるようにしてから、角から二軒目の塀の中へ、すっと吸いこまれるようにはいっていった。

松永橋をわたった角の屋敷も、どこか旗本の下屋敷といったふうな広い屋敷だが、その隣もずっと黒板塀がつづいて、庭は森が深いようだ。いま二人の姿が消えたあたりまで忍び寄ってみると、そこに裏木戸がある。

角屋敷のまわりは、掃除がよく行きとどいて、庭木も手入れがしてあるようだが、ここは塀ぎわに雑草がのび、庭木も伸び放題になって、往来へ枝がおおいかぶさっている。

——そうか、空き屋敷を巣にしているんだな。

もう間違いないと清太郎は踏んだ。

見ると、木戸がちょっとばかり閉め忘れてあるのは、彼らも無事に巣へたどりついて安心したせいだろう。中は森が深いらしく、のぞいてみたが、木の下やみでよくわからない。

清太郎はじっと耳をすましながら、思い切って木戸を一尺ばかりあけてみた。小道がずっと森の中へつづいているようだ。その小道も、ほとんど雑草にうもれている。

清太郎は一足中へはいって、うしろの戸をしめた。もし、彼らが出てくるようなら、素早く森の中へ身をかくせばいいのだ。武器はふところに短刀が一本あるきりだが、闘うのが目的ではなく、一通り巣を見とどけて帰ればいいのだから、全身を耳にしながら、地にはうようにして森の中へ進んでみる。

五、六間も進んだころだろうか。ふっと木戸のほうで物音がするのだ。ぎょっとしながら振りかえってみた。

「あっ」

お高祖頭巾の女が、木戸をあけて、しきりにこっちをのぞいている。そのかっこうが、どうやらお蓮らしい。

しきりにこっちをさがしているようだ。すると、薬研堀からずっと後をつけてきたのだろうか。いや、そんなことより、

——あぶない、バカ。女のくせに、こんなところへはいってくるやつがあるか。

と、清太郎がいそいでとめに引きかえそうとした時、ふらふらと一足木戸の中へはいったお蓮が、あっとそこへ立ちすくんでまった。

「静かにしろ」

左右からいきなり覆面の男に抜刀を突きつけられたのである。

「おい、そこにかくれている男、おとなしく出てこないと、この女を突き殺すぞ」

一人がもうお蓮の腕をつかんで、切っ先を向

けながらこっちを威嚇する。その間に、一人は木戸の戸じまりをして、つかつかとこっちへ進んできた。
「清さん、逃げて」
「こらっ、大きな声を出すやつがあるか」
しまった、と清太郎は思った。やつらはちゃんとこっちの尾行を知っていたのだ。だから、わざと木戸を少しあけておいたのだ。
「よし、手向かいはしないから、女にだけは手荒なまねをしないでくれ」
清太郎はいさぎよく観念するほかはなかった。自分一人ならなんとでもなるが、お蓮を人質に取られてしまったのでは、どうしようもない。
「そうか、悪あがきをするより、そのほうが利口というもんだ。手をうしろへまわせ」
一人がうしろへまわって、たちまち清太郎の両手を縛りあげる。
「堪忍して、清さん」
そのお蓮も、有無をいわせず、もう一人の男にうしろ手に縛られていた。
「さあ、こっちへ来い」
二人はべつべつに引っ立てられて、森の中を抜けた。そこにもう一つ内木戸があって、そこをはいると中はがらんとした草っ原だった。どうやら、屋敷は火災にあって焼け落ち、そのまま建て直さずにほってあるらしい。その一隅に、外蔵が一棟だけ焼け残っていた。
「ここへはいって、しばらく辛抱しているんだ。さろぐつわだけは許してやるから、大きな声は立てるなよ」
一人が蔵の戸口をあけて、恩にきせるようなことをいう。
「神保さんはここにゃいないのかね」
清太郎はふしぎそうに聞いてみた。
「よけいな口はきかなくてもいい。いまにわかることだ」
「ああ、そうか。すると、後からくるわけなんだな」
清太郎はなんとかして口をわらせようと持ちかけてみたが、結局むだだった。二人は蔵の中へお蓮と清太郎を押しこんで、ばたあんと戸をしめ切ってしまう。
耳をすましていると、二人はそこで張り番をするわけでもないらしく、裏木戸のほうへ去っていく足音が聞こえてきた。
蔵の中は、窓の戸が一枚こわれていて、そこからぼんやりと夜の光がただよってくる。
「清さん――」
お蓮が悲しげに肩をすりよせてきた。
「怒っているの、清さん」
「べつに怒っちゃいないが、――どうもわからない」
「なにがわからないの」
「おれはてっきりここが神保党のかくれ家だと思ったんだが、そうじゃなさそうだな」
「そうねえ。この屋敷には、この蔵のほかになんにもないようだわ」
「お前はずっとおれの後をつけていたのか」
「ええ。家にじっとしていられなかったもんだから、そっと路地をぬけ出していくと、ちょうどあの二人が舟へ乗るところだったんです。だから、見つかるとあんたにしかられると思って、こっそりあんたの後を追ってきたんです」
「そうか。ちっとも知らなかった」
「清さんたら、一度もうしろを振りかえろうともしないんですもの」
「ふうむ。自分じゃ落ち着いていたつもりなんだが、やっぱりあがっていたんだな」
清太郎は苦わらいをしながら、急に疲れを感じてきて、
「いつまで立っていたってしようがない。まあ座ろう」
と、どっかり、そこへあぐらをかく。
「すみません。あたし、清さんがここへはいらなければいいがと思って、はらはらしながら見

ていたんです。そしたら、やっぱり中へはいってしまったんで、早くとめようと思って、つい木戸をがらりとあけてしまったんです。あれがいけなかったんだわ」
　お蓮もくずれるように横ずわりに肩を投げかけてきながら、敵に見つかったのは自分のせいだと思っているようである。
「いや、お前が悪いんじゃない。やつらははじめから、おれたちのつけているのを知っていたんだ。というより、むしろ、わざわざおれをおびき出すために、あんなかっこうをして棚倉屋の近所をうろついてみせたんだろう」
「そうかしら――。どうして?」
「今考えてみると、やつらは舟へ乗るまで、一度もうしろを気にしているふうはなかった。第一、はじめからの計画でなければ、おれたちを自分たちの一存でこんな空き屋敷へつれこむはずはない。たぶん、神保は、もう今夜あたり殿さまが乗り出して、棚倉屋へ見張りをつけるだろうと、こっちの裏をかいてきたんだろう。つまり、これが殿さまへの挑戦の第一歩なんだ」
「どうする、清さん。じゃ、あたしたち殺されるのね」
　いまさらのように、お蓮はさっと顔色を変える。
「お蓮、お前、死ぬのはこわいか」
「そんなことないわ。あんたと二人でこのまま死ねるんなら、あたし、こわくなんかちっともありゃしないけれど――」
「そうか。おれたちはどうせ死ぬと覚悟しておかなくちゃなるまい。しかし、おれが心配なのは、神保はおれたちをおとりに使って、殿さまをここへおびき出しはしないかということなんだ。――困ったことになった」
　自分のうかつから浜町さまに万一のことがあっては、死んでも死にきれないと、清太郎は思わずがくりとうなだれてしまう。
「そんな、そんな、今から力を落としちゃいや

だ」
　お蓮はそんな清太郎の悲しげな姿を見せつけられると、たまらない気がしてくるのだろう。
「清さん、あたしがなわをかみ切ってあげる」
「なにッ」
「口があるんだもの、がっかりすることないわ。体さえ自由になれば、なんとかここを逃げ出せる工夫がつくでしょう」
「そうだったなあ、口があったなあ」
　清太郎もはっと目を輝かせながら、
「おれもうっかりしていたが、やつらもよっぽどあわてていたんだろう。よし、お蓮、やってみてくれ。なわの結び目をよく見るんだ」
　と、くるりとうしろを向いた。
「待っててください」
　お蓮は顔を両手の結び目あたりへ押しつけていく。
「無理をするなよ。よく結び目を見て、ゆっくりやるんだ」
「大丈夫よ」
　お蓮の歯がなわの結び目へかみついたようである。
「歯を痛めないようにしろよ」
　両手のあたりへふれてくるお蓮のほおは、火のように上気しているようだ。男を助けたい一心で、必死になっているのだろう。そこから強い女の愛情をひしひしと清太郎は胸へ感じながら、
「お蓮、あわてなくてもいいぞ。おれたちはきっと助かるんだ」
と、心からいたわり励ましてやらずにはいられなかった。

怪しい手紙

　清太郎とは反対の旗本屋敷の角から棚倉屋を見張っていた芳公は、やがて四ツ半(十一時)近くなると、宵からの張り込みなので、さすがに少し気疲れがしてきた。

「けっ、出るんなら早く出やがりゃいいんだがなあ。退屈でしようがねえや」

さっきから何度もあくびばかりかみ殺していたが、そのたびに表の鳥松や向こうの清太郎のことを思い出して、

「いけねえ、いけねえ。後で鳥のおじさんに、だからお前はまだひよっこだっていうんだ、なんてわらわれた日にゃ、明日から仲間はずれだからな」

と、気を取りなおして、しゃっきりと目を光らせる。

半刻(はんとき)に一度ずつ火の用心がまわってくるだけで、こっちはまったく人が通らない。つい退屈してあくびが出てくる。

「畜生め、出るのはあくびばかりか」

またしても口小言が出た時、

「小僧、そんなに退屈か」

ふいに、うしろからいうやつがある。

芳公は飛びあがらんばかりにびっくりして、見ると、いつのまにか怪しい覆面の侍がきて、ぬっと立っているので、二度びっくりだった。

「おじさん、ちっとも足音を立てねえんだな。少し怪しいぞ」

芳公はじりじりと後じさりをしながら、もうそんな憎まれ口をきく。

「お前はたしか浜町の子分だな」

「そうだよ。よく知ってるなあ、おじさん」

覆面の男は、芳公のむだ口には答えず、ふところから封書のようなものを取り出して、

「お前が本当に浜町の子分なら、この手紙をすぐ親分の火薬どのにとどけてくれ。いいだろうな」

と、念を押して手わたす。

「おじさんはいったいだれなんだ」

「そんなことは、この手紙を見ればわかる」

「ふうむ。けど、おれはいま殿さまの御用中なんで、すぐってわけにはいかねえんだけどなあ。明日の朝じゃいけないのか」

「そんなことをしていると、清太郎とお蓮の命がなくなる。それでもいいのか」

「なんだって――」

芳公は変な顔をしながら、思わずわたされた封書の表を見ると、たしかに浜町様と書いてあるが、裏にはなんにも書いてない。

「じゃ、おじさん、こうしよう。そこに清太郎あにいがきているから、いっそ本人にこの手紙を殿さまのところへとどけさせよう。それが一番たしかだろう」

「清太郎はもうここにはおらん。うそだと思ったら、いっしょにきてみろ」

怪しい覆面の男は目でわらいながら、さっさと棚倉屋のほうへ歩きだす。

「おかしいなあ、そんなはずはねえんだがなあ」

さあ、わからねえ、と芳公は思った。

この男は神保党の物見に違いない。ことによると、こんないい加減なことをいって、おれたちの見張りを遠ざけ、その後で一味のやつらが棚倉屋へ押し込もうという魂胆かもしれない。

――そんな手に乗せられてたまるもんか。けど、清太郎あにいが持ち場にいないというのは本当かなあ。

芳公は、半信半疑で、男の後ろから棚倉屋の横を通りぬけ、清太郎が張りこんでいるはずの二丁目と三丁目の四つ角まできてみたが、なるほど清太郎はどこからも出てこない。

すると、清太郎はもう神保党のなにかの手に引っかかって、どこかへ連れ出されてしまったのだろうか。

「おじさんは清太郎あにいの行った先を知ってるのか」

「黙って歩け。その手紙を持って浜町へ行けば、いやでもわかることだ」

「そんな意地の悪いことをいわねえで。じゃ、たった一つだけ教えてくんな。おじさんはさっき、お蓮ねえさんと清太郎あにいといっしょだといったな」

「うむ、いっしょだ」
「そいつがおいらにはわからねえ」
「小僧、たった一つだけの約束だったな」
「けっ、しゃべると、おじさんの口はそのたびに減るようにできているのか」
減らず口はたたいてみたようなものの、こいつはえらいことになったようだぞと、芳公は内心おだやかでなくなってきた。
こうなってはしようがない。この手紙を見ればなにもかもわかるというのだから、一刻も早く浜町へ駆けつけるほかはない。
「じゃ、おじさん、おいらは駆け出すぜ」
「それが一番利口だ。きっと、浜町さまにその手紙を見せるんだぞ」
「わかったよ。こんどおじさんに会う時は、匕首であいさつをしような。あばよ」
芳公はそんな悪態をついて、ぱっと矢ノ倉のほうへ駆けだした。
——畜生め、お蓮ねえさんにまで手を出すなんてひきょうなやつらだ。
十五、六間も走ってから、ちらっとうしろを振りかえってみると、覆面の男は薬研堀のそばに立って、まだじっとこっちを見送っているようだ。
浜町の屋敷の表門は、矢の倉の通りの中ほどにある。芳公は門番小屋の窓下へ駆けこむなり、
「門番さん、今晩は。芳公です。殿さまに急用があるんだから、すんませんが、くぐりをあけておくんなさい。——起きていやすか、門番さん」
と、大きな声でどなった。
「おうい、いまあけるぞ」
ちゃんと鶴七郎から言いつけられているとみえて、門番はすぐに出てきて、くぐりをあけてくれた。
「御苦労だな、芳公」
「すんません。なにしろ、一大事でござんしてね」

「そうか。いま奥へ取りついでやるから、いっしょにくるがいい」
門番はちょうちんの用意をして内玄関まで行き、宿直の小侍に取り次ぎをたのんでくれる。まもなく奥から引きかえしてきた小侍は、いつもの書斎の庭へまわるようにと告げた。
玄関わきからぐるりと庭をまわって、毎日朝のあいさつに出る書斎の廊下へ出ると、鶴七郎は白羽二重の寝まき姿のまま、ぼんぼりを手にして廊下で待っていた。
「殿さま、一大事でござんす」
芳公はいきなり縁先へ走り寄っていった。
「どうしたな、ぴよ」
「この手紙を早く見ておくんなさい」
手紙を手わたしながら、あらましのことを告げると、
「さようか」
鶴七郎はまゆをよせて、ぼんぼりを廊下へおき、裏に署名のないのを見とどけてから、静かに封を切る。
文面は至極簡単で、
一、清太郎お蓮両人の命をお買いあげ願いたく、今明けがたまでに金一万両、仙台堀焼け屋敷へ持参ありたし。神保隼人
ただそれだけで、それにあて名が書いてない。
「ぴよ、字が読めるようになったか」
「仮名とやさしい字なら読めやす」
「さようか。では、これを読んでみよ」
鶴七郎は手紙を芳公にわたす。
「一、清太郎お蓮、その下は両国橋の両に人だから、両ひと、ふたりのことでござんすね」
「うむ、両人の命お買いあげ願いたく、今明けがたまでに金一万両、仙台堀焼け屋敷へ持参ありたし、神保隼人と書いてある」
「畜生。やっぱり、神保党のやつらの仕事なんですね、殿さま」

「うむ」
「この仙台堀の焼け屋敷ってのは、どこなんだろうなあ。清あにいもお蓮ねえさんも、どうしてまた、そんなところへつれていかれちまったんでしょうね」
「殿さま、ごめんなすって」
そこの植え込みのかげから、烏松がひょいと出てきてあいさつをした。これは例によって裏の塀を乗りこえてはいってきたのだろう。
「あれえ、おじさん」
「烏、妙なことになったようだな」
鶴七郎はさっそく説明を求めるように、声をかける。
「へえ、どうやら、やつらにうまく引っかけられたようでござんす」
いつになく烏松の顔は暗い。
「じゃ、おじさんは、清あにいがやつらにどうしてつれていかれたのか、知っているのか」
芳公が顔をのぞきこむようにする。
「知っているとも——。実は、あっしは棚倉屋の屋根の上から見張っていたんですが。四ッ少し前ごろ、三丁目のほうから怪しい覆面のやつが二人でやってきやして、ちょっと離れたところから棚倉屋のほうを見て、ぶらぶらと薬研堀のほうへ引きかえしていきやがるんです。てっきり神保党の物見だなと見ていると、清の字がうまく後をつけ出したようだ。しめた、もう大丈夫だ、今夜はのがさねえと張り切っていたんですが、その清の字がいくらたっても帰ってこないんで、はてな、そんなに遠いところから物見を出すはずはねえがと、心配していやすと、こんどは芳公のほうへさっき覆面が一人やってきて、芳公をつれて薬研堀のほうへ行きやがる。しかも、その後からもう一人覆面のやつが見えかくれについていく。こいつはいけねえと思って、いそいであっしも後をつけてきたんですがね」
「そうか。芳公のほうへ出た覆面どもは、それからどうした」

鶴七郎がなにか思いあたった顔をして聞く。
「薬研堀のところで二人で相談していたようですが、また別れて、一人は矢ノ倉のほうへ、一人は大川端へ出やしたから、きっとこのお屋敷の裏と表を見張っているんだと思いやす」
「たぶん、そうであろうな」
「おじさん、これを見てくんな」
芳公は例の手紙を烏松にわたして、
「お蓮ねえさんは、どこでやつらにつかまっちまったんだろうな、おじさん」
と、ふしぎそうに聞く。
「そうよなあ。あねごは貞女だから、清さんの体を心配して、どこかから清さんを見張っていた。その清さんが二人の後をつけだしたんで、あねごもそれにひかれてどこまでもついていく。やつらにとっては思いがけなく、かもが二羽になったわけだ。つまり、やつらはこっちが今夜あたりから棚倉屋を張り込むだろうと考えて、人質をとりにきやがった」
「畜生、裏をかきやがったんだな」
「殿さま、こっちも一つ神保党の裏をかいて、あっし一人でこの仙台堀の焼け屋敷ってのへ忍びこんでみようと思うんですが、どんなもんでござんしょうね」
烏松は手紙を鶴七郎にかえして、目を光らせる。
「烏は、この仙台堀の焼け屋敷というのを存じているのか」
「そいつは知りやせんが、なあに、仙台堀へ行ってみりゃすぐ見当はつきやす」
「これは神保党の仕事ではないと思うが、烏はどうだ」
鶴七郎が意外なことを言い出す。
「神保党の仕事でないっていいやすと——」
「おそらく、こじき玄蕃がたくらんだ仕事だろう」
「さあわかんねえ。どこでそんなことがわかるんです、殿さま」

烏松も芳公も、思わずひざを乗り出していた。
「神保隼人という男は、なにかちゃんとした目的があって金を集めているのだ。復讐などのために、よけいな道草などを食う男ではない。あの男は、この間失敗した一万両の金を、江戸の金持ちから集めることができれば、それでわしへの復讐はできたと考えているようだな。実利主義とでもいうか、物ごとをちゃんと割り切っている男だ」
「なるほど。そういえば、お富のことでも、わしが色じかけでお富をまるめこんでいるわけではなく、お富の体が男のほしい年増盛りだから、女のほうから夢中になっているだけだと、平気で言い切れるやつですからね」
「こんどの押し込みなども、千両しか持っていかぬ。お前は金持ちなのだから、千両ぐらいくれても腹は痛むまい。こっちはその金で立派な仕事をするんだと、自負してのことなのだろう。そういう男が、一度それで失敗した一万両を持参しろというおなじ手口を、またここで使うはずはない。第一、この明け方までにわしの力で一万両の金が集められるか、られないか、そんなことぐらいわからぬ神保ではあるまい」
「だって、殿さま、棚倉屋さんへ言いつければ、一万両ぐらいすぐ出してくれるんでしょう」
芳公は、あくまでも鶴七郎を日本一にしておきたいのだ。
「いや、人間という者は、どんな場合でも、決して他人の金を当てにしてはいけない。そこから世の中が乱れてくるのだ。それはそれとして、この手紙を書いた男も、一万両の方はできないのを承知で、ただわしを焼け屋敷へ呼び出したいのだろう。太田原玄蕃はわしの目の黒いうちは安心して眠れぬ。神保の名でわしを呼び出して、わしの命を奪うか、あるいはわしにあやまらせるか、つまり、自分の命惜しさにこんなことをたくらんだものとみえる」
「こじき玄蕃じゃ、お蓮ねえさんがあぶねえや。

おじさん、おいらもその焼け屋敷ってのへ、いっしょに乗りこむぜ」
「ぴよ、心配いたすな。清太郎とお蓮に、万一のことがあってはならん。わしがこの呼び出しに乗せられてみることにいたそう」
「大丈夫でござんすか、殿さま」
烏松はびっくりして目をみはる。
「いや、玄蕃がいかに無法者でも、いきなりわしの首をねらうようなことはすまい。わしはぴよをつれていくから、烏は人目につかないように陰供いたしてくれ」
鶴七郎はそういうと、もう気軽に支度をしに立っていた。

意外な対面

鶴七郎はいつものとおりの無造作な身なりで、芳公を供につれ、ぶらりと裏門から大川端へ出た。陰供の烏松はどこにいるのか、その辺には姿を見せない。そういえば、どこかに敵の見張りがいるはずだが、これもうまく姿を隠しているようだ。時刻はやがて九つに近いだろう。
「殿さま、口をきいてもようござんすか」
新大橋のほうへ歩きながら、芳公が聞いた。
「いまのうちならまだよい」
「ありがてえ。――おいらちょいと心配なんだが、仙台堀へ行きゃ焼け屋敷ってのはすぐわかりますかねえ」
「たぶん、わかるだろう」
「人に聞こうたって、もうみんな寝ていやすぜ、殿さま」
「人に聞かなくても、およその見当はつくはずだ」
「どう見当をつけるんでござんす」
「ぴよ、自分で考えてみよ。頭を働かせればわかるはずだぞ」
「そうですかねえ」
「早く焼け屋敷をさがし出さなくては、清太郎とお蓮の命があぶない。自分一人だったら、ぴ

よはどうする」

「なあるほど、こいつはぐずぐずしていられやせんね。焼け屋敷っていうんだから、火事で焼けた屋敷だ。焼けた家をさがしゃいいんでしょう」

「大きな屋敷だと、外からでは家は見えないぞ」

「塀にのぼりゃ見えるでしょう」

「いちいち塀にのぼっていては夜が明けてしまう。明け方までの命だと、手紙に書いてあったな」

「そうでござんしたねえ。しょうがねえ、番屋をたたき起こして聞いてみやす」

「それもテだが、もう少し自分で頭を働かせてみろ」

「これでも、頭はさっきから働かせているんですがね、いい考えが出ねえんでさ」

「では、清太郎とお蓮は見殺しにするほかはないな」

「意地が悪いなあ、殿さまは。そんなことを言わねえで、教えてくださいよ」

「悪党どもが無断ではいりこめる屋敷だから、そこは空き屋敷になっているに違いない。空き屋敷は手入れが行きとどかないから、まわりに雑草がはえているだろうし、庭木ものび放題になっているはずだ」

「なあるほど、殿さまはやっぱり頭がいいですねえ」

「それにな、敵はわざわざわしを呼び出しているくらいだから、仙台堀まで行けば、出迎えに出ていてくれるかもしれぬ」

「ちげえねえや。途中で殿さまを取りかこむ、つまり、待ち伏せって手もありゃしませんかねえ」

「まずそれはなかろう。町なかでそんなまねをすれば、人が起きだすから、やるとすれば焼け屋敷へつれこんでからだろう」

「殿さまは強いから、負けやしないでしょうねえ」

そうはいってみたものの、芳公はなんとなく心細い。敵はきっと人数を集めて待っているに違いないからだ。

「たぶん、大丈夫だろう」

鶴七郎は平気でわらっている。

新大橋をわたり、万年橋へ出て、その次の橋が上ノ橋だった。手前に伊達の下屋敷があるから、その堀を仙台堀と呼んでいるのである。橋をわたると、佐賀町になって、左角は尾張屋という大きな質両替屋である。

「あっ、殿さま」

その尾張屋の角の黒板塀に、ぴたりとはりつくようにして、だれか黒い人かげが二人ほど立っている。芳公はぎょっとしながらも、やっぱり迎えに出ていやがるなと思った。

「ぴよ、黙ってついてまいれ」

鶴七郎は小声で制して、ゆっくり上ノ橋をわたっていく。

「おい、どこへ行く」

待っていた二人の覆面黒装束のやつが、いきなり短筒を突きつけながら出てきた。さっきの覆面の男とはまったく様子が違う。

——いけねえ、こいつは本物の神保党かもしれねえ。

そういえば、ここは深川でも大きな質屋だし、しかも川っぷちだと芳公は気がついて、いそいで仙台堀を見ると、ちゃんとそこの桟橋に荷足舟がついている。

「その方どもは、神保党の見張りか」

鶴七郎は二人の銃口の前へ平然と立ちながら、おだやかに聞いた。

「なにッ」

あきらかに図星をさされたらしく、黒覆面二人はどうしようかというように、たがいに顔を見あわせる。

「神保隼人がまいっているなら会いたい。呼んでもらいたい」

二人は目ばかり光らせながら、まだ返事がで

きないようである。相手が浜町の松平鶴七郎とわかっているからだろう。
　そこへ、ちょうど仕事がすんだらしく、仙台堀のほうの裏口から、ぞろぞろと五、六人同じような覆面どもが出てきて、先頭の男がちらっとこっちを見ると、後ろの者に先へ舟へ乗れとあごでいいつけてから、つかつかとこっちへ近づいてきた。
「浜町どのですな」
「さよう、――神保隼人か」
「御想像にまかせよう。よくここへ見当をつけられましたな。それとも、偶然かな」
　神保は少しも悪びれない。冷たい目に底光をたたえているのは、相手の出ようによっては決戦も辞さぬと腹をきめているからだろう。
「まず、これを読んでみるがよい」
　鶴七郎はふところから例の呼び出し状を取り出して、神保にわたした。
　あいにく、どっちもちょうちんは持っていない。しかし、月かげにかざしてみれば、読めないこともない。
「これはむろんわしの書いたものではない。あなたはこの焼け屋敷へ行かれる途中らしいな」
　神保は手紙を鶴七郎にかえしていった。
「さよう、ふたりの者を見殺しにするわけにはいかぬでな」
「すると、われわれのほうはどうされるつもりかな」
「人命の方を先に救わなければなるまい。しかし、こうしてわしの目にふれたからには、一言申しておく。たとえどんな目的があるにもせよ、押し込みはよろしくない。第一、その方どもは公儀の力を甘く見すぎているようだが、そういう非法なまねをつづけていると、目的に向かう前に一網打尽にされる時がくるぞ。この機会に、一応注意しておく」
　鶴七郎はきっぱりといってのける。
「忠告はありがとう。わしの方もついでだから、

一言いっておこう。われわれは町人どもに公儀よりも不当な御用金は申しつけておらんつもりだ。そして、この資金は、他日、利をつけてかえすつもりでいる。したがって、公儀ばかりではなく、だれでもわれわれの仕事をじゃましようという者があれば、断然戦っていくつもりでいる。戦いは好まんが、目的のためには戦いも辞さぬ、これが同志一同の誓言なんだ」
　神保も負けずにやりかえしてきた。
「そちの言い分は一応もっとものように聞こえるが、天下の法が定まって、天下の民がそれによって互いに泰平をよろこんでいる国においては、やはり天下の秩序をみだすものである。庶民の安寧秩序の責任を持たぬ者が、庶民から御用金を取りあげる権利はないはずだ。よく考えてみるがよい」
「いわれるまでもなく、われわれが今は天下の法に背いていることはよく承知している。ただ、われわれは善良な庶民にそう迷惑をかけていないつもりだ」
「よろしい。それだけ承知しているならば、公儀の手で押し込みとしてあげられる前に、一日も早く目的に向かって善処してはどうか」
「その点は再考してみよう」
「では、ここを通るぞ」
　神保はようやく納得したようである。
「どうぞ御自由に」
「ぴよ、まいれ」
　鶴七郎は芳公をうながして、尾張屋の横手の堀っぷちを松永橋のほうへ歩き出す。神保隼人は用心深くしばらくそれを見送ってから、張り番といっしょに舟に乗りこんだようだ。
「ああ、驚いた。本物は今夜、尾張屋へ押し込んでいたんですねえ、殿さま」
　芳公はほっとしたようにいう。
「うむ、悪いことはできぬものだな。神保党がつかまるのも、もうそう遠いことではあるまい」
「どうしてです」

「隼人という男は、ともかくも意地を持っているようだが、ああいう烏合の衆は、どんなによい目的を持っていても、大金が目の前に集まってくると、ついめいめい勝手な欲が出るものだ。自然、仲間割れをする。気の毒だが、隼人という男は仲間に切られるかもしれぬな」
「ちょいとかわいそうですね、殿さま」
芳公は思わず言ってしまってから、
「こいつはいけねえや。人のことどころじゃねえ。もうここは仙台堀なんだからな」
と、急にあたりを見まわしながら、首をすくめた。
どこかで九つの鐘を打ち出している。

匕首が飛ぶ

やがて、松永橋をわたった鶴七郎は、角屋敷の長い塀を通りこしてから、ふっと立ちどまった。
一足うしろから歩いていた芳公は、思わずその裏木戸のあたりを見まわして、あっと息をのむ。塀の上から往来へのびている庭木の様子といい、雑草がそのままはびこっている具合いといい、たしかに、ここは空き屋敷の裏木戸に違いない。
「殿さま、ここのようですね」
「うむ。ぴよ、そこの木戸をあけてみよ」
「はい」
ここがやつらの呼び出し状にあった焼け屋敷だとすれば、むろん、この中に清太郎とお蓮の二人はとりこになっているはずだし、千両玄蕃は例の四天王のごろつき浪人や子分どもを狩り集め、十分手くばりをしてこっちを待ちうけていることになるのだ。
――烏のおじさんは、ついてきているんだろうなあ。
その陰供の烏松を入れても、こっちは三人きりなのだから、木戸に手をかけた芳公は、さすがに胸がどきどきした。

「あっ、あきましたよ、殿さま」
「さようか。わしについてくるがよい」
鶴七郎はなんのためらう色もなく、先に立って木戸の先へはいる。そこに深い森があって、雑草に埋もれてはいるが、奥へ通じる小道がついているようだ。
――殿さまはちっともこわくないのかなあ。
芳公はまったく感心してしまった。鶴七郎はまるで自分の家の庭へでもはいっていくように、平気で奥へ歩きだしたからである。
その森を出はずれると、急にがらんとした広場へ出て、右手に焼け残った土蔵が一棟、案の定、そのあたりの積み石の上へゆうぜんと腰をおろしてこっちを見ているのは、千両玄蕃に違いない。
左右に四天王をはじめ、取りまきのごろつき浪人や、やくざどもが二十人ばかり、そら来たぞと言いたげに、いずれも殺気立っているようだ。
「けっ、だれも出迎えに出やせんねえ、殿さま。礼儀を知らねえやつらだ」
こうして敵の顔を見てしまうと、芳公も急に度胸がすわってくる。
「ぴよ、まいれ」
鶴七郎は月かげを踏んで、ゆっくりと千両玄蕃の正面へ進んでいく。取りまきどもなどには目もくれようとしない。その堂々たる貴公子ぶりに、取りまきどもはわざと力みかえった面構えはしているが、まるっきり格式が違うのだから、内心みんな気おされ気味で、思わずみんなしいんとしてしまったようだ。
「浜町どの、よくまいられたな」
玄蕃はさすがにふてぶてしく正面を切りながら、にやりとわらってみせる。貴公子だろうと、将軍だろうと、こうしてわなに引っかかってくれば、もうこっちのものだという気持ちがあるのだろう。
「玄蕃、これが一世一代の男の知恵をしぼった

「その方の今夜の招宴か」
　鶴七郎の声音には、いくぶんさげすんでいるようなひびきがある。
「御意にかないませんかな」
「多少小細工にすぎたきらいがあるようだな」
「その小細工に乗せられたのだから、あまり大口はきけないでしょう」
「いや、たとえ小細工でも、人命には替えられぬ。その方どもは、人の命を粗末にしすぎるからこわい」
「さよう、じゃま者には眠ってもらう、それがわれわれの主義でしてな」
「その方は、先日、三日のうちにかならず棚倉屋の娘を取りかえしてみせると、わしの前で大音を吐いていたようだが、あれは失敗いたしたようだな」
「いや、あなたさまさえ横からよけいな小細工をしなければ、成功していたでしょう」
　玄蕃はぬけぬけとそんな負け惜しみを口にする。
「わしは事の成否をここでとやかくいうつもりはない。その節、その方が前金として棚倉屋から持参した百両、あれは棚倉屋へもどしてつかわしたであろうな」
　不意を突かれて、こんどは玄蕃もぐっと返答に窮したようだ。
「悪党は悪党なりに義理のかたいものだと聞きおよぶ。義理を立てなくては、いかに悪党でも、親分子分は成り立つまい。親分があまり身勝手なことばかりしていると、やがて、子分からも愛想をつかされるようになると思うが、どうかな」
「その御心配は御無用。――今夜は一万両の売り物を用意していますでな、棚倉屋の百両はいうまでもなく、子分どもへも十分小判がばらまけるというもの。――まず、金主どのに厚くお礼を申しあげる」
　玄蕃はたちまち図太さを取りもどして、小バ

カにしたような会釈をしてみせる。
「玄蕃、金もほしい、わしの首もほしいでは、少し欲が深すぎはせぬかな」
「いや、そのかわり、清太郎お蓮のふたりの命だけは助けてつかわします。約束ですからな」
「さようか。しからば、まず両人の無事な顔を見よう」
「一万両のほうを先に見せていただこうか」
「無理を申すものではない。一万両という金がふところへ入れて運べるか。金はその方の知恵で、取るようにして取るがよい」
「なるほど――」
　玄蕃はその言葉のあやを解こうとするように、じっと鶴七郎の顔を見すえる。
　鶴七郎との距離は二間、しかも、鶴七郎は例によって差し添え一本しかささぬ着流し姿だ。むろん、抜き打ちはきかないし、これだけの人数でかこんでいるのだから、今夜は逃がすはずもない。にもかかわらず、どうしてこんなに平気でいられるのか。いや、どんな成算があって、一人でこんなところへ乗りこんでくる気になったか。それからして、あまりにも無造作すぎる。
　――そうか。こわいもの知らずで甘く育ってきているから、ふたりを無事にかえせばお前の首も許してやろうで、話し合いがつくものと高をくくっているんだな。知恵で金を取れとは、その上で棚倉屋へでも手紙をつけてくれる気なのだろう。
　玄蕃は玄蕃流にとっさにそう考えて、それならこっちとしても大成功だと思ったから、
「よろしい。では、まず両人をここに引き出してお目にかけるが、あなたが一足でもそこを動くと、ふたりはむろんのこと、あなたの命も即座にもらいうける。それでよろしいか」
と、念を押してみた。
「よいようにせよ」
　鶴七郎はわらっている。

「綱、金助、浜町どのの両側につけ。男の約束だから遠慮はいらぬ」
玄蕃は用心深く四天王綱右衛門と金助に監視をいいつける。
「動いたら切ってもいいんですな、御前」
「かまわぬ。約束だ」
こんな時ばかり約束をふりまわしたがる手前勝手な玄蕃である。
綱右衛門と金助は、鶴七郎の両側へ行って、抜き打ちのきくところに立つ。
「貞五郎、政、蔵から清太郎とお蓮を引き出せ」
「はっ」
貞五郎と中盆の政が、土蔵のほうへ走り寄っていく。
――やっぱり、あの蔵の中か。
芳公はごくりとつばをのみこみながら、そっとふところの匕首に手をかける。
玄蕃は姉お菊の敵だ。いざとなったら、かなわぬまでも刺しちがえてやろうと覚悟したのだ。
政がまず蔵の観音びらきをひらいて、それから中の格子戸をがらがらあける。
「これ、清太郎、お蓮の両人、本所割り下水の御前がお呼びだ。出てこい」
貞五郎が暗い蔵の中をのぞきこみながら声をかけた。
庭中の目がその戸口へ集まっている。鶴七郎を監視しているはずの綱右衛門と金助まで、うっかりそっちへ目をやっているのだから、こういうごろつきどもはまったくたよりにならない。
「おい、貴様たちは足も縛られているのか」
貞五郎はつかつかと土蔵の中へはいっていった。
むろん、一同は、まもなく清太郎とお蓮がなわつきのまま引き出されてくるものとおもって、ぽかんとそっちを見ていると、
「あっ、野郎」
戸口に立っていた犬政が、のけぞるようにして絶叫した。
「どうした、政」
玄蕃がはっと立ちあがる。
とたんに、戸口へすっと出てきたのは、抜き身を引っさげた清太郎だった。うっかりそばへ寄った貞五郎に当て身をくれて、素早くその腰の刀を奪ってきたのだろう。
「うぬ、切れ、切れ。のがすな」
がくぜんとして玄蕃が叫んだのと、
「畜生――」
鶴七郎のうしろから芳公が躍り出しざま、蔵のほうへばかり気をとられている玄蕃の胸もと目がけて匕首を力一杯投げ飛ばしたのと同時、
「わあッ、――うぬッ」
芳公の一念凝った匕首は、きらっと月光にきらめきながら、物の見事に玄蕃のみぞおちのあたりへ突きささっていた。
「あ、やった」
「おのれ」
一番手近にいた綱右衛門と金助が、うろたえ気味に芳公のほうへ切って出ようとしたが、
「えいっ、――とうっ」
それより早く、鶴七郎が差し添えを抜き打ちに、右を払い、つばめがえしに左をなぐ。
「わあッ」
「ううむ」
綱右衛門は左の腕をひじのあたりから切り落とされ、金助は高股を深く切りさかれて、悲鳴をあげながら二人同時にのけ反っていた。
「ぴよ、森の中へ駆けこめ」
「はい」
芳公がばたばたと森のほうへ走りだす。
「それッ、逃がすな」
二、三人が気がついたように後を追いだしたが、
「一同、しずまれ。無益の血を流してはならん」
鶴七郎が凜然と叱咤すると、それでなくてさえ目の前で玄蕃が倒れ、綱右衛門、金助まで深

手を負って悲鳴をあげているのだから、敵はみんな啞然として、まったく戦意を失ってしまったようだ。しかも、そのまごまごしている敵の頭の上へ、ひゅっ、がらがら、がしゃんと、かわらが飛んでくだけ出したのである。

「畜生、蔵の屋根だ」

「あぶねえ、逃げろ」

一人がそう叫んでばたばたと逃げだすと、もうひとたまりもない。浮き足立っていた敵は、いっせいに四方へ逃げ散りだした。

大川の月

まもなく、鶴七郎たちは烏松が都合してきた舟に乗って、無事に仙台堀から深夜の大川へこぎ出していた。

お蓮はさっきから、ともすれば沈みがちな清太郎の顔色ばかりうかがいながら、心配でたまらない。

ひょっとすると、この人、殿さまをお屋敷までお送りしておいてから、死ぬ気でいるんじゃないかしら。

なにも今夜のことは、この人が悪いのではないのだ。あたしさえ後をつけたりしないで、この人一人だけなら、あの時敵のとりこにならずにすんだのである。

そのことは、さっき、殿さまにすっかりわけを話して、よくわびておいた。

「心配いたすな、今夜のことは、だれが悪い、だれがいいではない。こうして一同が無事だった、それだけで十分である。よけいなことは気にせぬがよい」

殿さまはそういって、ちゃんと許してくれている。

が、この人は一本気だから、それでは気がすまないのかもしれぬ。自分のために大切な殿さまをあんなあぶない目にあわせた、無事だったからそれでいいとは考えられないのかもしれぬ。

そういえば、あの蔵の中でやっとなわが解け

て両手が自由になった時、この人ははじめてあたしをしっかりと胸の中へ抱きしめて、

「お蓮、おれたちはこうしてどうやら手だけは自由になったが、この世で夫婦になるってわけにはいかないかもしれないな」

と、はっきりいっていた。

こっちは蔵の中から出られないことを言っているのかと思ったから、

「気を落としちゃいやだ。なんとかしてここを出られる工夫をしなくちゃ」

と、はげましながらも、男の胸の中に抱かれているのがうれしくて、たとえこのまま死んだって、二人でならかまわないと、そんな気持ちでいた。

「なあに、気など落としちゃいない。いまに見ているがいい」

「どこか抜け出せるところはないかしら」

「匕首一本じゃ、おそらく無理だろう。そんな無理をしなくたって、蔵の戸はいまに敵があけてくれる」

その時から、この人は殿さまが呼び出されてくることを考えていたのらしい。だから、蔵の中へ踏みこんできたやつを当て身で倒して、刀を奪った時、

「お前はここを出るな」

というなり、外へ出ていった。

あの時は切り死にする気だったのだろう。

それが、意外な芳公の働きで、あっけなく敵はみんな逃げ出していた。

こっちは殿さまをはじめ、五人ともこうして無事だったのだから、みんなよろこんでいるのに、この人だけはなんとなく沈みこんでいるのである。

「あたしにはちゃんとわかる。どうしても死ぬ気でいるんだ」

お蓮は思わずため息をつかずにはいられない。そして、しようがありゃしない、この人が死ぬ気なら、あたしもいっしょに死のうと、悲

しく覚悟するほかはなかった。

「ああ、そうだ、お蓮ねえさん、今夜殿さまは神保党のやつらもしかりつけてやったんだぜ」

大川へ出るとまもなく、舳先の方に鶴七郎といっしょに座っている芳公が、思い出したように話しかけてきた。

「まあ、神保党にもお出会いになったんですか」

お蓮がびっくりすると、清太郎もおどろいたように鶴七郎のほうを見る。

「やつらは、上ノ橋の角の尾張屋へ、今夜押し込んでいたんだ。二人の見張りがいきなり短筒を殿さまに向けてるところへ、大将の神保隼人ってやつが出てきてね、殿さまが玄蕃の呼び出し状を見せて、人命を助ける方が先だっておしかりになったもんだから、無事に道をあけてくれたんだ」

「ぴよ、それは少し違うぞ。わしは、人命のほうが先だから、今夜のところはお前たちは見のがしておくのだ。しかし、夜盗はどんな理屈があっても夜盗なのだから、早く善処するようにと忠告して、道をあけさせたのだ」

鶴七郎が微笑しながら訂正する。

「そうでしたね。やつらのほうが恐れ入って道をあけたんですね。けど、殿さま、神保のほうがこじき玄蕃なんかよりよっぽど話がわかるんじゃないでしょうかねえ」

「うむ、あの者たちは目的があって、悪事を方便としている。悪事を働かなくては生きていけない者とは少し違うが、しかし、人が迷惑をすることはおなじだな」

「どうでしょうねえ、殿さま、やつらは明日の晩も千両強盗をつづけますかねえ」

艪をこいでいる鳥松が、こっちから聞いた。

「あの時、おじさんはどこにいたんだい」

「おれは仙台屋敷の土塀の上にいたんだが、あそこからかわらを投げても間にあわないんでね、いい心配をしちまった」

「けど、おじさん、よくあの土蔵の屋根へのぼ

れたなあ、おいらすっかり感心しちまったぜ」

「なあに、鳥には羽根ってものがあるさ。それより、ぴよ公は、いつ手裏剣のけいこをしたんだ。今夜はばかにうまくいったなあ」

「本当は前に、そばへ行ったんじゃとてもかなわないから、匕首を投げて姉さんの敵討ちをしてやろうと思って、ずいぶん一人でけいこしたことがあるんだ。そのうちに、遠くから匕首を投げて敵討ちをしたんじゃつまらない、体ごとこの手で突き刺してやりてえと思って、けいこはやめちまったんだけど、今夜は夢中だったんだ。つい匕首を投げ飛ばしていたんだ」

「ぴよ、今夜はよくやった。姉の敵討ちができてよかったな」

鶴七郎がそばからしみじみという。

「殿さまのおかげです。けど、殿さま、おいら思ったほどうれしくないんです」

芳公はなにかしょぼんとしているようだ。

「どうしてかな」

「おいらがせっかく敵討ちをやっても、死んだ姉ちゃんは生きてかえってきてくれやしないし、——それより、おいら、お蓮ねえさんがさっきからいやに沈みこんでいるのが心配になってしようがないんでさ」

「まあ、あたしは、あたしはちっとも沈んでなんかいないのに——」

はっと胸を突かれたお蓮は、あわてて言いながら、思わず涙が出てきて、そで口を目へ持っていく。

「ぴよ公、ほっておくがいいや。お蓮ねえさんは清さんと蔵の中で痴話でもしたんだろうよ。第一、清さんがいけねえさ」

鳥松がそっぽを向きながらいった。

「清太郎——」

鶴七郎がしずかに呼ぶ。

「はい」

「自分の意地のために、はたの者に悲嘆を見せるような意地は、かた意地だとは思わぬか。男

の意地とは、あくまでも生きる意地でなければならぬ。たとえば、今夜落ち度があったら、明日はそれをつぐなう、それでよいのだ」

「はい」

「そちには老母がある。妹がある。お蓮も、ぴよも、烏松も、みんなそちのことを心配している。自分一人の体だと思ってはならんぞ」

「申しわけございません」

清太郎はそこへじっと両手をついて、うなだれてしまう。

「お蓮――」

「はい」

「清太郎は今日からそちにあずける。これはいっこく者ゆえ、かげ身になって間違いのないように面倒を見てやってくれ」

「殿さま、ありがとうございます」

お蓮はかっと体中が熱くなってきて、もうなんといっていいのかわからない。わけもなく涙ばかり出てくる。

「おじさあん」

芳公が艫のほうへ呼んだ。

「なんだ、ぴよちゃん」

「まだ魚屋起きてるかなあ」

「そうだなあ、まだ河岸へ買い出しに出かけるにゃ、少し早すぎるようだな」

「ようし、魚屋にたのんでさ、明日は一番大きいたいを河岸から買ってきてもらおうや」

「酒も新川へ四斗樽をたのむかな」

「長屋が一軒あくなあ、おじさん」

「そいつは、ぴよ公がお嫁をもらう時まで借りておこうや」

「けっ、うまくいってらあ。おじさんもお嫁をつれてきて、おいらをあいた家へ追い出す気じゃないのか」

「さては見ぬかれたかな」

そんな冗談口をたたきあいながら、烏松も芳公もうれしくてたまらないようである。

月のあかるい深夜の大川だった。

「殿さま――こんなことというとしかられるかなあ」

「なんだ、申してみろ」

「殿さまはいつお嫁さんをもらうんです」

「わからんなあ」

「おいらはまだ駄々姫さまってのに会ったことはないが、ずいぶんお勇ましいお姫さまなんですってね」

「芳ちゃん、そんな失礼なこと、言うもんじゃありません。尾州さまのお姫さまに、芳ちゃんが会えるはずはないじゃありませんか」

お蓮が、ようやく話の仲間へはいってきた。

「そうかなあ。おいらこれでも浜町さまの第三人目の家来なんだぜ、それでも会えねえか、お蓮ねえさん」

「むずかしいでしょうねえ。あちらさまは殿さまと違って、お行儀がとてもやかましいんだから」

そういうお蓮も、また駄々姫には会ったことはない。が、いよいよ鶴七郎のお声がかりで清太郎の女房ときまってみると、駄々姫に仕えている浪江とは姉妹ということになるのだから、駄々姫は自分にもお主筋というわけになってくる。なんとなくなつかしい気がしてくるからふしぎなものである。

翌朝――。

清太郎が目をさましたのは、むろんお蓮の家であった。

「祝言の杯など後でいい。殿さまのお声がかりなんだから、今夜から夫婦になるのが本当だ」

烏松がゆうべそういいはって、無理に清太郎をお蓮の家へ押しこんで、外から戸をしめてしまったのである。烏松にすれば、清太郎を一人でおくと、またどんなことにかた意地をおこさないともかぎらないと、それが心配になったのだ。

朝になれば、三人はそろって浜町へごきげんうかがいに出なければならない。いつもはお蓮

の方が三人を誘うことになっているのだが、今朝はなかなか出てこないので、鳥松と芳公の方からお蓮の家へ押しかけていった。

「おはようござんす。もうお目ざめでござんすか」

　鳥松がわざと外から声をかけると、

「おじさん、ちょっとあがってください」

と、お蓮がいやに真剣な声で呼んだ。

　おやと思って、芳公にはちょっと待っていろと目くばせしておいて、

「どうしたんだね。あさからもう夫婦げんかってわけでもなかろうな」

　鳥松があがっていってみると、二人ともちゃんと身支度をするにはして、長火ばちに向かいあいながら、なにか言いあっていたところらしい。

「どうした、清さん」

「いいえね、あたしが今日はお店をしまってこようと思うと相談したら、この人はまだいけないっていうもんだから」

　お蓮がかわってそういうのだ。

「店をしまうって、だれかにゆずってしまおうっていうのかね」

「ええ。あたしはもうこうなったんだから、水商売はいやだ、普通のおかみさんになりたいって言ったんです。この人がまだ早いっていうのは、なにかわけがあるに違いないと思って、それをいま聞こうとしているところなんです。──ねえ、清さん、おじさんの前でなら言えるでしょ。本当のことを言ってくださいっていうのに」

　お蓮は本当に真剣になっているようだ。

「清さん、お前さん本当に腹になにかあってそんなことを言ってるのか」

　その腹というのが鳥松にはおよそ読めるような気がするので、こっちも思わず、すわりなおさずにはいられなかった。

「松つぁん、そんなに心配してくれなくてもいいんだ。お蓮は少しおおげさなんだから」

　清太郎は苦わらいをしながらいう。

「そうか。まあ、おれにはおよそ清さんの腹が読めないでもないが、朝っぱらから女房の顔色をかえさせるようなことは、つつしまなくちゃいけねえ。御奉公にさしつかえるようなことでもあると、それこそ、せっかくいっしょにしてくれた殿さまに、申しわけのないことになるからな」

　鳥松のいうことは、さすがに苦労人だけに、思いやりのある中にも、ぴんと一本筋のとおったところがある。

「あら、あたしが悪かったかしら、おじさん」

　御奉公といわれたのが、がつんと胸にこたえたらしく、お蓮が急にすまなそうな顔をする。

これから浜町さまのごきげんうかがいに出る亭主に、少しでも気まずい思いをさせて送り出すのは、貞女のすることではないと気がついたのだろう。

「まあいいやな。おじさんはこれでなかなか物わかりのいいほうなんだから、殿さまの前へ出ても、こんな話なんか口の端へも出しゃしねえ。安心しな」

「すみません。どうかお願いします」

　お蓮はちょっと鳥松をおがんでみせて、

「清さん、お店の方はあたし、もうあんたのいうとおりにしますから、きげんを直して浜町へ出かけてください」

　と、たのむようにいう。

「そうかしら。──じゃ、あたしは後かたづけがすんだら、すぐお店へ出ます」

「そうするがいい。ただなあ、浮気なんかしちゃいけねえぜ」

「あんなことを――」
　お蓮はうれしそうに、とろんとした目で清太郎をにらみながら、もうさっきの強い顔はどこにもない。
「出かけようぜ、清さん。夫婦げんかは、犬も食わねえとは、よくいったもんさ」
　烏松は苦わらいをしながら立ちあがる。
「どうもすみません」
　お蓮はただあやまるばかりだ。
　玄関から路地へ出ると、芳公が待っていて、
「あれえ、お蓮ねえさんは今朝はいっしょじゃないのか、おじさん」
と、烏松にきく。
「あたしはまだ後かたづけがあるのよ」
　上がりかまちまで清太郎を送って出てきたお蓮が、かわって答えた。
「お蓮ねえさん。御近所の手前もありますからね、明日の朝は清太郎あにいより少し早く起きたほうがいいなあ」
「なまおいいでない。あたしがいくら早く起きたって、だんなさまが朝寝をすればしようがないでしょ」
「なあるほど。――おつかれさんでござんす」
「まあ、芳んべったら。おじさん、少しはしかってやってくださいな」
「ごめんなさい。行ってまいりやす」
　芳公はぴょこんとおじぎをして、路地口のほうへ駆けだしてしまう。
「なあ、清さん、清さんが殿さまのことばかり考えているように、女房なんてものは亭主のことだけしか心配していないもんだろうと思う。男とは違うんだから、あんまり奥歯に物のはさまったような口は、なるべくきかないほうがいいぜ。罪だからな」
　いつもの薬研堀の通りへ出てから、烏松がしみじみといってくれる。
「ありがとう。女ってのは、たしかに男とは違うな、松つぁん。わかり切っているようなことでも、はっきり聞かなけりゃ承知できないらしい」
「そういうもんらしいな。かわいいと腹で思っていただけじゃ承知しない。ちゃんと口に出して、愛(う)いやつとかなんとか言ってやらなくちゃな」
「おれはどうも、お蓮といっしょになるなあ、ちょいと早すぎたような気がするんだ」
「そんなこともなかろう。まんざらきらいってわけでもなかったんだろ」
「そりゃきらいじゃない。それだけに、おれがもし死んだらどうするだろうと、かわいそうになるのさ」
「わかってるよ、清さん。いつでも殿さまのために死のう、それがあるから、あねごに水茶屋はやめるなといった。その気持ちは、ちゃんとわかってるんだ。けどなあ、女ってものは一本気なだけに、いざとなると男より度胸がすわってくるもんだ。今から死んだ後のことまで心配することはないやね。それとも、なにか、死んだ後も後家をとおしてもらいたいなんて男の欲が、清さんにはあるのか」
「なるほど。人間死んでしまえばなんにもわからなくなる。やっぱり、生きている間にかわいがってやるほうが本当かもしれないな」
「そのとおりさ。死にいそぎも男の恥だが、大っぴらに女房がかわいがれねえなんて生半可なのも、男の自慢にならねえとおれは思うぜ」
　いうべきことはぴしゃりといっておく烏松である。
　元柳橋をわたって、浜町河岸へかかったとたん、
「おじさん、あの船はなんだろうな」
　芳公が大きな声で、向こうを指さしながらどなった。
　ちょうど鶴七郎屋敷の裏河岸の桟橋(さんばし)あたりへ、立派な屋形船がとまっている。烏松ははっとして、

「清さん、尾州さまの船じゃないか、あれは」
と、清太郎を振りかえる。
「そうらしいな。たしかに、この間の船だ」
「しめた。すると、清あにい、尾州の駄々姫さまの船だね。早く行ってみようや」
芳公はいきなり駆け出そうとする。
「待て、ぴよ公、尾州さまのお船だと警固がきびしい。うっかり近寄ると、しかられてしまうぞ」
「だって、兄貴、お姫さまは殿さまのところへきたんだろう。おいらはこれでも殿さまの家来のうちだぜ。それでもしかられるんか」
「いや、われわれのこのかっこうでは、殿さまの家来ではとおらぬ。警固の士の中に知った顔でもあれば別だが、とにかく行って話してみよう。怪しまれないようについてくるがいい」
清太郎は侍の出だから、警固の士の苦労というものをよく知っている。なるべく迷惑をかけないようにという心づかいがあるのだ。
「むずかしいもんだなあ、兄貴」
「そりゃ御三家さまだからな、へたなまねをすると、無礼討ちにされてもそれまでの話だ。侍のことは清さんにまかしておかなくちゃいけねえ」
烏松がわらいながらたしなめる。
「けど、おじさん、おれは前から、一度でいいから駄々姫さまってのを拝んでみてえと思っていたんだ。そこんとこをなんとかうまく取り計らってもらいたいもんだな」
話しながら鶴七郎屋敷のほうへ近づいていくと、屋形船はまだそこの桟橋へついたばかりらしく、供船からあがった警固の者たちが、いま屋敷のこっち角をかためたところだ。
屋形船からは一人の腰元が桟橋へあがって、供侍に迎えられ、案内を請いに行くのだろう、そこの横町から表門のほうへまわっていくところである。
「清さん、あれは浪江さんだぜ」

「うむ」
「すっかり立派なお腰元さまになっちまったなあ」
烏松はうれしそうに目を細めている。
「へええ、おじさん、あの腰元が清あにいの妹の浪江さんてのか。ずいぶんべっぴんだなあ」
芳公は目を丸くして見送っている。
清太郎は、浪江がそこの横町へ曲がっていってから、警固の侍たちのほうへ進んでいった。
「失礼でござんすが、手前どもは浜町さまの通いの小者どもで、これから屋敷へ顔を出すところなんですが、まだここを通っちゃいけませんでしょうか」
「ああ、お前たちは、たしかこの間、向島で会った時も、浜町さまの供をしていた者だな」
幸い警固の士の中に、その時の侍がいてくれたようである。
「はい、お見それいたしましたが、手前はあの時の清太郎と申します者、これは松五郎、芳造、みんな相棒でござんす」
「屋敷へはどこから出入りするんだな」
「その横町にあります中門から出入りいたします」
「そうか、お前たちならかまわぬだろう。おい、だれか中門まで送ってやれ」
「はっ」
若侍の一人が進み出てきた。
「お手数をおかけいたしやす」
「ああ、これこれ、お前たちは浜町さまと親しく口がきける者たちのようだが、今日は姫君さま、にわかの御来訪でな、浜町さまはなんとおぼしめされるか、あいなるべくは御対面くださるよう、お前たちからもしかるべく尽力をたのみおくぞ」
警固の士は呼びとめて、そう口をそえる。
「かしこまりましてございます」
中門まで若侍に送ってもらって、屋敷うちへはいってしまえば、もうこっちのものである。

「お供さんたちも、相手が駄々姫さまじゃ骨が折れるとみえるな」
いつものように庭にまわって、書斎の廊下のほうへ進みながら、烏松はわらった。
「おじさん、わらいごとじゃないぜ。もし、殿さまが会いたくないなんて言い出して、一番困るのはお使者に立った浪江さんじゃないのか」
「ちげえねえ、いそいでみよう」
烏松の足が早くなる。
しかし、清太郎はたぶん大丈夫だろうと踏んだ。屋敷中がなんとなく色めき立っているからである。
例の書斎の廊下へまわってくると、鶴七郎はいつもの姿で、いま庭下駄をはいて、浪江をともない、ふらりと庭へおりるところであった。
「殿さま、おはようございます」
「おお、一同まいったか」
「えらいお客さまに押しかけられましたね。――浪江さん、御苦労さま」
烏松はだれにも如才がない。
浪江は黙って、丁寧におじぎをかえしただけである。
「殿さま、お客さまにお会いくださるんでござんしょうね」
烏松はまずそれを聞かずにはいられない。
「うむ、浪江の使者ではな、そうあっさりことわるわけにもいくまい」
「そうでござんすとも。向島の時は、あのお姫さまにちょいとお世話になっているんですからね、物には礼心ってことがありやす。それに、この間の飴玉のお礼だってありやすし、――はあてな、ことによると、お姫さま、あの時の短筒の弾を、おねだりにきたのかもしれやせんね」
「本当のねらいは、おそらくその辺にあるのだろうな」
「そいつはあぶない、生兵法は大けがのもとだ。困ったことになりやしたね」
わがままで勇ましい姫君のことだから、一つ

へそが曲がると、どんなことで銃口を家来どものほうへむけないとはかぎらない。短筒は正直だから、ねらって引き金さえひけば、きっと弾が飛び出す。あっ、しまった、とあわてたところで、もう間にあわないのである。
「殿さま、お姫さまがどんなにおねだりになっても、弾だけはあげちゃいけやせん。第一、御家来さん方にうらまれるし、うっかりお姫さまが御自分でけがをしても、うらまれるのはやっぱり殿さまでござんすからね」
「うむ。しかし、お駄々どのがおとなしく承知するかな」
鶴七郎はわらっている。
やがて、そこはもういつも鶴七郎がしのびの時出入りをする裏門だった。今日は門のとびらが八文字にあけさせてある。
「お前たちは、なるべく目立たぬように控えているがよい」
鶴七郎は門内へ烏松たちをとどめておいて、浪江だけをしたがえ、つかつかと往来へ出ていった。
その往来の向こうの桟橋に尾州家の屋形船がついていて、往来はすでに通行止めになり、その河岸っぷちに、この間の供頭役野々山弥太夫が、供侍数人をしたがえて、こっちの返事を待っているところだ。
「弥太夫、久しぶりだな」
「これはこれは、浜町さま、じきじきのごあいさつにては恐れ入ります」
「いや、わしはこのとおり無位無官、格式張ったことは無用だ。今日はお駄々どのが舟遊びの途中、屋敷へ立ち寄ってくれるそうで、ちょうどよい、まだこの間の向島のときの礼も言っていないので、出迎えにまいった。お駄々どのにお目にかかろう」
「さっそくのお言葉にて、ありがたきしあわせに存じます。ただいま姫君さまにお取りつぎいたしますから、しばらくお待ち願います」

弥太夫がいそいで船の方へ立とうとすると、
「鶴七郎さま、おじゃまにうかがいました」
　声を聞きつけた駄々姫は、もうさっさと船をおりて桟橋をあがってくる。どっちも変わり者だから、家来の取りつぎなどは待っていない。
　桟橋をあがってきた駄々姫は、掻取り姿もきらびやかに、いつもながら伸び伸びとしたあざやかな姫君ぶりである。
　浪江が会釈をして、つと姫君の後ろへつきしたがう。
「お駄々どの、よくまいられましたな」
「駄々は、この間から鶴七郎さまをおたずねしたかったのですが、あいにく船が修繕中とかで、出せなかったのです」
「それはそれは、意地の悪い船ですな」
　家来たちも駄々姫の目的がわかっているので、なるべく船を修繕中にしておきたかったに違いない。
「弥太夫、その方どもは表門へまわるがよい。突然のことでなんの用意もないが、茶など支度がさせてある」
「はい、お造作にあずかります」
「お駄々どのは、わしがここから案内いたそう。裏門からでは失礼かな」
　鶴七郎がわざと姫君の顔を見ていうと、
「いいえ、駄々はどこからでもかまいません。もし、鶴七郎さまのように一人でどこへでも出ていけたら、どんなにいいだろうと、いつもうらやましく思っているのですから」
と、本当にうらやましそうな顔をする。
「よろしい。そんなら、こんど鶴がそっと迎えに行ってあげよう」
「本当ですか、鶴七郎さま」
「本当です。——とにかく、まいりましょうかな」
　鶴七郎は駄々姫を誘って、裏門から屋敷にはいった。姫君の供は、浪江一人である。
　つまらない知恵はつけないでくれればいいが

なあというような顔をして、弥太夫たちが見送っていた。
「そうそう、お駄々どの、この間は飴玉をありがとう」
　鶴七郎は少し考えがあるので、わざと家来たちは一人も近づけずに、自分で姫君を築山のあずまやのほうへ案内しながら、気軽にこの間の礼をいってみる。
「ああ、鶴七郎さま、今日は駄々に短筒の撃ち方を教えてください」
　果たして、姫君は誘い出されたように、それを切り出してきた。
「短筒を持ってきたんですか」
「いいえ、あの短筒は乳母に取りあげられてしまいました」
　これはちょっと意外である。
「取りあげられたんですか」
「ええ、そんなあぶないものは、ぜひ乳母にあずけてくれ、あずけてくれなければ自害すると、泣いてたのみますので、しかたありませんでした。乳母はきっと家老どもに言いつけられたのかもしれません」
「なるほど、ありそうなことですな」
「ですから、今日は別の短筒をいただいて帰ります。それから、弾も。鶴七郎さまは火薬さまなのですから、短筒も弾もたくさんお持ちなのでございましょう」
「それは持っています。しかし、また乳母が自害すると騒ぎだしはしないかな」
「いいえ、こんどはそっとかくしておきますから大丈夫です」
「しかし、短筒というやつは、撃つと音がしますからな、すぐわかってしまう」
「撃たずに持っているだけならいいでしょう」
「撃たない短筒など持ったってしようがないでしょう」
「いいえ、いざという時には撃つのです。ですから、今日は撃ち方も教えてください」

いうことも少し変わっているが、駄々姫の短筒熱はやっぱり相当高いようである。
「しばらくここで休んでいきますかな」
鶴七郎は予定のとおりあずまやへはいって、姫君をそこへ掛けさせる。
浪江はあずまやの外へややさがって控え、鳥松、清太郎、芳公の三人はそれより後ろのほうへ、目立たないようにひざまずいている。
それ以外にはだれもいない、若葉につつまれた閑静なあずまやである。
「お駄々どのは今、いざという時には短筒を撃つといわれたようだが、そのいざというのは、どんな時なのです」
鶴七郎はわらいながら聞いてみた。
「その前に、駄々はもう一つ鶴七郎さまに教えていただきたいことがございます」
「どんなことですか」
「駄々は鶴七郎さまのように、一人で街へ出てみたいのです。どうすれば家来たちにわからないように、屋敷をぬけ出せるでしょう」
これはまた大変なことを考えている姫君である。
しかし、鶴七郎にもそのおぼえはある。まだ城にいたころ、一人で街を歩いてみたらどんなにのびのびとしてたのしいだろうと、毎日そればかり思い暮らしたことがあった。
今の駄々姫が、やっぱりそれなのだろう。
「お駄々どの、それは少し無理だな。第一、お駄々どのは一人で街へ出ても、道がわからないでしょう」
「浪江だけはつれていきますから、大丈夫です」
「しかし、女二人きりではなあ。街には人さらいもいるし、おいはぎも強盗もいる」
「ですから、その時の用意に、短筒を持っていたいのです。悪者なら、撃ち殺してもかまわないでしょう」
きれいな目を輝かせているのは、もうそういう時のいろいろな場面を、あれこれと一人で夢

に描いて、たのしんできたのだろう。
「そうか、お駄々どのはただ短筒が撃ってみたいのではなくて、本当は一人で街が歩いてみたい、その時の用意に、短筒を持っていこうというのですな」
「駄々は鶴七郎さまのまねがしたくてしようがないのです。街を一人で歩いてみたら、どんなにおもしろいでしょう」
「さあ、それほどおもしろいところじゃありません、といっても、わしが意地悪をいっているとしか取らないだろうしな」
「おもしろいか、おもしろくないかは、自分で歩いてみなければわかりませんもの」
いうことだけは、なかなかはっきりとしている。
「しかし、尾州家の姫君さまでは、少しむずかしい望みではないかな」
「いいえ、鶴七郎さまならきっと駄々の相談に乗って、望みをかなえてくれると思いましたから、たのしみにしておたずねしたのでございます」
「つまり、男と見こんだというわけですか」
「ええ。鶴七郎さまは男らしく、お知恵がありあまるほどあるとうかがっています」
「ほめていただいて、どうもありがとう。お駄駄どのは人をおだてるのがお上手だな」
「ですから、いいお知恵をかしてくださいませ」
「困りましたなあ」
鶴七郎は苦笑するほかはなかったが、ふっと思いついて、
「では、お駄々どの、街を一人で歩く知恵をかしたら、もう短筒などというあぶないおもちゃはほしがりませんか」
と、念を押してみる。
「駄々は短筒よりも、街を一人で歩いてみたいのです」
「きっと、短筒のことは二度とねだらないでしょうね」

「ねだりません」
「よろしい。では、いい知恵を一つさずけてあげよう」
「お願いいたします。どうすればよろしいでしょう」
「考えてばかりいないで、実行することです」
「どう実行しろとおっしゃるのでございます」
「わかりませんか」
「ええ」
「お駄々どのは、江戸の街を一人で歩きたいのでしょう」
「そうです」
「ここには鶴七郎と、お駄々どのと、それから浪江の三人しかいません。実行する決心さえつけば、屋敷をぬけ出すぐらいなんでもないでしょう」
「まあ」
　駄々姫はさっと目を輝かして、みるみる顔へ血の気がさしてきた。
「駄々はこれからすぐに実行いたします。鶴七郎さまはやっぱりお知恵がございますのね。すっかり感心してしまいました」
「せっかく感心していただいたのだから、もう一つお教えしましょう。実行には勇気がいるということです」
「駄々は勇気を出します。まだ教えていただくことが、ほかにございますかしら」
「いや、勇気さえあれば、なんでもできるはずです。ほかにお教えすることはなにもありません」
「駄々、本当に勇気があるかどうか、ここで試してみたいと思います」
「よろしい、試してごらんなさい」
「鶴七郎さま、駄々はこれから一人で街へまいりますから、道案内を申しつけます。わかりましたね」
　さっそうと立ち上がった駄々姫は、くじゃくのように胸を張って鶴七郎に言いつけるのである。
　――これはすごい。
　鶴七郎は啞然と目をみはってしまった。

姫君の散歩

　鶴七郎は尾州家の駄々姫をつれて、裏門から大川端へ出た。
　しのびで、街を自由に歩いてみたいという駄々姫の希望は、できる機会に一度かなえておいてやらないと、二度とはできないことだし、一生それが心残りになるようなことがあってはかわいそうである。
　それに、一度でもそういう経験をしておくことは、姫君にとって生涯のたのしい思い出にもなり、決してむだなことではないのだ。
　供は腰元の浪江一人で、むろんその後から少し離れて鳥松、清太郎、芳公の三人がつづく。裏門を出た桟橋に尾州家の屋形船が待っていて、これには番士が残っているから、鶴七郎と駄々姫が肩をならべて出てくると、びっくりした目をみはりながら、あわてておじぎをした。もう姫君の御帰館かと勘ちがいをしたのだろう。
「これ、鶴七郎がしばらくお駄々どのを借りていく。すぐにもどるから、問う者があったら騒がぬようにと申しておくがよい」
　鶴七郎がそう声をかけると、
「はっ」
　と答えた番士たちは、あっけに取られて、思わず顔を見あわせている。
「鶴七郎さま、まいりましょう」
　駄々姫は、いま引きとめられては大変だというように、鶴七郎をうながして澄まして歩きだす。
　元柳橋までは片側が大名屋敷続きだからそう人の往来はないが、それでも用があって通りかかる町人たちは、めったにそばへ寄れない豪華絢爛たる搔取り姿の姫君をすぐ目の前に見て、しかもそれが輝くような美貌の持ち主なので、

みんな啞然と目を丸くしながらよけて通る。
駄々姫にすれば、そういう町を歩いている小商人、行者、職人、鳶の者というように千差万別の町人姿がひどく物珍しいらしく、
「鶴七郎さま、あの白い着物をきている小者は、なにをする人でしょう」
「あのたらいのようなものを頭にのせている男と女は、なにを商っているのです」
などと、いちいち鶴七郎に説明を求める。
そんな町のくわしいことは、鶴七郎にもわからないことがあるので、
「ぴよ、――ぴよ、これへこい」
と、うしろの芳公を呼ぶことにした。
「殿さま、なんか用ですか」
待ってましたというように、芳公は浪江のそばを駆けぬけて鶴七郎の前へ出る。
「お駄々どの、これはぴよ公といって、わしの家来だが、町のことはなんでも知っている。この者にきかれるがよい」
鶴七郎は芳公を姫君に引きあわせて、
「ぴよ、しばらくお駄々どののお相手をせよ」
と、わらいながら言いつける。
「ありがたきしあわせにござんす」
「そなたはぴよと申すのですか」
駄々姫はおもしろそうに芳公の顔を見ている。
「さいでござんす」
「町のことはなんでも知っていますか」
「へえ、たいがいのことは知っていますでござんす」
「では、供をするがよい」
「かしこまりやしてござんす」
まさか肩をならべちゃ悪いと思ったので、芳公は一足さがって歩きながら、
「豪勢なもんだなあ。おいら、すっかり感心しちまったぜ」
と、思わずひとりごとが出る。
「なにを感心したのです」

「お姫さまはそばで見てもきれいでござんす。おまけに、声がすばらしいや。玉をころがすって声でござんすね」
「鶴七郎さま、ぴよがあんなにほめてくれます」
駄々姫はうれしそうである。
「さよう、お駄々どのは本当にきれいだから、ぴよもおどろいているのでしょう」
鶴七郎は相かわらず如才がない。
こんどは姫君の顔が少し桜色になったようだ。
「ぴよ、あのはち巻きをして、両方へ荷をかついでいく小者は、なにをかついでいるのです」
元柳橋へかかって、向こう角を魚屋の若い衆が薬研堀のほうへ曲がっていくのである。
「あれは、お姫さま、魚屋の若い衆が荷をかついで、おとくいまわりをしているんでさ」
「あのたらいの中に魚がはいっているのですか」
「たらいじゃありません。あれは盤台っていうんでさ。あの中に、たいだの、ひらめだの、いわしだの、さけだのがはいっているんです」
「みんな生きていますか。見たい」
「けっ、あんな小さな盤台の中で、たいやひらめが生きていられるもんですか。さけなんか、たいてい切り身にされているんでさ」
「切られているんですか」
「さいですよ。切り身にしなけりゃ焼いて食えやせんからね。さけで茶づけなんてのは乙なもんだが、お姫さま召しあがったことありやすか」
「ありません。ごちそうしてください、ぴよ」
「あれえ、本当ですか、お姫さま」
元柳橋をわたるとまもなく、右手にずらりとよしず張りの水茶屋がならび出して、もうすぐそこが両国広小路の盛り場になるから、急に往来がごたついてくる。
「やあ、こいつはすごいお姫さまだ。本物かねえ」
柄の悪い折助が二人、ひどく酔っているほう

があきれたように前へ立って顔をのぞきこんできたが、連れのほうはちらっと鶴七郎の顔を見て、
「いけねえぜ、定。浜町さまだ」
いそいで相棒の腕を引っ立てながら、人ごみの中へまぎれこんでいく。
——さあ、ことだ。
芳公は冷やりとしてちょいと青くなったが、見ると、駄々姫はただ珍しそうに二人のかっこうをながめているだけで、まったく鷹揚な姿そのものである。
——さすがにいい度胸だなあ。
芳公が感心していると、
「ぴよ、ここにこんなにならんでいる小屋は、なにをするところです」
と、もう水茶屋のほうへ目を移しながらきく。
「これは水茶屋といって、みんなお茶をのませる店なんでさ」
「お茶をのませるのですか」
「さいで。——きれいなねえさんがいて、茶をくんでくれるんですぜ。といったところで、お姫さまのようなきれいなねえさんは一人もいねえな」
「鶴七郎さま、ここは本当にお茶をのませてくれるところですか」
「そうです、寄ってみますかな、お駄々どの」
「ええ、寄ってみたい。駄々は少しのどがかわきました」
「よろしい、案内しましょう。——ぴよ、その方、お蓮の店へな、先乗りをいたせ」
「合点だ、殿さま」
しめたっと芳公は思った。お蓮あねごも姫君に会いたがっていたのである。
芳公は人ごみの中を泳ぐように駆けぬけて、お蓮の店へ飛びこんでいき、
「お蓮ねえさん、お客さまだよう」
と、威勢よく呼ぶ。
「あら、芳ちゃん、どうしたの」

お蓮が水屋のほうから、手をふきながら顔を出す。
「大変なお客さまなんだぜ、ねえさん。だれだと思う」
「浜町さまでしょ」
「うむ、浜町さまもいっしょだが、今日は尾州さまの駄々姫さまがいっしょなんだ」
「なんですって——」
お蓮は本気にできない。浜町さまは別だが、尾州の駄々姫さまが一人で気ままに出歩けるものではない。
「かつぐんじゃないかい、芳ちゃん」
用心深く念を押しているところへ、すっと入り口から鶴七郎がいつもの姿ではいってきた。
「まあ、殿さま——」
そのうしろから、ぱっと目の中へ赤い光物が飛びこんだかとばかり豪華な姫君が、すらりと鷹揚につづく。
「お蓮、座敷を借りるよ」
「はい」
お蓮はすっかりどぎまぎしてしまって、どうしていいかわからない。
「殿さま、支度ができやしたよ」
その間に芳公は桟敷へあがっていって、ちゃんと座布団をならべているのだ。
「そうか。——さあ、お駄々どの、おあがりなさい」
鶴七郎は駄々姫をうながして、さっと桟敷へあがっていく。姫君がうなずいて通りすぎた。
その姫君のうしろへつづいて、入り口へ顔を見せたのは、紫矢がすりの美しい腰元で、
「お蓮さま——」
顔があうと、小声で呼びながら、にっこり笑顔になる。
「まあ、浪江さん」
あんまり思いがけなかったので、お蓮はあいた口がふさがらない。
「のちほどごあいさついたします」

大切な姫君のお供中だから、浪江はしとやかに会釈をして、土間の姫君と鶴七郎の履物をなおし、二人につづいていく。

——どうしよう。お茶をさしあげるのかしら。

普通の客とは違うので、お蓮がぽかんと立ちつくしていると、こんどは鳥松と清太郎がそっとはいってきた。

「ああ、おじさん、どうすればいいの」

「なあに、お茶をさしあげればいいんだ」

「そんな立派な茶わんなんかないのよ」

「かまわねえよ、いやなら、のまなけりゃいいんだから」

その間に清太郎はついたてのかげへ行ってきちんとすわり、こっちなど見向きもしないのである。

——あの人、まだ浪江さんと口もきいていないのかしら。

そんな律義なかっこうを見ると、お蓮は急にじいんと胸が熱くなってきた。

いそいで水屋へきてみると、これはまたすばしこい芳公が、もうせっせと茶の支度をしていてくれた。

町の家来

「ここはいいながめですね、鶴七郎さま」

桟敷にすわって、駄々姫は目の前の大川をながめながら、すっかり気に入ってしまったようである。

対岸に東両国をながめ、左手には人がありのように歩いている両国橋が見えるし、藍色の大川にはさまざまな船がゆっくりと行き交っている。

しかも、盛り場から風に乗ってくる笛太鼓三味線の音は、この辺からだとなにか哀愁をおびてきこえ、見るもの聞くもの大名屋敷にはない庶民のにおいが濃い。

「御意にかなったようですな、お駄々どの」

「駄々は街へつれてきていただいて、本当によ

かったと思います。鶴七郎さま、あの橋はなんという橋でございましょう。人がたくさん歩いていますね」

「あれは両国橋です」

「後であの橋をわたってみたい」

「さあ、あのとおり混雑していますからな」

いかに鶴七郎でも、相手が姫君では、人が肩と肩をふれあって歩いているような盛り場へは、ちょっと連れていきかねる。

「お姫さま、お茶をおあがんなさい」

そこへ芳公が茶わんに茶をついで二つ、盆にのせてきて二人の前へおいた。

「ご苦労だな、ぴよ」

鶴七郎はなれているから、すぐその茶わんの一つを手にしたが、姫君はあまり茶わんが粗末すぎるので、さすがに手を出しかねているようだ。

「それから、お姫さま、さけで茶づけを召しあがるんなら、おいら一っ走り魚屋へ行って、さけの切り身を買ってきますよ」

「いいえ、まだおなかはすいていません。ぴよ、後でさけの切り身を求めに行く時は、駄々もいっしょにまいりましょう」

「あれえ、お姫さまが魚屋へ自分で行くんですか」

「ええ、今日はしのびですからかまいません。ついでに、いろいろお買い物をしてみたいと思います」

駄々姫は本当にそう考えているらしく、しごくまじめな顔つきだ。

「そうそう、お駄々どのにわしの町の家来たちをお引きあわせいたそう。——鳥、清太郎、お蓮、こっちへ出なさい」

鶴七郎は思い出したように、三人を呼んだ。なんとかここで駄々姫の気をまぎらしてしまわないと、買い物のお供をしなくてはならなくなりそうだからである。

「へえ」

ついたてのかげから、烏松、清太郎、お蓮の順に出てきて、浪江の下座へかしこまる。

「お駄々どの、この三人はわしが街へ出てきた時の家来です。三人とも、おもしろい話を持っている者ばかりでな、声をかけてやっていただきたいな」

「はい」

駄々姫は素直に三人のほうを見て、

「姫は尾州の駄々です。今日はご苦労ですね」

と、にこやかに会釈をする。

「そのお言葉では恐れ入りやす。手前は浜町さまのおしのびのおりの用心棒、烏松と申しやす」

松がまずあいさつをする。

「烏松というのですか」

「へえ、松というのが名前で、烏というのは浜町さまにいただいたあだ名でございますんで」

「鶴七郎さまはどうしてそんなあだ名をつけたのでございましょう」

鶴七郎もまさかこの男は、どろぼうのかくしておく金をさがすのが名人だからとも言いかねるので、

「この男は権兵衛のまいた種を掘ってたべてしまうからすの鳴き声が上手なのです」

と、あっさりごまかしておく。

「まあ、珍しい。この権兵衛がらすの鳴き声が聞いてみたい。鳴いてみてください」

駄々姫は無邪気なものである。

「ご勘弁ねがいます。権兵衛がらすは昼間は鳴きませんので——」

烏松は苦わらいをしながら、頭をかいている。

「ああ、権兵衛がらすは夜しか鳴かないのですか」

「へえ、うっかり昼間鳴きやすと、権兵衛が鍬（くわ）を持って追いかけにきやすんで」

くすくすとお蓮がわらいだす。

「清太郎、あいさつをせよ」

鶴七郎が助け船を出す。

「手前は清太郎と申す名もなき者でございま

す」

清太郎が遠慮そうにそこへ両手をついた。

「あの、清太郎のことは浪江から聞いています。そう、そなたが清太郎ですね」

駄々姫の目が、そこに控えている浪江と清太郎を改めて見くらべている。

「お言葉ではございますが、その儀は一切お忘れくださいますよう——手前はすでに両刀をすてた名もなき者でございます」

「清太郎、その遠慮にはおよびません。名もなき者でもよいから、いつでも母をたずねてあげなさい」

「はっ、ありがたきお言葉——」

清太郎は思わずそこへ平伏していた。浪江がいそいでそっと涙をおさえている。

「お駄々どの、その隣にいるのがな、お蓮と申してこの店のあるじ、清太郎の女房でな、浪江もしばらくここで働いていたことがあります」

鶴七郎がわざと気軽にお蓮を引きあわせる。

お蓮は黙っておじぎをして、たもとで涙をふいている。

「鶴七郎さま、駄々もここで二、三日働いてみたい。みんな心の美しい人たちだし、おもしろいでしょうね」

「それだけは、お姫さま、いけやせん」

烏松がひょいと顔をあげていった。

「なぜです、烏松」

「お姫さまがここで茶くみをはじめますと、お大名さま方がすててはおかない。みんなお通いになる。そのたびに、下にい、下にいとやられては、せっかくここをいい遊び場にしている町人どもがかわいそうですからね」

「いいえ、駄々は大名は客にしません。客はそなたたちと鶴七郎さまだけにします」

駄々姫は平気でそんなことをいう。

「どうも、せっかくでござんすが、お姫さまのお茶くみでは、あっしどもは体がかたくなって、いただききれやせんからねえ。いっそお客さま

は浜町さまお一人ときめていただきましょう」
「駄々は鶴七郎さま一人でもかまいません」
そう言いながら、姫君は熱ぼったい目を堂々と鶴七郎に向けるのだから、こりゃ大したものだと、烏松は感心してしまった。
「はて、あれはどういたしたのかな」
鶴七郎がいぶかしそうに両国橋の方を見てつぶやく。
ここからは西の橋たもとのほうは見えないが、そこでなにか不時のことでも起こったらしく、いつのまにか橋の往来がとまって、みんな立ち往生をしているようだ。
「こいつは変だ、ただごとじゃありやせんね、殿さま」
烏松も思わず目をみはる。
「殿さま、おいらちょっと行って見てきやす」
芳公はそういうなり、土間へ走って、もう風のように店を飛びだしていった。
「あの子、一人で大丈夫かしら」
お蓮がはっとしたように、清太郎のほうを見ながら立ちあがった。
――なにかあれば、この人は、いつでも浜町さまのお身がわりになるつもりでいるんだから。
お蓮はなによりもそれが一番こわいのだ。
案の定、清太郎はもうきちんとすわりなおして、ひそかに表の気配に耳を澄ましている。
「殿さま、ちょっと見てまいりましょうか」
烏松も落ち着かないようすである。
「いや、いま、ぴよがもどるだろう」
鶴七郎は少しも動じた色は見せてはいないが、
「お駄々どの、今日のそぞろ歩きは、もうこのくらいにして、そろそろもどることにしましょう」
と、姫君のほうを向く。
「なぜです、鶴七郎さま」
「両国橋になにか事がおこったとわかると、屋敷で待っている家来どもがよけいな心配をしま

す。こういう時は、早く一同を安心させてやらなくてはいけません」
ずいぶん思いきったまねの好きな鶴七郎ではあるが、そういう思いやりは決して忘れていないのである。
「駄々はもう少し遊んでいたいと思いますけれど、どうしてもいけなければ、鶴七郎さまのいうとおりにいたします」
駄々姫はまだ帰りたくなさそうだ。
「お駄々どの、またという機会があります。今日あまり家来の者を心配させてしまうと、もう懲りて、二度とわがままをさせてくれなくなります」
「わかりました。では、もどりますから、鶴七郎さま、約束をしてくださいますか。近いうちにもう一度だけ街へ誘ってくださると――」
「わしがお駄々どのの屋敷へ迎えに行くのですか」
「ええ、ぜひ――」
「さあ、うまくいきますかなあ」
今日はちょうどいい機会があったから、うまく裏門からぬけ出せたようなものの、こっちから尾州家へ乗りこんで姫君をそっとつれ出すということは、ほとんど不可能に近い。第一、一度こういう前科があるから、尾州家のほうでもこっちが顔を出せばきっと用心してしまうだろう。
「きっと約束してくださいますね、鶴七郎さま」
「それはちょっと難題ですな」
「いいえ、鶴七郎さまには勇気がございます。知恵と勇気があれば、どんなことでもできないことはございません」
それはさっき鶴七郎が姫君にいった言葉である。
ちゃんと覚えていて、しっぺ返しをしてくるのだから、駄々姫も決して頭の悪いほうではない。
「よろしい。では、近いうちにきっとお迎えに

行きます」
こう挑戦されては、鶴七郎も後へひけなくなってきたのだ。
「まあ、うれしい。本当にでございますよ、鶴七郎さま」
「男の約束です。鶴七郎は二枚舌はつかいませんよ」
大丈夫かなあというように、鳥松があきれた顔をしている。
「殿さま、わかりましたよ」
表から物見に行った芳公が、ばたばたと駆けこんできた。
「なにがあったの、芳ちゃん」
お蓮はせきこまずにはいられない。
「それがちょいと大変なんだ」
芳公は鶴七郎の前へ出て、
「殿さま、気違いに刃物っていうでしょう。それなんでさ。若い侍が、急に両国橋の上で刀を抜いて暴れ出したんです。しかも、強くってだれも手がつけられない。だから、橋はとまっちまうし、みんなで大騒ぎをしているんです」
と、汗をふきながら告げる。
「けが人はあるようか」
そうと話がわかってみれば、ひとまず安心ではあるが、しかし、町なかの迷惑を思うと、鶴七郎はやっぱりまゆをひそめずにはいられない。
「へえ、まだ死人はないが、けが人はだいぶ出たっていってやした。なにしろ、早くどうにかしなくちゃしようがないってんで、腕自慢の侍や、鳶の者なんかが、気ちがいの刀をたたきおとしに行くんだが、そのたびにけがをさせられて、みんなだめなんだって言ってやした」
「まさか、いくら気ちがいだって、こっちは切ってしまうってわけにゃいかねえでしょうからね、そいつは始末が悪いな」
鳥松も考えこんでしまう。
「はしごぜめなんてのはだめなんですかねえ」
お蓮が遠慮そうに口を出す。

「橋の上じゃ、はしごもつかいにくいだろうからね」
「鶴七郎さまならきっと大丈夫だと思います。お強いのですもの」
駄々姫が大変なことをいいだす。
一同ははっとした。むろん、悪気があってそんなことをいいだしたのではなく、ひいきの引き倒しで、姫君は鶴七郎を一番強いものにしておきたいのだろう。
「さあ。わしで大丈夫かな」
鶴七郎は苦わらいをしている。
「大丈夫です、鶴七郎さま、諸人が難儀をしているのですもの、その狂人を取りおさえてやれば、きっとみんながよろこびます」
「なるほど。諸人の難儀を、黙って見ているのはひきょうかな」
どうやら心が動いてきたらしい。
「駄々は鶴七郎さまが大好きです。勇気があるのですもの」
「よろしい。お駄々どのにそうほめられては、立たないわけにもいかぬ」
「殿さま、その儀は清太郎にお申しつけ願います」
清太郎がいちずな顔をあげて、きっぱりといった。
あっとお蓮は真っ青になる。この時ばかりは、本当に姫君がうらめしかった。
「いや、清太郎にはほかに申しつけることがある」
鶴七郎はそういって、おだやかな目を清太郎に向けた。

橋の上の狂人

「清太郎、屋敷で尾州家のお供の者たちが心配しているであろう。その方はお駄々どのの供をして、屋敷までお送りしてあげてくれ」
鶴七郎は駄々姫に聞かせるように、清太郎にいいつける。

「はっ。しかし、その儀なれば、ほかにも人がおりますこと――」
　清太郎としては、大切な鶴七郎を狂人の前へなど絶対に出してはならないのだ。
「いや、お駄々どのの身については、今日は鶴七郎に責任がある。万一にも間違いがあってはならんから、清太郎に供をいいつけるのだ。違背はならん。――烏、そちも清太郎の後見をするように」
　鶴七郎はきっぱりといって立ちあがった。
「鶴七郎さま、駄々も両国橋へ見に行ってはいけませんか。鶴七郎さまが狂人をとりおさえるところを、ぜひ見たい」
　半分はそれが目的で、駄々姫は鶴七郎をけしかけたのだから、いかにも不満そうに駄々をこねだす。
「それはなりません。求めて危ないところへ立ち寄るようなことは、賢明な人のすることではありません」
　鶴七郎はたしなめるようにいって、事態は一刻として猶予していられる場合ではないのだから、
「ぴよ、来い」
　芳公をうながして、さっさと土間へおりていく。
　駄々姫も清太郎も、もうこうなってはどうしようもない。ひそかにほっとしたのはお蓮だけだった。
「姫君さま、鶴七郎さまのお言葉にしたがい、清太郎、浜町までお供つかまつります。なにとぞ、お支度くださいますように」
　清太郎はしようがないので、あらためてそこへ両手を仕えた。
「いいえ、清太郎、駄々はどうしても両国橋へまいります。案内してください」
　駄々姫はまだあきらめきれないようだ。
「お言葉ではございますが、それでは清太郎当惑つかまつります」

「清太郎が困るというのなら、駄々は浪江と二人で行きますから、そなたは見ぬふりをしていればいいのです」
「お姫さまは、そんなに浜町さまのお強いところが見たいのですか」
　清太郎があつかいかねているようなので、烏松がそばから口を出す。
「そうではありません。駄々はうっかり鶴七郎さまに危ないことをおすすめして、悪いことをしました。鶴七郎さまのお身に、もしものことがあっては申しわけありません。たとえ役には立たなくとも、駄々は鶴七郎さまの助太刀にまいる覚悟です」
　なるほど、姫君の顔色が少し変わっているのだ。うっかり鶴七郎をおだててのっぴきならぬ立場に追いこんでしまったことを、いまさらのように後悔しているのだろう。
「ごもっともではございますが、浜町さまのおおせに背きましては、清太郎は腹を切らなければなりません」
　板ばさみになった清太郎の立場はいよいよつらい。
　お蓮はまたしても青くならずにはいられなかった。
「御用人さま、この家です」
　そこへ、つい今しがた鶴七郎について出ていった芳公が、勢いよく表から駆けこんできた。その後からどかどかと土間へはいってきたのは、尾州家の供頭野々山弥太夫以下警固の供侍たち十人ばかりで、おそらく芳公が鶴七郎にいいつけられて浜町へ尾州家の家来たちを呼びに行く途中で、ぱったりと出会ったということになるのだろう。
「おお、姫君さま、ここにおられましたか」
「弥太夫、よいところへまいってくれました。駄々をすぐ両国橋へつれていってください」
　姫君はさっそうと立ちあがる。
「それはまた、なにをしにまいられるのでござ

りますな」

「両国橋へ狂人が出て、刀を抜いてあばれているのです」

「弥太夫もさようにうかがい、船番の者から、姫君さまは鶴七郎さまとおしのびにて両国橋のほうへまいられた、このままにいたしておいてもよろしいでしょうかと知らせてきたので、なぜもっと早くそれを耳に入れておかぬのかと船番の者をしかりつけ、取る物も取りあえずお迎えに駆けつけました次第——」

「弥太夫、そのお小言は後にしてください。駄駄がおすすめして、いま鶴七郎さまがその両国橋の狂人を取りおさえにまいっています。鶴七郎さまのお身に間違いがあっては、駄々も生きてはいられませぬ」

「な、なんと仰せられます。浜町さまはお一人でそのような危ないところへ出向かれたのでございますか」

弥太夫はびっくりして、半分出かかった小言もとまってしまったようだ。

「駄々が悪いのです。鶴七郎さまはお強いから、きっと狂人でも取りおさえられるでしょう。諸人のためですから、こういうとき勇気を見せてくださいと、ついおすすめしてしまったのです」

「それは大変だ」

弥太夫は老いのまゆをひそめて、

「これ、浜町の家来ども、お前たちがついていて、なぜ鶴七郎さまをおとめしなかったのか。狂人に刃物、浜町さまにもしものことがあったらなんとする」

と、鳥松と清太郎をにらみつける。

「弥太夫、その小言は後でよいのです。早く駄駄を両国橋へ案内なさい」

姫君は待ちきれなくなったように、土間の方へ進もうとする。

「あ、お待ちなされませ。姫君さまは、さような危ない場所へお近づきになってはなりません。狂人はこわい。弥太夫がこれからまいって、なんとか取りはからいます。これ、二、三人わしについてまいれ。それから、後の者は姫君さまのお供をして、ともかくもお座船へ引きあげていなさい」

弥太夫は警固の供侍にそう言いつけると、そそくさと土間を出ていった。

「姫君さま、お座船へお供つかまつります」

後に残った供侍の中から一人が進み出て促したが、

「いいえ、駄々は鶴七郎さまがおもどりになるまで、ここは動きません」

姫君は元の座へすわってしまう。一度言い出したら、供侍のいうことなど素直にきく駄々姫ではないとわかっているから、家来たちはただ顔を見あわせている。

「清太郎——」

「はい——」

「もう供の者がきましたから、そなたは鶴七郎さまを見てあげてください。これは駄々の言いつけです」

「はい」

清太郎は待ちかねていたところだから、おじぎをして言下に立ちあがる。

「鳥松——」

「へい」

「清太郎の後見をなさい。だれに間違いがあってもなりません」

「かしこまりやした」

すみにおけないお姫さまだなと、鳥松はすっかり感心してしまった。

そのころ——。

両国橋の西の橋たもとへ出た鶴七郎は、黒山のような人だかりの間をかきわけて、人がきの中へ進んでいった。

「なんでえ、後からきて前へ出るやつがあるか」

中には気の強いやつがいて、いきなりけんつくをくわせてくる。

「その方、狂人がそんなにおもしろいか」

「なんだと——」
「おもしろければいっしょにまいれ。もっとそばへ行って、よく見せてつかわそう」
鶴七郎がわらいながら言うと、
「いいえ、それにゃおよびやせん」
さすがに相手はしりごみをしている。
「やあ、浜町さまだ」
そのうちに知っているやつがいて、そんな声が早くも伝わり、道は自然にあいた。
見ると、橋たもとから橋へかけて、もう人は一人もいず、橋板にからんと真昼の日のあかるいのが、盛り場だけにちょっと無気味だ。
いや、それより無気味なのは、橋の中ほどより少し手前の欄干のそばに、乱髪の侍が一人抜き身をだらりと右手に持って、川下のほうをながめている姿である。その狂人一人のためにこうして橋がふさがっているのだから、なんともすごい感じである。
——はてな、あの狂人は脚絆草鞋がけ、旅支度のようだな。
鶴七郎はそう気がついて、なにか妙な気がした。
橋のたもとは、六尺棒を持った手先や、手鉤を持った鳶の者がかため、町年寄りといっしょにそれを指揮しているのは、顔見知りの定町回り同心下条市兵衛だった。
「これはこれは、浜町さま」
「市兵衛、狂人だそうだな」
市兵衛は丁重に頭をさげて、
「あのとおり抜き身をさげておりますので、うっかりそばへも寄れず当惑しております」
と、苦わらいをしている。
「だいぶけが人も出たと聞いたが」
「はい、さいわい大けがをしたという者はないようですが、相当腕は立ちますようで、始末にいけません」
「どうやら旅支度のようだが」
「田舎から出てまいったようです。若葉どきで

はございますし、急ににぎやかな盛り場へきて気が変になったものか、いきなり刀を抜いてあばれ出し、浅草橋のほうから走ってきたということです」
「そうか。いずれにしても、いつまでほってもおけまい。わしが狂人の刀をたたき落としてつかわすから、その六尺棒を貸しなさい」
「いえ、その儀はご遠慮願います。万一のことがあってはなりません。ただいまはしご攻めにして捕ることにきまりまして、はしごを取りにまいっておりますので」
市兵衛はあわててとめたが、
「心配いたすな。かなわぬようなら、うまく逃げてくる。とにかく、一度やってみよう」
鶴七郎は無造作にいって、手先の一人から六尺棒を受け取り、もうさっさと橋の上へ進んでいく。
無造作といえば、鶴七郎はいつものとおり差し添えだけの着流し姿で、しかも庭下駄のままだ。それが六尺棒をこわきにかいこんで気軽に狂人のほうへ進み出したのだから、野次馬どもはあっと目を丸くして、思わず息をのんでいるようだ。
庭下駄で、しかも平気で歩いていくのだから、橋板が鳴る。間合いが二間ほどになると、狂人はくるりとこっちを向いて、刀を正眼につけてきた。
なるほど、二十四、五歳とも見える国侍で、必死な形相にはなっているが、狂人によくあるような、どこかうつろな冷たい目の色とは少し違うようだ。
鶴七郎は構えも取らず、そこへ立ち止まってじっと相手の目を見すえる。
狂人の顔からなんとなく殺気が消えて、当惑の色が出てきたようだ。
「これ、正気にかえったか」
鶴七郎はおだやかに声をかけてみた。
「残念です。手前は、はじめから気など狂って

おりません」
　相手の口から意外な言葉が出てきた。
「それはどういうわけか」
「あなたさまは、御身分のあるお方と存じます」
「わしは浜町に世を捨てている松平鶴七郎と申す者だ。これ、刀を構えておれ」
　なにか事情のありそうな相手である。正気の者では、これだけ御府内を荒らしたふらち者、どんな事情があるにもせよ、衆人の見ている前で逃がしてやるわけにはいかなくなるのだ。そう考えたから、鶴七郎はとっさに自分も棒を八双に取って構える。

すごい勇気

「手前、信州上田の家来、前川房之助、国もとの大事を江戸の奥方さまにお知らせに出府しましたが、そこの浅草橋をわたったところに、悪人一味の者五人待ち伏せしていまして、手前を気違い呼ばわりして切りすてようとしました。そのため、余儀なくここまで切りぬけてまいりました者」
「よし、ここで長話は無用、――それが事実なら、助けてつかわそう」
「お願いいたします。役目を果たしました上にて、今日の罪は切腹しておわびつかまつります」
　律義いちずな面魂だ。
「その方、泳ぎは達者か」
「はい、一里ぐらいなら」
「それなら大丈夫だ、川へ飛びこめ」
「舟でかこまれはしませんでしょうか」
　真昼間のことだから、それが心配になって、今まで川へ飛びこめなかったのだろう。
「その心配はない。できるだけ水をくぐって、川下へ泳げ。浜町河岸まで行けば、そこに尾州家の姫君の屋形船がついている。そこへ行って、わしの名をいって助けてもらえ」
「かたじけのうござります」
「水へはいったら、刀もなにも捨ててしまうのだ。物惜しみをするとおぼれるぞ」
「はい」
「わしが棒を振りかぶったら、下をよく見て飛びこむのだ。それ、行くぞ」
　鶴七郎は八双の棒をさっと上段になおした。
「ごめん」
　ひらりと欄干の上へのぼった前川は、ちらっと川を見おろしてから、思い切り欄干をけった。
「わあ」
　両岸から見ていた野次馬どもが、思わず声をあげている。
　その間に前川は、どぶうんと水しぶきをあげて、大川の青い潮の中へのみこまれていく。
　――うまくやれよ。
　心に念じながら、鶴七郎が欄干に寄って川面（かわも）を見おろしているところへ、市兵衛を先頭にして町年寄りたちがかけつけてきた。
「浜町さま、御無事にてなによりでございました」
　市兵衛はなによりもそれを心配していたらしい。公子の身に万一のことでもあると、自分の目の前で起こったことだけに、役目の手前、身分にかかわってくるのだ。
「市兵衛、つかまえそこなった。面目ない」
「どうつかまつりまして。――かえって水へ飛びこんでくれましたほうが、この上のけが人が出ずにすみます。なかなか手ごわいやつのようでございましたな」
「うむ、なかなか素早いやつだった。おぼれなければいいがな」
「さあ、なにぶん狂人のことでございますからな」
　一同川面をのぞきこんでいるが、まだ前川はどこへも頭を出さないようだ。
「市兵衛、わしはもどるぞ」
「はい、御苦労さまでございました」
　もうここには用がないので、鶴七郎は六尺棒を市兵衛にあずけ、西両国の方へ引き返す。や

っと橋が開いたので、待ちかねていたように急いで渡る者、欄干から川をのぞきこんでいる者で橋の上はごったがえしている。
　やっと、橋をわたって、水茶屋横町へ曲がろうとすると、ばったり野々山弥太夫の一行に出会った。
「おお、浜町さま、御無事でございましたか。狂人は川へ飛びこんだそうでございますな」
「うむ、心配いたしたか、弥太夫」
「あまり軽々しいお振る舞いはいかがとぞんじます」
「いや、わしはわがまま勝手を望んで城を出た身分――しかし、今日は、お駄々どのを誘いだして迷惑をかけたな」
「いいえ、姫君の駄々さまもお父君御承知の上でございますが、浜町さまというお手本ができましてから、まことにはや、ときどき冷や汗をかかされます」
「皮肉か、弥太夫」
　見ると、道端に清太郎と烏松が、ほっとしたような顔でひざまずいている。これもさぞひやひやしていた組なのだろう。
　弥太夫と肩をならべて、お蓮の茶屋の前までくると、もう芳公が御注進に走っていたらしく、豪華な駄々姫が浪江をしたがえて、すっと入り口から出てきた。
「鶴七郎さま、おめでとうございます」
「いや、それがあまりめでたい出来ではなかったようです」
「いいえ、とてもお立派だったと、ぴよが申しておりました」
　うれしそうに肩をならべてくるのは、もうおとなしく船へ帰る気になったのだろう。
「駄々は申しわけないことをいたしました」
　二人が肩をならべて歩きだしたので、弥太夫をはじめ家来たちは六尺ばかり後ろへさがってつづく。
「どうしてです」

「鶴七郎さまがお出かけになってから、駄々はもう心配で心配で、どうしてあのような危ないことをおすすめしたのだろうと、後悔してしまいました」
「いや、鶴七郎は本当に勇気があるのだから、その心配はいらなかったのに」
「それはよくわかっているのですけれど、駄々はじっとしていられなくて、何度助太刀にまいろうと思ったかしれません」
「ありがとう。そんなに心配していてくれたのなら、お駄々どのにだけ、本当のことを話してもいいな」
　供の者には聞こえない距離なので、鶴七郎が笑いながらいう。
「聞かせてください。本当のことって、どんなお話です」
　駄々姫は鶴七郎の肩へよりかかるようにしてくる。幸い元柳橋からこっちは警固の者が通行人を往来どめしているから、屋敷の庭を歩いているのとおなじことだ。
「実は、さっきの両国橋の狂人は、気違いではなかったのです」
「まあ」
「信州上田の藩士で前川房之助と名乗っていたが、国もとになにかおもしろからぬ事態がおこり、江戸の奥方のもとへ密使に立った。浅草橋をわたると、悪人の一味が五人待っていて、町の中だから人目の手前、狂人あつかいにして切ってしまおうとした。それをどうにか前川が切りぬけて、両国橋の上まできたのです」
「まあ、かわいそうに――」
「一犬虚にほえればなんとやらで、気違いだ気違いだあとみんなに追いかけられるものだから、どうにもしようがない。へたをすれば、野次馬にたたき殺されてしまうから、橋の上で立ち止まった。川へ飛びこんで逃げようかとも思ったらしいが、舟で取りかこまれては逃げ場がなくなる。思い迷っているところへ、わしが出

ていったというわけです」
「鶴七郎さまには、狂人でないことがすぐわかりましたか」
「落ち着いてよく顔を見ると、どうも狂っているような目ではないのです。その方は正気にかえったようだなと聞いてやると、ほっとした顔をして、自分ははじめから気違いではないのだといって、今の話をするのです」
「駄々は鶴七郎さまが好き。どんな時でも落ち着いていて、勇気があるのですもの」
いつのまにか、姫君はしっかりと鶴七郎の腕につかまっている。
「しかし、いくら鶴七郎に勇気があっても、あれだけ町を騒がせてしまっては、正気の者として助けてやるわけにはいかない。泳げるかと聞いてやると、一里ぐらいは泳げるというので、それなら川へ飛びこめ、この川下に尾州家の姫君の船がついているから、なんとかそこへ泳ぎついて、わしの行くまで待っておれといってやりました」
「まあ、すばらしい。では、その気の毒な男は、駄々の船へ泳いでくるのですね」
駄々姫は好奇の目をいそいで大川へ向けたが、どこにも泳いでいる男の姿はないようだ。
「もしや、おぼれたのではありませんかしら」
「いや、用心してなるべく水の中を泳いでいるのでしょう。ごらんなさい、もう向こうへはあんなに小舟が出て、前川をさがしまわっています」
「そうですね。見つかると大変ですね」
「うまくお駄々どのの船まで泳いでいければ、まさかそこまでは町方の舟も気がつかないでしょうからな」
「いいえ、たとえ町方の舟がきても、駄々が追いかえしてやります」
「ぜひ、そうしてやっていただきたいな」
「悪人どもの追っ手五人は、どうしたでしょう、鶴七郎さま」

そんなところへよく気のつく姫君も、ただの駄々姫ではないようだ。
「えらいなあ、お駄々どのは」
「なぜです」
「追っ手のことにすぐ気がつくのは、聰明だからです。その上情け深い生まれつきだからです」
鶴七郎はちょいとおだてておく。
「駄々はいい奥様になれると思いますか」
姫君はうれしそうな顔をかくそうともしない。
「なれますとも、お駄々どのはきっと立派な賢夫人になれます」
「ですから、駄々は鶴七郎さまの賢夫人になりたい」
ぱっと顔を赤らめながら、すごいことをいいだす姫君だ。
「いや、捨て扶持五千石の鶴七郎にはもったいない御器量です」
「いいえ、こんな駄々姫は、鶴七郎さまでなければ、だれももらってくれません」
「そんなことはない。お駄々どのをお嫁にほしい大名はたくさんあるはずだ」
「ほかの大名は駄々が気に入りませんし、そこの家来たちが、駄々のようなわがまま者では迷惑なのです」
「すると、どうしても鶴七郎でないとだめかな」
「ええ、だめです。駄々は鶴七郎さまでなければ、賢夫人になれません」
まったく堂々たる勇気である。
「よろしい、考えておくことにしましょう。それはそれとして、目下の急務は悪人一味の五人のことです。人一人の命にかかわることですから、ほっておけません」
鶴七郎はうまく話題をかえたつもりだったが、
「そうですね、せっかくそこへ気がついてほめていただいたのに、それっきりにしては賢夫人でなくなります」

と、姫君はちゃんとだめを押しておいて、
「五人の追っ手は、どこまでも前川という者をつけているのではないでしょうか」
と、こっちの話をうける。
この勝負は、どうやら鶴七郎のほうが押され気味のようだ。

駄々姫帰館

やがて、鶴七郎の屋敷の裏門が近くなると、そこの桟橋（さんばし）にもやってある駄々姫の船から、番人の侍が一人、いそいで二人のほうへ走ってきて、小腰をかがめた。
「鶴七郎さまに申しあげます」
「いかがいたしたな」
「つい今し方、前川房之助と申す者が船へ泳ぎつきまして、これは尾州家の姫君さまのお船でしょうかとたずねますので、そうだと答えますと、手前は浜町さまのお指図をうけて両国橋から泳ぎついた者、しばらくここへおかくまいくだされたいと申します。なにか子細ありげにもおもわれましたので、桟橋の杭（くい）のところへ待たせてありますが、いかが取り計らいましょうか」
「鶴七郎さま、あの男は、無事に泳ぎついたようでございますね」
駄々姫がさっと目を輝かして、うれしそうにいう。
「そうですな。まいってみましょう」
鶴七郎は姫君のほうへうなずいてみせてから、
「これ、御苦労であった。その者は、少しく子細のある者なのだ。供の者たちにしばらく川をのぞくのは遠慮するようにと、申しつけておいてくれ」
遠いからたぶん大丈夫だろうとは思うが、町方の者に気づかれてはおもしろくないし、まして五人の追っ手の者の目がどんなところに光っていないともかぎらないので、取りつぎの船番にそう言いつけておいて、桟橋のほうへ足を早める。

きてみると、房之助は水の中で着ているものをすっかりぬぎすてたらしく、裸の胸から上を見せて、必死に桟橋の杭にすがりついているようだ。水の中はまだ冷たいし、相当長い間を泳いできたのだから、くちびるの色も紫になって、疲れ切った顔色である。
「これ、狂人、その顔色はなんだ。侍がこれしきのことで精根がつきるようでは、大事の役には立たんぞ」
鶴七郎は上からのぞきこんで、まずしかりつけてやる。
「はい、手前はまだ疲れてはおりません」
「そうか。疲れていなければ、ぐっと腹に力をいれて、もうしばらくそこに待っておれ」
「はい」
駄々姫が無理ばかりいうと言いたげに、まゆをひそめながら鶴七郎の顔を見ている。
「清太郎、鳥、これへまいれ」
五、六間向こうに、野々山たちといっしょに控えている清太郎と鳥松を呼ぶ。
「はっ」
二人がいそいで走り寄ってきた。
「両人、あの川の中にいる裸の男を屋敷へつれていって、早く介抱してつかわせ」
二人は、まさかそれが両国橋の狂人だとは気がつかないから、
「はい」
とは答えたが、妙な顔をしている。
「これ、早くいたせ。子細は後で申し聞かせる」
「はっ」
清太郎と鳥松は、桟橋をおりていって、両方から若者の手をつかんで助けあげてやる。疲れ切っていて、一人では歩けないようだ。
「房之助、もっと腹に力を入れろ。ここで気をゆるすと、死に神に取りつかれるぞ」
「はい」
やっと両方から助けられて裸のたくましい若

者が往来へあがってくると、事情を知らぬ尾州家の家来たちは、みんなびっくりしたように目をみはっていた。
「ぴよ、まいれ」
房之助が裏門口から運びこまれていくと、鶴七郎は、芳公を呼んだ。
「御用ですか、殿さま」
「鳥松がついているから如才もあるまいとは思うが、あの者は長い間水の中にいて、体が冷え切っている。すぐに薬をのませて、みんなで体中をこすってやるように、注意しておきなさい」
「合点でござんす。土左衛門を助けた時のようにやりゃいいんでしょう」
「うむ、その心得でやればよい」
「そんならわけなしだ。おまかせおき願いやす」
芳公はうさぎのように門内へ飛びこんでいく。
「鶴七郎さま、あの男は、すぐに口はきけないようですね」
駄々姫は、ちょっとがっかりしたようである。
「そうですな。少し休ませてやらぬと無理でしょう。あの男の話は、後でよく聞いておいて、わしから駄々どのにお知らせいたそう。家来どもにあまり気をもませては気の毒ですから、お駄々どのはもう船にお乗りなさい」
女中たちはすでに船に乗って、姫君さえ乗りこめばいつでも船が出せるように、ちゃんと支度をして待っているのである。
「鶴七郎さまが明日屋敷へきてくだされば、そうします」
「さあ、明日というのはどうかな」
「では、明後日まで待ちます。駄々は早くあの男の話が聞きたいのです。鶴七郎さまがきてくださらなければ、駄々のほうからまいります」
「おいでくださるのは一向かまわぬが、賢夫人というものは家来どもにそうたびたび迷惑をかけないものです」
「ですから、鶴七郎さまの方からきてくだされ

ば、駄々は家来たちに迷惑をかけずにすんで、賢夫人になれるのです」
「よろしい、よろしい。なんとかできるだけ都合してみましょう」
やっぱり、鶴七郎のほうがかぶとをぬぐほかはなかった。
「では、駄々は船に乗ります。鶴七郎さま、今日はいろいろよいことをお教えくださいまして、どうもありがとうございました」
駄々姫は改めてていねいにあいさつをする。そういうところはさすがにしとやかで、行儀が正しい。
「気をつけてお帰りなさい」
「はい」
駄々姫は浪江につきそわれて、おとなしく船に乗った。
それと見て、野々山弥太夫が鶴七郎の前へ走り寄り、
「浜町さま、まことにありがとうございました。いずれ改めまして、お礼にまかり出ますでございます」
と、礼の言葉も早々に、またもや駄々姫の御意がかわらぬうちにと、あたふたと姫君の後を追う。
警固の侍たちも互いに合図をしあって、往来の警戒を解き、それぞれ供船へ乗りこんで、もやいを解くと、お座船から先に川下へこぎ出していく。
駄々姫はこっちを見あげて、にっこりわらっているようだ。
――やれやれ、あの調子では、お駄々どの、本当に賢夫人に押しかけてくるかもしれぬなあ。
鶴七郎はそんなことを考えながら、しばらく大川端に立って、去り行く尾州家の船を見送っていた。
屋敷で介抱された信州上田藩士前川房之助が、やっと人心地を回復して、改めて目通りを願い出たのは、それから一刻あまり後のことで、

やがて八ツ半（三時）に近い時刻であった。

「そうか、それはよかった。あずまやで会うから、つれてまいれ」

鶴七郎は清太郎にそう言いつけて、いつもの書斎から築山のあずまやへ出て行く。

まもなく、だれかの借り着をした房之助が、清太郎たちにつきそわれて、あずまやへ上ってきた。

「殿さま、このたびはあやうい命をおすくいいただきまして、お礼の言葉もございません」

九死に一生を得たのだから、房之助は肝に銘じて感激しているらしく、ぴたりと大地へすわって両手をつかえる。

「それにはおよばぬ。手をあげなさい。どうだ、もう気分はなおったか」

「はい、おかげをもちまして、もうすっかり回復いたしました。ここにおられるお三方の手あつい御介抱のたまものです。ありがたく思っております」

「そうか、結構であった。しかし、よくあれまで泳いできたな」

「おぼれてはならぬ体なのでございます。せっかく両国橋でお助けいただきましたのに、ここで死んでなるものかと、死に物狂いでございました」

「そうであろう。そちは、なかなか勇気のある男のようだ。そこで一通り子細を話してみなさい。力になれるものならなってつかわそう」

「かたじけなく存じます」

「そうそう、ここにいる三人はわしの手足のようなもので、わしと同様に信用してもらっていい者たちだが、どうだ、ここにいては話しにくいか」

「そんなことはございません。手前はこのお三方に命の介抱をうけております。一生の恩人だと思っているくらいです」

房之助もまた純情いちずの男のようである。

「さようか。では、それにて話してみなさい。

次第によっては、この三人が、またいい知恵を貸してくれぬでもない」

「はい、一通りお聞きを願います」

房之助はきちんと顔をあげて、改めて話しだす。

「手前は信州上田藩八万石上田信濃守（しなののかみ）の家来前川房之助と申します。国詰めてございまして、父は房右衛門と申し、先日まで郡奉行（こおりぶぎょう）をつとめておりました」

当主信濃守は、三年前に十二歳で先君の封（ほう）をつぎ、今年の春元服して信濃守に任官したばかりである。したがって、この三年間は江戸では一門の家老神谷民部が当主の後見役となり、国元では城代家老馬場大膳（だいぜん）が藩政をあずかって一切をきりまわしてきた。

大膳は、先君の妹を妻にもらいうけているほどの家柄で、才腕人望ともに一藩に優れていたが、先君が世を去って頭の押さえ手がなくなると、ようやく奢侈（しゃし）専横の気を生じ、領民に重税を課してその金の大半を私するようになった。

国詰めの家来たちは、大膳ににらまれると身が立たなくなるので、一人も彼の意に逆らう者はない。みんな大膳のいうなりにきげんを取りむすんでいる。

藩士たちは大膳のいうなりになっていればその身が無事なのだから、多少目にあまることはあっても見ないふりをしていられるが、重税を課せられている領民はそうはいかない。

ことに、百姓はこの三年来のきびしい年貢の取り立てに困窮をきわめ、再三嘆願書を藩庁へ出しているが、一向に聞き入れられないばかりでなく、そんな総代に立つ者はいたずらに百姓どもを扇動する者として、びしびし牢屋（ろうや）へほうりこんでしまう。

「もうこの上は、一揆（いっき）を起こして城をつぶしてしまうか、江戸の公儀へ訴え出るか、二つに一つだというところまで百姓どもは憤激して、険悪な状態になってきました。父房右衛門は郡奉

行をつとめておりますので、その危険な状況をくわしく大膳の耳に入れ、反省熟慮をうながしたのですが、大膳は逆に、そんなことで郡奉行の役がつとまるかと激怒して、百姓どもの賄賂をうけ百姓どもの手先を働くふらち者という汚名のもとに、父はその日のうちに投獄されてしまいました」

そう語りながら、さすがに房之助のこぶしがひざの上でふるえている。悔しいことも悔しいが、それより投獄された父の身が子として心配でたまらないのだろう。

「冗談じゃねえや。そんな国元の乱暴な話を、江戸の殿さまは、——いや、殿さまはまだお若いにしても、その後見さんの神谷民部さんたちは、なんにも知らずにいるんですかい」

鳥松がたまりかねて横から口を出してきた。

「むろん、少しも知らないということはないでしょうが、国元の者はほとんど大膳一味ですから、悪いことは江戸へなるべく知らせないようにしていますので、江戸ではそれほど百姓どもの事態が急迫しているとは思っていないのでしょう。それに、神谷さまは殿さまの後見役で、江戸を離れるわけにはいきませんから、何事もこの五月、殿さまが初のお国入りの日まで、目をつぶっているのだと思います」

「五月というと、もうまもないな」

鶴七郎が後をうながすようにいう。

縁というもの

「百姓一揆もさることながら、実はその殿さま初のお国入りについて、容易ならぬうわさがあるのでございます」

房之助は暗い顔をかくしきれないようだ。

「うわさと申すと——」

「大膳の奥方は、先君の妹君でございます。嫡子又一郎さまは主家の血をひいていることになりますので、大膳は又一郎さまを御当主さまに替えたい野心がありますそうで、それには殿さま初のお国入りと同時に百姓一揆がおこってくれたほうが、なにかにつけて都合がよいと、ひそかに策謀をかまえているといううわさなのです」

「なるほど、ありそうなことだな」

「父房右衛門は、百姓どもの中へはいりこんでいる浪人どもから、そういううわさを耳にしましたそうで、万一自分が投獄されるようなら、すぐに江戸藩邸へ走って、そのことを神谷さまのお耳に入れるように。ただし、直接上屋敷へ乗りこんではあぶない。おそらく、上屋敷にも、もう大膳一味の者が相当いるに違いあるまい。築地の中屋敷に先君の奥方さまがいられる。いまは松月院と名乗っておられるが、この方は賢夫人の聞こえが高かったお方だから、まず、この松月院さまにお目通りして、よく相談申しあげてみるがよいと、父から言いつけられておりました」

「そうか。それで、そちは国元をひそかに脱出してきたのだな」

「はい。手前の出発が早かったのと、道中をいそいで、ほとんど旅籠は取りませんでしたので、さすがに追っ手も途中では追いつけなかったものとみえます。この分なら無事に築地の中屋敷へ着けるだろうと、さっき浅草見付をはいりますと、いきなり、五人の者に取りまかれました。その中に国元の大塚文之進という男がはいっておりましたから、大膳一味の者に相違ありません。だれの思いつきか、頭からこっちを狂人あつかいにして追いかけられてしまい、あやうく野次馬どもに打ち殺されてしまうところでございました」

「あれえ。じゃ、房之助さんは、さっきの両国橋の気ちがい侍だったのかあ」

芳公がびっくりして目を丸くする。

「ぴよ、そのことはだれにも口外してはならんぞ。幸い、わしは狂人でないと見たので、わざと川へ逃がして、かように取りはからってつか

わしたのだ」

「ごめんなさい、殿さま。うっかりしたことを言って、どうもすみません」

芳公はいそいで両手で口をふさいでいる。

「いや、わしこそ、とんだけが人まで出してしまって、まことに面目ござらん」

暗然としてうなだれてしまう房之助だ。

「御心中お察しいたす」

清太郎は侍というもののつらさを骨の髄まで知っているので、心から同情している顔つきである。

「殿さま、その浅草見付の五人のやつってのは、憎いやつらでござんすね」

烏松は目を光らせながらうなりだす。

「うむ、悪知恵が働くだけに憎いな」

「ただ憎いだけじゃすみやせん。もうそんなところまで手がまわるようじゃ、江戸の上屋敷にも悪人一味がいっぱいいるということになりやす」

「まずそう見てよかろうな」

「御後室さまの中屋敷のほうは、どうなんでしょうね」

「中屋敷は隠居所だから、これは悪人どももそう重くは見ていまい。しかし、房之助が江戸へはいったとわかったからには、見張りぐらいはつくかもしれないな」

「じゃ、房之助さんを中屋敷へ無事に送りこむにゃ、どうしたらいいでしょうね」

「それもあるが、房之助が本当に会いたいのは、後見役の神谷民部だ。――そうであろうな、房之助」

「はい」

「賢夫人の松月院どのに、その工夫がつくかな」

「こう江戸に悪人一味の目が光っていましては、その御苦労を御後室さまにおかけするのは忍びないような気がいたします」

「もっともである」

その房之助の気持ちは、鶴七郎にもよくわか

る。

「そんなことをいったって、御後室さんの賢夫人にしろ、房之助さんにしろ、悪人ばかりこわがっていた日にゃ、これからなんにもできやしませんぜ」

烏松が威勢のいいことを言いだす。

「なるほど、これは烏のいうとおりだ。断じて行うよりほかに手はない」

鶴七郎がまず賛成する。

「そうですとも。――どうせ命がけの仕事なんだ、片っ端から悪人どもを退治してかかる度胸でないと、こっちは手も足も出なくなりまさ」

「わしは命など惜しみはしません。悪人さえ退治できれば、死んでも本望です」

「どうだ、その勢いで、房之助さん、いっそその馬場大膳てやつを刺し殺しちまっちゃ。おれが片棒かついでもいいぜ」

烏松は本気な顔つきである。

「待て、烏。そう話が飛躍してしまっては、まとまりがつきにくくなる。ここは一つ房之助の初志どおり、まず中屋敷へ無事に送りこむことからはじめよう。その上で、万一賢夫人の後室に難渋の色が見えた場合には、また第二策を練る。――どうだな、房之助」

「お力ぞえいただければ、感泣のほかはございません」

「その松月院どのの中屋敷は、築地のどの辺にあるのだ」

「尾州さま中屋敷の北隣でございます」

「なに。すると、お駄々どのの隣屋敷だな」

「はい」

「築地はよほど賢夫人に縁の深いところとみえる」

鶴七郎はさっきの駄々姫のことを思いだして、思わず微笑が出てくる。房之助はそれをどう取ったか、

「はい、尾州家には駄々姫さまと申しあげる変わった姫君さまがおありだとうわさにうかがっ

ておりますが、松月院さまはその駄々姫さまの叔母君（おばぎみ）にあたらせられます」
と、意外なことを言いだす。
「ふうむ、松月院どのは尾張家からはいられたのか」
「はい。父房右衛門の考えでは、いざとなったら、尾張さまにおすがりしろという腹ではないかと思います」
「なるほど。すると、中屋敷にも大膳のひもがついていると見なければならんな」
鶴七郎は急に真剣になってきた。松月院が駄駄姫の叔母とすれば、上田家の当主信濃守は駄駄姫とはいとこ同士ということになる。その駄駄姫は、いずれは自分のところへ押しかけ賢夫人になろうとしている姫君なのだ。なんとなく人ごとでなくなってきたような気がするから、われながらふしぎだ。
「房之助、さっきその方が救われた尾州家の船、と申すより、あのおりわしといっしょに立っていたのがお駄々どのだ。おぼえているか」
「はい、手前もひょっとしたらそうではないかと思っておりました。あのおりは見苦しい裸をお目にかけ、申しわけなく存じております」
「それはよいが、はてな、――お駄々どのは上田の家来と聞いて、しきりにその方の話を気にしていた。そうか、お駄々どのはそちを叔母君の家来と知っていて、心配していたとみえる」
今にして鶴七郎は思いあたるのである。
「で、殿さま、そうなると房之助さんを、どんなふうに中屋敷へ送りこんだもんでござんしょうね」
烏松がひざを乗り出してくる。
「待て。――昼間はどっちみちあぶない。日が暮れてからということにして、それまでにまだ間がある。お前たちも四人で十分策を練ってみろ。わしももう一度よく考えてみよう」
鶴七郎はそういって静かに立ちあがった。
その夜、改めて書斎へ四人を呼んだ鶴七郎は、

「烏、お前、塀（へい）を乗り越えて屋敷を出て、表門、中門、裏門のあたりをさぐってみろ。たぶん、怪しいやつが見張りにきているはずだ」
と、いきなり、烏松に言いつけた。
「怪しいやつって、上田の野郎どもでござんすか、殿さま」
「うむ」
「だって、房之助さんがこんなところにいるなんてことは、野郎どもの夢にも気のつかないことじゃありやせんか」
「実は、わしもはじめはそう思っていた。しかし、よく考えてみると、今日の追っ手五人は、相当悪知恵の働く者どもと見ていい。房之助の死骸（しがい）が川からあがらぬと見ると、尾州家の船があの時裏の桟橋（さんばし）についていたことから、ひょっとわしが物好きをおこして、房之助をここへかくまったのではないかと、見当をつけないものでもない。まあ、見てくるがいい。万一、見張りがついているようなら、敵ながら油断できない相手と見なければならん」
「ようござんす。じゃ、ちょいと行って見てきやす」
烏松はまさかと思うのだ。両国橋とここではちょいと離れていすぎるし、それを無理に疑うとすれば、駄々姫さまの船のほうを疑うはずだ。
――殿さまも自分の頭がよすぎるもんだから、少し勘ぐりすぎるようだな。
高をくくるような気持ちで、そっと裏の川っぷちの塀を乗り越え、ぶらぶらと裏門の方へ歩いていってみると、中門のある横町へ曲がろうとするあたりに、だれか黒い人かげがうごめいているようだ。月の出のおそい宵闇（よいやみ）のころだから、あたりは暗い。
――はあてな。
こいつは油断ができないと思いながら、そこの角へ近づいていってみると、たしかに侍が二人、じっとそこに立っている。
「今晩は、お武家さん」

烏松はついでに一つからかってやれと思い、一度その角を通りすぎてから急に引き返して、声をかけてみた。
「なんだ、なにか用か」
侍たちはぎろりとこっちをにらんでいるようである。
「へえ、まことに失礼でござんすが、いまここを十八、九の、ちょいときれいな下町娘が一人で通らなかったでしょうかね」
「十八、九の下町娘か――」
二人はちょっと顔を見あわせながら、
「その娘かどうか知らんが、娘は一人たしかに通った。向こうへ行ったから、早く行ってみろ」
と、一人が元柳橋のほうを指さす。
「へえ、ありがとうござんす」
そうあっさり出られてしまったんでは、礼をいって、義理にも駆けださないわけにはいかない。
――けっ、つまらねえ目にあいやがる。
烏松は苦わらいをしながら駆けだす。おかげで、ぐるりと薬研堀のほうからまわらなければ、表門へは出られない。
「あっ」
松平丹波守の下屋敷の裏門の前を駆け抜けようとして、烏松はぎょっと足をとめた。

情けの使者

「ああ、おじさん――」
裏門のかげから走り出てきたのは、意外にもお蓮である。
「なんだ、お蓮さんじゃないか。どうしたんだね」
「うちの人いっしょじゃないんですか。おじさん」
「ああ、そうか、清さんをむかえにきたんだな」
「ええ、あんまりおそいから出てきてみたんですけど、お屋敷になにかあったんですか。あそこに変なお侍が立っていますね」

「まあ、歩きながら話そう」
烏松はお蓮をさそって、薬研堀のほうへ歩きだしながら、こっちは見張りをからかうつもりで、若い娘は通らなかったかときいてやると、やつらはいまあっちへ行ったと返事をしていた。やつらのは、まんざら口から出まかせではなくて、お蓮のことを言ったのだとわかると、なんだか一人でおかしくなってくる。
「なにがおかしいんです、おじさん」
「なあにね、お蓮ねえさんは貞女だと思って、感心しているのさ」
「たんとお冷やかしなさいまし。あたしの御亭主なんですもの、あたしがむかえに行って、なにがおかしいのかしら」
お蓮はむかえにきたのをわらわれたと、勘ちがいをしてしまったらしい。
「まあ、そう怒っちゃいけねえ。けどなあ、貞女さん、おめえさん、いまあんまりおそいからむかえに出てきてみたといったが、まだ日が暮れたばかりだぜ。あんまりおそいなんて時刻じゃないと思うんだがなあ」
「そりゃそうですけど、――いつもはもっと早く帰ってくるんでしょう、いっしょに夕飯にしたいと思ったもんだから」
「なんだ。じゃ、まだ飯をくわずに待っていたのか」
「変なことをいうのね、おじさん。どこの世界に、御亭主より先に夕飯をすませて、夫の帰りを待っているようなあきれた女房がいるんです」
「こいつは一本まいった。なるほど、昨夜からお蓮ねえさんは清さんのれっきとしたお女房さんだったけな」
烏松はちょっと感心して、
「けどな、ねえさん、清さんやおじさんのつとめは普通の宮仕えとは違うんだ。殿さまの御用となれば、いくら家で貞女が飯もくわずに待っていてくれるとわかっても、お先に失礼というわけにゃいかねえんだ。そこが武家奉公のつら

いところなんだ」
と、ついでに言って聞かせておく。
清太郎が心配しているのもそこだと、わかっているからである。
「心配だわ、おじさん、清さんに今日なにかあったんですか。どうしておじさんといっしょに帰ってこられなかったんです」
もう泣きべそをかきそうになっているお蓮のようだ。
「おっと、こっちへ曲がろう」
元柳橋の手前へ出て、橋はわたらずに下屋敷の塀について左へ曲がりながら、
「今夜は清さんばかりでなく、おじさんも芳公もまだ家へは帰れないんだ。殿さまの御用中なんでね」
と、まじめな顔になる。
「じゃ、やっぱりなにかあったんですね」
「あるにはあった。が、直接清さんの身に振りかかったことじゃない。実は、窮鳥ってやつが一羽、お屋敷へ飛びこみやがってね」
お蓮にはかくしておくこともないので、前川房之助の話を一通り耳に入れてやる。
「まあ。じゃ、昼間の両国橋の上の気ちがい、そんなかわいそうな人だったの」
「うむ。つまり、うちの殿さまだから、その狂人がなにかわけのある男だなと、一目見てわかった。ほかのでくの坊なら、今ごろかわいそうに、そんな大役を持ったまま地獄へ追いやられていたかもしれねえんだ」
「本当にねえ。すると、あの見張りに立っている侍たちは、昼間の五人組ってことになるわけですか」
「どうもそうなるらしい。おれは、まさかいくらなんでも、やつらが浜町へ目をつけるわけはなかろうと、高をくくって出てきてみたんだが、やっぱり殿さまのほうがお目が高かった」
「それで、おじさんはこれからどうする気なんです」

「さあ、そこだ。おれはこれから表門へまわって、そこからお屋敷へ帰るつもりだが、ここでお蓮さんに出会ったのはちょうどいい、一つ相棒になってくれねえか」
「相棒っていうと――」
「まあ、いっしょについてきてくれりゃわかる。そのかわり、一目だけはきっと清さんに会わせてやるぜ」
「なんだかこわいな、あたし――」
しかし、清太郎に会わせてくれるというのだから、お蓮はついうれしそうな顔をかくしきれなかった。
烏松は矢ノ倉の通りへ出て、屋敷の表門へまわってみると、案の定、そこにも前側の旗本屋敷の塀のあたりに二人ばかり、怪しい侍がひっそりと立っているようだ。
――畜生め、よっぽど悪知恵がまわるやつらなんだな。
烏松はすましてその前を通りぬけ、鶴七郎屋敷の表門へかかり、門番小屋の窓下へ行って立つ。
「今晩は。――門番さん、烏の松でござんす。殿さまの御用をたしてまいりやしたんで、すんませんが、くぐりをおあけ願いやす」
「おう」
門番中間も、表向きの奉公人ではないが、烏松たちのことはよく知っているので、一応、窓をあけて顔をたしかめ、すぐにくぐりをあけてくれた。
「松つぁん、このねえさんはだれだね」
烏松の後ろからつづくお蓮を見て、門番はふしぎそうな顔をする。家来たちの家族は別として、鶴七郎屋敷には女っけは一人もいないからである。
「なあに、姿こそかえていなさるが、このお方は尾州家の駄々姫さまのお腰元さまなんだ」
烏松がもっともらしい顔をして、口から出まかせをいうと、門番はびっくりして、

「これはこれは失礼いたしました」
と、あわてておじぎをしていた。
「いやだわ、おじさん、あんなことをいって」
「しっ、とにかく、お腰元さまのつもりになっていなくちゃいけねえ」
　どんなことで、このうそがあんがい役に立つかもしれないと考えている烏松なのだ。
　いつもの中門内のほうへまわって、そこから庭づたいに書斎の縁先へ出ていくと、目ざとく見つけた鶴七郎が、
「もどったか、烏、——お蓮もいっしょか」
と、烏松のうしろへ小さくなってひざまずいたお蓮のほうへも声をかけてくれる。
　清太郎はじろりとお蓮のほうを見ただけで、冷たくそっぽを向いてしまう。御奉公中は親も女房もないという心なのだろう。
「殿さま、あっしの負けでござんす。表にも裏にも、怪しい侍どもがちゃんと見張っていやした」
「そうだろうな。房之助の死骸(しがい)が川からあがらぬかぎり、ここへ目をつける。敵ながら相当な者どもだ」
「殿さま、感心ばかりしていなさらねえで、房之助さんのため一つ、なんとか考えてやっていただきたいもんで」
「そう申す烏松ならどうするな。お蓮をつれてきたところを見ると、なにかよい考えがあるのだろう」
　鶴七郎がわらいながら聞く。
　房之助と芳公が、じっとこっちを見つめているようだ。
「そりゃ殿さま、房之助さんをただ築地の中屋敷へ送りこむだけのことなら、早い話がお蓮あねごにも一役買ってもらって、房之助さんを清太郎あにいに仕立ててつれ出すっていうテだってありやす。しかし、せっかく苦労して中屋敷へ送りこんでも、向こうに悪人一味がはいりこんでいるとなると、それから先のことはあっしたちの手にはおえません。もっとも、それから

のことは房之助さんが自分でできるというんなら別でござんすがね」
　烏松は正直なところをぶちまける。
「なるほど、それもたしかにテだな」
　鶴七郎は一つうなずいてみせてから、
「こういたそう。房之助を清太郎に見せるのではなく、清太郎を侍にして房之助に見せかけるのだ」
と、逆のことを言い出す。
「あっしのとあべこべでござんすね、殿さま」
「うむ。清太郎が侍になって頭巾(ずきん)で顔をかくし、お蓮をつれて表門のくぐりから出る。烏松は中間姿になって、ちょうちんを持って供をするという趣向だ」
「それはどういう判じ物でござんす。駆け落ち者ならちょうちん持ちはいらねえはずですがね」
「まあ、聞きなさい。見張りの敵は、こっちが女づれだけに、てっきり頭巾の侍を房之助だと見る。つまり、自分たちの目をごまかすために、わざと女づれにしたのだと。悪知恵が働く者たちだけに、必ず引っかかる」
「なるほど——」
「敵は、なるべく人気のないところで、三人を取りかこむ。その敵の口からどんな言葉が飛び出すか、なるべくそれをたくさん引きだすのが、そちたちの才覚だ。もっとも、あぶないと見たら、清太郎はすぐに頭巾をぬぐがいい。女づれだから、決して危ない橋をわたってはいかん」
「それでどうなるんでござんす」
「頭巾をぬいだら、清太郎はおだやかに敵にこう言いなさい。敵は今日尾州のお駄々どのが浜町へまいったのを知っているはずだ。だから、尾州家の野々山から端女(はしため)を一人世話してくれと、主人がたのまれた。わしは主人の言いつけで、その端女を送っていくところだ。疑わしいと思ったら、築地の中屋敷までついてくるがよい、といってやる」

「なるほど――」
「もし敵がついてくるようなら、かまわぬから表門までつれていくがよい。そして、清太郎は野々山に対面して、わしの手紙をわたし、こっちの事情をよく話すがよい。手紙には明日の手はずがしたためてあるのだ。念のため申し聞かせておくが、明日お駄々どのに、上田家の当主を招いてもらう。近々に初の国入りをするのだから、その別れの茶席という名目だ。むろん、後見役の神谷民部もついてくるだろう。そこで、隣家のことだから生母松月院さまもお招きする。みんな集まっているところへ、わしが船で房之助をつれて、水門口からお駄々どのをたずねようというのだ」
「うまい。恐れ入りやした、殿さま」
烏松は思わずひざをたたいてしまった。これなら、房之助を送りこむと同時に、一度に話がついてしまうわけだ。
「清太郎――」
鶴七郎が呼んだ。
「はい」
「野々山に会ってな、すっかり用談がすみ、その後でもし野々山がそちにお長屋で母に会って行くようにとすすめてくれたら、ありがたくうけて、遠慮なく会ってきなさい。ついでに、お蓮の顔も母に見せてやるがよいぞ」
「は、はい」
あっとお蓮は烏松と顔を見あわせて、
――ありがとうございます、殿さま。
と、思わずそこへ両手をついてしまった。
清太郎もしばらくは顔があげられないようである。
「殿さま、恩にきやす」
二人にかわって一言礼を言ってくれたのは烏松で、これもこぼれそうになってくる涙をのみこむのに一生懸命のようだった。
「あのう、殿さま、ぴよには今夜なんにも役はないんですか」

不平そうなのは芳公である。
「いや、ぴよには後で大役がある」
鶴七郎はそう言ってわらっていた。

無作法な追っ手

それからが大変だった。一同は鶴七郎の前をさがると、控えの間にはいって、清太郎は老用人棚橋茂右衛門の用意してくれた侍の衣装に着替える。烏松は屋敷のお仕着せを着て中間に早がわりをする。
その間に、お蓮はまだ夕飯前なので、茂右衛門の計らいで握り飯をこしらえてもらって、腹ごしらえをする。ちょっと素人芝居の楽屋といったいそがしさである。
しかし、清太郎はもとの侍姿にかえるだけのことだから、そう手間はかからない。器用な烏松が中間姿になるのはもっと簡単だった。
手持ちぶさたの房之助は、
「すまん。わしのために御苦労をかけて、まことに相すまん」
と、うろうろしながら一人一人に礼をくりかえして頭をさげているばかりだ。
「お蓮ねえさんいいなあ。今夜は清太郎兄貴と道行きだぜ」
片すみであわただしく腹ごしらえをしているお蓮のそばへ行って、芳公がそっと耳もとへからかう。
「そんな、冷やかすもんじゃありません」
「冷やかしてるんじゃねえんだ。ごらんよ、清太郎兄貴は立派になったぜ。もとがもとだからな、侍はすっかり板についているはずだもんな」
「ねえ、芳ちゃん、あたしこんなかっこうでいいかしら」
お蓮は自分のふだん着のままの姿が急に気になってくる。
「かまわねえとも。お蓮ねえさんは端女(はしため)、つまり下女になりに行く役なんだからな。ふだん着のまんまのほうが、かえっていいくらいのもん

だ」
「いいえ、それはあたしかまわないんだけれど、後であの人のおっかさんに会うって役があるでしょう。おっかさんがほかの人に対して困りはしないかしら」
「そんな心配はいるもんか。お蓮ねえさんはその姿で駄々姫さまにもお目にかかっているんだ。その時、うちの殿さまがちゃんと、これは清太郎の女房だって、口ぞえしてくれたじゃないか」
「ああ、そうだっけ。――あたしはこのまんまのかっこうで、もうちゃんとあの人の女房だったのね」
「そうだとも。おっかさんだって、きっとよろこんでくれらあな」
「それは、おっかさんはきっとよろこんでくれると思います」
おなじ貧乏長屋でさんざんいっしょに苦労してきた浪江親子なのである。そのおっかさんに、いまは清太郎の嫁として、初めて対面するのだ、どんなによろこんでくれるかと思うと、お蓮は胸がわくわくしてくる。
「さあ、お端(はした)のお蓮ねえさん、支度がよかったら出かけやしょう」
向こうから中間の烏松が声をかけてきた。
「はい」
「清さん、殿さまのお手紙は持ったろうな。そいつを忘れちゃ芝居がだいなしになる」
「うむ、大丈夫だ。ちゃんと持った」
侍姿で顔を頭巾(ずきん)につつんだ清太郎が、先に立って内玄関へ出てくる。
「清太郎、しっかりたのむぞ。今夜は、当家の正式の使者、並川清太郎なのだからな。そのつもりで、堂々とやりなさい」
内玄関まで送って出てくれた老用人が、はげますようにいう。
「はい、お役目かならずつとめてまいります」
清太郎はあいさつをして、中間烏松がそろえ

てくれた草履をはく。
「松、途中気をつけてな」
「へえい」
烏松は心得たものである。
「あれえ、おじさんはなにをやらせてもうまいなあ」
芳公は目を丸くしていた。
表門のくぐりから、まずちょうちん持ちの烏松が出て足もとを照らし、清太郎がすっと表へ出る。お蓮が後へつづいた。
そのままちょうちん持ちが先に立って、江戸橋のほうへすたすたと歩き出す。
ようやく宵半ば(よいなかば)をすぎようとする時刻で、もう人の往来もまばらに、江戸の町筋はどこも大戸をおろしていた。築地までは一里あまりあるだろうから、尾州家の中屋敷へ行きつくのは、どうしても五ッ（八時）すぎになる。
「おじさん、やっぱり怪しいやつがついてくるようだわ」
肩をならべている清太郎はむっつりとしていて話しにくいので、お蓮は前を行く烏松に話しかける。
「そうか。そうくりゃしめたもんだ。かまわねえから、時々そっと振りかえってみるんだな。気にしていると見せかけたほうが、今夜はいいんだ」
「でも、人に追われているのって、あんまりいいもんじゃありませんね」
どっちにともなくいったのだが、清太郎は返事をしてくれない。
「心配しなさんな。今夜はちゃんと御亭主がそばについていてくれるんだ」
烏松がかわりにそういってくれる。
――怒っているのかしら、清さんはさっきから一言も口をきいてくれないんだもの。
お蓮は妙に気が沈んできて、それっきり口をきく元気がなくなってしまった。
「後をつけているのは、どうやら五人だ。昼間

のやつらに違いない」
　べつにうしろも振りかえらずに、烏松がひとりごとのように言ったのは難波橋をわたってからで、ちゃんと足音でわかるらしい。
　もっとも、敵はだんだん大胆になってきて、もう道の真ん中を堂々とつけて歩いている。取りかこむのにちょうどいい場所を見つけているのだろう。
「お蓮、敵が取りかこんできたら、おとなしくさがっていろよ。まさか、女まで切ろうとはしないだろうからな」
　ふっと清太郎がやさしい言葉をかけてきてくれた。
「はい」
　やっぱり、あたしのことを心配していてくれたんだと思うと、お蓮はじいんと胸が熱くなってきて、死んだってかまやしない、夫婦いっしょなんだものと思った。
「そこへ行く御仁、しばらくお待ち願いたい」
　五人の覆面侍がばらばらっと追いすがってきたのは、それからまもなく、親父橋のたもとへかかった時だった。
　清太郎はとっさに、それとなくお蓮を柵のほうへかばいながら、無言でゆうぜんと立ちどまる。
「だんな方、どんな御用でございましょう」
　烏松がわざとちょうちんを突きつけるようにして聞いた。
「下郎は黙って控えておれ」
　覆面の一人がしかりつけるようにいって、
「失礼だが、貴公は上田の前川房之助どのだな」
と、高飛車に出る。
　後ろの四人は、それとわかったらすかさず切って出る気らしく、いっせいに柄に手をかけて返事を待っている。
「いや、人違いのようですな」
　清太郎はわざと低い声で答える。それがいっそう敵の疑惑を深めたらしく、

「なにッ、人違い――。では、念のためにかぶりものを取ってみてもらおう」
　と、笠にかかってきた。
「それは困ります」
「いや、人違いなら困ることはないはずだ」
「わしは浜町の松平鶴七郎さま家来、並川清太郎、鶴七郎さまは隠居の身分ではあらせられるが、将軍家の御連枝です。主人の使者として出向く途中、かぶりものをかぶった何者ともわからぬおのおの方に、こっちがかぶりものを取らせられたとあっては、主人に聞こえても申しわけありませんからな」
　清太郎はおだやかにいって聞かせる、が、一度疑った者には、それさえ逃げ口上としか取れなかったのだろう。
「よろしい。拙者もかぶり物を取るから、貴公も頭巾をぬいでみてくれ。それならいいだろう」
「貴公たちの御姓名は――」
「わしは上田藩大塚文之進、ここに控えているのはみな同藩の者だ」
「上田信濃守さま御藩中ですな」
「さよう」
「万一、かぶりものを取って、わしが人違いだったとわかったおりは、どうなされる」
「なにッ」
「人違いをしてまことに申しわけないという一札を、連名でお入れくださるな」
　さすがに大塚もちょっと言葉につまったようだ。
　が、彼には、どうしても相手が前川房之助に見えたのだろう。
「よろしい。いかにもわび状を一札入れよう。かぶり物を取ってくれ」
　大塚は決然として言いながら、自分も素早く覆面をぬいでみせる。国元から大事を託されて出てきているだけあって、年ごろ二十五、六とも見えるなかなかたくましい面魂である。
「さあ、ごらんください」

清太郎はしずかに頭巾を取った。
「あっ」
大塚は愕然として、思わず一足後ろへさがる。
「わび状を一札入れていただきましょうかな」
「失礼だが、貴公はどこへ行かれるのです」
どうも解せないという顔つきで、大塚が聞く。
「主人御用のことは他人のあずかり知らぬところだが、貴公たちはなにかわしを疑っているようだ。子細によっては主人御用を申しあげてもよいから、一体貴公たちはなんでこんな間違いをおこされたのか、それから一通りうけたまわろう」
武士の作法にはずれるようならそのまま許すわけにはいかないが、清太郎はあくまで冷静に話を進めていく。
――立派だわ、うちの人。
お蓮はつい、そのきっぱりとした横顔にうっとりと見とれずにはいられない。
「武士の情けだ。貴公正直に教えてくれ。今日前川房之助という者が、鶴七郎さまのおそでにすがりに、浜町の屋敷へ逃げこまなかったろうか？」
大塚は国者の無作法さで、そんなふてぶてしいことをずばりと切り出してくる。
「いや、そんなことはあるはずもないことだが、その前川という者は何者かな」
「国元でふらちを働いて、こんど江戸へ逃げてきたやつです」
「すると、あなた方には、わしがそのふらち者に見えたわけだな」
「正直にいえばそのとおりです」
「そのふらち者は、中間をつれて主人の用に出歩くような身分の者なのかね」
「そう言われると困るんだが、鶴七郎さまは策の多いお方だと聞いているんで、ひょっとするとこんなテを打って前川を逃がすんじゃないかと思ったんだ」
「こんな姿で、どこへ逃がすと考えたのかね」

「上田家の中屋敷が築地にある。前川はそこへ逃げこむかもしれない男なんだ」
「そこへ逃げこめば、その男は安全なのかね」
清太郎は澄まして突っ込んでいく。
「大塚、失礼しよう。こっちはまだいそがしいんだ」
うしろのほうから、うながしたやつがある。
「ああ、そうか。そうだったな。――貴公、まことに失礼した。このとおりあやまる。われわれ少しいそいでいるんだ」
大塚はていねいにおじぎを一つすると、さっさと歩きだそうとする。
「お待ちなさい」
清太郎の声がはじめて鋭くなる。

船頭の鶴七

清太郎は憤然として大塚文之進を呼びとめたが、大塚は煮ても焼いても食えないやつらしく、
「いや、その御立腹はごもっとも。――まったくわれわれの不調法、まことに相すまん。このとおり、このとおり」
べらべらと一人でしゃべり立てて、おじぎを一つしたと思うと、さっと元きたほうへ駆けだしている。
「すまん、すまん、――逃げろ、逃げろ」
「ごもっとも、ごもっとも」
それと見た後の四人も、口々にそんなとぼけたことを言いながら、どんどん大塚の後を追いだす。
「清さん、ほっておくがいい。あんなやつらを相手に、本気になるだけ損だ」
そばから烏松が小声でいそいで清太郎にいった。
「うむ、今夜のところは逃がしておこう。いずれまたという日がある」
「そうだとも。――今夜はまだこっちには大役があるんだからな」
中間烏松はそう言いながら、もう先に立って

親父橋をわたり出す。
「あいつたち、また浜町へ見張りに引きかえす気かしら」
お蓮はほっとして清太郎に肩をならべながら聞いてみた。
「なあに、いまから浜町へ引きかえしたって、もうおそい」
清太郎は別に怒ってもいないようだ。考えてみると、約束のわび証文こそ取れなかったが、こっちはちゃんとあいつらを引っぱりだす目的は果たしているのだし、勝負だって五人を相手に、こっちは始終先手先手と出て、一歩もひけはとらなかったのだから、
「——うちの人は、お侍になっても、十分役に立つ人なんだわ」
と、お蓮はいそいそとせずにはいられなかった。
その夜、無事に築地の駄々姫屋敷へはいって、奥用人野々山弥太夫のお長屋をたずね、清太郎が鶴七郎の書状を手渡しすると、弥太夫は衣服を改めて、ただちに駄々姫の御前へ出ていった。
そして、ほどなく浪江をつれてもどってきて、
「姫君には、明朝、浜町のお使者にお会いくださるそうです。それについては、お蓮もいっしょに今夜は浪江どののお長屋へ泊まってまいるようにとのことで、わざわざ浪江どのをおつかわしになられたのです」
と、駄々姫の言葉をつたえた。
浪江は浪江で、烏松に、
「おじさま、そういうわけですから、浜町さまのほうへは、おじさまからよろしく申しあげておいてくださいませ」
と、すまなそうにあいさつをする。
「へえ、承知しやした、お腰元さま。浜町さまも、それを申しあげたら、きっとおよろこびのことでございましょう」
烏松は中間らしく浪江におじぎをしてから、
「それでは、お使者さま、御新造さま、下郎め

は一足先にごめんをこうむりやす。どうぞ、御母堂さまに、下郎からもよろしく申しあげていたと、おつたえおき願いやす」
と、清太郎夫婦にたのんでおいて、帰りは一人で駄々姫屋敷を出た。
——母子、兄妹、夫婦、今夜は久しぶりで水入らずだ、さぞ話がはずむことだろう。
そう思うと、烏松は人ごとながら心たのしい。
こうして、烏松が浜町の屋敷へ帰りついたのは、もう五ツ半（九時）をまわっている時刻だったので、わざと鶴七郎には会わず、老用人をとおして、今夜の使者は無事にすませ、清太郎夫婦は向こうへ泊まったむねを取りついでもらって、自分の長屋へ帰ってきた。
すると、意外にも、家には芳公と前川房之助が、自分の帰りを待っていたのである。
「おじゃまをしています、おじさんうじ」
「どうしたんだね、前川さん」
「なあに、これが殿さまの計略なんだとさ、おじさん。明日の朝、屋根船を雇って、五ツ（八時）までに前川さんをのせて、お屋敷の裏の桟橋へこいっていうお言いつけなんだ」
「なるほどねえ」
つまり、あくまでも敵の目を用心しようという計らいなのだろう。
「おじさん、一人で帰ってきたのか。御夫婦さんはどうしたんだい」
「御夫婦さんは、今夜、御母堂さまのお長屋へお泊まりさ。駄々姫さまのお取り計らいでな」
「へえ、お駄々さま、なかなか味をやるなあ、おじさん。大名の娘っ子にしちゃ、ちょいと出来がいいや」
「芳公うじ、おめえももう浜町さまの御家来の一人なんだから、そんな行儀の悪い口をきいちゃ悪かろう」
「ああ、そうか。殿さまの体面にかかわるといけねえものな。どうもすんません」
芳公は正直に頭をかいている。

「烏松うじ、われわれがお屋敷を出た時は、もう見張りの目はどこにもなかったようだが、そっちはどうだったんだろう」

　前川がそれを心配する。

「見張りのやつらはうまくこっちへ引っかかりやしてね、親父橋のところで取りまいてきやがったが、相手が人違いじゃどうしようもない。清さんにやりこめられて、しっぽをまいて引きさがっていったが、しかし、あの大塚文之進というやつは、どうしてなかなかしたたか者のようだね」

「あの男は微禄者なんだが、小才と、腕と、もう一つ押しと三拍子そろっているんで、今ではだんだん大膳に目をかけられて、国もとの若手組を牛耳っているやつです」

「そうだろうな。第一、今夜浜町の屋敷へねらいをつけるなんてことは、普通じゃ思いもつかない。油断は禁物だねえ」

　それがあるから、烏松は寝る前にもう一度長屋のまわりをそっと見まわってくることを忘れなかった。

　翌朝、三人は鶴七郎の言いつけどおり、屋根船を借りて前川をのせ、烏松と芳公が船頭になって、五ッ（八時）少し前に浜町の屋敷の裏の桟橋へ出て待っていた。

「おはようございんす、殿さま」

「烏、昨夜は御苦労だったな」

「恐れ入りやす。――けど、殿さま、今日はそのおみなりでいいんですか」

「どうしてだね」

「だって、今日は尾州さまのお客になるんでござんしょう」

「ああ、そのことか。それなら、わしに少し考えがあってのこと、気にせずともよい」

　鶴七郎はわらいながら船へ乗りこむ。

「そうでござんすか。まさか、あちらさまでも、殿さまが貧乏して、羽織はかままで質に入れたとは思わないでしょうが、そのかっこうじゃ、

ちょいと失礼にあたらねえでしょうかね」

「船は表門へかかるわけではなく、裏の水門口からこっそりはいるのだから、その心配はなかろう」

「まあ、そうおっしゃりゃそんなもんですが、――じゃ、船を出します」

　相かわらず変わってるなあとは思ったが、気ずい気ままは鶴七郎の性分だし、それを百も承知で家来になった烏松なのだから、またなにか考えがあってのことだろうと、そのまま船をこぎだす。

　今日もよく晴れた朝だった。浜町河岸から築地までは、どういそいでこいでも一刻はかかる。向こうへ着くとちょうど四ッ（十時）ごろになるはずだ。

　船が永代橋の下をくぐりぬけると、藍をたたえた潮の色はいよいよ濃くなって、海のにおいが強く鼻についてくる。

　舳先を石川島の西へ向け、明石町河岸から御浜御殿のほうへこぎくだっていくと、やがて海へ出て、まもなく駄々姫屋敷の水門口へかかってきた。

　ゆうべ時刻の打ち合わせがしてあるから、尾州家ではちゃんと水門口をあけて待っていた。その水門口をくぐって船を掘り割りの船着き場へ進めながら、

　――そうれ見たことか。

　と、烏松は思わず目をみはった。

　桟橋の上へ駄々姫が腰元たちをしたがえて出迎えに出ていて、今日は客を招いている日だから、みんな目もあでやかな盛装をこらしているのだ。

「殿さま、着きやした」

　船房へ声をかけると、

「おお、着いたか」

　気軽に艫へ出てきた鶴七郎も、まるで花が咲いたような桟橋の出迎えに、あっとびっくりしたようだ。

「やあ、お駄々どの、わざわざのお出迎えでは恐れ入りますな」

「鶴七郎さま、ようこそおいであそばしました。さあ、おあがりくださいませ」

駄々姫はうれしそうに顔を輝かしながら、手を取らんばかりにする。

「いや、それが今日はちょっと困るんです」

「まあ、なぜでございます」

「わしは今日は前川房之助を送りとどけにきたので、いわば船頭もおなじこと。そのつもりだから、こんな失礼なかっこうをして出てきたんで、船からあがらずに帰ることにきめているんです」

鶴七郎はわらいながら、船からおりようともしない。

「まあ――」

駄々姫はまじまじと鶴七郎の顔を見つめながら、さすがにその胸の中を読んでしまったらしく、

「では、今日は船頭の鶴七だとおっしゃるのですか」

と、いきいきとした目がいたずらっぽく微笑する。

「はい、さようでございます。どうぞ前川房之助をおうけとり願います」

「それはお門違いではありませんか。房之助と申す者は上田家の家来、幸い信濃守さまも松月院さまも、もうあちらへまいられていますから、そちらへわたしていただきます」

「これはこれは、ついうっかりいたしました。それでは恐れ入りますが、上田家の神谷民部を、ちょっとここへお呼び願います」

「お黙りなさい。お駄々は尾州家の姫です。船頭鶴七にあごで使われるわけにはまいりません。御自分で呼んでおいでなさい」

「困りましたなあ。では、お腰元さまにお願いして――」

「それもなりません。船頭風情のお使いなどさ

せては、お嫁入りの時のさわりになります」

腰元たちはみんな下を向いて、くすくすわらっている。

「これはどうも、困ったことになりましたなあ」

「船頭鶴七に申しつけます」

「はあ」

「そなたに少し問いただしたい不審がありますから、房之助とやらをつれて、お茶室まで姫の供をなさい」

「どうもいたし方がございません。お供つかまつります」

どうやら、この勝負は、鶴七郎の負けときまったらしい。

「船頭の鳥とぴよ」

「へえ」

「そなたたちにはいまお茶とお菓子をとらせますから、しばらくそこで待っていなさい」

「ありがたきしあわせにござんす」

駄々姫は鶴七郎と房之助をしたがえて、さっそうと庭のほうへ歩きだした。

「おじさん、こりゃどういうわけなんだろうな」

芳公が変な顔をしてきいた。

「どういうわけって、つまり、うちの殿さまより、お姫さまのほうが今日は役者が一枚上だったってことになるんだろうなあ」

「本当か、おじさん」

芳公は不服そうな顔をする。

「殿さまは今日、上田家の殿さまや御生母さまに会いたくなかったのさ。会えばどうしても、こんどのごたごたにまきこまれてしまう。前川さんを無事に助けて、ここまで段取りをつけてやったんだから、後のことは自分たちでうまくおさめるがいい、そういう腹があったんで、わざとふだん着のままで出てきたんだな。それを駄々姫さまが見ぬいてしまったんで、とうとう殿さまを船頭鶴七にして、茶室へ引っぱりこんだってことになるんだ」

「なるほど、そうかあ。それで、うちの殿さま、

やっぱり上田家のごたごたにまきこまれてしまうだろうかな、おじさん」

「そうよなあ、駄々姫さまが殿さまのひざをゆすって、鶴七郎さまは勇気があるから大好きです、とかなんとかうまく持ちかければ、まず、そんなことになるのが落ちだろう」

「なあ、おじさん、うちの殿さま、まんざらお駄々どのが憎くもなさそうだな。そりゃ、お駄駄どののほうがよっぽど、足駄をはいて傘をさしているほうだけど、あのとおりのべっぴんだし、頭だってそう悪くなさそうだし」

「しっ、つつしまねえか、芳の字」

そうたしなめる烏松も、これからはじまる茶室の一幕を考えると、ついにやにやしたくなってくる。

うまい筋書き

鶴七郎と駄々姫の舌戦は、茶室へ行くまでもなく、もうその途中歩きながら早くもはじまっていた。

外庭から内庭へはいり、若葉の美しい林の中の小道がつまさきのぼりになって築山へかかるころには、供の腰元たちはずっとおくれ、房之助はいつのまにどこかへつれていかれていた。

「お駄々どのはたしか、賢夫人になろうという立派なお心がけを持っていられる方でございましたな」

肩をならべて、しっかりとこっちの腕をつかんでいる駄々姫に、鶴七郎がおだてるように話しかける。

「はい、お駄々は鶴七郎さまの賢夫人になろうと心がけている勇気のある女でございます」

駄々姫は少しも悪びれない。

「なるほど。――それなら、なぜ鶴七郎が今日は上田家の方々に会いたくないか、よくご存じのはずだが」

「鶴七郎さまにおうかがいいたしますが、知恵というものは使えば減るものでございましょうか」

「そうですなあ。使えば減ってしまうような知恵は、知恵のうちにははいらないでしょう」

「お駄々もそう思います。そして、いくら知恵があっても、それを出し惜しみして使わなければ、なんにもならない知恵だと思います」

「なるほど――」

「それから、せっかくの知恵を自分のためにばかりしか使わないのは、けちんぼうだと思います」

「けちんぼうはいけませんな」

「困っている人の話を聞いて、よい知恵を惜しみなく貸してあげるようでなければ、立派な人とはいえません」

「そのとおりです。そんなけちんぼうは、賢夫人を迎える資格がない」

「鶴七郎さまは、賢夫人を迎える資格のあるお方ですから、お駄々は大好きなのです」

うっとりとこっちの肩へもたれかかってくるのだから、まったくたいした姫君である。

「やあ、これはすばらしいながめだ」

ようやく茶室の庭にはいってきて、東から南へからりとひらけた青い海を見晴らし、鶴七郎も思わず感嘆の声をあげる。

「鶴七郎さま、海はここからでも見晴らせます。どうぞお上がりくださいませ。お駄々がお茶を一服さしあげます」

駄々姫はいそいそと茶室へあがって、炉の前へすわった。

「ありがとう。――はてな、房之助はどこへ迷子になったのだろう」

房之助の姿が見えないばかりでなく、腰元どもも遠慮してこっちの庭まではいってこないから、ここには二人きりである。

おそらく、尾州家でも、駄々姫は鶴七郎の賢夫人に押しつけようと、もう話がきまっているのだろう。

「房之助は窮鳥ですから、どこかへ一人で飛ん

でいったのかもしれません」
駄々姫はそんな冗談口をきいてわらっている。
「なるほど、今日は御当家へ、窮鳥の親分鳥がお客にきていましたな」
鶴七郎はゆっくりと縁先へ腰をおろしてしまう。
「どうしておあがりになりませんの」
「お駄々どのは賢夫人だから、とりこにされるとこわい」
「勇気のあるお方が、そんなことをおっしゃるものではございません。もうここまできたのですから、せめて民部にだけは会ってあげてくださいませ」
「とうとうわしの負けですかな。それでは、覚悟をきめます。会うだけは会いましょう」
会えばただですまなくなりそうだとわかってはいるが、ここまできてはどうもしようがなかった。
改めて茶室の客になって、茶を一つよばれていると、まもなく五十年輩とも見える裃姿の老武士が、房之助をつれて庭先からはいってきた。驚いたことには、もう一人房之助といっしょに清太郎がついてきている。
「鶴七郎さま、上田の神谷民部です。――民部、こちらへあがって、ごあいさつをなさい」
駄々姫は知才がない。
「初めてお目通りつかまつります。上田家に仕えます神谷民部、このたびは前川房之助が思わぬ御庇護にあずかりましたそうで、主人信濃守にかわり、厚くお礼を言上つかまつります」
「民部、わしは知ってのとおり世捨て人だ。そう堅くるしいあいさつはいらぬ。楽にしなさい」
「恐れ入りましてございます」
「鶴七郎さま、清太郎を信濃守さまに目通りさせましたのは、御当主から一言昨夜のあいさつをしていただきたいと思い、お駄々が無理に呼んだのです。いけませんでしたか」

「いや、御当主さまからお言葉をいただけば、清太郎も働きがいがあったことになります」
察するに、駄々姫はなにからなにまでちゃんと手を打って、こっちをとりこにしようと待ちかまえていたのだろう、恐るべき賢夫人である。
「民部、国もとの様子を房之助からすっかり聞きましたか」
「はい。おおかたのことは手前も承知いたしておりましたが、思ったより事態は迫っておりますようで、まことにお恥ずかしいしだいでございます」
さすがに民部は憂色をかくしきれないようだ。
「どうすればよいか、策は立ちましたか」
「先刻から、御当主さまならびに御生母さまともいろいろ相談つかまつり、どうやらこれならばという策は立ちましたが、なにぶんしかるべき手が一つだけ欠けておりますので、当惑しております」
「聞かせてください。叔母君の家の大事、姫も心配です。それに、鶴七郎さまは知恵も勇気もおありの方ですから、なにかよい工夫がいただけるかもしれません」
芝居は駄々姫の書いた筋書きどおりに、すらすらと進んでいくようだ。鶴七郎はひそかに苦わらいをしながら、黙って聞いているほかはない。
「一番恐ろしいのは、領内百姓の一揆でございます。まずこれをなんとかして、御当主さまお国入りのおりまで押さえておかなくてはなりません」
「どうすれば、百姓どもの一揆を押さえておくことができるのです」
「入牢中の郡奉行前川房右衛門は、百姓に人望のある忠義者でございます。まずこれを牢内から救い出し、御当主さまのお墨付きを持って、領内の大名主どもを説得させますれば、十中の八、九まで一揆は未然にふせげるものと存じま

す」
「房右衛門を牢内から助け出すには、どうすればよいのです」
「これが一番むずかしい仕事でございます」
「房之助や清太郎にたのんで、牢破りをしてもだめですか」
「馬場党も油断なく手をめぐらせてましょうから、二人や三人では牢内へ近づくこともなりますまい。よしまたうまく房右衛門を助け出してみましたところで、総代名主に会うまでが一騒動になりましょう」
「困りましたね。なにかいい策はないものでしょうか」
「ただ一つ、刀で牢番に向かうのではなく、牢番を説得して房右衛門を助け出すだけの器量人がおりますれば、あんがい事はうまく運ぶのではないかと思います。手前が御当主さまに引きそって、事が敢行できますれば、不肖ながら、なんとかなる目あてがないではございませんが、それでは早急の間にあいません」
「鶴七郎さまにお願いしてはだめなのですか」
ずばりと駄々姫が切りだす。
「それは、浜町さまなれば一も二もなく事はおさまりますが、高が一藩の不始末にさような勝手なお願いは、口にするのも恐れ多いことでございます」
「いいえ、鶴七郎さまは人の難儀を黙って見ていられるお方ではございません。清太郎や浪江をはじめ、これまでにも、ずいぶん困っている人を助けておいでになります。ですから、お駄駄は心から鶴七郎さまを尊敬しているのでございます。――鶴七郎さま、――きっと房右衛門を牢内から助けてくださいますね」
駄々姫は、ちゃんと一人できめてしまっているのである。
「お駄々どの、あなたはたしかに賢夫人になれる方だ」
「はい、お駄々は、きっと鶴七郎さまの賢夫人

になります」
またしても見事なしっぺがえしだった。
「よろしい、よろしい。こんなかっこうで失礼だが、では御当主と松月院さまにお目にかかることにしましょう」
鶴七郎ももう度胸をきめるほかはない。
「本当でございますね、鶴七郎さま」
「本当です。鶴七郎は勇気を愛する男ですからな」
「民部、早く御当主さまに今のことを申しあげておいでなさい。お駄々が後から鶴七郎さまを案内します」
「はっ、なんともお礼の言葉もございません。ただただ感泣つかまつります」
民部は心から頭をさげると、房之助をしたがえて、いそいで御殿のほうへ引きかえしていった。
「鶴七郎さま、お駄々は差しでがましいことをいたしまして、おゆるしくださいませ」
二人きりになると、駄々姫は急に鶴七郎の前へ両手をつかえて、深くわびる。その目に涙さえうるんでいるようだった。

賢夫人ぶり

「お駄々どの、今日は上田の御当主にも松月院さまにもお目にかからぬほうがいいように思う」
鶴七郎はなにか思いついたらしく、ふっとそんなことを言い出す。
「どうしてでございます、鶴七郎さま」
「わしが御当主からたのまれて上田へ行くのと、お駄々どのの話を聞いて物好きから上田へ行くのと、なにか事があった場合に、上田家へかかってくる迷惑が違ってくる。わしの物好きにしておいたほうが、後の面倒がなくていいようだ」
こんどの上田行きは、敵地へはいっていくのである。必ず無事に帰ってこられるとは言いが

たい。万一のことがあった時、上田家でたのんで行ってもらったとなると、若隠居はしていても公子は公子なのだから、なぜ公儀へ前もって届け出ておかなかったかと、それが問題になってくるのだ。
鶴七郎が自分の物好きから出かけたのだとなれば、その責任だけは問われずにすむ。
「まあ、鶴七郎さまにそんな、もしものことがありましたら、お駄々はどうしましょう」
駄々姫もはっとそこへ気がついたらしく、いまさらのように顔色を変えた。
「いや、わしは勇気があるから、めったに、もしものことなどありません。しかし、打つべき手は、ちゃんと打っておくほうがいいのです」
「そう申せば、敵も死に物狂いでしょうから、お駄々は急に心配になってきました」
たった今まで自分がさんざんすすめていたくせにと、鶴七郎は思わずおかしくなりながら、
「賢夫人は女々しいことをいうものではありません」
と、たしなめてやる。
「あたくし駄々夫人だったかもしれません」
「そんなことはない。お駄々どのは、やっぱり賢夫人です。だから、わしはお駄々どのが好きなのだ。さあ、しゃっきりしましょう」
「いつ江戸をお立ちになりますの」
「思い立ったが吉日ということがある。今日ここから立つことにします」
鶴七郎は一度決心がつくと、すぐ実行に移さないと気がすまない性分なのだ。
「まあ――」
駄々姫はいよいよ顔を曇らせながら、
「浜町のお屋敷へことわらなくてもよろしいのでございますか」
と、気が気ではないようだ。
「屋敷へは使いをやっておきましょう。今から立てば、日いっぱいに五、六里は歩けるし、そのほうが敵の意表を突くことになるのです」

「家来は何人ぐらいつれておいでになりますの」
「清太郎、鳥松、ぴょの三人だけにしましょう。わしはこれから船で先へ京橋の大根河岸へ行って待っているから、房之助は御当主のお墨付きをもらって、清太郎といっしょに後からすぐ来るようにと、お駄々どのから申しつけておいてください」
「もっとたくさん家来をつれていってはいけないのですか」
「いや、桃太郎だって鬼ガ島へ行く時の供は、犬、さる、きじの三匹ですからな。わしも三人でたくさんです」
「そうでした。鶴七郎さまは桃太郎よりお強いのですもの、きっと大丈夫でございますね」
どうやら駄々姫も鶴七郎の日ごろを思いだして、少し安心してきたようだ。
「大丈夫です。わしは賢夫人にほめられるほど勇気のある男なのです」
「短筒はお持ちになっていますの」
「持っています。では、そろそろ出かけますかな」
「まあ、そんなにおいそぎにならなくても、――もうおひるですのに」
「いや、善は急げということもあります。おじゃましました。おもしろい土産話をたくさん持ってきてあげよう」
鶴七郎はわらいながら立ちあがる。
「ああ、お待ちあそばして――」
このまま別れてしまうのは、あまりにも名残惜しい駄々姫は、いそいで呼びとめて立ちはしたものの、自分でもどうしていいかわからず、倒れかかっていった。
「鶴七郎さま」
「どうした、お駄々どの」
鶴七郎ががっしりと胸へ受けとめて、肩を抱いてくれる。

「お駄々を、どこにいてもお駄々のことを忘れてはいけません」
「わしの賢夫人、――忘れはせぬ」
鶴七郎は大輪の緋ぼたんがあえいでいるような駄々姫の切なげな顔を、すぐ目の下に近々と見つめて、激しい愛情が火のように燃えてきた。抱いている肩の手に思わず力がこもって、ぐいと引きよせながら、くちびるがゆっくりと赤いくちびるへ近づいていく。
「うれしい、鶴七郎さま」
駄々姫は、紫の雲につつまれてしまったようなうっとりとした幸福に目をつむって、鶴七郎のくちびるをうけながら、気が遠くなりそうになってきた。
「さあ、これで約束はすんだ。お駄々どのはもう鶴七郎の賢夫人になったんだ」
鶴七郎のくちびるがすっと離れていくのを、駄々姫はまだ夢のように聞きながら、思わず目をあいて、にっこりとわらった。なにか恥ずかしいような、いつまでもこうして抱いていてもらいたいような。
「お駄々はもう鶴七郎さまのもの」
舌の先まで甘ったるくなっているのが、自分でもわかる。
そういえば、全身から力がぬけてしまって、まだぐったりと鶴七郎の胸の中に支えられているのだ。
「さあ、もうしゃっきりしなさい」
駄々姫はいやいやをしてみせる。
「はてな、賢夫人が甘夫人になってしまったかな」
「鶴七郎さまのせいです」
「よろしい、活をいれてあげよう」
鶴七郎はもう一度ぐいと肩を引きつけて、思い切り抱きしめておいてから、ぽんと一つ背中をたたいて、素早く身をひいた。
「まあ、鶴七郎さまは――」
「では、行ってまいります」

にっと微笑してみせて、鶴七郎はぬれ縁から庭へおりる。
「いけません。お待ちあそばして」
そこまで追ってきた駄々姫が、庭へ手をたたいて、
「浪江、――浪江はどこです」
と、いそがしく呼ぶ。
すそをひいて、打ち掛けを着ていたのでは一人で庭へおりかねるのである。
「はい、ただいま」
枝折り戸のほうから浪江が走り出てきて、駄々姫の身支度ができるまで、鶴七郎は庭に立って海のほうを見晴らしていた。
江戸から信州上田まではざっと四十八里ほどある。ほぼ五日の道中になるだろう。
敵は昨日すでに浜町の屋敷へ目をつけているのだ。今日信濃守が駄々姫屋敷の客になったことを、うっかり見のがしているはずはない。すると、房之助が清太郎といっしょに旅支度でここを出れば、おそらく上屋敷の一味へ伝令が飛び、敵はまず戸田の渡しあたりへ網を張るのではないだろうか。
――しょせんは、その網の一つ一つを腕と知恵で押し破っていくほかはあるまい。
鶴七郎の頭は早くもこの風雲の道中へ一歩踏み出している。
「鶴七郎さま、船着き場までお見送りさせていただきます」
駄々姫が肩をならべてきた。
「ありがとう」
鶴七郎は賢夫人の手を取って歩きだす。
腰元たちは見ないふりをして、ずっと後からついてくる。
「お駄々はしあわせです、鶴七郎さま」
姫君はおおらかで正直である。
「つい今朝まで、こんなにしあわせがあるとは知らずにいました」
「すると、わしの賢夫人になるのがしあわせだ

ということになるんですか」
「ええ、お駄々の胸の中には、もう鶴七郎さまのほかに、なにもなくなってしまいました。だから、しあわせなのです」
「なるほど――」
「さっきは、こんどの旅が少し心配になりました。けれど、馬場大膳はどんなに悪だくみをはかっても、将軍家の家来のまた家来です。鶴七郎さまに勝てるはずはありません。しかってやればいいのです。もう安心しました」
駄々姫は自分が昂然と胸を張ってみせるのだ。そういうところは、しごく無邪気でもある。
「よろしい、きっと、しかってやりましょう」
「本当は、お駄々も鶴七郎さまと、このまま上田まで行きたいのですけれど、そんなに歩けないかもしれませんから、やっぱり江戸で待っています」
「そのほうがいいのです」
「そのかわり、鶴七郎さまが上田からお帰りになりましたら、すぐに浜町へお輿入れをします」
「さあ、家来たちがそううまく運んでくれるかな」
「いいえ、家来たちがうまく運んでくれなければ、お駄々は自分で浜町へまいります。もうそんなに待っているのはいやなのですもの」
「鶴七郎のことで胸が一杯になっているわけですな」
「ええ。鶴七郎さまにさっき抱いていただいた時、うれしくて、もう死ぬかと思いました。あの時から、お駄々の胸の中は、鶴七郎さまで一杯になってしまったのです」
「わしもあの時はお駄々どのを食べてしまいたいと思った」
「ああ、それで鶴七郎さまはお駄々のくちびるをかんだのですか」
「そうです」
「食べてしまってくださればよかったのに」
駄々姫はしっかりと鶴七郎の腕を両手で胸に

抱いて歩きながら、まだ恋のうま酒に酔いしれているようである。
やっと船着き場へ出てきたようだ。
足音を聞きつけたらしく、烏松が艫へひょいと立ちあがり、
「殿さま、お帰りでござんすか」
と、いそいでおじぎをしてしまう。
見ちゃいられねえと思ったのだろう。
「烏――」
駄々姫が鶴七郎の腕を放して、つかつかと桟橋の上へ行く。
「へえ」
「ぴよはどこです」
「ここにいやすよ、お姫さま」
「両人に申し聞かせます」
「へえ」
「鶴七郎さまはこれからそなたたちをつれて上田へまいりますから、もしあぶないことがありましたら、いつでもお身代わりをつとめなくてはいけません」
「へえ」
「鶴七郎さまはお駄々の、お駄々の大切な人なのですから、きっとたのみます」
「かしこまりやしてございます」
「そなたたちは本当に忠義者ですね。お駄々はうれしく思います」
それはまったく愛情こまやかな賢夫人ぶりであった。

旅立ち

「殿さま、いよいよ上田へ乗りこむんでござんすか」
船が尾州家の水門口を出ると、芳公と二人で艪をこいでいる烏松が、船房のほうへ聞いた。
「うむ、どうもやむをえぬ仕儀になった」
鶴七郎は体を横にして休めているようである。
「つまり、とうとうお姫さまに、やいのやいの

と、くどき落とされてしまったってわけなんですね」
「そういうことになるな」
「上田の殿さまと、御生母さまにお目にかかってきたんですか」
「会わなかった。――会わぬほうがよいのだ」
「なるほど――」
鳥松にも、その心はおよそ見当がつく。
「じゃ、殿さまはずっとお姫さまと差しで、茶室でくどかれていたってことになるんでござんすね」
「いや、江戸家老神谷民部にはちょっと会った」
「それにしても、あのお姫さまに長々と差しでくどかれちゃ、男としていやだとは言い切れなくなる。行くのは結構でござんすがね、物には礼心ってことがありまさ。お姫さまは殿さまになにをくれるって言ってやした。こんな命がけの仕事を、まさかただってことはねえでしょう」
「うむ、お駄々を食べてもいいといった」
「食べる。――頭から塩をつけてでござんすか」
「うむ。とにかく、上田へ行って帰ってくると、賢夫人になりに、浜町へ押しかけてくると申していた」
「なあるほど――、あのお姫さまはたしかに賢夫人になりやす。自分で御亭主にあぶない仕事を押しつけておいて、もしものときはあっしたちに身代わりをつとめろ、きっとたのみおきますぞえとおいでなすった。あっしたちがそんなにたのみになると思っていておくんなさるのはありがてえが、たのみにされたほうの身になってみると、こいつはちっとばかし荷が重すぎやす」
はじめは冗談口のつもりだったのが、考えてみるとそれどころじゃない、こりゃあ命がけの仕事だったと、鳥松は急に心配になってきた。
「まあよかろう、もう引きうけてしまったのだから、やるところまでやってみなければ、お駄駄どのにわらわれる」

「そりゃ、こうなっちゃまさか後へは引けやせんがね、――で、いつ江戸を立つ気なんでござんす」
「今日これから立つことにしてある。船を京橋の大根河岸へつけてくれ。後から房之助と清太郎が支度をしてくることになっているのだ」
「あれえ、そいつはまたばかに手っ取り早くできているんですねえ。こっちの支度はどうなるんです」
「わしは、わらじさえはけば、このままでいい。べつに支度が上田へ行くわけではない。体さえ運んでいけばいいのだ」
「こいつは理屈だ、体はわらじさえはけば、あんよが運んでくれやすからね。浜町のお屋敷へは黙って行っちまってもいいんですか」
「茂右衛門が心配するといかんな。お前わらじをはいたら、ちょっと浜町へ寄って、後から追いつくがいい。どうせ今夜は蕨（わらび）泊まりということになるだろう」
日本橋から板橋へ二里八町、板橋から蕨へ二里八町、昼から立つとすればちょうどその辺泊まりになる。
「驚いたなあ、殿さまはよっぽどお姫さまにおどしゃをかけられやしたね」
とはいうものの、立つとなれば、そのほうが面倒が省けていいのだ。一度浜町へ帰ってからなどといっていては、いつ敵の目が光りだすかしれないのである。さすがは殿さまだと、鳥松は内心感心させられる。
「殿さま――」
船房からは返事がない。
「あれえ、眠っちまったのかな。そんなとこでうたた寝すると、風邪をひきやすぜ、殿さま」
「おじさん――」
芳公が小声で呼ぶ。
「どうした」
「おもしろくなってきやがったね」
「のんきなことをいっちゃいけねえ。いざとな

りゃ、おれたちはお身代わりの道中だ」
「しっかりしてくんなよ、おじさん。江戸にいたって、おいらたちはいつもお身代わりを買って出ているんじゃねえか。どこで死んだっておなじことさ。おいら、わらって死んでみせるぜ」
　芳公の目がわらっている。
「なあるほど、こいつはおじさんが一本まいりかな」
　鳥松は胸の中へ涼風を吹きこまれたような気がして、腹がすわってきた。別に命が惜しかったわけじゃない。どうすればうまく目的を果たして、みんなで江戸へ無事に帰れるかと、つい欲が出るから、心配も苦労もするのである。
　――年からいえば、おれが一番上なんだからな。気だけは使ってやらなくちゃならねえ。
　鳥松は鳥松らしいことを考えているのだ。
　船がやがて京橋の大根河岸へ着くと、鳥松はすぐ芳公をつれて陸へあがり、江戸というところは金さえあれば調法なところで、まもなく二人共すっかり旅支度になって帰ってきた。しかも、鶴七郎のわらじから手甲脚絆、菅笠までそろえてきている。
「では、殿さま、あっしはこれから浜町へまわって、後から追いつきやす」
「そうしてくれ。ご苦労だな」
「なあに、一っ走りでさ。芳公うじ、船はしっかりとそこへつないでおいてくんな。ついでに、船宿へ寄って、船頭に取りにくるようにたのんでおくからな」
「合点だよ、おじさん」
　鳥松が陸づたいに走り去ると、まもなくこれも旅支度に身をかためた房之助と清太郎が、河岸に来て立った。
　清太郎は昨夜以来の侍姿である。
「殿さま、このたびはひとかたならぬ御尽力、感泣のほかはござりませぬ。御当主さま、ならびに御生母さまからも、くれぐれもよろしく申しあげてくれますようにとのお言葉でございま

した」
　房之助はまず丁重にあいさつをする。
「往来中で目立っては悪い。もうなにも申すな」
「はい」
「お墨付きは持参いたしたな」
「しかとちょうだいいたしてまいりました」
「それでよい。今からわしは松平鶴七郎ではなく、道中は陰陽師風来堂松鶴ということにする。そちたちは弟子というつもりで、先生と呼びなさい。殿さまはいかんぞ」
　相かわらず差し添え一本という気ままな姿だから、侍にしてはおかしいし、むろん町人とも見えない。風変わりな易者ぐらいがちょうどいいところである。
「風来堂松鶴先生でございますな」
「そうだ。では、まいるぞ」
　鶴七郎は先に立って、京橋のほうへ歩きだす。
「清あにい、立派だなあ。お侍さんに清あにいと呼んじゃ悪いねえ」
　芳公はうれしそうに清太郎と肩を並べながら、菅笠の中の顔を見あげる。
「かまわないよ、芳公。清あにいは侍は廃業しているんだからな。それより、おじさんはどうしたんだね」
「おじさんは、殿さま、じゃねえ風来堂先生の御用で浜町のほうへまわって、後からすぐ追いつくことになっているんだ」
「そうか。お屋敷へ知らせておかなくちゃ、いくらなんでも御用人さまが心配するからな」
「うちの殿さまときたら、じゃねえ風来堂先生だった、どうも殿さまが口癖になっていていけねえや。あれえ、おれなにをいうつもりだったけかな。そうそう、うちの先生ときたら気が早いからね、おじさん目を丸くして、きっとお駄駄さまにうんとおどしゃをかけられたんだろって、心配していたっけ」
「そうか」
「なにしろ、おいらたちお駄々さまから、あぶ

ない時はそなたたちがお身代わりになってくださいって、たのみこまれてきているんだ。清あにい、心配しなくったっていいぜ。お身代わりはおいらが一番で、おじさんが二番目ということにきめておくからな」

芳公があっさりといってのける。

「清の字──清の字」

前を行く鶴七郎が呼んだ。

「はい」

清太郎がいそいで肩をならべていく。真ん中の清太郎がぬけたので、こんどは房之助が芳公と肩をならべることになる。

「芳公うじ、今の話を」

「なんの話だい、前川さん」

「そのお身代わりの一番手というやつ、それはわしに譲ってくれ。そうでないと、わしの面目が立たん。わが藩のために、みんなに苦労してもらっているんだからな」

けなげな房之助は、顔を真っ赤にして感激しているようだ。

「あれえ、前川さん、いいとこあるんだなあ。そうか、前川さんもまだ賢夫人がいないんだね。じゃ、仲間に入れてやってもいいな」

「ぜひ、たのむ」

房之助はしっかりと芳公の手を握っていた。

「清の字、お蓮はどうしたな」

前では鶴七郎が清太郎に聞いていた。やがて、京橋から日本橋へかかろうとしている。

「はい、母のところへ残してまいりました。しばらくいてくれるようにと、母が望みますものですから」

「そうか、そうであろうな。浪江は、お駄々どのが放さぬ。母も一人では寂しいだろう。それはよかった」

「母も、浪江は姫君さまの御意にかない、しあわせ者だと、よろこんでおります」

「うむ。お蓮はこんどの道中を心配していたであろう」

「はい。しかし、母のことは決して心配してくれるなと申してくれました」

「そうであろうな。あれも性根は賢夫人になれる女だ」

「当節は賢夫人ばやりのようでございます。駄駄姫さまは、手前が築地を立ちますおり、わざわざお目通り仰せつけられまして、後のことは必ず心配するなと、ねんごろなお言葉をたまわりましてございます」

「ほかになにか申していなかったか」

「これはまだだれにも内密だが、こんどのことがすめば、すぐに浜町へまいるつもりなんだから、含んでおいてくれるようにと、特に仰せられておりました。察するに、いざという時には、お身代わりになっても、殿さまだけはきっとおまもりせよというお心かと存じます」

「たぶん、そうであろう。あの賢夫人は、なかなかすみへおけぬ」

鶴七郎は明るくわらいながら、

「どうだ、築地を立ってから怪しいやつにつけられている、それを気にしなかったか」

と、ふっと真顔になる。

「十分気をつけてまいりましたが、そんなふうはないようでございます」

「そうか。もっとも、わざわざ尾行するまでもなく、行く先は上田とわかっているのだからな」

「と仰せられますと、敵はもうこっちの旅立ちを悟ったと見るべきでしょうか」

「そのほうがよいと思う。そちと房之助が旅姿で築地を出たとわかれば、敵は一切を悟る。昨夜、そちは築地へまいる途中で大塚文之進らに会っているのだし、その翌日の今日、信濃守どもが駄々姫屋敷へ客になったとなれば、だれしもおよその見当はつくだろう」

「なるほど──」

清太郎は目をみはらずにはいられない。

「どう策を弄してみても、しょせんはねらう者とねらわれる者だ。こっちは正面から闘いをい

どむほかはない。勝負は腕と力ということになるだろう」

鶴七郎はもう先の先まで見とおしているようである。

雌だぬきとくま

板橋から蕨へ二里八町、その中ほどに志村という村がある。志村を出ると草っ原道が二十町ばかりつづいて、戸田の渡しへかかる。

鶴七郎の風来堂先生が芳公をつれてこの草っ原道へかかろうとしたのは、もう八つ半(三時)に近い時刻だった。

「先生、おじさんはまだきませんねえ」

芳公は後ろを振りかえってみながら、またしてもいった。十間ばかり後から清太郎と房之助がついてくるが、浜町へ回った烏松は、まだ追いついてくるようすもない。

「そう心配しなくともよい。今夜の泊まりは蕨ときまっているのだ」

「心配はしませんが、おじさんは自慢の足なんですからね。板橋あたりできっと追いつくはずだと、おいら踏んでいたんです」

「では、途中で、うさぎの昼寝としゃれているのかもしれぬな」

「そんなことしたら、おいら承知しません」

「なぜだな」

「道中へ踏みだせば、おじさんでなくちゃ間にあわない用がたくさんありまさ。板橋からこっちは、もう道中へ踏み出したことになる。御用の手間を欠くのは、いい奉公人じゃありませんや」

侍は侍の役にしか立たない。道中は物騒だから、世間なれた烏松のような男がついていなければ、人にごまかされやすいと、芳公は心配しているのだろう。

案の定、志村を出はずれて草っ原道へかかろうとする掛け茶屋の前までくると、

「お武家さま、すみませんが、そこまでお供さ

せてくださいまし」

と、こっちの通るのを待ってでもいたように、中から若い女が走りでてきておじぎをした。年ごろ二十三、四でもあろうか、旅芸人といったような身なりだが、ひどくあだっぽい女で、のびのびとした肢体に、どこか妖気のようなものがあふれている。

「あぶねえ、あぶねえ」

と、芳公が目をみはりながらいった。

「ほんとにあぶなくて、あたし困っているんです」

女は神妙な顔をして訴えるようにいった。

「この草っ原道は、そんなにあぶないのか」

「いいえ、あたしより一足先に、こわそうな浪人さんが茶店を立っていったんです。なんですか、あたし、その人たちが途中で待ち伏せしているような気がして、だれか通ったらいっしょに行っていただこうと思って、待っていたんです」

「ふうむ、浪人者たちがねえ」

鶴七郎は涼しいまゆをひそめる。ひょっとすると、大塚文之進が雇った浪人組かもしれないからだ。

「一人は体の大きい、剣術使いといった男で、一人はその門弟のようでした」

「二人きりか」

「ええ、二人きりです。二人ともなんだか人相があまりよくないんで、心配なんです」

「そうか。まあ、いっしょにきてみなさい」

とにかくぶつかってみなければわからないので、鶴七郎は女をうながして歩きだす。

「お武家さまは、どちらまでおいでになるんでございます」

女は芳公と反対側のほうへ肩をならべてきながら、そんな、だれでもがまずききたがるようなことを口にする。

「どこといって、別に当てはない。わしは風来堂という陰陽師でな、人助けのために諸国を遍

歴しているのだ」
「まあ、陰陽師というと、占い屋さんなんですか」
「うむ。易を立てれば、観相もやる。自分でいうのもおかしなものだが、これでなかなか名人のほうなんだ」
「おいらはねえ、ねえさん、風来堂先生の弟子で、芳公堂ってんだ。自慢じゃないが、当たることはなんでも当たるかわりに、はずれるときはきっとはずれるっていう名人なんだ」
芳公はぺろりと赤い舌を出す。
「じゃ、坊や、あたしがどんな女だか当ててごらんなさい。うまく当たったら、好きなものをおごってあげる」
女はまず芳公に挑戦してきた。
「あれえ、坊やとおいでなすったな、しょうがねえ。今日から坊や堂芳公先生と改名するかな」
「それで、坊や堂先生のお見立ては」
「さよう、ねえさんの前世はきつねだった。母ぎつねのおこんさんが浮気者で、女に化けて夜な夜な村の若い衆といたずらをしているうちにできたのがねえさんなんだ。だから、ねえさんは油揚げが好きで、人をだまくらかすのがうまい。どうだ、当たったろう」
芳公はずばりとやってのける。
「少し違ったわ。あたしの前世はたぬきで、油揚げは好きじゃないかわりに、綱渡りができます。文福茶釜はあたしの伯父さんなんです。あたしは軽業師で、つばめ太夫と申します。どうぞよろしく」
「なあんだ、ねえさんはたぬきか。そのわりに、おなかは大きくないねえ」
「いまにだんなさまを持てば、いやでも大きくなります」
けろりとしてわらっているあたり、これは相当のしたたか者らしい。
「太夫は一人旅のようだが、どこまで行くのかな」

鶴七郎は気軽に声をかける。
「高崎に一座が待っていてくれるんで、それを追っていくんです」
「では、いそがしい旅ということになる」
「そうなんです。風来堂先生、あたしの一生の運勢はどうなんでしょう。あたしは一生旅まわりの女芸人ですんでしまう女なんでしょうか」
「さようさな、太夫は女にしては度胸がありすぎるので、今までしたいほうだいのことをして、天下にこわいものがなかった。しかし、もうそろそろ身がかたまって、ちゃんとした女になれる運が向いてきているようだ」
「身がかたまるって、あたしがちゃんとした御亭主を持つことなんですか」
「そうだ。来年あたりは、たぬきになれるかもしれないな」
「そんな、あたしの好きになるような男が世間にいるかしら」
「太夫は強い女だが、しかし、ただ一つ泣きどころはある。その弱点を突かれると、ころりとまいる」
「まあこわい。――それはどんなところなんです」
「わしにきかなくても、いまに自然にわかる時がくる」
「ずるいわ、そんなこと。――知っているんなら、教えてくれたっていいじゃありませんか」
弱点といわれたのがひどく気になるらしく、つばめは少しむきになってきたようだ。
「悪いことなら、ころばぬ先に注意してやるということもあるが、太夫のは、ころんだほうがしあわせな女になれるのだから、まあ、その時までたのしみに待っていなさい」
鶴七郎はおだやかにわらっている。
「じゃ、先生は近いうちにあたしが本当にほれて、たぬきになりたくなるような男が出てくるっていうんですね」
「さよう」

「もし、そんな男が出てこなかったら、どうしてくれます」
「気の毒だが、その時は自分のふしあわせだと思ってあきらめてもらうほかはあるまい」
「ずるいなあ、そんなことといって逃げてしまうなんて」
「いや、わしは逃げもかくれもしないが、太夫は自分がしあわせになるのはいやなのか」
「変なことをいうんですね、先生は。じゃ、あたしは男にほれて、たぬきにならなければ、しあわせになれないっていうんですか」
「女は男にほれれば、だれでもたぬきにしてもらいたくなる、男にほれることがふしあわせか、しあわせかは、その女の心しだいで、太夫の場合は女のしあわせとはここにあったのかと、たぶんわしに感謝するようになるだろう」
「そうかしら。あたしが夢中になれるような男なんて、世の中にいるかしら」
　これはまた、ひどくうぬぼれの強い女のようだ。
「あれえ、先生、あそこに変なやつが待ってるようですよ」
　芳公がふいに前のほうを指さす。
　ちょうど草っ原道の真ん中ほどへかかって、道端に松の木が一本枝をひろげている。その下に、剣客ふうの男が二人、じっと立ってこっちを見ているのだ。
「太夫、あれか、お前のいったこわい浪人者というのは」
「ええ、そうなんです。やっぱり、あいつたち待っていたわ」
　つばめが吐き出すようにいう。
「よろしい、黙ってついてきなさい」
　鶴七郎はゆっくりとそっちへ進んでいく。
　さっきつばめが道づれになった時から、すぐうしろへきていた清太郎と房之助が、
「先生、手前どもが先へまいりましょうか」
と、そっと声をかけてきた。

「いや、お前たちは知らんふりをしていなさい」
「はい」
　つばめがちらちらっとうしろを振りかえりながら、
「あのお二人も、先生のお弟子さんたちなの」
と、きいた。
「さよう。一人は清の字堂、一人は房の字堂、まだ二人とも初学でな、物になるかどうかわからぬ」
　鶴七郎はあっさりと答えていた。
「待ちたまえ、貴公たち」
　一本松の下までくると、身なりは貧乏くさいが、体軀(たいく)の堂々たる師匠剣客のほうが声をかけてきた。
「なにかわしに御用かな」
「うむ。よけいなことだが、貴公はどこでその女と道づれになったんだね」
「志村のはずれの掛け茶屋の前から同行しています」
「まあ、そこまで歩きながら話そう、話は歩きながらでもできる」
　師匠剣客は、芳公をおしのけるようにして、鶴七郎と肩をならべる。
「けっ、ずうずうしいんだなあ」
と、芳公はあっけに取られている。
「子供は黙ってさがっておれ」
　剣客は歯牙(しが)にもかけず、
「貴公は遊山旅か」
と、鶴七郎にきく。面がまえはこわい豪傑面だが、そう腹黒い人間にも見えない。
「いや、わしは風来坊という陰陽師で、稼業旅(かぎょうたび)です」
「易者か。それなら一目でわかりそうなものだな」
「なにがです」
「その女は、貴公、なかなかのくせ者だぞ」
「はあ、前世はたぬきだったと、自分でもいっています」

「なにッ、たぬき――」
「つばめ太夫という綱渡りのうまい軽業師だそうでしてな。太夫がいうには、こわい浪人さんが原で待ち伏せしていそうだから、道づれになってくれと頼まれました」
「それはあべこべだ。わしはその女を道中師と見たんで、諸人のために化けの皮をはいでやろうと思い、わざわざあそこで待っていたんだ。案の定、雌だぬきは貴公をくわえこんできた。油断してはいかんぞ、貴公」
　当人をそばにおいて、これだけ堂々と言いきれれば、これもまた、たいした人物である。
「くまの親類みたいなおじさん、あんまり変なことといわないでくださいな」
　つばめがせせらわらうように口を出してきた。
「なにが変なことだな」
「あたしを道中師だなんて、どこを押せばそんな音が出るんです。あんたこそ、ふところが寂しくなったんで、武士のならいってやつをやろうと思ってたくせに」
「なんだ、武士のならいとは――」
「切り取り強盗っていう能なしのやる物騒な荒仕事のことよ」
「無礼なことをいうな。神道無念流の達人大河原一刀斎、そんなバカなまねはしなくても、ぜひ召し抱えたいという大名が腐るほどあるんだ。お前らのような雌だぬきとは、ちょいと人間のできが違うのだ」
「じゃ、どうしてさっさとどこかへ召し抱えられてしまわないんです。そんなお寒いかっこうをして、道中をうろうろしているより、どこかの御指南番になっていたほうが、よっぽどくまの胆(い)が育つんじゃないかしら」
「そうはいかん。わしが道中を留守にすると、お前らのような雌だぬきがのさばって、諸人に難儀をかける。わしは諸人のために、こうしてわざわざ道中をしてまわっているのだ。わしの

目の黒い間は、お前などにこの仁のふところは絶対にねらわせんから、その覚悟でおれ」
　察するに、このくま剣客は、鶴七郎をいいかもと見て、しばらく道中を賄ってもらう気でいるのだろう。
　江戸を立ったその日に、鶴七郎はたちまち妙な道中虫二組にねらわれてしまったものである。

ふろ場の媚態(びたい)

　鳥松は戸田の渡しへかかるころ、やっと一行に追いついてきた。
「どうしたんだ、おじさん、心配していたんだぜ」
　荒川の土手に立って待ちかねていた芳公は、こっちから走り寄っていって不平そうにいう。
「そうか。実は、お屋敷であんがい手間取っちまってな。御用人さんにすりゃ、いろいろと心配されるのも無理はねえ。で、みんな別に変わりはないんだろう」
「それが大変なんだ、おじさん。あの草っ原道から、女と男の虫が先生についちまって。ああ、そうそう、殿さまは道中じゃ風来堂って易者に化けていくんだから、先生って呼べっていうんだ」
　そのことを早く話しておきたくて待っていた芳公だから、いそいでつばめ太夫(たゆう)と大河原一刀斎のことを鳥松の耳に入れる。
「ふうむ、もうそんな虫がついたのか」
　鳥松はちょっと考えてから、
「野郎のほうはただの油虫かもしれないが、雌だぬきのほうは、ひょっとすると、さそりかもしれねえ」
　と、目を光らせる。
「さそりってなんだ、おじさん」
「おれも見たことはねえが、油虫よりは小さい虫で、そいつに刺されるとたちまち死んじまう、すごい毒虫なんだそうだ」

「そいつはあぶねえ。先生のそばへくっつけておいても大丈夫かなあ」

　土手へあがってくると、なるほど、船着き場に立っている鶴七郎の右と左に、まるで意地にでもなったように、つばめ太夫と大河原とがくっついている。

　清太郎と、房之助と、大河原の門弟というのが、少し離れたところから、そっちをながめているようだ。

　日はすでにだいぶ西へ傾いて、だれの影も河原に長くのびている。

「先生、ただいま帰りやした」

「御苦労だった」

　烏松が鶴七郎の前へ行っておじぎをすると、つばめ太夫も大河原もじろりと見て、うさんくさそうな顔をする。

「先生、この兄さんも占いのほうのお弟子さんなんですか」

「いや、これは烏松といってな、万事風来堂の財布をあずかっている大番頭だ」

「あらあら。じゃ、この兄さんにはお世辞を使っておかないといけませんね。兄さん、あたしは高崎まで先生のお供をさせていただくつばめという女芸人なんです。どうぞよろしく――」

　つばめは悪びれもせずに、気取ったおじぎをする。

「お供はいいが、先生につめだけは立ててもらっちゃ困るぜ」

「大丈夫だわ。どうせねらうんなら、あたしは財布をあずかっているおじさんのふところをねらいます」

「なあるほど。――お前はすみにおけねえ雌だぬきのようだ」

「そのとおりだ。しかし、心配せんでもいいぞ。神道無念流の達人、この大河原一刀斎の目が光っている間は、道中師などに指一本出させはせぬ」

　ぽんと胸をたたいてみせる大河原だ。

「神道無念流っていうと、だんなは飯田町の斎(さい)藤弥九郎(とうやくろう)先生の門人かね」

「いや、弥九郎はわしの弟弟子だ。間違ってはいかん。あれは口先がわしよりうまいんで宗家をついだが、腕ではわしに頭のあがらぬ男だ」

「ちょいと、くまの先生、あんたのくまの胆(い)も相当なもんね。つぶしにすると、いいお金が取れるわ」

　どっちもどっちで、いい取り組みである。

　戸田の渡しをわたると、まもなく蕨の宿である。

「松つぁん、大丈夫だろうかなあ」

　わざと一番後ろになって、清太郎が心配そうに烏松に聞いた。

「見たところ、くまの方はだぼらばかりで、そうたいしたやつじゃなさそうだが、雌だぬきはどうもくさいね。明けっ放しにぱっぱっと物をいってしまうあたり、腹ん中にはなんにもなさそうに見えはする。が、あの五分もすきのない体つきがくせ者だ。軽業師にしても、相当名のある太夫だ。その太夫が一人で旅をしているってのが第一くさい」

「なるほど。――すると、殿さまの寝首でもねらう気だろうか」

「そういうことになるかもしれない。もう一つ、あの薄ぼんやりしているくまの弟子野郎、こいつがどうも怪しいんじゃないかと思うんだがねえ」

　館林八十吉(たてばやしやそきち)と名乗ったその門弟は、いま芳公の話相手になりながら、くたびれたような歩き方をしている。

「あれがどう怪しいんだね」

「こいつは、あっしの勘でね、なんにも怪しい節が見えねえから、くさいとにらんだのさ。まあ、あいつから当分目をはなさないことだ」

　烏松にそう言われてみると、清太郎は薄ぼんやりの館林から目が放せなくなってしまった。

　おかしなのもで、そうなると各自の分担がい

つのまにかきまる。芳公は一番罪のないくま剣客を、房之助が一番怪しいつばめを、それとなく受け持つことになったようである。
「清の字さん、もしつばめが怪しいということになれば、大塚一味に金でたのまれてきているということになるんだろうか」
房之助はおりを見て清太郎に聞いた。
「そう見ておいたほうが、間違いないだろうと思う」
「すると、つばめの目的は、殿さまのお命ということになるのか」
「ことによると貴公の持っているお墨付きかもしれないし、場合によっては真夜中に雨戸をあけて敵を手引きするという手もある」
「なるほど、こいつは油断はできないわけですな」
それからの房之助は、始終つばめから目を放さないようにしている。
その夜の宿は、蕨の宿の林屋ときまった。同行八人だから、鳥松の采配で八畳と六畳の二間つづきを借り、寝る時は鶴七郎だけ奥にもう一間上座敷を用意している。
さて、人を見張るということになると、それはなまやさしい仕事ではない。
いつ相手がどんなやつと連絡を取らないとはかぎらないので、厠へ行くまでついていかなくてはならない。
——こいつは大変な仕事だ。
相手が女だけに、房之助はちょいと当惑させられたが、つばめのほうではどうやら早くもそうと見抜いてしまったらしく、
「房の字堂先生、あたしひとふろ浴びてきたいんですけれど、あんた用心棒に、いっしょにはいってくれない」
宿について男たちがかわるがわるふろへはいってくると、大胆にもみんなの前で、からかうようにそんなことを言い出すのだ。
「そりゃいかん。その用心棒は拙者の役だ。拙

者がいっしょに行ってやる」
大河原剣客が真顔になって立ち上がろうとする。
「あら、くま先生はいまふろからあがってきたばかりじゃありませんか。ここでまだふろのすまないのは房の字さんとあたしだけだから、ついでにいっしょに行ってもらうんです」
「そうか、お前がはいるんだったら、拙者も待っていればよかった。しまったことをしたなあ」
大河原は惜しそうにいったが、だれも知らん顔をしていて相手にならない。
「さあ、房の字さん、いらっしゃい」
つばめは手ぬぐいを持って、さっさと廊下へ出ていく。
——雌だぬきめ、見抜きやがったな。
房之助はしようがないので、後からついていった。
つばめはまったく大胆で、なんのためらう色もなく、帯を解いてはらりと着物をぬぎすてると、澄ましてふろ場へはいっていく。
房之助も度胸をきめて後につづいたが、こんな経験ははじめてなので、白々とした女の体がどうにも目について、目のやり場に困る。それは軽業師だというだけあって、肉太からず細からず、すんなりと引きしまった見事な肢体なのだ。
あいにく、ほかにだれも相客はいない。
「いいふろ加減だわ。遠慮しないで、あたしとおはいりなさいよ。風邪をひくわ」
先に湯舟にひたったつばめは、いよいよ意地悪く挑戦してくる。
「二人ではいると、湯がこぼれやしないか」
「こぼれたって、別にあんたの損にゃならないでしょ」
「そうか、そういえばそうだな」
二人並んではいると、いやでも肩がふれあうほどの湯舟なのだ。
「ふ、ふ、そんなに小さくならなくたって大丈

夫よ。あんた、あんがい遠慮っぽいのね」
「体がさわっちゃ恐れ多いからな」
「おっしゃるわ。はばかりへまで、あたしの後をついてくるくせに」
「あれえ、知っていたのか」
「だれに言いつけられたの。あの鳥のおじさんなの」
「違うよ。ただ、ふらふらとついていきたくなるんだ」
じわじわと責め立ててくるつばめだ。
「ごまかしたってだめよ。あの鳥はただものじゃない。雌だぬきに気をつけろって、あんた、言いつけられたんでしょ。白状なさいよ」
「じゃ、お前は本当に雌だぬきなのか」
房之助がやっと逆襲する。
「いま見てたでしょ。あたしにしっぽがあったか、なかったか」
「そうだったかなあ」
「なあんだ、見ていなかったの」
「目がつぶれると困るからな」
「じゃ、目をつぶって、さわってごらん。あんたなら怒りゃしないわ」
じいっと横目で見てわらっているのである。なんともすごい雌だぬきだ。

失敗剣客

房之助はひとふろあたたまると、流し場へ出てさっさと体をふきはじめた。これ以上つばめに悩殺されてはたまらないからだ。
「あら、もうあがるの、房の字さん」
つばめは湯舟の中へすらりと立ちあがりながら、不服そうにいった。
「あたし、背中を流してもらいたかったんだけどなあ」
「今日はもう勘弁しろ。明日流してやる」
見まいとしても、湯ぼてりに紅を刷(は)いているなめらかな素膚、滴している女盛りの豊かな双の乳房が、若い房之助の目に痛い。

「あんなことをいって、あんた、あたしのしっぽをよく見ていかないと、鳥のおじさんにしかられるんでしょ」
「いや、しっぽはいまさわってみたから、もういいんだ」
「うそばっかし、――ひとがせっかく目をつぶっていてやったのに、あんた、なんにもできなかったじゃありませんか」
「おれは本当は女がこわいんだ」
「どうしてさ」
「どうもおれは好きだとなると夢中になる性分かもしれない」
「いいじゃありませんか、好きなら夢中になったって」
「ところが、おればかり夢中になって、女のほうはさほどでもないとなると、ちょいとみじめなことになるからなあ」
「そんな心配しなくたっていいわ。あたしのほうも夢中になってあげる。――いま、あたしもあがるから、先へ帰っちゃだめよ」
どうやら、このふろ場の勝負はおれの負けだと、房之助は内心苦笑せずにはいられない。そして、素っ裸の女ぐらいあつかいにくいものはないと、房之助はしみじみと思った。
二人がふろからあがって帰ってくると、座敷には、膳部(ぜんぶ)が並んで、みんなその前にすわって待っていてくれた。
正面はむろん風来堂先生の鶴七郎で、そのそばに給仕役として烏松が陣取っている。その左右に三つずつ膳がならび、右側は清太郎、次が房之助の席をあけて、末座が芳公だ。
左側は大河原一刀斎を上座に、次をつばめのために一つあけて、館林門弟が座についている。
「おそくなりまして申しわけありません」
房之助はあいさつをして清太郎の隣へ行った。
「太夫(たゆう)、お前はここだ」
大河原がつばめを呼んでいる。

「坊や、ちょいと――」
それをしり目にかけながら、つばめが芳公を呼んだ。
「なんだ、太夫さん」
芳公がなにげなくそっちへ立っていくと、
「坊やはあっちへすわってね」
と、つばめは素早く房之助の隣へ陣取ってしまう。
「けっ、たぬきのおばさんにゃかなわねえや」
芳公は、しょうがないから大河原の隣へ行った。
「さあ、みなさん、顔がそろったからおはじめなさい。ただし、銚子は疲れ休めに一本きりだからね。もっとほしい者は、自前で表へ飲みに行ってもらう。わかりやしたかね」
烏松がそうぴっしゃりと念をおしてから、
「先生、お酌をいたしやす」
と、鶴七郎のほうへ銚子を取りあげた。
「先生、ちょうだいします」
清太郎と房之助は上座のほうへ会釈をしてから、杯を取りあげた。
「はい、房の字さん、お酌」
つばめは、房之助が隣の清太郎に酌をしてやるのを待って、いきなりそのひざを自分のほうへ向かせた。
「すまんなあ、太夫」
「そんな水くさいことをいうもんじゃありません。たったいま、おへそをくらべっこしてきたばかりじゃありませんか」
臆面もなくいって、にっとわらってみせるつばめだ。
「太夫、人の前で、あんまり本当のことをいうなよ」
「あら、この人ったら赤くなった。――烏のおじさん、おじさんはこの人に、あたしのしっぽを見てこいって言いつけたんですか」
「いや、おじさんは、そんな無理なことは言いつけないよ。人にしっぽを見せるようなたぬき

じゃ、まだ人間には化けられないからね」
「道理で、この人ったら、おふろの中であたしのおしりをなでまわしていたわ」
「太夫、うれしそうな顔だな」
鶴七郎がわらいながら声をかけてきた。
「大先生の目にもそう見えますかしら。あたし、まんざらでもないんです」
つばめは、わざととろんとした目をして、房之助の顔を見ている。
「結構だな。好きなら、遠慮なくたぬきにしてもらいなさい」
「ああ、そうそう、大先生は、たぬきになるようでなければ、女のしあわせはわからないといってましたねえ。でも、この人にそんな実意があるかしら。――房さん、あたしにもお杯を一つくださいよ」
「そんなにたぬきにしてもらいたいのかね」
房之助がわらいながら、杯をやる。
「おっしゃるわ、女はこわいって、さっきふるえてたくせに」
「女の裸を見たのははじめてなんで、わしは目がつぶれやしないかと思ったんだ」
房之助は正直である。
「大丈夫よ。どうせいまに、あんたのものになる体なんだもの。あたし、あんたにだけは、ぜひ見ておいてもらいたかったんです」
うそかまことか、つばめは体つきまで、ともすれば房之助のほうへくずれかかっていきそうに見えるので、さっきから苦りきって一人でのんでいた前がわの大河原一刀斎は、とうとう我慢ができなくなってきたらしい。
「こらっ、そこの二人、いいかげんにせんか。ここはふろ場ではないぞ。おへそがどうの、おしりがどうのと、聞き苦しい。やめろ」
「まあ、こわい顔。――くまの先生がやきもちをやいているわ。気にしなくてもいいのよ。こっちはこっちなんですからね」
つばめは、ちらっと大河原のほうを見ただけ

で、相手になろうともしない。
「しかし、悪くはないかなあ。大河原先生は太夫といっしょに、ふろへはいりたくてしょうがなかったんだからな」
「なに言ってるんですよう、あたしがいっしょにふろへはいってあげるのは、あんた一人だけだって言ってるのに」
「そうか、すまんなあ」
二人とも、まだひそひそ話をやめないので、
「おい、こらっ、やめろといったらやめろ」
大河原は意地になってきたらしい。
「大河原先生、お見のがし願いたいな、下世話にも、とめてとまらぬ恋の道とか申す。われわれはまだ若い者同士なんです」
房之助にしてはうまいことをいう。
「ならんならん、不義はお家の御法度だ」
「いや、幸い拙者は気楽な浪人者の境涯です。よけいなおせっかいは迷惑でござる」
「なにッ、よけいなおせっかいとはなんだ。許さんぞ」
「おお、こわい。――平気よ、あんた。ほえたがる犬は弱いっていいますからね」
聞こえよがしに、つばめがいった。
「うむ、平気だよ。わしには太夫がついていてくれるものな」
「よし、もう許さん。房の字堂、表へ出ろ」
大河原は、まっかな顔になって、すっくと立ちあがった。
「表へ出てどうするんです」
「貴様をたたっ切ってやるんだ。武士たる者が、犬にまでたとえられて、黙ってすませると思うか」
大河原は居丈高になってあたりをにらみまわしたが、みんな知らん顔をして、まあまあと止めてくれる者は一人もない。そうなると、一度立った手前、自分で勝手にすわるわけにもいかないので、どかどかと次の間へ行き、身支度をしはじめた。

「おや、お立ちでございますか、先生。なんのおかまいもいたしませんで、失礼いたしました。どうぞ、道中お気をつけなさいまして」
つばめが澄まして別れのあいさつをする。
「立つんじゃない。勝負をするんだ。おい、房の字堂、支度をしろ」
「いよいよ表へ出ますかな」
房之助はまだ立とうともしない。
「およしなさいよ、あんな山犬を相手にするのは」
「そうもいかないだろう。先生はもうちゃんと支度までしてしまったんだからな」
「じゃ、どうしてもやるの、あんた」
「うむ、ちょいと片づけてこよう」
「たのもしいなあ。あたし、あんたがそんなに強いとは知らなかった。しっかりやってね」
けろりとして、けしかけるようなことをいうつばめである。
「おい、早くせんか、房の字堂」
大河原は身支度をすませて、すでに大小をわしづかみにしている。
「よかろう。じゃ、出かけるといたそう」
房之助は立って、どてらのまま、床の間の大刀だけを取りあげた。
「来い」
大河原は先に立って、どかどかと廊下へ出ていく。
芳公が立ちあがろうとして、鳥松にいそいで目でとめられていた。
房之助は黙って鶴七郎のほうへ目礼をして、大河原の後を追った。
こうなってみると、大河原一刀斎も、どうやら敵に金で雇われてきたもののように思える。
そうでもなければ、分別盛りの大の男が、こんなバカバカしいけんかを吹っかけてくるはずはない。
ただ問題なのは、つばめ、大河原、館林の三人が一組で大塚組に雇われているか、三人べつ

べつに雇われているかである。どうも、一組ではないらしい。三人ともべつべつに雇われて、当人同士もおたがいにそれとは知らず、こっちの人数を一人ずつ消していこうという敵の作戦に見える。

そうなれば、こっちも一人ずつ片づけていくほかはないのだ。

――わしの見たところに間違いがないとすれば、大河原はあほうをよそおってはいるが、相当の腕にちがいあるまい。

油断はできないと、房之助は思った。

大河原がわらじをつけるのを待って、房之助は宿の下駄を借り、けげんそうな顔の番頭に見おくられて、つれ立って表へ出た。

「どこへ行くね」

「この裏へ行こう。たしかに草っ原があるはずだ」

大河原は旅籠の横手へはいって、ずんずん裏の方へ歩きだす。もうあんまりむだ口をきかないのは、その必要がなくなったからだろう。

だれか一人、そっと後をつけてくるようだ。つばめか、それとも館林か。

宿の裏手の雑木林をぬけると、そこにちょっとした空き地がある。空き地の向こうは麦畑だった。

月のない初夏の夜で、かえるの声がやかましいほど耳につく。生ぬるい夜空に、星がうるんでみえた。

「ここでいいだろう」

大河原は、そこへ立ちどまって、くるりとこっちを向いた。

「いよいよはじめるかね」

「気の毒だなあ。貴公、なにか遺言はないのか」

「ないなあ。きれいなつばめの膚は見てきているし、思い残すこともない」

房之助は、わざとのんびりかえす。

夜のいたずら

後をつけてきたやつが、つかつかと前へ出てきた。館林門弟である。

「先生、助太刀をしましょうか」

「いや、助太刀にはおよばん。お前にはなんの関係もないことだ。そこでおとなしく見ていなさい」

大河原が鷹揚に言いきかせる。

「はあ。では、そうします」

館林はあっさりといって、道ばたのほうへさがっていった。まったくさばさばとした師弟である。

「おい、行くぞ」

「心得た」

さっと飛びさがって、同時に抜きあわせる。相正眼だ。

果たして、あほう剣客の仮面をすてた大河原は、相当以上の実力を持っているようだ。互角といいたいが、大河原のほうが、危ない世渡りの数を踏んでいるだけに、一枚上かもしれぬ。

夜気がぴいんと緊張してきて、双方の切っ先から、切るか切られるかの殺気が、水のようにみなぎってくる。

「えいっ」

「とうっ」

房之助はもうかえるの声さえ耳にはいらなかった。

こうなれば、せめて相打ちにまでこぎつけるのが関の山だ。敵の仕かけを待って、こっちは捨て身の突きを入れる以外に手はない。

ここで死ぬのは残念だが、お家のことは浜町さまが乗り出してくれたのだから、心配しなくてもいい。その浜町さまをねらう刺客と刺しちがえて死ぬのだから、むしろ本望なくらいだ。

「おうっ」

「とうっ」

柄の大きい大河原は、勝ったと見たのだろう、

気合いでこっちを圧倒しておいて、一気に踏みこむ気らしく、ぐいと距離をちぢめてきたが、こっちは死ぬ気だから、来るなら来いと一歩も後へさがらぬ。

——うぬッ、捨て身になったな。

自分ができるだけに、大河原にもすぐそれがわかったようだ。こうなると、金で雇われている刺客だから、けがをしてもつまらないし、死んではそれこそ元も子もなくなるという気がおこる。

「えいっ」

「とうっ」

じりじりとこんどは房之助のほうが押して出た。敵の弱気へつけこんだのである。

「まいった」

大河原はぱっと飛びさがって刀をひいた。一度だめだとわかると、見切りをつけるのも早い。

「貴公、思ったよりできるなあ」

「死にたくないからねえ」

冗談は飛ばしたが、房之助はじっとりと冷や汗をかいている。

「しようがない。惜しい女だが、つばめは貴公にゆずろう」

「それはありがたい」

「まあ、せいぜいかわいがってもらいたまえ。生き血を吸われないようにしてな」

大河原は刀を鞘（さや）へおさめて、もうさっさと表のほうへ引きかえしはじめる。

「先生、——大河原先生」

館林門弟がいそいで後を追っていった。

——やれ、助かったか。

房之助がほっとして刀をおさめると、

「強いのねえ、あんた」

いつのまに来ていたか、つばめがふいにうしろから肩へ抱きついてきた。

「あたし、すっかり見なおしちまったわ」

「そうか、じゃ、本当にたぬきにしてもいいか」

「いいわ、好きなんだもの」

胸をはずませているような、甘ったるい声になっている。

「生き血なんか吸っちゃいやだぜ」

とんだお芝居だとおもいながらも、ぴったりと背中へ燃えるような女体を押しつけられていると、若い房之助は半分ぐらい変な気がしてくる。

「いたちじゃないもの、あたし。生き血なんか吸わない」

「そうか、真にうけておこう」

「切ないなあ、あたし」

「そう抱きついちゃ、おれだって苦しいよ」

「ねえ、あんた、このままあたしと駆け落ちしてくれない」

ほおをほおへすり寄せながら、むらがるような女のにおいをたぎらせてくる。

「駆け落ちなんかしなくたって、たぬきにはしてやれるよ。大先生からちゃんとお許しが出ているんだからな」

「いやだなあ。あの大先生、本当にあたしの運勢を言い当ててしまったのかしら」

「ふうむ、風来堂先生がなんといったんだ」

「近いうちに、あたしが本当にほれて、たぬきになりたくなるような男ができるって言ってたわ。どうしようかしら」

「しかし、たぬきになると、太夫（たゆう）は困るんだろう。稼業（かぎょう）の綱渡りができなくなるからな」

「それもそうねえ」

「まあ、ゆっくり考えてみるんだね。高崎まではまだ二日一晩の旅だ。いそぐことはないやね」

「じゃ、あたし、そうします。もう一度考えさせてね」

どこまでが本当なんだかわからない女だ。

宿へ帰ってみると、膳（ぜん）はもうすっかり片づいて、鶴七郎は別間へ引きとっていた。

おどろいたことには、館林門弟のほうが一足先へ帰ってきている。

「どうした、房の字堂、大河原先生は立ってい

ってしまったそうだな」
清太郎がわらいながらいう。話は館林門弟からすっかり聞いているのだろう。
「うむ。太夫はわしにゆずってくれるそうだ」
「そうか、うまくやったな。そこへ握り飯をこしらえておいてもらったから、太夫といっしょに食べるがいい」
「ありがとう。ちょっと大先生にごあいさつをしてきます」
房之助は別間へ行ってみた。
鶴七郎は烏松を相手に、明日の打ち合わせでもしていたところらしい。
「先生、ただいまもどりました。お騒がせして申しわけありません」
「おお、もどったか。明日はまた早いから、ゆっくりと休んでおきなさい」
「はい、おやすみなさいませ」
鶴七郎は、今夜のことについては、なにもいわなかった。だれもが敵にねらわれている体なのだから、自分のことは自分で片づけていく、そういう気持ちなのだろう。
こっちの寝床は、八畳のほうへ三つ、六畳のほうへ三つ、頭合わせに敷いて、間のふすまはあけて寝ることになった。
八畳のほうは、廊下に近いところから、烏松、芳公、清太郎の順である。
六畳のほうは廊下に近く、房之助、つばめ、館林の順だった。
つばめにしても、館林にしても、いつ別間の鶴七郎の寝首をねらいに行くかわからないから、今夜は絶対に油断はできない。
いや、一人が一人ずつという敵の策だとすると、第一に自分の体をまもらなければならない。
しかも、房之助は大切なお墨付きを身につけて、つばめの隣にいるのである。
八畳のほうのすみに有り明け行灯（あんどん）をおいて、六畳のほうはことに薄暗かった。
「房さん、起きてるの」

しばらくたってから、つばめがこっちを向いて、そっと声をかけてきた。
もうみんな軽い寝息をたてているようだ。
昼間の疲れがあるから、ついうつらうつらとしかけていた房之助は、どきりとして目をあいた。
「うむ、起きてる。眠れないのか、太夫」
「手を貸してくれない」
「みんなに恥ずかしいじゃないか」
「大丈夫よ。みんなもうよく眠ってるわ」
わかるもんかと房之助は思った。
「たぬきかもしれないよ」
「いいから、手を貸してくださいっていうのに、――いやなの」
「そら」
房之助は、掛け布団の下から、そっと手をのばしてやった。
つばめはそれをしっかりと握って、黙って自分の胸の上へ持っていく。むっちりとした乳房が、手の甲にくすぐったい。
その乳房は、夕方、ふろ場ではっきりと目にしみている白い乳房だ。いや、つばめの女体は、どこからどこまで、みんな見てしまっている房之助なのだ。
――困ったなあ。これじゃ眠れやしない。
しかし、すぐに、また、うつらうつらとしてきたらしい。
貸している手が動くような気がして、はっと目がさめた。
つばめはいつのまにか、男の手をじかに乳房の上へ押しつけている。
――どういう気なんだろうな。
房之助はわざと眠ったふりをしていると、つばめはもう敏感に目のさめてるのを悟ったらしく、ふと乳房から男の手をはがして、自分の指で、「たぬき」と、一字一字書いてよこす。
そして、くすりとわらった。
「なんだ、まだ眠れないのか」

そっと聞いてやると、返事のかわりに、「せつない」と、書いてみせて、その手をまたしても乳房の上へ伏せ、両手でしっかりと押しつけてみせる。

――勝手にしろ。

房之助は知らん顔をしているうちに、本当に眠ってしまったようだ。

その夜は何事もなく朝がきた。

今日は十里あまり歩いて熊谷泊まりのはずである。幸い、今日もいい天気だった。

旅籠を立つと、先頭は例によって鶴七郎と芳公がならび、すぐ後ろに烏松がつづく。その後に清太郎と館林とがならんでつづき、一番しんがりは房之助とつばめだった。

つばめは、なんのかんのと言いながら、房之助のそばを少しも離れようとしない。みんなも、もうそういうものにきめてしまって、からかおうとする者もなかった。

「あんた、ゆうべよく眠れた?」

つばめは、わざと前の清太郎組から十間もおくれて、ぴったりと房之助の肩に肩をすり寄せて歩きながら、うれしそうに話しかけてくる。

「悪いやつだなあ。どうして、おれの手をおもちゃにしたんだ。眠れなくてしようがないじゃないか」

「うそばっかし。――ぐっすり眠ってたくせに」

「そうかなあ。まさか、おれの手はお前の胸へ失礼なまねはしなかったろうね」

眠っているうちのことは自分でもわからないので、ちょっと不安だ。

「いいのよ、いくら失礼なことをしたって、どうせ、あんたのものなんだもの」

つばめは甘ったるく言ってから、

「あんた、あたしのお手々がゆうべあんたにどんなおいたをしたか、知ってるの?」

と、じいっと横から顔をのぞきこんでくる。

「おいた――」

ぎくりとした房之助は、いそいでふところの

お墨付きをさぐってみたかったが、さすがに意地があるから、つばめの目の前ではそれもしかねる。

「おい、お前のお手々は、どんなおいたをしたんだ」

「あら、じゃ、あんたは、おいたをされちゃいけないような、なにか大切なものを持っているんですか」

つばめは、にやにやと意味ありげに一人でわらっている。

うれしい約束

「太夫、話がある。わしといっしょに、ちょっときてくれ」

房之助は急に街道の真ん中へ立ちどまった。

「いやだ、そんなこわい顔をしちゃ。歩きながらだって、話はできるわ」

つばめはちょいとどきりとしたようだ。

「いや、歩きながらじゃできない話だ」

「どこへ行けっていうの」

「あのお堂のうらへ行くんだ。いやか」

そこに稲荷堂が祭ってあって、裏は深い雑木林になっている。

――場合によっては切らなくてはならぬ。

こっちのその気持ちが自然に出るのだろう、つばめはまじまじと見つめながら、

「行くわ、どこへだって」

と、さすがにほおから血の気がひいてきたようだ。

房之助はうなずいて、先に立って雑木林のほうへ歩き出した。

粗野で、臆面なしで、武家の作法のうちにはない女だが、それだけにいきいきとした情熱をたたきつけられてくると、若い房之助には身がかわしきれない。正直にいうと、あぶない女だと知りながら、もう半分以上好きになりかけているのだ。

万一、大切なお墨付きでも奪われたら、それ

こそ浜町さまに申しわけがない。いや、父祖以来重恩のある主家を累卵の危うきにさらしてしまうことになるのだ。

いまのうちに、別れるか、切るか、きっぱりと話をつけておかなくては、もうあぶない。

朝の雑木林は、まだしっとりと露をふくんで、若葉青葉がしいんと明るかった。あっちこっちから小鳥の声が耳につく。

もう街道からは人目のとどかないあたりまで来て、房之助はくるりとつばめのほうを向いた。

はっとしたように、つばめがこっちの顔を見あげる。敏感な女だから、こっちのおよその気持ちは読んでいるはずだが、しゃっきりと意地の強い目をして、むしろ、くるならこいといった面魂である。

「太夫、本当のことをいってくれ。お前はおれがなにを持っているか、知っているんだろう」

房之助はわれにもなく、つばめの両腕をわしづかみにしていた。

「知ってるわ」

つばめの赤いくちびるが、はっきりと答える。

「お前はだれかにたのまれて、わしのその大切なものを奪いにきたんだね」

「そうよ」

あんまりすなおに答えられると、ちょっと二の句がつげなくなる。

「ゆうべお前は、それにさわってみたんだな」

これは愚問だったらしく、つばめはちらっと目でわらってみせただけだ。

「なぜ、お前、さわっただけにしておいたんだ」

これはもっと愚問だったらしく、

「そんなこと聞いて、どうするの」

と、つばめは逆襲してくる。

「そうか、お前はいつでも取れるという自信があるから、ゆうべは取らなかったんだな」

「違うわ。取っちゃ、あんたがかわいそうだから、取らなかっただけよ」

「なんだって――」

房之助の完全な負けである。

「そうか、わしはやっぱり物の役に立つ男じゃなかったんだな」

「あんた、あたしを切りに、こんなところへ引っぱりこんだんでしょ。どうして早く切らないんです」

つばめが冷たく挑戦してきた。

「いや、おれにはお前は切れそうもない。第一、おれは今朝はもう生きてはいない人間のはずなんだ。しようがない、ここで別れよう」

「あたしが別れるのいやだといったらどうする」

「たのむから別れてくれ」

「いやです」

「おれをからかう気か、つばめ。おれは男のみえも恥もすてて、正直にお前にたのんでいるんだぞ」

「そんなことをいうんなら、あたしだって、あんたになら切られたっていいと思うから、こんなところへおとなしくついてきたんじゃありませんか。本当をいえば、あたし、ゆうべは、あんたの大切なものには手出しをしちゃいない。いいえ、こわくて手が出せなかったんだわ」

ふっと目を逃げて、つばめのほおへほんのりと血の気がさしてくる。

「その先はもういうな。おれとお前は、敵と味方なんだ。おれはお前に負けるのがこわい。いや、どうしても負けてはいけないんだ。ここで別れるか、切るか、それより道がないんだ」

「別れたって、どうせあたしは切られるのよ。こんな仕事、つい引きうけてしまったのがバカだったんだけれど、あたしはいい気になっている浜町さまにたてがついてみたかった。まさか、あんたっていうこわい敵がいるなんて、思いもかけなかったんだもの」

「浜町さまはいい気になんかなってやしない。殿さまはただ不正を憎むだけで、情にはもろいお方なんだ」

「そうかしら――」
「それでなけりゃ、敵に頭をさげて、切ることさえできないようなぐずな男を、黙って見ているはずはないじゃないか」
「いいえ、あんたはぐずじゃない。ただ、正直で、子供みたいに生一本なだけよ」
「おれは侍には向かない男かもしれない」
房之助は、侍をすててしまった清太郎を、うらやましいと思う。
「ねえ、あんた浪人して、あたしといっしょになってくれない」
「いや、いまは浜町さまを裏切るようなまねは、死んだってできないんだ」
「いまじゃなくていいのよ。こんどの仕事がすんでからの話よ」
「しかし、お前は裏切り者になると、命をねらわれはしないか」
「その時は、あんたがあたしをまもってくれるじゃありませんか。黙ってみていられるようなあんたじゃないもの」
「それが困るんだ。おれはいつ浜町さまの身がわりになるかわからない体なんだからね」
「清の字さんに身がわりになってもらったらどうなの。あの人はいつもその気になっているんじゃないかしら」
「あの人はそういう人なんだ。わしは、その清の字さんがあぶない時は、その身がわりにもならなくちゃならない義理があるんだ」
「じゃ、あんたはどこにも立つ瀬がないじゃないの」
「しようがないさ。浜町さまたちは、うちの藩のために、こんなあぶない旅をしていてくれるんだからな」
「いいわ。じゃ、あたしがいつでもかわいそうなあんたの身がわりになってあげる。それならいいでしょう」
「困ったなあ。いまは、お前とそんな約束をしたとわかっても、おれはみんなに恥ずかしい体

なんだ」
「大丈夫よ。約束はあんたとあたしの二人きりのことにしておいて、あんたは今までのように知らん顔をしていればいいんだわ。そのくらいのことはできるでしょ」
「それが、おれは正直だから、すぐ顔色に出てしまうんでねえ」
「大丈夫だったら。あたしがうまくやるからさ。さあ、行きましょうよ。いつまでもこんなところで道草を食っていちゃ、浜町さまたちに追いつけなくなるわよ」
結果から見ると、二人は夫婦約束をするために、わざわざこんな雑木林の中へはいってきたことになる。
しかし、いそいでもとの街道へ出てきた二人は、とてもしあわせだった。
「おい、お前は館林って男をどう思う」
「あれはこわい男よ、きっと」
「お前もそう思うか」
「あの男の目ね、ときどきねこの目のようにかわるのよ。知っている?」
「そうかなあ、それはうっかりしていたなあ」
「あの男は、ことによると、忍びの術を知っているかもしれない」
「そうか、忍者というやつだな。おれは出会ったことはないが、忍者というやつは、どんな場合でも声は出さないそうだな」
「それはしのぶということが本職なんだもの、声を出しちゃ、しのべないじゃありませんか。忍者の名人になると、天井へだってはりつくっていうわ」
「綱渡りはどうだろう」
「バカねえ、綱渡りって芸は、もと忍者のほうから出たのよ。忍者は城へしのびこむ時、濠（ほり）をわたらなければならないでしょ。だから、先に鉤（かぎ）のついた細引きを持っていて、それを城の木へ投げて引っかけ、こっちの端を木の幹にゆわえておいて、綱をわたるのよ」

「なるほど、綱渡りはそういうところから出たのか。すると、あいつのねらっているのは、殿さまの寝首だなあ」
「あたしはきっとそうだと思う」
「あぶないなあ。さっそく、殿さまのお耳に入れておかなくちゃ」
「そのほうがいいわ。もっとも、浜町さまはもうご存じかもしれない」
「どうして――」
「忍者は人の目の色をよむのが早いから、もし浜町さまがうっかりしているようなら、もうゆうべのうちに、お寝間へしのびこんでいるはずだわ。それができなかったのは、浜町さまの目がいつもあの男のほうへ光っているんで、館林もうっかり手出しができないでいるんです」
「いそごう、つばめ。おれは急に浜町さまのことが心配になってきた。いや、館林は清さんのかかりなんだから、早く清さんの耳にも入れておかなくちゃ」

房之助の足が急に早くなり出す。そして、ふっと気がついたことは、さすがに軽業の太夫だけあって、つばめの足が平気で自分についてきていることだ。
「つばめ、お前はなんでもおれより役者が一枚上にできているようだが、飯はたけるんだろうな」
「変なこといっちゃいや。あたしは亭主に飯をたかせるような、そんな甲斐性のない女に生まれてきていないつもりよ」
つばめは肩をぶつけてきながら、うれしそうにわらっていた。

熊谷土手

その日の中食は、四里あまり歩いて、桶川の宿だった。掛け茶屋へ休んで、茶をもらい、今朝、宿からもらってきた握り飯をみんなで食うのである。なかなかたのしい。
「房の字堂さん、お前さんの組はだいぶおくれ

ていたが、どこで道草を食って、太夫にかわいがられていなすったね」
風来堂先生の床几で茶の給仕をしている大番頭格の烏松が、わらいながらそんな意地の悪いことをきく。
「申しわけありません。太夫が腹が痛いというもんですから、ちょいと林の中までつきあっていました」
あんまりうまいうそはつけない房の字堂である。
すかさず、おなじ床几にいた芳公が、
「あれえ、前川さんはもう太夫と、そんなにくさい仲になっているのか」
と、遠慮なく切りこんできた。
「しようがないでしょ、芳公さん、背に腹はかえられないっていうんだから」
「たぬきの背中は火がぼうぼう、太夫のおへそは茶をわかす。前川さん、そのお茶うまいか」
「ぶつわよ、芳んべ」
つばめも、ちょいとたじたじの体だ。
「前川さんは、うらやましいですなあ」
清太郎の床几にいる館林八十吉が、握り飯をほおばりながら、にやにやわらった。見たところ、目の細い、まったくうすぼんやりとした顔である。
「館林さん――」
風来堂先生が、のんびりと館林を呼ぶ。
「はあ」
「お前さんは女色を断っているんだろう」
「はあ、女にはどうも縁がありません」
「男は陽、女は陰、日月でいえば日は陽、月は陰、館林さんは陰に住む人のようだ。陰は女に縁がありすぎるでな、女に目をひかれると、久米の仙人のように天から落ちる。お前さんはせいぜい女に縁のないほうが無事かもしれぬな」
「はあ、ありがとうございます」
館林はうやうやしくおじぎをしている。
「房の字堂――」

「はい」
房之助は思わず、ひやりとしたように首をすくめている。
——だめだなあ、この人は。
と思いながら、その実、つばめも胸がどきどきしているのだから、悪いことはできないものだと思う。
「お前さんは陽に住む人だ。陽は陰を得てはじめて一人前になるのだ。陰陽は相半ばするのがよいので、文字に書けば、陰陽どちらが強くても形がゆがむ。陽はとかく強くなりがちだから、陰は陽の上になる。それをいましめて、陰を上におくのだ。男女と書く時は男が上だが、女夫と書く時は女が上になる。女房を大切にしてうやまえということだ。わかるかな」
「はい」
「たぬきさんや——」
「大丈夫です、大先生。あたしは決して亭主をしりに敷くような女じゃありませんから」
つばめは、いそいで先まわりをする。
「そうかそうか、それならよろしい」
「しりには敷かないが、しりを引っぱたく。あんまり悪い知恵はつけてもらいたくないもんだね」
烏松がそばからしたり顔に口を出す。
「あたしはおじさんほどまだすれっからしじゃありません」
「そうだったなあ。おとなしくて、お上品で、生まれは公卿の娘だってね。おとっつぁんはたぬき小路下ル八畳敷きにお屋敷のある腹鼓大納言さま」
「おっかさんはだれにしようか、おじさん」
そばから芳公が口を入れる。
「そうだなあ、おはしたにあがっていた王子の雌ぎつねかな」
「つまり、きつねとたぬきがばかしっこをしたんだね」
「どうして、大先生のお供さんたちは、みんな

こう口が悪いのかしら」
今日のつばめは、うまく太刀打ちができない。やっぱり、いい人ができたせいかもしれぬ。
「大先生、今日の運勢はどうでございましょうな」
一番まじめな清太郎がきいた。
「昼からは凶にかわりそうだな」
「それでは、ここから手前が先供をいたします」
清太郎はおじぎをして立ちあがった。館林がおとなしく後につづく。
「では、まいろうかな」
鶴七郎がすっと立つ。
「おやじさん、勘定はここへおくよ」
大番頭の烏松が小銭をそこへおいて、
「房の字堂さんの組はまたしんがりだ。あんまり道草を食いなさんなよ」
にこりとわらって、大先生の後を追おうとする。
「松おじさん——」
房之助が呼んで、つとそばへ行き、
「清さんにいっておいてくれ。館林はことによると忍者かもしれない」
「ふうむ。房さん、そいつはだれかさんの入れ知恵だね」
「わかるのか、おじさん」
「心配しなさんな。内緒にしておくよ」
烏松はもう一度にっこりわらって、鶴七郎の後を追った。
「どうだったの、房さん」
つばめが肩をならべながら、心配そうにそっと聞く。
「だめだ。やっぱり、おれが一番頭が悪くてぐずのようだ」
「大丈夫よう。これからは、あたしがついているんだから」
「そのことまで、もうみんな見ぬいているようなんだ」
「いいじゃありませんか、立派な手柄さえ立て

ればいいんでしょ」

「それはそうだ。大先生はこれからは凶だといっていたな」

「ねえ、あんた、あんまりあせってお先っ走りをしちゃだめよ」

次から次へと気がもめてきて、男ってどうしてこう心配なものなんだろうと、つばめは胸が痛くなってくる。

桶川から鴻ノ巣へ一里三十町、鴻ノ巣から熊谷へ四里六町、六里歩いて今夜は熊谷泊まりになるはずだ。

その熊谷の宿へはいるまでに、一里あまりの熊谷土手を歩くことになるから、どうしても土手の途中で日が暮れることになる。あいにく、この旅は、月の出のおそい下旬にかかっている。

「熊谷土手があぶないな、つばめ」

「そうかもしれないわ」

「大塚文之進というやつは、平気でどんなことでもやってのけるくそ度胸を持ってる男なんだ」

「一人と一人となら、あんたのほうが強いんじゃないかしら」

「あいつは一人じゃ出てこないやつなんだ。つばめ、もし敵が出たら、お前はどこかへかくれて見ていろ」

「あたしの心配なんかしなくたっていいわ。あんたは大先生のことだけ考えていればいいんです」

「ああ、そうだ。おれはお前にしりっぺたをひっぱたかれてばかりいるなあ」

房之助は正直にいって苦わらいをする。

「ねえ、あたしがあんまり出しゃばるようだったら、しかってくれなくちゃだめよ」

「こんどからそうしよう」

とうとう熊谷土手へかかってきた。

土手の両側は遠くまで水田つづきだが、すでに日は落ちて、一足ごとに蒼茫と夕やみが迫ってくる。

やがて、先頭の清太郎がちょうちんに灯を入れ、中軍の鶴七郎組は芳公がちょうちんの用意をした。しんがり組はむろんつばめがちょうちんを持つ。

桜の青葉つづきの土手を半ばほどすぎるころ、日はとっぷりと暮れて、空には初夏の星が美しいが、両側の田んぼはすっかり宵闇に塗りこめられてきた。かえるの鳴く声が降るように耳につく。

先頭の清太郎は、もしくせ者が出たら、真っ先につれの館林を切ってすてる決心でいた。

どこにこれが怪しいという節はまだ見せないが、大河原が去った後も平気でこうして残っている以上、敵のまわし者であることは間違いない。

そういうこっちの覚悟を知ってか知らずか、

「すっかり暗くなりましたなあ」

館林はそんなことを言いながら、のこのこと平気で歩いている。

「おいはぎが出るかもしれないねえ」

わざと清太郎がいってやる。

「出ないでしょう、こっちは大勢なんだから——」

けろりと言ってわらっている。

「いや、出れば向こうも大勢で出るはずなんだ。油断はできない」

「そんなもんですかなあ」

のれんに腕押しのようで、一向に手ごたえがない。よっぽど腹のすわったやつなのだろう。

果たして、幾足も歩かないうちに、ばらばらっと前の土手へ人影が、しかも左右から躍りだしてきたようだ。

「出たぞう」

清太郎はうしろへ声をかけながら、持っていたちょうちんをすて、ぱっと光が暗に消えたとたん、

「えいっ」

抜き打ちに右を払った。

手ごたえがない。いつのまにか、足音一つ立てず、まるでやみに消えるように、館林は姿を消していたのだ。

——素早いやつ。

清太郎は啞然としたが、もう消えた館林を考えている暇はなかった。

「とうっ」

前から一人、さっと鋭く切りこんできたやつがあるのだ。

「えいっ」

こっちは後へひく手はないので、身を沈めながら一刀を左へたたきつける。

「わあっ」

こんどはたしかに手ごたえがあった。

「とうっ」

「えいっ」

清太郎はただ一刀を左右にたたきつけるだけだ。攻めてくる敵は、それより防ぎようがない。やみといっても、そのやみに目がなれてくると、地上の影だけはちゃんと見えてくる。

残る敵は三人、いずれも覆面黒装束で、こっちを手ごわいと見たか、剣陣をつくって一息入れている。

この三人を倒してしまわなくては、うしろの浜町さまのそばへ行くことができない。

「とうっ、——えいっ」

清太郎は強引に自分のほうから、三人の剣陣の中へ切りこんでいった。是が非でも切らなくてはならぬ。自分が切られることなど考えてはいられないのだ。

先頭へくせ者が躍りだしたのと同時に、しんがり組のほうへも土手の左右から、ばらばらっと四、五人、抜刀をきらめかして躍り出てきたのだ。

「房さん、目をつぶるのよ」

つばめが声をかけながら、ふっとちょうちんを吹き消した。

「どいてろ、つばめ」

房之助は、ちょっと目をつぶって抜刀して、目をあいた。それだけのことで、ふしぎと心が落ち着き、はっきりと敵の影が目にはいった。

「えいっ、——とうっ」

房之助はがむしゃらだった。つばめにぐずだと思われたくなかったのかもしれない。こっちからめちゃくちゃに覆面の中へ切りこんでいったのである。

「あっ」

「おのれ」

多勢をたのんでなんとなく油断のあった敵は、あわてて刀を振りまわしながら左右へ飛びのく。

「わあっ」

逃げそこねたやつが一人、大きくのけぞりながら土手下へ転落していった。

「それっ」

「おうっ」

一度左右へ逃げた残る四人が、こんどは気をあわせて、一人の房之助に殺到してきた。

「えいっ、おうっ」

房之助は必死に一刀を左右へたたきつけたが、四人一度には防ぎきれない。

やられたかなと観念した時、

「はあっ」

ひゅっ、ひゅうと風を切る音が耳につき、

「わあっ」

「くそっ」

二人の敵が悲鳴をあげながらよろめき、ばたばたと土手下へ逃げこんでいく。

つばめになにか投げつけられたらしい。

この時、中軍のほうから、だあん、と、銃声が一発とどろき、つづいて、だあん、もう一発やみに火を吐いたのが、房之助の目にはっきりと見えた。

その夜の泊まり

鶴七郎は、前後に敵の伏勢が起こったとわか

ったとたん、桜の木を小盾にとって、

「ぴょ、わしのそばを離れるな。烏はうしろの土手下を見張れ」

とっさにそう言いつけて、自分はふところから短筒を取り出していた。

先頭の清太郎も、しんがりの房之助も、すでに覆面どもと乱闘に移っている。

いわばこの中軍が本陣なのだから、こっちへも敵が出ないはずはないし、出れば一番強い組がかかってくるはずである。

「あっ、出た、殿さま」

果たして、芳公が叫んだのと同時に、向こうの土手下から三、四人の敵がこうもりのようにひらりと土手へ躍りあがってきた。手に手に白刃をかざして、一気に切りこんでこようという殺気が、夜目にもはっきりと見てとれる。

だあん。

まず正面の一人をねらって、鶴七郎の銃口が無造作に火を吹いた。

「わあっ」

そやつがひとたまりもなく、今あがってきたばかりの土手下へ転落していく。

ふいの飛び道具に、左右の覆面どもは、ぎょっとしたように一瞬棒立ちになる。

だあん。

容赦なく第二弾が右をねらった。

浜町の火薬でとおっている鶴七郎の腕だから、ねらったら絶対にのがさない。

「わっ」

二人目の敵が、のけぞりながら土手下へ消えていった。

短筒はたいてい一発が常識で、次を撃つには弾をこめなければならないはずだ。それが二発までつづけざまに撃ってきたので、おそらく敵は、短筒を持っているのは鶴七郎だけではないと見たのだろう。

のこるやつらは愕然（がくぜん）として、自分から土手下へ逃げこんでいった。

鶴七郎が持っているのは、当時としては珍しいオランダ製最新型の元ごめ六連発だったのである。

こっちの銃声を聞いた後ろの敵も、たちまち風のように姿を消していた。

どこかで、ぴ、ぴい、ぴ、ぴいと笛の鳴ったのを、鶴七郎はたしかに耳にしているから、それが引きあげの合図だったのかもしれない。

「追うな、――追うにはおよばぬ」

鶴七郎は味方へ叫んでおいて、じっとしばらくあたりへ耳を澄ましていた。

敵は土手下づたいに、熊谷の宿のほうへ逃げ去ったようである。

「殿さま、――いや、大先生、御無事でございますか」

「おけがはございませんか、大先生」

前とうしろから、清太郎と房之助が走りよってきた。

「わしは無事だが、お前さん方も大丈夫のようだな」

「はい」

「太夫（たゆう）さんはどうかな」

鶴七郎は房之助の少しうしろに立っているつばめのほうを見て聞く。

「おかげさまで。――びっくりしちまいました、あたし」

つばめの声は、まだいくぶん興奮しているようである。

「そうか。これがびっくりの手はじめのようなものでな、まだまだびっくりするようなことがある。恐れることはないが、しかし、油断は禁物ですぞ。――松つぁん、もういいから、ちょうちんをつけなさい」

「敵の目じるしにならないでしょうかね、大先生」

烏松はちょっと心配する。

「いや、今夜はもう大丈夫だろう」

烏松がちょうちんに灯を入れると、清太郎も

つばめもその灯をもらってちょうちんをつける。
「さあ、出かけますぞ」
　鶴七郎の声で、先頭は清太郎、しんがりは房之助とつばめ、さっきとおなじ順で歩きだす。
「おじさん、こんどはちょうちんはおいらが持つ」
　芳公は鳥松の手からちょうちんを取って、六尺ばかり先へ出た。鶴七郎を敵の狙撃からまもるためである。
「ころぶなよ、芳公」
「心配御無用。——ころんだら起きて歩きやす」
　そんな減らず口をたたく芳公である。
　先頭の清太郎が歩きだすとまもなく、ふらりと館林八十吉が
「あぶなかったですなあ。清の字堂さん」
　と言いながら、肩をならべてきた。
「あんた、いままでどこにいたんだね」
　清太郎は思わず顔を見ずにはいられない。
「わしは恥ずかしいが剣術はからきしだめでしてなあ、そこの土手にかくれていました」
「そのほうが、けががなくていいにはいいんだが、われわれといっしょに歩いていると、これからも、たびたびこんな目にあう。考えてみたらどうかね」
「いや、そのたびにかくれますから——」
　館林はにやにやわらっている。こんなずぶとい男も珍しいだろう。
　しんがり組では、房之助がつばめにささやいていた。
「お前、さっきは敵になにか投げつけていたな。あれはつぶてか」
「いいえ、五寸くぎよ」
「ふうむ、お前は手裏剣術もけいこしたことがあるのか」
「違うわ。曲芸のうちに、剣投げというのがあるのよ。生きた人間を戸板の前へ立たせておいて、その人に剣を戸板へ投げつけるあれよ」

「そうか、器用なもんだなあ。お前はどうしてもおれの女房にはすぎた女のようだ」
　房之助はまたしてもなんとなくため息が出てくる。もし、あの五寸くぎの加勢がなければ、一太刀ぐらい敵にあびせられていたかもしれないのだ。
「またそんなことをいう。なんだか、あたしがいつもいばっているようで、恥ずかしいじゃありませんか」
　つばめはそっと房之助の手につかまってくる。
「そんなことより、あたし心配だわ」
「なにが——」
「いまの敵ねえ、中にはかなり重い傷をうけているやつがいたと思うの。それだのに、みんなうめき声ひとつ立てず、水がひくようにきれいに引きあげていったでしょう」
「うむ、あれは敵ながらあざやかだったな」
「だから、あの連中は、ただ頭数だけかきあつめてきたやせ浪人どもじゃないと思うの。みんな恥を知っている粒よりの連中で、今夜は幸い浜町さまの火薬にびっくりして引きあげたけれど、こんど押し寄せてくる時は、きっと強いわ。一人一人があの大河原ぐらいの腕はあるやつらにちがいないんです」
「心配するな。こっちは一人一人が死ぬ覚悟でいるんだ」
「それが心配なのよ。あたし、あんただけは死んでもらいたくないんだもの」
　そんな虫のいいことをいうつばめである。
　まもなく熊谷の宿へはいった一行は、小松屋という旅籠へついた。
　その夜はだれもふろへはいる者はなく、すぐにみんなで夜の膳についたが、さすがに熊谷土手の話は、忘れてしまったように口にする者はない。
「太夫はどうしてふろへ行かなかったんだね」
　鳥松が鶴七郎に酌をしながら、わざと生まじ

めに聞く。
「みなさんがおはいりにならないので、遠慮しましたの」
「そんな遠慮はしないで、房の字堂さんにゆっくり背中を流してもらえばよかったのに――」
「いいんです。そのかわり、後でゆっくり背中をさすってもらいますから」
「ついでに、足もさすってもらうといいな、太夫さん」
芳公まで、まじめな顔をしていう。
「おあいにくさま。あたしはそんな失礼なまねだけはしないことにしているのよ」
「そうかなあ。だって、太夫さんの足は、綱わたりをする大切な足なんだろう。本当なら神だなへあげて拝んでもいい足なんだから、失礼ってことはないはずだぜ。遠慮じなさんなよ」
「ぴょちゃんは思ったよりうまいことが言えるのね」
「小憎らしい餓鬼ですみやせん」
「いいえ、いいのよ。本当は、そっとさすってもらうつもりでいるんですから」
「あれえ、太夫さんも相当なもんだ。あんよの次は、どこをさすってもらうんかなあ」
「順当にいけば、足の裏ということになるかな」
珍しく隣の館林が半畳を入れてきた。
「裏をかえせば花色木綿、なんてのは、ちょいとおつだが、裏をかえせばねずみ小僧なんてのは物騒でござんすからね」
芳公はぺろりと赤い舌を出している。
夜食がすむと、また明日が早いから、もうみんな寝るばかりだ。
鶴七郎はまもなく別間へ引き取っていった。
鳥松は鶴七郎の身のまわりの世話に行っているし、館林は用たしにでも立ったか、姿が見えない。
「清の字さん、ねずみ小僧はあの熊谷土手の時、なにをしていたんだろう」
房之助はそっと清太郎に聞いてみた。

「それがおかしい――。わしがちょうちんをすてて刀を抜いた時には、もうどこかへ姿を消していた。それから、ちょうちんをつけて歩き出すと、ぶらりと肩をならべてきて、わしは剣術はからきしだめだから、土手下へかくれて見ていたと、けろりとしている。まったく油断のできない男だ」
清太郎はにがわらいをしている。
「あいつは忍者じゃないかというんだがねえ」
「殿さまからもそんな注意があった。とにかく、油断はできないな」
芳公がぶらりとどこかへ立っていく。
「あたし、ちょっと顔を洗ってくるわ」
つばめは房之助にことわって、廊下へ出た。
もう寝るばかりだから、今のうちに体の汗だけでもふいておきたいと思ったのである。
言ってみれば、これも房之助への心中立てなのだ。どうせ、今夜もまたまくらをならべて寝るようになるだろうから、ひょっとして汗くさいなどと男に思われたくない。
――あたし、どうしてこんなに、あの人にほれちまったのかしら。
考えてみると、小娘のようにわくわくしている自分の心根が、いじらしくさえなってくる。
しかし、あの人はなんのてらいも邪心もなく、今では一本気にこっちへ打ちこんできて、自分をたよりにさえしている。つばめはそういう房之助の子供っぽいところが好きでたまらないのだ。
――好きな男ができて、女ははじめて本当のしあわせがわかるのだ。
浜町さまは初対面早々そう言ってわらっていたが、この勝負はたしかにこっちの負けだった。
つばめは、好きな男ができたばかりに、一度引きうけた大塚文之進との約束を、いまは命がけで裏切らなければならない羽目になってしまったのである。
――しょうがありゃしない。金で約束したん

だから、金をかえせばいい。
そっちのことは、度胸よくそう腹をきめているつばめだ。つまり、命がけの恋ということになるのである。

卵塔場

宿の女中にきいて、ふろ場へきてみると、幸いもうだれもはいっている者はなかった。
つばめは安心して小桶に水を取り、いさましくもろ膚ぬぎになって、まず顔からえりあしを洗った。それから手ぬぐいをしぼって、体の汗をふきはじめる。灯心をとぼした薄ぐらい光をうけて、われながら見とれるように白々として健康そうな素膚である。
——この膚を、あの人はいつ自分のものにしてくれる気かしら。
ふっと、つばめは胸が甘くうずいてきて、うっとりと夢を見ているような気持ちにさそわれてくる。
「つばめ、そこにいるかい」
そこの高窓の外から、聞きなれた声がそっと呼んだ。たしかに、房之助の声だ。
「あんたなの」
「うむ。体をふいたらな、話があるから、ちょっと庭へ出てこないか」
「どこにいるのよう、あんた」
「窓の外だ。ふろ場を出た廊下の雨戸の外に、草履を持ってきておいてやったから、だれにも見つからないように早くきてくれ」
「はい」
つばめはもうわくわくと膚を入れていた。
話があるって、どんなことなのだろう。また、なにかおこったのかしら。ただ話だけなら、ここでもできるのに——。
——ああ、そうだ。あの人、暗い庭でふたりきりになりたいのかもしれない。
人目をしのぶ恋、あの人にならもう御夫婦とおなじなんだもの、どこでどんなことをされて

もかまわないと思うと、つばめはかっと体中が熱くなって、手早く帯をしめなおし、いそいでふろ場を出た。
なるほど、そこの廊下の雨戸が一枚あいて、ちゃんと草履が用意してある。
——房さんは親切だから好きさ。
あたりにだれもいないのを見さだめて、その草履をはいて外へ出ると、そこは庭というより塀ぎわの狭い道になっていて、どうやら裏口へ出られるようになっているらしい。
房之助は湯殿の窓の向こうに待っているようだ。こっちが足音をしのばせて歩き出すと、先に立ってどんどん歩き、果たしてひょいと塀の外へ出たようだ。
なるほど、そこに裏木戸があって、戸があいている。外は表通りからはいってくる横町になっているらしく、前は隣の塀のようだ。
空に星あかりはあるが、道は暗い。
「どこへ行くの、あんた」
一足木戸から出たとたん、
「いいところへつれていってやるのさ」
男はぴたりと体をよせてきながら、いきなりこっちの右手のひじのあたりをつかんできた。
「あっ」
房之助とは体のにおいが違う。
「太夫、声を立てると命はもらうよ」
「あんた館林さんね」
「うむ」
「太夫は房の字と間違えたらしいな」
畜生、あの人の声色なんかつかいやがってと、つばめはむかむかしてきたが、こうなってはもう度胸をすえるよりしようがない。
「あたしをどこへつれていく気——」
「まあ、歩きながら話そう。本当は味方同士のはずなんだからね」
館林はゆっくりと横町の奥のほうへ歩きだす。ちゃんと旅支度をして、わらじまではいているようだ。

ひじの関節をしっかりとつかまれているから、いくらつばめが軽業師でも、身もがき一つすることができない。
「じゃ、お前さんも大塚に雇われてきた口なの」
「裏をかえせば花色木綿さ」
館林はにやりとわらったようだ。
「それで、あたしにどうしろというの」
「太夫は房の字にころりとまいったようだな」
「いけなかったかしら」
「もう花色木綿を解いている仲かね」
「昨日素っ裸になって、いっしょにふろへはいった仲よ」
「あれがどうもいけなかったらしいな。あれから太夫はさかりのついた雌になってしまったようだ」
いかにも女はだめだなあと言いたげな口ぶりである。
つばめは、悔しいが、ずばりとそういわれてみると、たしかにそのとおりなのだから、ひとりでに顔が赤くなってくる。
「しようがないわ。あの人、うぶでかわいいんだもの」
「裏切り者は切る、そういう約束じゃなかったのかね」
「あんたはいくらでこの仕事を引きうけたんです」
「まず千両かな」
「あたしはたった十両よ。十両で命まで売っちゃつまらない」
「そんな理屈はとおらないな」
「あんたはあたしのお目付役だったの」
「それも兼ねている」
「じゃ、十両かえすから、大塚さんにあたしはぬけたと話しといてくれない。——はい、十両」
つばめは帯の間から紙入れを抜きとって、そのまま館林のほうへ差し出す。
「十両かえせば、それですむと思っているのかね」

「すんでもすまなくても、この金はかえしておきたいの。それから話をつけましょう」
「そうか——。では、この金はうけとっておこう」
館林は紙入れをうけとって、無造作にふところへ入れながら、
「そこで、太夫の話というのは」
と、改めてきく。
「あたしは前川房之助の女房です。ただそれだけの話よ——。そこで、あんたのほうの話ってのはどんなこと」
「気の毒だが、裏切り者は切る。こっちもただそれだけの話だ」
「あたしを切るより、あんたの仕事は、浜町さまの首をもらうほうが先じゃなかったの。あっちはちょっと切れないから、こっちを先にするんじゃ、なんだか弱い者いじめみたいね」
「いまにわかる。——ここだ」
人家がつきて広い田んぼ道へ出るあたりに、生けがきでかこった卵塔場がある。そのかきねの破れ目から、館林はつばめをつれて中へはいっていった。
「いるか——」
あたりを見まわして声をかけると、
「はっ」
「います」
前後の墓のかげから返事があって、覆面黒装束の男が五人ばかり、少しも足音を立てずに、館林の前へ集まってきた。
「この女を縛れ」
「はっ」
二人がかりで、一人がつばめを押さえつけ、一人がさっさとうしろ手になわをかけてしまう。
争ってもむだだと思ったから、つばめは覆面どものするなりになっていた。
——ここで切る気なら、なにもなわなどかけなくてもいいはずだ。いったい、どうする気なんだろう。

そんなことを考えているうちに、手ぬぐいでさるぐつわまでされてしまう。
「首領、できました」
　館林は先に立って、墓地の奥へ進んでいく。雑草が生いしげって、ひどく荒れはてたような墓地だ。
　真ん中ごろまでくると、そこにかなり大きい松の木が一本、枝を四方に張っていた。
「その松の木へなわじりをしっかりと結わえつけろ」
「はっ」
「いたちに生き血を吸われてはかわいそうだから、ちょうちんをつけておいてやれ」
「はっ」
　一人が小田原ぢょうちんをつけて、松の枝にぶらさげる。まるで人魂がやみにういたようで、かえって無気味だ。
「太夫、いまにおもしろい芝居が見られる。しばらく辛抱しているんだな」
　館林は冷酷な微笑をうかべて、そう言いすてると、
「一同、こい」
　五人の覆面をしたがえて、もときたほうへ引きかえしていった。まったく足音を立てない連中である。
　――おもしろい芝居ってなんだろう。
　そして、つばめは、はっと気がついた。
　あいつたちは自分をおとりにして房之助をここへおびきだし、お墨付きを奪ってから、いっしょに殺そうというに違いない。そうでなければ、わざと目じるしにちょうちんなどぶらさげていくはずはない。
　それとも、ここには本当にいたちが多くて、人の生き血を吸いにくるのだろうか。
　さすがの気の強いつばめも、なんとなく無気味で、体中が総毛立ってくる。すぐに度胸はすわった。

　――あたしは前川房之助の女房で死ぬんだ。かまうもんか。
　なによりもさっき館林に十両かえしておいたことが安心である。あれさえかえしてしまえば、もう大塚などに義理を感じることは少しもないのだ。万一、命がありさえすれば、こんどは房之助といっしょに堂々とやつらを敵にまわして闘ってやれるのだ。
　それにしても、ちょっと意外だったのは、館林は思ったより大きな敵だとわかったことである。どうやら、あれは世にかくれた忍者の一団の首領のようである。ことによると、大名を相手に、しのびを稼業にしている大物ではないだろうか。
　――房さんの命が心配だわ。
　房之助はあまりにも正直すぎるので、自分がついていてやらなくては、とても館林と太刀打ちはできそうもない。まるで子供あつかいにされてしまうのではないだろうかと思うと、つばめは急に胸が痛くなるほど心配になってきた。
　そのころ――。
　房之助はまだつばめが姿を見せないのに気がついて、
「ちょっと失礼します」
　清太郎にあいさつをして、廊下へ出てみた。
　体をふいてくるといっていたから、ふろ場にちがいないのだ。たとえおふろへはいったにしても、もうとっくにあがってくる時刻なのだ。
「いやだなあ。ふろ場まで迎えにきちゃみっともないじゃありませんか」
　ひょっとすると、またつばめにしかられるかもしれないが、それですめばそれに越したことはないと思い、思いきってふろ場まで行ってみた。
　ふろ場にはだれもいない。
　――どこへ行ったんだろうなあ。
　ふろ場を出てくると、そこの廊下の雨戸が一枚あいている。

まさか、黙って外へ出るはずもないし、雨戸から戸外をのぞいてみると、そこは裏口へでも出る通路になっているようだ。

ちょうどその通路を、まるで風のように走りこんでくる者がある。

「あっ、前川さん、大変だ」

こっちを見るなり、立ちどまって叫んだのは芳公である。

「どうした、芳公うじ」

「太夫が館林にだまされて、ここからつれ出されたんだ」

「なにッ」

「おいらは館林のようすが怪しいんで、後をつけていたんだ。――畜生、そんな話はあとでもいいや。ここから出ると裏口で、横町の道に出るんだ。それをまっすぐ三、四町行くと、右手に墓場がある。太夫はそこへつれこまれたんだ。すぐ行ってくんな。館林のほうには四、五人仲間がついているから、気をつけてくんなよ。おいらはおじさんに話して、後からきっと助太刀に行くからね」

芳公は一気にまくし立てて、廊下へ飛びあがり、座敷のほうへ駆けこんでいく。

「ありがとう、芳公うじ」

房之助はかっとなりながら、裏口のほうへ走り出していた。

「なにッ、館林がつばめをつれ出したというのか」

梟組の梟十郎

もうすっかり寝床のとってある座敷で、烏松と明日のことなど話しあいながら、みんなの帰ってくるのを待っていた清太郎は、芳公の知らせをうけると、すぐに刀を取って立ちあがった。

「清さん、おれもいっしょに行こう」

「いや、松つぁんは殿さまをたのむ」

「なあに、殿さまはもうおやすみになっている。わざわざお起こしして騒ぎ立てることもなかろう。――芳の字、お前、あとへ残って、もし殿さまがお目ざめになって、どうしたんだとおききになったら、これこれだとわけを申しあげておいてくんな。たのんだよ」

烏松は芳公にそう言いおいて、清太郎の後を追う。

「けっ、ずるいや、おじさん」

とうとう留守番を押しつけられてしまった芳公は、ちょいと不平ではあったが、考えてみると、自分が行くより二人に行ってもらったほうが、房之助のためにも、つばめのためにもずっと力になる。問題は、どうして早く無事に、館林の手からつばめを救い出すかにあるのだから、ここは烏のおじさんの言いつけどおりにするほかはないと思った。

――けど、おどろいたなあ。館林ってねずみ野郎が、五人も手下を持っているなんて、人は見かけによらねえもんだ。

芳公はいまさらのように感心する。

実は、館林が裏口からつばめをつれ出すのを見て、あれえ、あのどぶねずみめ、太夫をどこかへつれこんでくどく気かな、いやな野郎だなと、芳公は、はじめそんな軽い気持ちで後をつけていった。

ところが、卵塔場へはいると、いきなり覆面の手下が五人も出てきてつばめを縛りあげてしまったので、こいつは大変だと、夢中で知らせに引きかえしてきたのだ。

「待てよ」

敵は館林を入れて六人、こっちは房之助、清太郎、烏松の三人きりだ。房之助も清太郎も強いには強いが、敵だってそう弱いとはかぎらない。もし強ければなおさらのこと、六人に三人ではかないっこない。

「そうだ、やっぱりこいつは殿さまに知らせたほうがいいかもしれないぞ」

ふっとそう気がついた芳公は、もう待ったなしに廊下へ出ていた。

そこの廊下を奥へ突きあたって、左へ折れたところが鶴七郎の座敷になっている。なにげなくそこを曲がろうとして、芳公はあっと棒立ちになって息をのむ。
　そこの廊下の雨戸が一枚あいていて、いま真っ暗な鶴七郎の座敷から覆面黒装束のくせ者が一人、まるで煙のように音一つ立てず、するりと出てきて庭へのがれ出ようとするところなのだ。
　――館林八十吉だ。
　とっさに芳公はそう思った。館林は忍びの者だと耳にしていたし、いま出てきたくせ者は、忍び装束だからである。しかも、その動作は風のように素早い。
　この芳公の勘はあたっていた。
　実は、館林は、さっき芳公につけられているのを、ちゃんと知っていたのだ。
　だから、卵塔場でつばめを組下の者にわたすと、たちまち忍び姿になって、芳公の後を追うように旅籠へ引きかえしてきた。
　芳公が前川たちにつばめの急を知らせれば、前川たちはきっと卵塔場へ駆けつける。おそらく、寝ている鶴七郎を起こして知らせるようなことはないだろう。そこが館林のつけ目だった。
　一方で前川をおびき出してお墨付きを奪わせ、こっちは鶴七郎の寝所へ忍び入って一刺しにする。
　そして、その計画は八分どおり図にあたったようだ。廊下の外の庭から、清太郎と鳥松が走り出ていく物音を耳にすると、館林は時をうつさず鶴七郎の座敷の前の雨戸をあけた。旅籠を出る前に、自分でそっと桟をはずしておいたのだから、これは苦もなくあくはずである。
　廊下へ忍びこむと、寝所は真っ暗だ。
　――はてな。
　慣れない旅籠などに泊まる場合は、必ず有り明け行灯をつけておくのが常識だ。それでないと、なにか急なことがあって飛び起きたとき、

戸惑いをする。
　――そうか。浜町の火薬め、なまじ頭が働くだけに、おれを用心して、わざとあかりを消しておくんだな。
　館林はにやりとわらいながら、忍者はやみの仕事にはなれている。控えの間のふすまをあけて寝所へはいり、布団の端へ手がふれると、すっと立って刀を抜くなり、
　ここと思しいあたりを一突きにした。
　――あっ。
　なんの手ごたえもない。
　しまったと思ったとたん、館林はもう未練気もなく元の廊下へ滑り出ていた。寝所をかえたか、それとも厠へでも立ったか、いずれにせよ失敗したとわかったら風のように退いて、再挙をはかるのが忍者の法だ。なまじ未練を残してぐずぐずしていると、かえって敵のわなにかかる恐れがある。
　館林が思いきりよく廊下から庭へ飛びおりると、
「待て、館林」
　そこの雨戸の外へはりつくようにして立っていた鶴七郎が、しずかに声をかけた。
　ぎょっとしたが、そんな時決して声は立てない忍者である。
「黙って先へ歩くがいい」
「どこへ行きますな」
　抜き打ちなどのきく鶴七郎ではないし、この人のふところにある短筒がこわい。館林はしばらく言うなりになっているほかはなかった。
「裏口から表へ出るのだ」
　裏口から表へ出れば、例の卵塔場へ続く横町へ出る。
　鶴七郎はそこで館林の左側へ肩をならべて、卵塔場のほうへ歩きだす。
「さすがですな、浜町さま」
　館林はふてぶてしく話しかける。
「いや、今夜はお前のほうに運がなかったよう

だ」
「いつ庭へ出られたのです」
「お前が座敷へはいるのを見てからだ」
「厠ですか」
「いや。弟子どもが廊下を走る音が耳についたので、しかってやろうと出てきた時、お前が雨戸をあけたのだ。こっちの運がよかったのだな」
すべてを運に帰して、鶴七郎はわらっている。
「その運がこんどこっちへ向くと、どういうことになりますかな」
「それはその時になってみないとわからないだろう」
「だいぶ自信がおありのようですな」
「お前の本当の名は、なんというのだね」
「梟組(ふくろうぐみ)の梟十郎(きょうじゅうろう)とおぼえておいていただきましょう」
「得意先は大名のようだが、一口いくらぐらいで働くのだね」
「一口千両ときめています」
「なるほどな。それだけ修業するにはなまやさしい苦労ではなかろうから、そのくらいが相場かもしれないな」
「まあ、好きでなければ、こんなバカげた修業はできないでしょうな」
それだけの天分がなければ、まねようったってできる修業ではないのだから、梟十郎はいささか得意である。
「好きというより、そういう人間に生まれてきている。つまり、人には不死身の体質があるように、お前のは普通の人間と違うものが生まれながらにあるのだろう」
「損な生まれだというんですか」
梟十郎はちょいと突っかかってみたくなる。天分を不死身といっしょにされるのは不服なのだ。
「損だとか、得だとかいうのは人の勝手だ。そんなことは気にすることはないが、人の因果はだれもまぬがれることはできない。早くそこに

気がつかないと、お前は自分の術におぼれて死ぬ。天命を全うすることは、まず、むずかしいな」
「わしに意見をしてくれるんですか」
「いや、お前にぜひこうせよといっているんじゃない。お前の術は、悪人には通用するが、普通の人間には通用しないと言いたかったんだ」
「運はいつもあなたのほうにあって、わしには絶対に運はないというんですな」
「もっと正直にいえば、気をつけないと、お前は自分の術にかかって早晩横死すると断言しておいてもよい」
「よろしい。その前に、あなたのお命だけは、この梟十郎きっとちょうだいしてお目にかけよう」
梟十郎はむっとして、思わず豪語せずにはいられなかった。
「さあ、お前の術がわしに通用するかな」
鶴七郎はむしろ、その豪語をあわれんでいるようでさえある。

死ぬ覚悟

そのころ——。
前川房之助は一気に卵塔場へ駆けつけていた。
「つばめ、どこにいる」
この墓地のどこかに六人の敵が待ちかまえていると、芳公の話でわかってはいるが、そんな敵を恐れてぐずぐずはしていられない。
かまわず足にまかせて墓と墓との間の道をぐんぐん奥へ踏んごんでいくと、向こうにふわりと人魂(ひとだま)が一つ浮いていた。
はっとして見なおすと、それは人魂ではなくて、たしかにちょうちんのようである。
「あそこだ」
房之助は大股(おおまた)にそっちへ近づいていった。果たして、つばめがそこの松の木へ縛りつけられているようだ。

「つばめ、房之助だ」
「あっ、あんた、あぶない」
それと見たつばめが、声にならない声をあげた。
「待て、前川。とまれ」
「動くとたたっ切るぞ」
墓のかげから四人の覆面が立ちあがって、二人ずつ左右から抜刀を突きつけてきた。
「くそッ、来い」
房之助は同時に抜きあわせる。
「手向かいするか。見ろ、あれを」
「なにッ」
見ると縛られているつばめのうしろへも覆面の敵が一人立って、刀を振りかぶっているのだ。
「貴様が手向かいすると、女の命はないぞ」
「うぬッ。ひきょうなまねをするな。縛った者を切るやつがあるか」
「いや、貴様さえ神妙にすれば、女は切らぬ。どうだ、つばめをかえしてやるから、それと引きかえに、貴様のふところのものをこっちへ渡さぬか」
「ふところのものとはなんだ」
「江戸から貴様があずかってきたお墨付きだ」
しまった、と房之助は思った。敵はお墨付きをねらっている。わかりきっていることなのだから、これをここへ持ってきてはいけなかったのだ。
「おい、貴様が強情を張ると、女がなぶり殺しになるだけだぞ」
「ひきょうなことをいうな」
「なにをいう。敵と味方の仲に、ひきょうもくそもあるか。早く返事をしろ。素直にお墨付きをわたすか」
「いやだ」
「言ったな、こやつ。よし、じゃ見ていろ。つばめをなぶり殺しにしてやる。――おい、おれが五つ数を読んだら、その女の腕を一本切れ」
一人がつばめの後ろに立っている味方に言い

つける。
「心得た」
そやつは、つばめの右の腕を引っつかんで刃(やいば)を当てる。
「あんた、負けちゃだめよ。あたしは死んだって平気なんだから、しっかりして」
つばめが真っ青な顔をして、目顔ではげましてきた。
「一つ」
こっちのやつが容赦なく数を取りはじめる。
――どうしてくれよう。
脅しとはわかっている。敵の目的はつばめの腕を切るより、お墨付きのほうがほしいのだ。しかし、お墨付きをわたさなければ、女の腕の一本ぐらい、敵は平気で落としかねない。
「二つ」
房之助は歯がみをしながら、じっとりと冷や汗が流れてくる。
「三つ」
あと二つだ。五つと数えられてからではまにあわない。
「四つ」
くそッ、つばめといっしょに死ねと、とっさに覚悟をきめた房之助は、
「外道ッ」
いきなり数を取っているやつの真っこうから、だっと一刀をたたきつけていった。
「わあッ」
ふいをくらったやつは、肩先へ一太刀あびながらも、さっと飛びのいて、
「切れッ、――たたっ切れ」
と、死に物狂いで絶叫した。
「えいっ、――とうっ」
房之助はもうむちゃくちゃだ。
――つばめ、勘弁してくれ、おれもきっと後から行く。
つばめは凶刃にかかったものと思うから、三人のほうへ刀を火のように振りまわしながら突

っこんでいった。
「わあッ」
「くそッ」
目の前の敵は、いつか墓のやみへ姿を消していた。
「つばめ――」
ひょいと見ると、つばめは烏松になわを切ってもらったところで、そのそばに清太郎が抜刀をさげながら、じっとあたりをにらみまわしている。
「つばめ、助かったか」
「あんたあ」
みえも外聞もなかった。房之助は泳ぐようにつばめのほうへ走りよって、ひしとその肩を抱き、つばめは離れじと胸へしがみついてくる。
ほうっ、ほうっ。
どこかで陰気なふくろうの声が鳴いた。
ほうっ、ほうっ。
そのふくろうの声に答えている声がある。
「清さん、油断できねえ。まだ敵には新手がいるようだ」
「うむ、ちょうちんを消そう」
清太郎がさっと枝にぶらさがっているちょうちんを切って落とした。
黒々とやみが一切のものを塗りこめた。空に星あかりがあるだけだ。
ほうっ、ほうっ。
ほうっ、ほうっ。
ふくろうの声は、しだいにこっちを包囲してくるようである。
「つばめ、闘うんだ」
「いいわ、もうあたしだって負けやしない」
やみに目がなれてくると、どうやら黒い形だけは見えてきた。
ほうっ、ほうっ。
ほうっ、ほうっ。
影を見せない敵は、なんとも無気味である。
しかし、敵はいつかはおおかみのように、八

方から襲いかかってくるに違いないのだ。
「みんな、できるだけここから動いちゃいけねえ。ひとかたまりになって闘うんだ」
烏松が小声で注意した。
「心得た」
一人一人になっては不利なのだ。
それにしても、敵はどのくらいの人数なのだろう。
つばめは、しっかりと房之助の腕をつかんでいる。
――死なばもろとも。
その手はそういっているようである。
ほうっ、ほうっ、ほうっ。
ほうっ、ほうっ。
ふくろうの声は、いよいよ近くなってきた。
だあん。
ふいに、往来に近いあたりで、銃声が一発夜気をついてとどろく。
だあん。
また一発。
「殿さまらしいな、松つぁん」
「うむ。芳公が知らせたのかな」
それっきり、ふくろうの声はぴたりとやんだようだ。
銃声も二発きりである。
「どうしたんでしょう」
たまらなくなったように、つばめがだれにともなくいった。
「もう少しようすを見るんだ」
烏松がたしなめるようにいう。
そして、また、しばらくたった時、
「おじさあん、どこにいるんだよう」
と、あんがい近いところで、芳公の呼ぶ声がきこえた。
「芳の字かあ。おじさんはここだ」
「なあんだ、そこにいたのか。みんなもいっしょか、おじさん」
「うむ、みんなもいっしょだ」

「もう出てきても大丈夫だって、殿さまが呼んでるよ」
「そうか、ありがてえ。——さあ、みんな、引きあげよう」
ほっとしたようにいって、鳥松が声の方へ歩き出す。
「房の字さん、行ってみよう」
清太郎がこっちへ声をかけておいて、後につづく。
「助かったのね、あたしたち」
「うむ、みんなのおかげだ」
「うれしい、あたし」
つばめは鼻をつまらせているようだが、房之助はまだ夢を見ているような気持ちだった。
「一同無事でなによりであった」
やがて旅籠へ帰りつくと、鶴七郎は改めてよろこびをのべた。
「殿さま、あたしがうっかりしていたために、みなさんにこんな心配をかけてしまって、本当に申しわけありません」
つばめが泣きべそをかきながら、真っ先にそこへ両手をつく。
「いや、太夫が悪いわけではない。向こうのやり方がうますぎるのだ。館林というやつは、梟組の首領で、梟十郎という者だと名乗っていた」
「梟組と申しますと、忍者の結社でございましょうか」
清太郎がまゆをひそめながらきく。
「そうらしいな。つまり、大名に雇われて隠密の役目を業としている。一口千両でうけあうのだといっていた」
「今夜のやり口を見ますと、館林は思ったより大物のようでございますな」
「大物のなんのって、おいら今夜だけはまったく肝っ玉が縮みあがっちまったんだ。おじさんたちが出ていくとすぐ、敵は六人、こっちは三人、やっぱり殿さまに相談したほうがいいと、おいらは気がついたんだ。そして、殿さまの座敷の廊下へ曲がろうとすると、そこの雨戸が一枚あいていて、暗い殿さまの座敷から忍び姿の館林が出てくるところなんだ」

「なんだって、芳の字。それは本当か」
鳥松がぎょっとしたように顔色をかえる。
「梟十郎はな、鳥、今夜はつばめをおとりにして房之助をあの墓場へおびき出す一方、そちたちがそれを助けに出かけた後へ忍びこんで、わしの寝首をかく計略だったようだ」
「申しわけございません」
すると、鶴七郎に黙って、かってに二人とも飛び出したのは、大きなうかつということになるので、清太郎は思わず冷や汗が出てきた。
「殿さま、その時どこに——」
鳥松があえぐようにきく。
「わしは、そちたちの廊下を走る足音で、なんとなくこれはただごとではないと気がついた。すぐに身支度をして、行灯を消し、廊下へ出ていくと、ちょうど梟十郎が雨戸をあけるところだった。わしはかげに隠れていて、梟十郎が座敷へはいるのを待ち、入れかわりに庭へ出て彼を待っていたのだ」
「あぶねえところでござんしたね。本当に紙一重ってやつだ。で、梟十郎のやつはどうしやした。殿さまはやつをつかまえたんでござんしょう」
「うむ。いっしょにあの墓地のほうへ歩きながら、お前はいい気になっていると、自分の術におぼれて早晩横死するぞと、それとなく意見をしてやると、その前にきっと浜町の首をとってみせると、ふてくされていた」
「野郎、なにをぬかしやがる。こんど見つけたら、この鳥松が承知しねえや」
「おじさんも忍びの術を知っているのか」
芳公がたのもしそうにきく。
「知っているとも。——おじさんのはからす流だ。ふくろうなんかに負けてたまるもんか」
「だって、からすは夜は目がきかないだろう」

「そんなことはねえ。夜がくれば夜がらす、朝がくれば、明けがらす、おじさんのは両方きくのさ」
烏松は悔しまぎれに、一人で力んでいる。
「梟十郎は結局逃げたのでございましょうか」
清太郎が話をもとへかえす。
「うむ、墓地の前までくるとな、さすがに忍者だ、ぱっと墓のうしろへ飛んで、勝負は後日と言っていた。命をとるのはやすいが、改心すれば物の役に立つやつなので、しばらくその時を貸しておくことにいたしたのだ」
「その殿のお情けが、梟十郎にわかってくれるとよろしいのですが」
清太郎としてはまだ先の長い道中だけに、これからのことが思いやられるのである。
「殿さま、あいつの手下は五人や六人じゃなさそうですね」
「そうだな、十人は越しているだろう。熊谷土手の時の人数は、みんな梟十郎の手下と見ていいだろう」
「そいつは大変だなあ。やつらは逃げる時でも、ちっとも足音を立てねえんだからな。今夜からは、うっかり眠ることもできねえぞ」
「ぴよ、心配しなくともよい。梟十郎は決してぴよの首はねらうまい」
「ああ、そうか。――けっ、つまんねえの」
芳公は照れたように首をすくめてみせる。
「さあ、明日はまた早い。もう引きとって寝るがよい」
鶴七郎の許しが出たので、一同はあいさつをして自分たちの座敷へ引き取ってきたが、
「松つぁん、殿さまは一人でおいていいかなあ」
急に神経質になっている清太郎だった。
「房さん、あたし今夜、たった一つだけいいことをしたわ」
つばめがそっと房之助にいう。
「どんなことだ――」
「大塚からわたされた十両、わけをいって梟十郎にかえしてやりました。あたしはもうこれで、あっちになんにも義理はないんです」
「そうか、それはよかった」
しかし、だからといって、裏切り者の危険が去ったとはいえないのだが、房之助は、それは口にしないことにした。命があぶないとなれば、これはつばめ一人ではなく、鶴七郎をはじめ命のあぶなくない者は、味方には一人もいないからである。

第一の難所

翌日は熊谷から高崎へ十里たらずの道中だった。
今日からは館林の梟十郎がぬけたので、先頭は清太郎と芳公がならび、次は鶴七郎と烏松、しんがりは例によって房之助とつばめである。
「大先生、今日の運勢はどんなもんでしょうね」
烏松は鶴七郎におうかがいを立ててみた。
「そうだな、今日はまず吉だろう」
「夜までずっと吉でござんしょうか」
「そう思っていていいだろうな」
「なるほど、高崎までは道はたいらだし、高崎は城下町でござんすからね。ちょいと考えると、やつらも小細工がしにくい。けど、油断はできやせん。やつらはかえってそういうところをねらわないとはかぎりやせんからね」
「それはそうだな。だれにも不測の災いということがある。そういう点からいえば、こんどの道中は、わざわいをしょって歩いているようなものだ。わしは江戸を出た時からずっとその覚悟でいる」
いまさら油断はできませんなどと口にするのはおかしいのである。
「恐れ入りやした。下司はどうもその日その日のことしか考えない。情けないもんでござんす」
烏松は苦わらいをして頭をかいていた。
しんがりの房之助組も、おなじような話をして歩いていた、

「ねえ、今日も梟組のやつら出るかしら」
「やつらは昼間は出ないだろ」
「じゃ、今夜はどう思う」
「今夜のことは、出るとも出ないとも断言はできないが、しかし、なあ、つばめ、やつらはどこかでまた出ることだけは確かなんだ。いいか、こんどやつらが出たら、おれたちは真っ先に死ぬ覚悟をきめるんだ。おれたちは昨夜、みんなに借りができているんだからな」
「すみません。あたしが悪かったのです」
　つばめは正直に申しわけなさそうな顔をする。
「いや、お前が悪くても、おれが悪くても、そのつぐないは二人でしなくちゃならないんだ。いつでも二人で死ぬ、そう覚悟をきめていればいいのさ」
「あたし、あんたとなら、いつでも、よろこんで死ねます」
「それでいいんだ」
　死ぬと覚悟がきまってから、二人の気持ちはあんがい楽になってきた。そして、口では言わなくても、もう自分たちは来世まで夫婦（めおと）なんだと、おたがいに安心して、いっそう愛情が深くなってくる。
　その日は、だれもが考えたとおり、ついに、梟組は姿を見せなかった。
　次の日は高崎から坂本へ七里あまりの道中で、坂本へはいる前に横川の関所がある。関所を出て十町ばかり坂をのぼると、坂本の宿へはいるのである。
　この日も一日中無事な旅だった。
　明日はここを出るとすぐ、中仙道（なかせんどう）第一の難所といわれる碓氷峠（うすいとうげ）へかかる。碓氷をこせばいよいよ信州へはいるのだ。
　その夜、旅籠について、みんなで膳（ぜん）に向かった時、
「おじさん、明日はどうやら、あぶない旅になりそうだな」

と、芳公が目を光らせながらいった。
「そうだとも。――あぶないのは明日一日きりじゃなくて、明日からは毎日いろいろとあぶないことになるだろう。しっかりたのむぜ、芳の字」
　烏松がわらいながら答える。
「ああ、そうか――。明日から信州路へはいるんだから、梟組だけじゃなく、どんな化け物が飛び出すかわかんないわけだな。こいつはたのしみだ」
「あんまりたのしみすぎて、おたがいに青くなるなあよそうぜ。江戸っ子の名折れになるからな」
「安心してくんなと言いてえところだが、おいらこの間の晩、殿さまの、じゃねえ、大先生の座敷から梟十郎のやつが出てきた時は、正直な話、ちょいと青くなったからな。あんまり自慢にならねえのさ」
　芳公は首をすくめてみせる。
「ぴよ、心配いたすな。青くなるのは、男の恥にはならぬ。人には青くなってから本当に強くなるのと、青くなったままふるえて腰がぬけてしまうのとがある。青くなったら、まず落ち着いて、それからどうすれば一番よいかを考えてみることだ」
　鶴七郎がそばから微笑しながら、そう教えていた。
　清太郎も房之助も一通り侍の修業をさせられているから、武士道は死ぬことと見つけたりという葉隠れのおしえぐらいは知っている。その精神に徹していれば、事にあたって別に青くなることもないはずだが、自分もまだ青くなってから考えるほうだと思い、鶴七郎の言葉をおもしろく聞いた。
　その夜、まくらについてからは、つばめはいつものようにそっと房之助の手をさぐって、明日死んでも心残りのないようにと、自分の胸の中へ抱きしめて、いとしそうに愛撫（あいぶ）しながら眠

っていた。
——死なばもろとも。
それがこの女の葉隠れなのだと思うと、房之助はつばめがたまらなくいじらしい。
翌朝、坂本の宿を立つ時、房之助は清太郎にいった。
「碓氷は何度も往復しているので、今日は案内かたがた、わしに先頭をつとめさせてください」
「そうか。では、今日は房の字堂さんに先頭をたのむことにしよう」
死ぬ気だなと思った清太郎は、こころよくそれを承知した。
「太夫も房の字さんといっしょだろう」
芳公がまじめな顔をして聞いた。
「そうよ、あたしはいつもこの人といっしょよ」
「気の毒だなあ。先頭じゃ、手をつないで歩けないもんな」
「悪い子ねえ、おとなをからかうなんて」
つばめは赤い顔をしてたしなめる。
前は赤くなってから急に強くなって、わざとでれついてみせたりするつばめだったが、いまはそんなつまらないまねをする気にもなれない。それほど胸一杯にあふれるような愛情がふくらんでいるつばめなのだ。
「太夫、わしには遠慮はいらないよ。坂道は骨が折れる。つらくなったらかまわず手を引っぱってもらいなさい」
鶴七郎はあたたかいまなざしでわらっていた。
「そうさしてもらいます」
つばめはまた少し赤くなって、とうとう赤くなりっぱなしだった。
こうして、先頭は房之助とつばめ、次が鶴七郎と鳥松、しんがりを清太郎と芳公がつとめて、一行六人、碓氷峠の難所へかかってきた。
房之助は絶えず前後に気をくばりながら、ゆっくりとのぼっていく。旅なれている上に軽業できたえてあるつばめの足は、決して房之助に

負けなかった。
「あんた、あんまり殿さまと離れすぎちゃ、警固にならなくなるわ」
「そうか、そんなに離れすぎたか」
山道になれない鶴七郎の足は、さすがに、ともすればおくれがちになってきた。
やがて、碓氷峠でも難所中の難所、胸つき八町へかかってきた。一方は高い岩の急崖(きゅうがい)、一方は深い谷、岩鼻を一つ曲がると、その急坂はまっすぐ八町つづく。岩つつじがきれいに咲いているが、いまはそれさえながめているゆとりはない。
「つばめ、手を引っぱってやろうか」
その半ばへかかって、房之助は、思わずそれが口に出た。自分の足がつらいから、さぞつばめも苦しいだろうと思ったのである。
つばめは額にじっとりと汗をためながら、黙ってかむりをふってみせた。
そして、やがて胸つき八町を七分ほど登ってきた時、
「あっ、房さん」
急に、つばめが房之助の腕にしがみついた。
胸つき八町をのぼり切った頭の上の岩角から、ふいにごろんごろんと無気味な地ひびきを立てて、四斗樽(しとだる)ほどの岩石が、こっちへころがりだしたのである。だれかが、こっちをみな殺しにするつもりで、わざと落としてよこしたのだ。
「あぶない、石だ」
房之助はとっさにうしろへ叫んだが、どうにも石をよける道はない
石はしだいに勢いがついてくるから、たとえ、今のぼってきた坂道を元のほうへ走っても、石の早さにはかなわないだろう。
「房之助、つばめ、早く岩壁へはりつくのだ」
十間ばかりうしろの鶴七郎がそう叫びかえして、自分もぴたりと一方の急崖へ身を寄せてみせたが、それがこの場合運を天にまかせた唯一

の身をまもる手段だとしても、石のころがりよう一つで、十中八、九、無事にはのがれきれまい。
　一瞬、房之助は体中に冷や汗を吹き出しながら、つばめを抱いてぼうぜんと立ちすくんだ。
　ごろん、ごろん、ごろんと、石はしだいに速力を加えて、砂塵をはね飛ばし出す。
「あんた、早く殿さまのおそばへ――」
　次の瞬間、つばめは真っ青な顔をして、房之助の体を鶴七郎のほうへ向け、力いっぱい押しやった。
「お前は――」
　二、三間思わず押しおろされて、房之助がうしろを振りかえった時、つばめは道端の小桶ほどの岩石を、坂道の真ん中へ運んでおいたところだった。
「あぶない、つばめ」
　房之助は絶叫しながら、目をおおわずにはいられなかった。
　砂塵をまいた大石は、すでにつばめの寸前へ迫ってきている。突きあたれば、ひとたまりもなくはね飛ばされるか、下じきになって押しつぶされるか、と見た一瞬、
「はあっ」
　必死の掛け声がつばめの口からほとばしって、派手なもすそをひるがえしながら、つばめの体は四尺ばかり地をけって飛びあがり、落ちかかる岩石を飛びこえる。
　とたんに、岩石はつばめがおいた石にあたって、それを押しつぶしながら方向がかわり、がらがらがらっとすさまじい音を立てながら、一方の谷底へ落ちこんでいった。
「つばめ――」
　房之助は、あっともう一度息をのみながら、なんともいえない熱い涙が、ふいにまぶたをあふれてきた。
　助かったのだ。つばめが身を殺して打ったとっさの手段が、よく一行六人の命を救ったのだ。

　つばめは今、そこの坂道へ両ひざをついて、谷のほうを向きながら、じっと合掌している。肩がはげしく波うっているのは、これも泣いているのかもしれない。
　鶴七郎は足早に坂をのぼってきた。わき目もふらず、房之助の前を通りすぎて、つばめのそばへ行って立った。
「太夫、ありがとう。おかげで、みんな助かった。――ありがとう」
　鶴七郎は心からつばめに会釈している。
「いいえ、殿さま、御運が、殿さまの御運がよかったんです」
　つばめは立ちあがって、いそいでそで口を目にあてていた。
　後から走り寄っていった烏松が、黙ってつばめの着物についた土を払い落としてやっている。
　だれもしばらくは口がきけなかった。

うれしいほうび

「あっ、殿さま、あの坊主だ」
　ふいに芳公が叫んで、坂の上を指さした。
　見ると、いま大石がころがり出してきた胸つき八町の上の岩角に、いがぐり頭の大坊主が、太い四尺ばかりのかしの棒を鉄棒がわりに突いて、仁王立ちに立ちはだかりながら、こっちを見おろして、にやにや小バカにしたようにわらっている。
　さあ、こられるものならきてみろと、挑戦しているかっこうだ。
　烏松がうめくようにいった。
「くそッ」
「石をころがしたのは、あの坊主にちげえねえ。梟十郎の仲間か、それとも大塚にたのまれたくそ坊主か」
「憎いやつだな」
　鶴七郎の目に珍しく怒りの色が燃えている。

「こんどはわしがやります」
房之助がきっぱりといって、ちゅうちょなく坂をのぼりはじめる。
大石がころがり出したときは、さすがに度を失って、ただ青くなっただけで、後の分別がつかなかった。とっさに死ぬ気になってくれたつばめに対しても恥ずかしい。
——こんどこそ、わしの死ぬ番だ。
房之助は、もう、つばめのほうさえ見ようとはせず、ゆっくりと坂をあがり出した。つばめにはかわいそうだが、ほかの者に、少しでも未練だと思われたくないからだ。
——つばめ、一足先へあの世へ行って待っているぞ。
そうはっきりと言い切れるのが、房之助にはうれしかった。死んでもつばめはおれの女房なんだと思うと、勇気が腹の底からわきあがってくる。
すぐ後から清太郎がついてくるようだ。これも、つばめに先をこされて、いささか恥じる気持ちがあるのだろう。
二人ならんでは敵にかかれない狭い坂道である。まず自分が捨て身に出て、体当たりに飛びこめば、後の太刀で、清太郎が憎い坊主をしとめてくれるにちがいない。
房之助はついに坊主の二間ばかり手前までのぼっていった。向こうが坂の上になっているので、いかにも地の利が悪い。
「きたか、小僧。石はよけられても、この今弁慶の大鉄のかしの棒はよけられぬ。気の毒だが、お前たち一人残らず引導をわたしてやる。
今弁慶は鬼のような顔をしてわらった。くそ力はありそうだが、あまり利口そうな顔はしていない。人間ではなくて、こいつは半分けだものの生まれそこないなのだろう。
「坊主、だれにたのまれて、お前、そんなところに立っているんだね」
「よけいな口はきかなくってもいい。おれは早

いところお前らを片づけて、きゅっとうまい酒が一杯引っかけたいんだ。さあ、行くぞ」
大鉄は、さっと、かしの棒を大上段にふりかぶる。
「うぬッ」
房之助は同時に抜きあわせたが、いかにも地の利が悪くて、この急斜面では手もとへ飛びこんでいくことさえできない。
「よいしょ」
大鉄は高いところから無造作にびゅんとかしの棒を振りこんでくる。刀にあたれば刀が折れて飛んでしまう。房之助はじりじりと後へさがるばかりだ。
「よいしょ、——逃げるか、こいつ。よいしょ」
すごい力で、大鉄はびゅんびゅん棒を振りまわしながら、ぐいぐいと追いつめてくる。
こっちはぐいぐい後へさがるほかはない。
——こりゃいかん。
どこまでさがっても敵のほうが上で、こっちは下なのだから、どうにもつけ入ることができないのだ。恥ずかしいと房之助は歯がみをした。
とたんに、
「畜生、——くそ坊主」
意外にも、うしろでつばめの金切り声が罵倒したと見るまに、びゅっ、びゅっと風を切って得意の五寸くぎが三本飛んだ。
「わっ、女郎め」
一本は棒ではね飛ばされたが、一本はほおをかすり、一本が坊主の右肩へつきささった。
さすがにちょっと棒がひるんだすきに、
「とうっ」
房之助はまっしぐらに突きを入れていった。惰性で坊主がとんとん前へおりてくるところだったから、こっちの切っ先は見事に大鉄の腹のあたりへぐさと突っこんでいる。
「わあっ」
反射的にうしろへ飛んで逃げた大鉄は、痛手に足もとがよろけて、そのよろけたほうが運悪

く崖っぷちのほうだったので、ひとたまりもなくどっと谷底へ転落していく。

「あんた――」

うしろからつばめが背中へしがみついてきた。

「つばめ――」

後からついてきたのは、清太郎だとばかり思っていたが、考えてみると、清太郎は鶴七郎のそばから離れるわけにはいかない場合だったのだ。

「こわかった、あたし。どうなるかと思った」

「また、お前に助けられてしまったんだなあ」

つばめはいまさらのようにがたがたふるえながら、背中から離れようとしない。

「そんなことといっちゃいやだ。いっしょに死ぬ約束なんだもの」

「よし、いっしょに死のうな。こい」

房之助は気がついたように坂をのぼりだす。

「どうするの」

「あの岩鼻を曲がったところに、まだ敵がいるかもしれない。こっちが下にいては不利だ」

「そうね」

つばめはものわかりよく、しゃっきりと歩きだした。

「あんた、五寸くぎ、もう二本しか残っていないよ」

その五寸くぎを左右の手に一本ずつ、しっかりと握りしめているつばめである。

一気に岩鼻までのぼって、そこを曲がると、そこからは道がくだりになって、はるか向こうの岩角を、だれかちらっと曲がって姿を消したのが目についた。

「逃げたらしいな、敵は」

「じゃ、まだ油断できないわね」

「うむ。いっしょに死ぬんだ、行こう」

「死ぬの、いやだなあ、あたし」

「いやか――」

「だって、まだ一度もあんたに抱いてもらわな

いんだもの。――でも、いいわ。死ぬ時はきっとあたしをしっかり抱いて死んでね」

「いいとも――」

下りは上りより楽だ。二人はずんずん次の岩鼻まで歩いた。

「おれはなあ、つばめ、お前がかわいくてしょうがないんだ」

抜刀を振り振り、房之助はそれを口にせずにはいられなかった。

「うれしいわ。あたしはあんたのおかみさんね」

「そうさ、二世も三世も、おれの女房だ」

「待って、あんた」

岩の曲がり角へくると、つばめは房之助に声をかけておいて、雌ひょうのように一足先に曲がり角へ走りぬけていった。

「やっぱり、だれもいないわ」

「いないなあ」

「もうその刀、しまったらどうかしら。ほかの人が見ると、山賊と間違えられるもの」

「なるほど、そうだったなあ」

房之助は苦わらいをしながら、刀をぬぐって鞘におさめる。

そこへまず芳公が追いついてきた。

「お二人さん、もういそがなくてもいいって、殿さまのおおせでござんす」

「お使者、大儀――」

そんな冗談が出るだけ、房之助も落ちつきを取りもどしてきた。

「どういたしやして。今日はさんざんいいところを見せつけてくれて、どうもありがとうござんす。これ、おとなをからかっているんじゃないんだぜ、太夫さん」

芳公はにやにやわらっている。

「あら、あたしたちそんなに見せつけたかしら」

「いや、おみごとなもんでござんす。お二人さんで大石を片づけたり、お二人さんでくそ坊主を退治したり、鳥のおじさんが悔しがっていやした。明日は芳の字、二人で先頭をつとめよう

ってね」
「恥ずかしいわ、そんなにいわれちゃ。あたし、ただ夢中だったのよ」
「さいでござんしょうね。太夫さんは、いま夢中で房の字さんより先にこの角を曲がったようでござんすね。おいら、感心してしまった。首ったけってことはあるけど、太夫さんのは命ったけっていうんだものな、お立派でござんす、それだけ一生懸命にほれりゃね」
芳公の顔からいつかわらいが消えて、妙に目がうるんでいるようだ。
「芳の字うじ、もうよそうや。わしは太夫に助けられてばかりいたんだから、ちょいと恥ずかしい」
「そんなことといっちゃいやだったら」
どうやら、鶴七郎が前後を烏松と清太郎にまもられて追いついてきた。
「房の字堂、命びろいをしてよかったな」
鶴七郎がねぎらうように、まず声をかける。
「赤面のいたり。お見のがしを願います」
「いや、赤面することはない。しかし、死にいそぎはいかんぞ。お前が死にいそぎをすると、つばめが殉死しそうだからな」
「はい、以後気をつけます」
うれしいことをいってくれる浜町さまだと房之助は思った。
「殿さま、今日の太夫には、どうしてもほうびを出さなくてはなりませんね」
烏松がまじめな顔をしていう。
「わかっている。太夫にはいいほうびをつかわすことにしよう」
「ありがとうございます。——芳の字も早くおじぎだ」
「ありがとうござんす、殿さま。どうか、太夫にはどっさりごほうびを願いやす。持ちきれなければ、おいらが半分かついで歩いてもいいや」
「それはせっかくだが、太夫が承知すまい」
「へえ、するとどんなごほうびなんでござん

す、殿さま」
「太夫には房之助をほうびにつかわそうと考えている。どうだ、いいほうびであろう」
「なあるほど、こいつはおいらが半分かつぐわけにゃいかないなあ。——太夫さん、おめでとうござんす」
「よかったなあ、太夫さん。——ここからあっしと芳の字が先頭をつとめるから、お二人さんはしんがりで、なんとやらの語らいというやつをしながら、ゆっくりと歩いてきなさるがいい。——芳の字、行こうぜ」
烏松は芳公をうながして、さっさと峠を下り始める。
「あたし、なんだか恥ずかしい」
しんがりになったつばめは、顔を赤らめながら、そっと房之助の手をさぐっていた。

火なわのにおい

碓氷峠をこえると、いよいよ信濃路になる。
鶴七郎たちの一行六人は、軽井沢の宿へはいって中食をとった。
「大先生、今夜はどこ泊まりということになりやすかねえ」
番頭役の烏松が、鶴七郎にきいた。
「そうだな、順当に行けば、小諸あたりかな」
軽井沢から沓掛へ一里五町、沓掛から追分へ一里三町、ここで道は中仙道と善光寺道にわかれ、小諸は善光寺道へ三里半はいる。つまり、これから六里たらず歩くことになるのだ。
「房の字堂さん、小諸から上田へは何里あるんだろう」
「ざっと五里ほどだ」
「すると、明日はいやでも上田へはいることになる。敵のやつらもぐずぐずはしていられないってわけだ」
碓氷峠の一難はやっと切りぬけたが、それでほっとしていてはいけない。敵の抵抗はこれから本格的になるんだと、烏松はそれをみんなに

注意しているのだろう。

「ねえ、ここからは、やっぱりあたしたちが先頭をつとめましょうよ」

つばめがそっと房之助にささやく。

「うむ、わしもそのつもりだ」

房之助は軽くうなずいて、

「大番頭さん、これからの先頭は、わしたちがつとめます」

と、烏松に申し入れる。

「そうだね、房の字堂さんはそうしなくちゃ気がすまないだろう。大先生、それでようござんすね」

「うむ、よかろう」

いわば房之助のために、こうしてみんな苦労しているのだ。じっとしていられない房之助の気持ちもよくわかるので、鶴七郎はそれをゆるした。

「太夫さんはどうしても房の字堂さんといっしょでなければいやかい」

芳公は向こうからつばめにきく。

「どうして、芳公さん」

「これからの先頭は、なにが飛び出すかわからないぜ。だから、おいらが太夫さんのかわりになってもいいぜ」

「ありがとう。せっかくだけれど、あたしはやっぱりこの人のそばがいいわ」

「なるほど、ここはもう信州でござんすからね。信州信濃の新そばよりも、あたしゃあなたのそばがいい」

芳公はぺろりと赤い舌を出す。

「ぴよはなかなか博識だな」

鶴七郎はわらい出す。

「博識ってのは、殿さま、ふろしきの親類ですか」

「まあ、おなじようなものかな。よく物を知っていると、つい大ぶろしきをひろげたくなる」

「ああ、わかった。博識ってのは、よく物を知ってることなんですね。なあるほど、おいら、

これでまた博識が一つふえやがった」

にぎやかな中食をおわって、一行はいよいよ沓掛へ向かって出発する。

先頭は房之助とつばめ、次が鶴七郎と烏松、しんがりは清太郎と芳公の順だ。

軽井沢から沓掛への道は、雑木林と草っ原ばかりが多い寂しい道である。

「清の字兄貴、こいつはきっとなにか出そうだぞ」

どこまで行ってもしいんと寂しい山の中の道なので、芳公は目を光らせながら、黙っていられなくなってきたようだ。

「うむ、出るかもしれないな」

清太郎は絶えず行く手へ目をくばりながら答える。

「出れば梟組(ふくろうぐみ)かなあ、兄貴」

「いや、梟組は夜でなくちゃ出ない。昼間出ちゃ、忍者は損をするからな」

「すると、また、あの坊主のような化け物が出てくるんかな」

「わしの一番こわいのは、飛び道具なんだ」

「ああ、そうか。そういう手があるなあ」

芳公は目を丸くしていたが、

「兄貴、ごめんよ」

ばたばたと前へ駆けだして、烏松とは反対側の鶴七郎の左がわへ肩をならべていった。

「どうした、ぴよ」

「おいらまた博識が一つふえたんです、殿さま」

「どんな博識だね」

「信州信濃の新そばよりも、あたしゃ殿さまのそばがいい」

「そうか、それならそばにいるがいい」

鶴七郎はすぐに芳公の心を読んで、あたたかいまなざしをしていた。

道はやがて草深い松林つづきへかかってきた。ちょうどこの辺が軽井沢と沓掛の中ほどになりそうだ。

「出たわ、あんた」

先頭のつばめはそういって、思わず一足後へさがる。
ふいに、行く手の深い草の中から立ちあがって、道へ躍り出してきたのは、七、八人の仲間をしたがえた大塚文之進である。
「おい、前川、お前なかなか色男らしいな。つばめがくどきおとせるようじゃ、すみにおけないぞ」
大塚は不敵にもそんないやがらせを口にする。
「文之進、こんどは気ちがい呼ばわりは通用しないぞ」
「そうか、こんどは気ちがいでなくて、色気ちがいのほうだからな」
大塚はにやにやわらっている。
おかしいと房之助は思った。ここに待ち伏せしていたからには、有無をいわせず切って出るのが本当だ。なんでこんなむだ口をたたいているのだろう。
「あっ」
房之助は愕然とした。どこからか火なわのにおいがただよってくる。浜町さまをねらっているに違いない。
「つばめ――」
せめて人がきを作ってふせぐよりしようがないと、うしろへ叫んだ時、
だあん。
耳もとで銃声が一発おこり、
だあん。
つづいて二、三間向こうの松の木の上からも一発、
「わあッ」
その松の木から、悲鳴をあげながら、人間が一人どっと草の中へ墜落してきた。
わずかに鶴七郎の短筒のほうが早かったようである。
「うぬッ」
思わずほっとしたすきに、もうこれまでと思

った大塚が、凶悪な血相にかわって、抜きうちにだっと切りこんできた。
「とうっ」
あやうく飛びさがった房之助は、とっさに抜きあわせて、文之進だけはなんとしても自分の手で切りたいと敵愾心に燃えている相手だから、捨て身になって逆襲に出る。
「えいっ」
「とうっ」
白刃が激しく火花を散らした。どっちにも憎悪と敵愾心があるから、それはすさまじい切りあいになった。
「房さん、しっかりして」
見ているつばめも必死で、もう目がつりあがっている。
その向こうでは、清太郎が敵の中へ飛びこんでいって、七人を相手にしているが、その七人のうちの二人が、ふっと気がついたように、房之助のほうへ向かってきた。
すきがあったら切って出ようと、じりじりと切りあいの横手へまわってくる。
「とうっ」
「えいっ」
大塚と房之助は激しく動きまわり、たびたび飛び違って位置がかわるから、なかなかすきが見いだせないようだが、一人がついに房之助の真横へ出た。
しめたというように、その男が一刀を振りかぶる。
「ひきょう者ッ」
かっとなったつばめは、その男目がけて夢中で五寸くぎを飛ばした。
「あっ」
それが見事に敵の左腕に突きささったので、よろよろとよろめきながら後ろへさがる。
つれの一人がこっちを見て、
「おのれ、こしゃくな」
たかが女一人と見くびったのだろう、無造作

に刀を振りかぶって向かってきた。
「くそッ、これでもくらえ」
こんどは左の手の五寸くぎが飛ぶ。
「わあッ」
そいつはのどへまともに五寸くぎをうちこまれて、たわいもなくしりもちをついてしまう。
つばめは二本残っていた五寸くぎをつかってしまったので、もう武器はなにもない。
「つばめ、こっちへさがっておれ」
つかつかと近づいてきた鶴七郎がそういって、つばめを背にかばいながら、
だあん。
二発目の短筒をぶっ放した。
向こうの清太郎のうしろへまわったやつの右ひじをねらったのだ。
「あっ」
そやつはがらりと刀を取り落とし、かなわぬと見たか、あわてて松林の中へ逃げこんでいく。
この一発の銃声は、敵をおじけづかせるのにすばらしい効果があったようだ。
さすがに大塚もはっとして、思わず銃声の方を見た。その一瞬のすき、
「とうっ」
房之助が死に物狂いのもろ手突きを、体ごとぶつかっていった。
よけるも、かわすもできない。文之進はみぞおちのあたりを一気に貫かれて、
「わあッ」
と、絶叫しながら、大きくのけぞっていた。
「おお、見事——」
鶴七郎はわがことのように称賛の声を惜しまなかった。房之助もすでに数ヵ所に文之進の切っ先をうけ、ただ負けてはならないという気力一つで闘っていたので、勝ったと思ったとたんに力がつきて、われにもなくそこへしりもちをついていた。
「房さあん——」
つばめが夢中で走り寄っていく。

小諸の夜

大塚組はついに破れて逃げ去った。
即死したのは皮肉にも大塚文之進一人で、あとの手負いたちは、ともかくも自分で逃げるだけの気力は残っていたのだろう。
こっちは清太郎も房之助も手傷はうけていたが、幸いほんのかすり傷だけで、それぞれ手当がすむと、すぐに元気を取りもどしてきた。
「殿さま、敵は七人もいて、思ったよりだらしがないんですねえ」
一時は青くなっていた芳公が、急にいばりだす。
「うむ。要するに、大塚は自分の策におぼれて、自滅したんだな」
「どうしてです、殿さま」
「大塚は猟師を雇って、松の木の上へのせておいた。これで大丈夫わしを倒せると思ったのだ。だから、わざといきなり切って出ずに、房之助をからかいながら、猟師の狙撃（そげき）を待っていた」
「あっしもあの時はおかしいと思いやしてね。そのうちに火なわのにおいが鼻へついた時は、まったくどきりとしちまいました」
鳥松は、今さらのように、胸をなでおろしている。
「猟師がどうしても引き金をひけなかったのは、ぴよと鳥がわしのそばを離れなかったからだ。こんど江戸へ帰ったら、ぴよにも鳥にも、どっさりほうびをつかわすつもりだ」
「だって、殿さま、おいらにゃそのくらいのことしかできないんだから、しようがありませんや。こんどはどうしても剣術をならっておかなくちゃ、こんな時不自由でしようがねえ」
「いや、なまじ剣術などはならわなくともよい。ぴよほどの心がけがあれば、いざという時、必ず物の役に立つ」
「殿さまの前ですが、あっしもそう思いやす。今日の芳公は、まったく上できでござんした」

烏松もうれしそうな顔をしながらいう。
「ほめてくれるのか、おじさん。よせよう、おいら顔が赤くなっちまわあ」
芳公は首をすくめている。
「とにかく、わしのほうがほんの少し早く松の木の上の猟師を見つけたのは幸運だった。大塚たちはそればかりをたよりにして、こんどこそ大丈夫だと安心していたところだから、それが失敗したとなると、すっかり狼狽してしまったのだ。だから、房之助と清太郎に切り立てられて、ただまごまごするばかりだった。命がけで闘おうとする者と、人をたよりにしてうまくやろうとする者とでは、はじめから意気が違うのだ」
「本当でござんすねえ。太夫なんかはまるで死に物狂いでしたからねえ」
房之助の傷の手当をしているつばめのほうへ、烏松がわらいながらいうと、
「おじさん、ごめんなさい。あたしは青くなると、ほかのことはなんにも考えないで、ただ、この人のことばかりに夢中になってしまうんです」
と、つばめは正直にいって赤くなっていた。
「いいとも、太夫はそれでいいんだ。せっかく殿さまからごほうびにもらった大切な御亭主なんだ、粗末にしちゃ罰があたらあね」
今日だけは烏松もつばめに一歩を譲っているようだ。
「さあ、支度がよければ出かけるぞ。ここはこれですんだが、今日はまだ安心はできぬ。こうして一同が心を一つにしてかかれば、なにがおころうと恐れることは少しもないが、油断だけは禁物だ」
「そのとおりでござんす。芳公、こんどはおれたちが先頭をつとめよう」
「合点だ、おじさん」
烏松と芳公が先頭に立って、次が鶴七郎と清太郎、しんがりは房之助とつばめという順で、

沓掛のほうへ進み出す。
「清太郎、大したけがもなくてよかったな」
鶴七郎はねぎらうように清太郎にいった。
「はい、殿さまのおかげでございます」
うしろからかかってきた敵は、ちゃんとわかってはいたが、前の敵から目が放せないので、どうにもふせぎようがなかったのだ。
「一人一人にすると、さすがに選んできているとみえて、相当腕の立つやつばかりのようだな」
「そうのようでございます。ただ、敵にも良心がありまして、自分たちは決していいことをしているのではないという気持ちがあるのでしょう、先に立つのはなんとなくためらいがちのようでございました」
清太郎はさすがにいいところを見ている。
「そうだな。その点が梟組と違って、みんな侍心を持っているのだろう」
うしろで聞いている房之助は、たしかにそうだと思った。心から悪人になりきっていたのは、あの中では大塚文之進一人のようだった。
それにしても、あの激しい切りあいの中で、そういうところまでちゃんと見ている清太郎は、立派な侍だと尊敬せずにはいられない。
「つばめ、よかったなあ」
房之助はわれにもなくそんな言葉が出る。
「本当によかったわ、けがぐらいですんで」
「いや、おれのことをいってるんじゃないんだ。清さんが無事で、本当によかったと思うんだ」
「ふ、ふ、いまさらしく、どうしてそんなことをいうのかしら」
「それはだれ一人無事でなくても困るんだが、お前はさっき、いざとなると、おれのことばかりが心配になるといったろう」
「ええ、いったわ。本当にそうなんだもの」
「清さんにもお蓮さんというおかみさんがいるんだ、清さんのことばかりしか考えていないような貞女がね。おれはいまふっとそれを思いだして、ああよかったと思ったんだ」

「じゃ、そのお蓮さん、いまごろ江戸でずいぶん心配しているでしょうね」
「うむ。だから、おれたちはどうしても勝たなくてはならないんだ」
「困ったなあ、あたし。もう五寸くぎ一本もないのよ」
「追分へ行ったら買うんだな。追分なら、金物屋があるだろう」
「のんきねえ、あんたは。その追分へ着く前に、もし敵が出たらどうするのさ」
「いや、こんど出ればどうせ梟組だから、昼間は出ないだろう」
　この房之助の勘はあたっていた。
　沓掛から追分へ一里三町、追分から小諸へ三里半、小諸の旅籠へついたのはすでに宵の口になっていたが、ついに梟組もなにも出なかった。
　しかし、明日は明るいうちに上田の城下へはいってしまうのだから、今夜どうしても梟組が出なければならないはずなのである。

「大先生、今夜は、だれにも銚子はつけないことにしました」
　膳が出た時、烏松は鶴七郎にことわっていた。
「そうか、大番頭さんがそういうなら、それでよい」
　むろん、だれも文句をいう者はなかった。それどころか、今夜はだれも旅籠の丹前と着替える者さえないのである。だれもが今夜はなにかあると見ているからだ。
　食事がすむと、鶴七郎はいつものとおり烏松に送られて、別室の寝所へ移った。
「清さん、今夜は殿さまのお座敷を寝ず番しなくてもいいだろうか」
　房之助はそっと清太郎に聞いた。
「わしもいまそれを考えているんだが、大番頭さんが帰ってきたら相談してみよう」
「清あにい、今日はみんなくたびれているだろうから、寝ず番ならおいらが引きうけてもいいぜ」

　そばから芳公がそう申し出た。
「いや、くたびれているのはだれもおなじだ。とにかく、松おじさんと相談してからのことにしよう」
　そこへ烏松が帰ってきた。
「おじさん、いまみんなで、今夜は殿さまの部屋を寝ず番しなくてもいいだろうかって相談しているところなんだが、どういうもんだろうな」
　芳公がさっそく聞く。
「いや、それはいいとお言いなさるんだ。それより、今夜はいつここを立つようになるかもしれないから、みんなも早く寝て、少しでもよけい眠っておくようにということだった。あっしはこれから帳場へ行って、勘定をすませてくるから、かまわずにこっちも早寝ということにしやしょう」
　烏松はそう言いおいて、そそくさとまた座敷を出ていった。
　その烏松が帳場へ行って言いつけたらしく、まもなく女中が寝床を取りにきた。
「今夜はみんな着のみ着のままごろ寝ということにしよう」
「それがいい、いつ、どんなことがおこるかもしれないからな」
　そう相談して、みんなはともかくもまくらについた。
　気は張っているつもりでも、今日はみんな疲れ切っているので、すぐにぐっすり眠ってしまったらしい。もっとも、まだ宵のうちで、あたりがなんとなくがやがやしているから、今のうちなら眠っておいても大丈夫だろうという気持ちがあったのだろう。
　その旅籠がすっかり寝しずまるのは、四ツ（十時）すぎだろうからである。
　そのころ、どこからともなく黒頭巾黒装束、忍び姿の人影が一つ、すっと清太郎たちの眠っている座敷の廊下へ立った。
　黒い人影は、障子の外から、じっと中の寝息

に耳をすませているようだ。
庭のほうから陰気なふくろうの鳴き声がする。
座敷の者たちはだれも目をさました気配はない。
黒い人影は、するすると足音も立てずに、その廊下を奥へ進み出す。ここの次の間が鶴七郎の寝ている座敷なのだ。
ほう、ほうと、庭でふくろうが鳴く。
黒い人影は、そこの戸袋のそばの雨戸の桟をことりとはずして、一寸ばかり雨戸をあけた。
黒い人影は、鶴七郎の座敷の前に立って、中の気配にしばらく耳をすませている。ここは上座敷で控えの間つきだから、間のふすまがしめきってあるとみえ、障子は暗い。
やがて、黒い人影は暗い障子をあけて、控えの間へはいった。こんどはふすまに耳をあてて、じっと中の寝息を聞いているようだ。
ほう、ほうと、ふくろうが庭でまた鳴く。
黒い人影は、少しずつそこのふすまをあけはじめた。有り明け行灯の暗いほかげが、控えの間のほうへ、そこだけ忍び流れてくる。
そのふすまのかげにかくれて、黒い人影はややしばらく中の気配を耳で聞いている。
そして、これは本当の寝息だとわかると、すっと座敷へはいって、鶴七郎の寝ている布団の足もとのほうへ立ち、その寝顔を見おろしながら、そっと刀の柄に手をかけた。刀をぬいたが最後、いきなり鶴七郎の胸を掛け布団の上から刺し貫く気だろう。
が、鶴七郎は忍者が刀の柄を手をかけたとたん、ぱっちりと目をあいて、
「梟十郎、まいったか」
と、おだやかに声をかけながら、にっと微笑した。
「なんだ、知っていたのか」
梟十郎はあきれたように言いながら、
「たぬき寝入りのうまい御仁だ」

と、頭巾の中の目が苦笑したようである。
「また出直すがいい。しずかに帰らぬと、わしの家来どもが起きだすぞ」
鶴七郎は身うごき一つせずに、しずかに言う。
一瞬、梟十郎は抜き打ちをかけてやろうかというように目をぎろりと光らせたが、あまりに鶴七郎が落ち着き払っているので、その気魄に気おされたらしい。
「三度目ということがあるからな」
そんな憎まれ口をたたきながら、すっとうしろへさがり出した。
そして、たちまち次の間から廊下へ姿を消していったが、さすがに足音は一つも聞こえなかった。
ほう、ほうと、庭でふくろうが鳴いている。
鶴七郎はむくりと寝床の上へおきあがり、梟十郎があけっ放しで出ていったふすまの間から、じっと庭へ耳を澄ましていた。

夜道

「あっ、殿さま」
梟十郎があけっ放しのまま出ていった控えの間から、烏松が音もなくはいってきて、
「やっぱり、来やがったんですね」
と、青くなりながらそこへすわる。
「うむ、来た。いま出ていったところだが、一同はどうした」
「ふくろうの声が耳にはいったんで、あっしはすぐ飛び起きてきたんですが、みんなもう起きていると思いやす」
「そこの雨戸が一枚あいているはずだが」
「へえ、半分ほどあいていやす」
「よし、出発の支度をして、そこの雨戸から一人ずつ庭へ出るように、一同に言いつけてくれ。音を立てぬようにと、くれぐれも注意するのだ」
「へえ」
「烏は支度がすんだら、すぐに、梟十郎を追っ

てみてくれ。上田口の宿はずれまで行って、それらしい者の影がなかったら、そこで待っていればいい」
「かしこまりやした」
「相手は梟だからな、十分気をつけてまいれよ」
「へえ。なあに、向こうが梟なら、こっちは烏でさ。ごめんなすって」
烏松はそのまま自分たちの座敷へ引きかえしてきた。
「どうだった、おじさん」
もうみんな寝床の上へ起きていて、芳公がさっそく声をかけてくる。
「しっ。みんな音を立てねえように支度をして、一人一人庭へ出てくんな。出発なんだ。それ、わらじはここにある」
烏松は、寝る前に用意しておいた新しいわらじのふろしき包みから、自分の分を一足とってふところへ入れ、あとをみんなの前へおく。
「殿さまはもう庭で待っていなさるんだ。音を立てちゃいけねえよ」
そう言いすてるなり、烏松はもうするりと廊下へ出ていく。
「なにかあったに違いない。いそごう」
清太郎がそっといって、今夜はみんな着のみ着のままで寝ていたのだから、わらじさえはけばいいのだ。だれもあとは口もきかず、芳公が一番早く座敷を出る。
「忘れ物をしないようにな」
清太郎はそう言いながら、二番目に出ていく。
「あんた、あわてなくてもいいのよ」
一番おそい房之助に、つばめがそっとささやく。
「よし、できた。つばめ、五寸くぎを忘れるな」
「大丈夫よ」
つばめは帯の上を軽く手でたたいてみせて、房之助のあとにつづく。
庭へ出てみると、もう鶴七郎が清太郎と芳公をしたがえて、星あかりに黒々と立っていた。

「つばめ、そこの雨戸はしめておくがいい」
「はい」
つばめがいま出てきたばかりの雨戸をそっとしめきると、鶴七郎は行くぞといって先に立ち、裏木戸のほうへ歩きだす。
足音さえ立てないようにしているくらいだから、むろん、だれもむだ口をきく者はなかった。
小諸の宿は、通りぬけ二十五町あまり、人家千二百余といわれ、この辺では大きい宿場になっているが、町はもうしいんと暗く寝しずまって、人一人通らない。鶴七郎は足をいそがせて上田口のほうへ進み、やがて宿はずれへかかってきた。
そこに八間ほどの橋がかかっている。
「殿さまでござんすか」
その橋のたもとから、ひょいと出てきたのは烏松である。
「烏か。——様子はどうであった」
「ここへくるまで、だれにも会いやせんでした」
「そうか」
鶴七郎はうなずいて、
「一同、わしの前へ集まれ。今夜の子細を話しておこう」
と、五人を前へ集めた。
一同は思わず息をのんで、鶴七郎の顔を見まもる。
「今夜、四ツ（十時）を打つとまもなく、梟十郎がわしの寝間へしのびこんできた。わしが目をさましていたので、彼は、三度目ということがあると、捨てぜりふを残して出ていった。その後で、わしたちはすぐにこうして出発してきたのだが、おそらく、梟十郎はもう一度わしの寝首をねらうつもりだと、わしは見ている。時刻は九ツ（十二時）から八ツ（二時）の間だ。それに失敗すると、夜明け前に三度目をねらう。つまり、梟十郎は、まさかもうこないだろうとこっちが油断する時をねらう計画と、わしはみたのだ」

「やつのやりそうなことでさ」
　烏松が何度もうなずく。
「今夜わしを何度もねらうつもりだとすると、梟組はまだこの宿のどこかにひそんでいるはずだ。そこで、わしは彼らの裏をかいて、第一回を失敗したすぐ後で上田へ夜道をかけようと、はじめから考えていた。それがどうやら図にあたったので、こうしてここまで出てきたのだが、問題なのはこれからのことだ」
「どんな問題があるんだろうな」
　芳公がひとりごとのようにいって、小首をかしげている。
「小諸から上田までは五里、普通に歩いても今からだと夜明け前には行ける。梟十郎の第二回目のしのびこみを九ツと見て、彼らはわしたちが夜道をかけたとわかると、すぐに忍者の足で追跡をかける。その足が普通の倍走ると見て、わしたちは九ツまでに五里の半分以上歩いていないと、上田へはいる前に彼らに追いつかれる。なるべく追いつかれないほうがいいのだ。わかったろうな」
「わかりました、殿さま。すぐに出発いたしましょう」
　清太郎が一同にかわって答える。
「よし、ぴょ、ちょうちんをつけて先に立て」
「はい」
　芳公はいそいでちょうちんの用意にかかる。
「烏、お前は十町ほど後から歩いて、万一梟組の足音が耳にはいったら、できるだけ早くわしに知らせるのだ」
「合点です」
「先頭はぴょ、次はわしと清の字、しんがりは房の字と太夫(たゆう)、いいな」
「はい」
「出かけやす、殿さま」
　ちょうちんをつけた芳公が、もうさっさと歩きだす。
「では、烏、後をたのむぞ」

「御安心なすって」
　鶴七郎が清太郎とならんで芳公につづく。しんがりは房之助とつばめだった。
「太夫、もう口をきいてもいいよ」
　鶴七郎が振りかえって、わらいながらいった。
「はい」
　しかし、つばめは胸がいっぱいで、急には口がほぐれなかった。
　空に星はきれいだが、道は暗い。そして、この暗い道は、一歩ずつ上田に近づいていくのだ。上田にはどんな危険が房之助を待ちかまえているか。いや、うしろからはもうしばらくたつと、梟組の追跡がはじまるのだ。
「殿さま、昼間の大塚組の生き残りが、もう上田へ着いていると思うのですが」
　清太郎が思いだしたように鶴七郎にいう。
「うむ、それは着いているだろうな」
「大膳はこっちが夜道をかけることを考えて、途中へ伏勢を出すというようなことはありませんでしょうか」
「それはまずなかろうと思う。大膳は大金を出して梟組をかかえこんでいる。今夜はその梟組が必ず勝つと信じているだろうからな。その梟組から失敗の注進がとどけば、どんな手を打つか油断はできないが、いまのところはまだ一切の望みを梟組の働きにかけて、安心しているだろう」
「なるほど、そうでした。つまり、こっちは絶対に梟組より一足早く上田へはいらなければいけないわけでございますな」
「うむ、そういうことになる」
　つばめはじっと耳を澄ませながら、上田へはいってから、どんな戦いになるのだろうと、それが聞きたかったが、清太郎はそれっきり口をつぐんでしまった。ちょっとがっかりしていると、
「殿さま、もっと早く歩きましょうか」
　と、こんどは先頭の芳公がきいた。

「いや、このくらいの足でいいだろう。あまり無理をしても、上田へはいってから疲れてはなんにもならぬ」
「ああ、そうだ。上田へはいってからが、本当の仕事なんですからね。殿さま、上田へはいったら、おいらたち、どんな仕事をすればいいんです」
つばめのききたいことを、芳公がきいてくれる。
「ぴよが大将なら、まずどんな仕事から手をつけるな」
鶴七郎がわらいながらきいた。
「おいら博識ってやつがあんまりないから、とても大将って柄じゃありやせんや」
「そんな遠慮はいらぬ。自分ならこうするといって、人の考えとくらべてみると、どっちがいいが、よくわかる。そういうことを何度もくりかえしていくうちに、人間の考えはだんだん深くなってくるのだ。勉強のために、自分の考えを言ってみなさい」
「じゃ、言ってみようかな。わらいっこなしですよ、殿さま」
「大将たる者は、そんなつまらぬことを気にするものではない」
「おいら、こんどのことで一番悪いのは城代家老の馬場大膳なんだから、上田へ着いたら真っ先に大膳の屋敷へ押しかけ、大膳を切ってしまいます」
「よし、それからどうするな」
「それから、大膳に味方をした悪人どもを切って、房の字さんのおとっつぁんを牢屋から出してやるんです」
「それもぜひやらなければならない仕事だな。それからどうする」
「それでおしまいじゃないかな。まだ、なにかすることがあるんですか」
「百姓一揆がおこりそうになっていることを忘れてはいかんな」

「ああ、そうだ。百姓には年貢をゆるしてやります」
「そうだ、だれが考えても、それでめでたしめでたしということになる。ただな、そのどの一つをとってみても、やさしい仕事は一つもない。敵も命は惜しいから、死に物狂いになる。その上、大将というものは、味方はむろんのこと、たとえ敵でも、なるべく人の命はそこなわないように戦をしなければならない。これが一番大切なことなのだ」
「悪人でも切っちゃいけないんですか、殿さま」
「うむ、切らずに改心させるのが、本当の大将なのだ」
「でも、こんどは悪人のほうが味方より多いんですから、うっかりするとこっちが切られちまいやしないかな」
「そこを、こっちも切られないように、敵もなるべく切らないように、うまくやるのが大将の器量ということになる」
「おいら、やっぱり大将は遠慮しやす。そんなこと、とてもむずかしくて、おいらには考えられませんや」
芳公はあっさりさじを投げてしまう。
「うむ、いまにだんだんわかってくるから、まあ見ていなさい」
鶴七郎も、それっきり自分の考えは口にしようとしない。
つばめは、またがっかりしてしまった。
しかし、考えてみると、鶴七郎がどういう手段をとるにしても、たった六人で敵地へ乗りこむのだから、無事にかえるようになどと考えるのは、考えるほうが無理なのだ。
そして、もし、六人のうちでだれか犠牲者が出るとすれば、房之助が一番先にそれを買って出なければならない立場にいるのだから、つばめはつらい。

関門破り

こうして、一行は小諸から二里半、田中の宿へかかろうとするあたりで、九つの鐘が鳴り出すのを聞いた。

こっちの考えどおりに事が運べば、いよいよ梟組が追跡にかかる時刻がきたのだ。

つばめは、黒頭巾黒装束の梟組が梟十郎を先頭にして、風のように暗い街道を走りだしたのが目に見えるようで、ぞっと背筋へ悪寒を感ぜずにはいられない。しかも、こっちはまだやっと半分道へかかろうとするところなのである。

「大丈夫かしら、あんた」

つばめはたまらなくなって、房之助の手をさぐっていた。

「つばめ、よけいなことを考えるのはやめよう。大丈夫だと信じていることだ」

房之助はあんがい冷静のようである。

「それはそうだけれど――」

「わしたちは、できるだけのことを、力いっぱいやっているんだ。もう、こうなったからには事の成否は天命にまつ、それでいいんだ」

「そうね、それよりしようがないわね」

つばめはそう答えながら、かまやしない、この人の死ぬ時がきたら、あたしもいっしょに死ねばいいんだと、ふっと考えて、急に気が楽になってきた。

「ねえ、あんた、こんどのことがうまくいったら、本当にお侍をやめてくれる?」

つい、そんな話が口に出る。

「うむ、おれはやめる」

「うれしいわ。あたしはこんな女で、とてもお侍の御新造って柄じゃないんだもの」

「おれはねえ、つばめ、侍をやめて、清の字さんのように浜町さまの家来にしてもらおうと思うんだ」

「それがいいわ。清の字さんのおかみさんは、水茶屋をやってるんですってね」

「そうなんだ。清の字さんはいつでも浜町さまの身がわりになる気でいる。お蓮さんが後で困らないように、水茶屋をつづけているんだそうだ。そこへいくと、おれは安心さ。お前は太夫って芸を持っているんだからな」

「いやだなあ、そんな死ぬ時のことばかり考えていちゃあ」

「さあ、いそごう。あんまりおくれると、浜町さまに気おくれがしたんじゃないかとわらわれる」

いつのまにか二人は、鶴七郎から十間ばかりおくれているのだ。

「大丈夫よ。気おくれがしたんじゃなくて、あたしがまだ甘ったれているんだと、浜町さまはちゃんと知っておいでなさいます」

どこまで行っても、星空の下の暗い街道がつづく。その暗い街道の果てに、上田の城下へはいる関門が待っているはずである。

うしろからは、梟組がしだいに距離をちぢめてきているであろう。

さすがに、もうみんな口数をきかなくなっていた。

どこかの里で打ち出した八ツ(二時)の鐘が、暗い野面をつたわって遠く耳についてきた。

「おじさん、どうしたかしら」

つばめがそっときく。

「どうやら、もうここまでくれば、梟組に追いつかれる心配だけはなさそうだ」

烏松が駆けつけてこないかぎり、梟組はまだ遠いはずなのである。

はるか行く手に、ちらっとあかりの光が見えて、つぎの瞬間消えたようだ。

おやと、つばめが目をみはっていると、

「房之助、上田の関門はもう近いようだな。いまあかりが見えたようだが」

「はい、もう二、三町ほどでございます」

「そうか。番士が門をふさいだら、かまわずわ

しの名を名乗ってきかせるがよい」

「かしこまりました。――失礼いたします」

房之助は鶴七郎を追いぬいて、先頭の芳公と肩をならべる。

――とうとう来ちまった。

つばめはまさか前へ出るわけにはいかないので、鶴七郎のうしろにつきながら、思わず息をのんでいる。

こっちのちょうちんの灯が、遠くから番士たちの目にはいっていたのだろう。やがて、関門に近くなると、向こうにもちょうちんが二つばかりちらつき出して、こっちを待っているようである。

きてみると、この新関は黒ぬりの柵門を作って、それをしめ切って街道を遮断している。

くぐりから番士が二人、ちょうちんを持って出てきて、

「そこへ来たのは何者だ。こんな真夜中にどこへ行くんだ」

と、横柄に誰何してきた。

房之助がつかつかと二人の前へ進んで、

「さがれ、両人、将軍家の御連枝松平鶴七郎さま、子細あって当城内へおこしあそばされる。失礼のないように、早々門をおひらきなさい」

と、一喝した。

「あっ、前川――」

番士はびっくりしたように顔を見あわせ、どうしようかというように目で相談していたが、

「しばらくお待ちなさい。いまお組頭にうかがってまいる」

と、一人があわててくぐりから番所へ引き返していく。

たとえ組頭に相談したところで、ただでは通さぬ関門なのだ。

「一同、つづけ」

鶴七郎はそう言うなり、先頭に立ってつかつかとくぐりを通りぬけようとする。

「こらっ、なにをするか」

後に残った番士は、あわててくぐりの前へ立ちふさがって叫んだが、

「のきなさい、じゃまをしてはならん」

鶴七郎はおだやかにいって、番士をかきのけ、かまわず中へはいる。

「狼藉者だ、――関所破りだぞ」

位負けがして、まさか刀も抜けない番士は、切羽つまって大声にわめき立てる。

「待てッ、その方は何者か」

番小屋から番士四、五人をつれて飛び出してきた組頭らしい中年の侍が、あたふたと鶴七郎の前へ立ちふさがる。

「その方の姓名はなんと申すか」

あべこべに鶴七郎が詰問する。

「黙れッ、ここは上田藩の関門、無礼なことを申すと手は見せぬぞ」

「その方は分別のある年輩だから、公儀のおきてはよく心得ているはず。たとえ城下たりと、街道筋へ関門をつくるには公儀の許可を得なくてはならぬ。この新関は、いつ公儀から許されたものか」

あっと組頭は言葉につまって、急には返事ができない。町木戸ならさしつかえないが、おなじ木戸でも関所というからには幕府の許可がいる。

「その方は言葉を間違えたらしい。ここは関門ではなくて、町木戸であろう。うかつな口をきくと、主人信濃守どのが迷惑をするぞ」

「黙れ黙れッ、先日来小諸からの通達によれば、このほどもったいなくも御連枝松平鶴七郎と名乗る凶賊が、異装の者をまじえて六人組の党を作り、しきりに街道筋をあらしまわるとのこと、察するに、この深夜といい、その方どもは六人組の盗賊に相違あるまい。――それッ、かまわぬから一同、賊どもを切ってすてろ」

組頭は覚悟をきめたらしく、一足さがって刀の柄に手をかける。

「待った、――待った」

ふいに、くぐりの外から声をかけて飛びこんできたのは烏松だった。
「なんだ、その方は――」
「あっしは烏松という江戸ではちょいと名の知れた岡っ引きだが、この人たちは賊じゃない。本当の賊は、いまここへ十四、五人、黒頭巾黒装束で、風のように飛んでくる梟十郎というのが大将で、梟組という凶賊なんだ。さあ、みんな逃げたり逃げたり」
　烏松はべらべらとまくし立てて、鶴七郎の腕をつかむなり、ぱっと城下町のほうへ走りだす。
　それと見て、清太郎は芳公と鶴七郎の背後をまもるようにつづき、房之助はつばめの手をとって駆けだそうとしたが、
「うぬッ、盗賊――」
　必死の組頭が、おそまきながら抜刀して、房之助の行く手に立ちふさがったので、房之助組は駆け出すわけにはいかない。
　やむをえず房之助も抜き合わせようとしたとたん、
「なにじゃますんのよう」
　つばめの手からさっと得意の五寸くぎが飛んで、組頭の右のひじに突きささった。
「あっ、おのれ」
　よろよろと相手がよろめいている間に、
「早く、あんた――」
　つばめは房之助のたもとを引っぱって、ばたばたと清太郎たちの後を追いだす。
「待て、くせ者」
　あっけにとられていた番士たちが、はっと気がついたように後を追いだした。
「くそッ、これでもくらえ」
　ひょいと振り向きざま、つばめの左右の手から、またしてもつづけざまに三、四本、五寸くぎが飛ぶ。
「わあッ、うぬッ」
「あぶない、気をつけろ」
　追っ手はほおや首筋を手裏剣でかすられたとでも思ったのだろう、ぎょっとしたように、そこへ立ちどまってしまった。
「いまのうちよ、あんた」
「急所はよけたんだろうな、つばめ」
　房之助にすれば、敵味方とはいえ、みんな知った顔なのだから、なるべく殺したくないのだ。
「大丈夫よ、あたしだって人なんか殺したくないもの」
「そうか、それならいいんだ。――おや、みんなはどこへ行っちまったんだろう」
　前をすかしても清太郎たちの姿がない。足音もきこえないのだ。
「いやだなあ、おいてけぼりにされちまったのかしら」
　一生懸命に走っていると、
「太夫、こっちだ」
　その暗い横町から、烏松が顔を出して呼んだ。
「ああ、よかった。迷子にしちゃひどいわ、おじさん」
「冗談いいなさんな、ここまできて房の字さんに迷子になられたんじゃ、こっちのほうこそ迷子になっちまう」
　烏松は苦わらいをしている。
「すまん、おじさんうじ」
「しっかりしてくんな、房さん。梟組はもうすぐここへ追いつく。やつらにじゃまをされないうちに、こっちは一仕事しちまおうというんだ」
　その横町を少しはいった四つ角に、鶴七郎が清太郎となにか話しあいながら、こっちの行くのを待っていた。
「浜町さま、おそくなって申しわけございません」
「いや、うまく切りぬけられてよかった。また太夫のくぎが役に立ったようだな」
「恐れ入ります」
「梟組が近いそうだ。さっそく仕事にかかろう。房之助、まず、そちの父が入れられている牢屋へ案内してくれ」

鶴七郎がきっぱりという。

牢　破　り

上田の新関の番士たちは、すでに馬場大膳の屋敷へ急使を走らせているにちがいない。大膳の屋敷は一ノ丸外の侍町の角にあって、外濠と向かいあっている。

牢屋は街道筋から左へはいって、侍町の間をまっすぐ西へ突きあたったところにある。

「房之助、そちの家はどこにある」

侍町へかかろうとするあたりまできて、鶴七郎が前川に聞いた。

「これをもう少し行くと、右手に会所があります。その会所の前の横町を、左へはいった中ほどになっております」

「なにかすぐわかるような目印はないか」

「父が入牢申しつけられているくらいですから、門前を竹矢来でふさがれ、たぶん見張りの足軽が詰めていることと思います」

「なるほど、ありそうなことだな。裏口もおなじかな」

「はい」

「だれか留守番はいるか」

「嘉助という老僕が、夫婦で留守をしております」

「よし、――太夫、太夫」

鶴七郎はふりかえって、つばめを呼んだ。

「はい、なにか御用でしょうか」

「そちは御苦労でもな、いま聞いた房之助の留守宅へまいって、父房右衛門の衣類大小を、老僕に出してもらって、牢屋の門の前あたりにかくれていてくれ」

「はい」

「房右衛門は牢屋から出るとすぐ、都合によっては一揆の代表名主の家へ走ることになるかもしれぬ。その時の支度なのだ」

「わかりました。いってまいります」

「待て――、なにか房之助からの使いだという

証拠を持っていかぬと、老僕が納得すまい。房之助、なにかないか」

「この印籠を持たせてやりましょう」

房之助は腰から印籠をぬきとる。

「太夫、番人がいるそうだが、裏門も裏口もだめだぞ。うまく塀を乗りこえろ。――そうだ、ぴよをつけてやろう。ぴよ、お前いっしょに行って太夫を助けてやれ」

「はい。殿さま、これは大役なんでしょうね」

芳公が念をおすように聞く。

「むろん、大役だ。番人に見つかると命がないと思わなければならぬ。しっかりやれ」

「合点です。太夫、いそごうぜ」

芳公は安心したように勇み立つ。

「つばめ、印籠だ。たのむぞ」

房之助がつばめに印籠をわたそうとすると、つばめはいきなりその手ごと印籠を両手に握って、

「あんた、気をつけてね」

と、必死な目を向けてくる。どっちに間違いがあっても、これが一生の別れになるのだから無理もない。

「お前こそ、たのむよ」

房之助の声には愛情があふれている。

「ぴよ、お前、かるはずみはいけねえぜ」

向こうでは思いはおなじ烏松が、しっかりと芳公の手を握っていた。

「いやだなあ、おじさん。おいらきっと大丈夫だよ」

芳公もはっと胸へきたらしく、急にべそをかいたような顔になる。

「よし、それなら気をつけて行きねえ」

「うむ。――殿さま、行ってきやす」

「御苦労だな」

鶴七郎はかまわず歩きつづけている。

やがて会所の前へきて、つばめと芳公は思いきりよくそっちへ駆け出していった。

時刻はすでに丑三ツに近い。
遠く街道のほうから、けたたましく犬がほえだし、次から次へひろがっていくのが無気味に聞こえだした。
「畜生、梟組がようやく着きやがったかな」
烏松がひとりごとのようにつぶやく。
まもなく、厳重な牢門の前へ出てきた。さすがに高い土塀がめぐらしてある。
「房之助、門をたたいてみろ。大膳の急使だというがいい」
鶴七郎が房之助に命じた。
「かしこまりました」
房之助は門の前へ進んで、あわただしく門扉をこぶしでたたきながら、
「門番、門番はおらぬか。御老職馬場大膳さまからの急使である。門番、門番」
と、大声に呼んだ。
「はい、ただいま」
深夜に牢屋の門をたたく者はほとんどいない。普通なら、中からしかりつけて、追い返されるところだろうが、ここでも老職馬場大膳の名は雷のように恐れられているとみえ、牢番足軽がうろたえたように答えながら、あたふたと門番詰め所からちょうちんをつけて出てきて、くぐりをあけ、
「どなたさまでございましょう」
と、寝ぼけ眼でこっちへちょうちんをかざした。
「しずかにいたせ。騒いではならん」
その鼻の先へ、房之助がいきなり抜刀して、きらりと切っ先を突きつける。
「あっ、くせ者」
思わず門番が後ずさりするのについて、房之助は抜刀を突きつけたまま、素早くくぐりの中へ押しいる。
つづいて鶴七郎。清太郎、烏松がはいって、くぐりをしめてしまう。
「くせ者だ、——くせ者だ」

門番が叫んで詰め所のほうへ逃げ出そうとするうしろから、清太郎が躍りかかっていってえりがみを引っつかみ、
「騒ぐと切るぞ」
と、脅しつける。
そのまに、声を聞きつけて牢番足軽が三人ばかり、六尺棒を持って飛び出してきた。
「一同、ひかえろ。ここにおいであそばすのは、いやしくも将軍家御連枝松平鶴七郎さまなるぞ。このたび、御当主信濃守さまの御懇請をいれられ、お家をみだす専横の老臣馬場大膳を取りおさえ、百姓一揆を未然におさめるため、わざわざ御入国くだされしもの、手向かいいたすと、かくいう前川房之助、君命により、その方どもを手討ちにするぞ」
房之助が居丈高になって一喝する。
御連枝のうちでも風がわりの奇人、浜町さまでとおる松平鶴七郎が、こんど馬場大膳を取りおさえにくるといううわさは、どこから出たのか、もう、城下中の者が知っている。むろん、まさかと思っている者のほうが多く、牢番足軽たちもその組だったが、いま見ると、そこに立っているのはたしかに葵の紋をつけた貴公子なのだ。
しかも、いっしょにきたのは、今牢内へ入れられている前の郡奉行の一子前川房之助なのである。
門番たちの力ではどうしようもない。
「前川さん、しばらく待ってください。ただ今、牢屋奉行林田さまを呼んでまいります」
「それにはおよばぬ。わしは入牢中の前川房右衛門をもらってかえればいいのだ。すぐに案内せよ」
鶴七郎がきっぱりという。
「そ、それでは、役目の手前、われわれどもが後で困ります」
「いや、後のことは心配ない。わしはその方どものの主人信濃どののたのみでまいっているのだ。

わしの言葉は、信濃どのの言いつけだと思うがよい」

「しかし、それならそれで、なにかお書きつけなりと——」

「それは後でつかわす。いまは一刻も争うのだ。——清太郎、その者は房右衛門の入れられている牢舎へ案内させよ」

じゃまがはいっては面倒なので、鶴七郎がかまわず清太郎に言いつける。

「これ、鶴七郎さまのおおせつけである。房右衛門の牢舎へ案内せよ」

清太郎はちょうちんを持った足軽のえりがみをつかんだまま先に立って、内門のほうへ歩き出す。

どこの牢屋も規模は小さいが、たいてい江戸の伝馬町の牢獄にならって建ててあるので、表門をはいると右のほうに牢屋役人の詰め所があり、まっすぐ行くと内門がある。この内門の中にも番所があって、そこに揚がり屋、百姓牢、女牢などが別棟に建っている。

内門は門番足軽が呼んであけさせた。

番所に詰めていた同心、足軽たちも、相手が将軍家の公子では、顔を見あわせているだけで、どうしようもない。

鶴七郎は房右衛門の入れられている揚がり屋の外鞘まできて、

「ここには何人ほど入牢しているのか」

と、牢役人に聞いた。

「ただいまは前川房右衛門一人でございます」

一揆がおころうとしているところで、百姓牢には暴政にたてをついた百姓が大勢入れられているが、士分の入れられる揚がり屋のほうは、いつもほとんどだれもはいっていないのが普通なのである。

「牢番、かぎをあけよ」

「恐れながら、かぎは牢屋奉行の手もとにありますので、ここにはございません」

かぎは番所のかぎ役が持っているのだが、な

んとかここで手間どっているうちには、奉行が駆けつけてくれるだろうと考えたので、牢番はわざとうそをつく。

「烏、お前の手でこのかぎがあけられるかな」

鶴七郎が烏松にきく。

「あんまり自慢にゃなりませんが、一つやってみやしょう」

こんなこともあろうと、くぎを一本用意してきている烏松だ。すぐに牢口へ飛びついていって、牢番が目を丸くしているうちに、かちゃりとかぎをあけてしまう。

「あけやした、殿さま」

「御苦労だった。——房之助、父を呼んでみろ」

「はい」

房之助が烏松とかわって、あいている牢口へ進み、

「父上、房之助です。お迎えに参りました。——父上」

と、暗い牢内へ呼ぶ。

「おお、房之助か。——これは一体どうしたことか」

房右衛門は牢口までいざり寄ってきたが、さすがに、すぐには牢を出ようとはしなかった。牢破りは死罪である。そんな罪をせがれにおわせたくなかったのだろう。

「御安心ください、父上。わしは江戸へ行って、御当主さまからお墨付きをいただいてまいりました。その上、ここにおられますのは、将軍家の御連枝松平鶴七郎さまにて、このたび御当主さまの御懇請により、一揆を未然に治めるため、わざわざ江戸よりおいでくだされたのです」

「そうか、——それはそれは」

房右衛門はやっと納得して、牢口から外鞘へはい出してきた。まだ半月ほどの入牢で、月代もひげものびてはいるが、まだそう体力はおとろえていないようである。

「房右衛門、元気のようだな。わしは松平鶴七郎だ」

「はっ、恐れ多いお言葉にございます」
「火急の場合だ、あいさつは後でよい。そちにはこれから大役があるのだ。房之助、父をいたわって後につづけ」
　こうして房右衛門を助け出したからには、一刻も早く牢屋敷を脱出しなければならぬ。鶴七郎が先に立って外鞘を出た時、急を知らせる板木が、表門のほうでけたたましく鳴りだした。
「一同、いそげ」
　鶴七郎はものともせず、内門のほうへ足を早める。

ふくろうの声

　牢屋奉行が指揮をとって、牢役人どもは内門の外に集結したらしく、掛けつらねた高張りちょうちんのあかりがここまで明るくしている。けたたましい板木の音は、それら捕り方の士気を鼓舞するように、まだ鳴りやまない。
「房右衛門、牢役人の人数はどれほどか」
　鶴七郎は房之助につきそわれて、すぐうしろにつづく房右衛門に聞いた。
「はい、中間小者をのぞけば、せいぜい三十人ほどでございましょうか」
「さようか――」
　鶴七郎は軽くうなずいてから、
「烏、門をあけろ」
と、烏松に言いつける。
　こんな時、くぐりから一人ずつ身をかがめて出るのは、さあ、おつかまえなさいというのとおなじで、たちまちたたき伏せられてしまうおそれがあるのだ。
「へえ、かしこまりやした」
　烏松が、つかつかと門へ飛びついていって、かんぬきをはずし、ゆうゆうとびらを八文字にひらく。
　わあっと捕り方たちの間から異様な叫び声があがった。捕り方は六尺棒、そでがらみなどを手に手に三十人あまり、火事装束に身をかため

た牢屋奉行を中心にして、内門の前へ半円を描いている。
「一同、わしのそばを離れてはならんぞ」
　鶴七郎はうしろへ声をかけておいて、ゆっくり門の外まで出ると、そこで立ち止まって、
「牢屋奉行、牢屋奉行」
　と、きびしい声で呼んだ。
「黙れッ、天下の法をおかして牢破りいたすふらち者、その方は何者か」
「わしは江戸浜町の松平鶴七郎、みだりに天下の法をおかしたわけではない。その方ども知ってのとおり、当上田領は老職馬場大膳の悪政により、百姓一揆勃発の寸前にある。万一、一揆がおこれば、双方に多くの犠牲者が出るばかりでなく、上田家の家名にも傷がつく。よって、信濃守どのの懇請により、事を未然に防がんため、大膳の不法にて入牢中の前の郡奉行前川房右衛門を借りて、百姓どもを説得させるのだ。長い間とはいわぬ。三日と日を切って、房右衛門は鶴七郎が預かる。相わかったら、おだやかに道をひらきなさい」
　鶴七郎は凛然として言ってきかせる。
「ならんならん。その儀なれば、なぜ前もって牢屋奉行たるわしに一言のあいさつもなく、勝手に牢破りしたのだ」
　牢屋奉行も負けてはいない。
「もっともの言葉のようだが、――それではきこう。もし事前に房右衛門をしばらく貸せと、その方にあいさつすれば、その方一存にて牢の戸があけられるか、どうだ」
　急所をつかれて、牢屋奉行はぐっと返事につまったようだ。牢屋奉行の一存で囚人を赦免することはむろんできない。
「その方いま、みだりに御連枝の名を名乗ったようだが、その証拠はどこにある。あったら出してみせろ」
　奉行は急に戦法をかえてきた。
「この紋どころを見ればわかるであろう。葵の

紋服は、一門のほかは許されてはおらぬ」
「黙れッ、紋どころは自分で書いても事はすむ。第一、御連枝ともあろう人が、行列も立てず勝手にのこのこと道中へ出られると思うか。察するに、その方どもは、私に御連枝を名乗って諸人を惑わせ歩く偽者であろう。者ども、それッ、偽者を召し捕れ」
偽者にでもしなければ、太刀打ちができなくなったのである。
「待てッ」
すかさず鶴七郎が一喝(いっかつ)したが、
「わあッ」
という捕り方の殺気立った叫び声に消されてしまいそうだ。
とっさに、鶴七郎はふところから短筒を取り出すなり、だあん、空へ向かって一発ぶっ放した。
さすがに一同があっと声をのんだすきに、
「牢屋奉行、手向かいする者は撃ち殺すぞ。わしはこれから馬場大膳の屋敷へまいる。案内せよ」
叱咤(しった)するように申しわたして、短筒を突きつけたまま、かまわず表門のほうへ歩き出す。
気をのまれた捕り方は、思わぬ飛び道具におそれをなして、ばらばらと道をあける。
「房之助――」
「はっ――」
「父をつれて、わしの前を歩け。門を出たら、父といっしょに馬を求め、総代名主の家へ一気に走れ」
「はっ」
「烏、馬が手にはいるまで、その方、房之助を助けてつかわせ」
「殿さまは、殿さまは、大丈夫でござんすか」
「心配するな。わしには清太郎がついておる」
「ちげえねえ。――馬はあっしが引きうけやす。後をたのむよ。清さん」
「心得た」

門の近くまでくると、鶴七郎は味方を門のほうへやって、くるりと捕り方たちのほうを向く。
ぞろぞろと捕り方たちはついてきたが、肝心の牢屋奉行は姿を消している。
「これ、牢屋奉行はどうした」
前川親子が馬で城下町を出るまで、ここで時をかせぐ必要があるのだ。
捕り方たちはだれも返事ができない。
「だれか、奉行にこれへ出ろと申しつけろ。申し聞かせることがあるのだ」
その間に、前川父子は、烏松につきそわれて、くぐりから表へ出ていったようである。
後でわかったことだが、この牢屋敷の北隣は蔵屋敷で、南がわは裏門の広場になっており、その広場の西側が馬屋になっていたのだ。
房之助たちがくぐりから出ると、その近くにかくれていた芳公とつばめが、房右衛門の衣類と大小を持って飛び出してきた。
これはあるに越したことはないが、なくてもよかったのだ。鶴七郎は女をつれて牢破りもできないと思い、わざと芳公をつけてつばめにそんな用を言いつけたのだ。
とにかく、つばめは芳公といっしょに、うまく、衣類大小を手に入れてはきたが、そこで着替えなどしているひまはない。五人はすぐに馬屋へ走った。
「江戸表殿さまのお使者である。馬を借りるぞ」
房之助が馬屋中間にことわり、むろんとがめ立てをすれば一刀のもとに切りすてる覚悟の房之助だから、中間どもがそのけんまくにうろたえている間に、烏松が一頭、つばめから大小をうけ取った房右衛門が、自分で一頭、裸馬をひき出す。
すると、つばめも負けずに、房右衛門の衣類をつつんだふろしき包みを右肩から背中へしっかりとしばりつけて、もう一頭裸馬を引き出してきた。
「あれえ、太夫さん、馬にのれるのか」

芳公がびっくりして目を丸くすると、
「芳ちゃん、恥ずかしいから、向こうをむいていてね。あたしは曲馬にもいたことがあるのよ」
というなり、ひらりと男のように裸馬にまたがる。
「父上、よろしゅうございますか」
「うむ、よい」
「では、出かけます。松つぁん、殿さまをたのみます」
「心配しなさんな。じゃまのはいらないうちに、早く行きなせえ」
「心得た」
一番あとから裸馬にまたがった房之助が、
「それ行け、――しっ」
馬の腹をかかとでけって、馬屋を出る。
ひ、ひいん。
先頭の馬が勇ましくいななくと、
後ろの馬も力いっぱいそれにならって、並み足はたちまち駆け足にかわり、まだ夜明け前の暗い街道のほうへ、かつ、かつと走り出した。
「おじさん、おどろいたなあ。太夫さんは裸馬にのれんだからなあ」
芳公は、ちょいとうらやましそうである。
「なあに、曲馬にいたことがあるってんだから、馬のほうが綱わたりよりは楽だろう」
「おじさんも馬にのれるのか」
「おれは乗るよりひいてくるほうが得意さ」
「馬をひいてくる、――けっ、なあんだ」
二人はわらいながら、表門のほうへ駆けだした。
その馬のいななく声を聞いた鶴七郎は、もう大丈夫とみて、
「清太郎、くぐりから先へ出て、外の様子を見てくれ」
と言いつける。
「はっ」
清太郎が一足くぐりから表へ出たとたん、

どうん、どうん、どうん。
と、城の太鼓が夜気をついて鳴り出した。非常を告げる太鼓である。
「それッ、者ども、くせ者を引っ捕らえろ。かかれかかれ」
捕り方たちのうしろから、大声にわめき走り出てきたのは、血相をかえている牢屋奉行である。どうやら大膳から厳命でもきたらしく、こんどは死に物狂いのようだ。
そのうしろのほうに、覆面黒装束の忍者が一人、じっとこっちを見ているのが、ちらっと鶴七郎の目について、たちまち人のかげに消えた。
――いよいよ梟組が戦列に加わったな。
鶴七郎はそう見てとって、だあん、と、一発奉行の右肩をねらって、
「わあッ」
牢屋奉行がたわいもなくそこへしりもちをついたのを見とどけ、いま清太郎が出たばかりのくぐりから、ゆうゆうと表へ出た。
「殿さま、いよいよ手がまわったようでございますな」
「うむ。大膳は城下の出入り口は藩士にかためさせ、梟十郎組にわれわれを討ち取らせる計略だろう」
「房之助たちは大丈夫でしょうか」
「馬だからな、たぶん大丈夫だろう」
「殿さまあ」
そこへ芳公と烏松が裏門口のほうから引きかえしてきた。
「おお、もどったか。――つばめは」
「裸馬へ乗って、房之助さんたちについていきました。曲馬にいたことがあるんですってさ」
「そうか、それはよかった。あれは五寸くぎをたくさん仕入れているらしいから、また前川父子を何度も助けることだろう」
「殿さま、牢屋からはだれも追ってきやせんね。どうしたんでしょう」
烏松がうしろを振りかえりながら、不審そう

にいう。

「牢役人は牢を離れることはできない。ほかの四人が牢破りをやると大変だからな」

「松つぁん、そのかわり、これからのわれわれの相手は、例の梟組だろうということだ」

そばから清太郎が注意する。

その清太郎は鶴七郎の右がわを、烏松は左がわを、そして芳公はうしろをまもって、ぴたりと寄りそうように足を早めている。

「殿さま、これからどこへ行くんです」

「大膳の屋敷へのりこもう。下っ端を相手にしてもしようがない」

「なるほど。――いよいよ一騎打ちの幕でござんすね」

「いや、その前に梟十郎という道化役者がいる」

牢屋敷の前の道をまっすぐ二町ばかり引きかえすと、そこに第一の四つ角がある。その角を北へ折れてまた三町ばかり行くと、濠端の道へ突きあたる。その右角の屋敷が大膳の家だと房之助から聞いているのだ。

そして、第一の四つ角を北へ曲がったとたん、

ほうっ、ほうっ。

果たして、無気味なふくろうの声が、どこからともなく耳についてきた。

血戦

この通りは、幅二間ほどの道の左右に、侍屋敷が向かいあって立ちならんでいるが、右側のほうが身分の上の者が住んでいるらしく、門も立派だし、塀もずっと築地塀がつづいていた。

左側は板塀つづきで、間口もすくない。だいたい、左の二軒分に対して、右は一軒のわりあいになっているようだ。

道はまっすぐ濠端までぬけているようだが、星あかりだけでは暗くて先の見とおしはきかない。

ほう、ほう。

ほう、ほう、ほう。

無気味なふくろうの鳴き声は、前にも聞こえるが、うしろにも聞こえる。しかも、城の太鼓はまだゆっくりと非常を知らせつづけている。

鶴七郎は右側の築地塀の上を注意して歩いていた。梟組がもし飛び道具を持って待っているとすれば、足場のいい築地塀の上にちがいないからである。

「清さん、出やがった」

小一町ほど進んだとき、鶴七郎の左についていた烏松が、さっと道中差しを抜いて前へ出た。

なるほど、両側の塀にぴたりとはりついていた黒装束のやつが三人ばかり、すっと行く手へ出てきたのだ。

しかし、三人は並べない道だから、二人が前へ出て、一人は後詰めというかっこうで、後ろへさがって構えている。

「松つぁん、引きうけた」

それと見るなり、清太郎が抜刀して一気に走り出す。

「えいっ――とうっ」

はじめから捨て身でかかっている清太郎だから、なんのちゅうちょもなく一刀を左へたたきつけ、かえす二の太刀で右を払う。まさかと思っていた敵が、あっと気をのまれて刀をふりあげた時は、二人とももう胴へ一太刀ずつあびて、どすんと右と左の塀へ体をぶっつけながら倒れていた。

うしろ備えのやつは、清太郎のあまりにも思いきった突撃ぶりに、ばたばたと二、三間われにもなく逃げ出す。そこの塀の両側から、

ほう、ほう、ほうっ。

ほう、ほうっ。

二人の新手がすっと出てきて、並んで刀をかまえた。

「えいっ、とうっ」

清太郎は冷静に突進していく。

新手二人はたまりかねて、ばたばたと二、三間逃げだす。敵は常に前の二人だけで、横にま

わることのできない道なのだから、清太郎一人になぎ立てられていく形になる。
が、この時、築地塀の上へ立った黒い人影が、どうやら、清太郎目がけて上から網を打ったようだ。
「あっ、殿さま」
芳公が叫んだのと、
だあん。
鶴七郎の短筒が三発目の火を吹いたのと同時で、
「あっ」
築地塀の上の人影は、短く叫びながら、塀の中へどすんと転落していく。
「それッ」
逃げた二人の敵は、清太郎が網をかぶったと見ると、急に一刀をふりかぶって引きかえしてきた。
だあん。
だあん。
鶴七郎の短筒が見事にその二人を撃ちたおす。
「くそッ」
網をかぶった清太郎のわきをすりぬけた鳥松が、道中差しをふりまわしながら、そのうしろへ出た新手二人の中へ躍りこんでいった。
「兄貴、大丈夫か」
その間に、芳公が清太郎のそばへ走って、網の一方をつかみ、素早く引っぱって取りのける。
「ありがとう、芳」
清太郎は別にあわてたふうもなく、
「松つぁん、かわろう」
と、またしても鳥松を追いぬけて、新手の中へ飛びこんでいく。
「えいっ、――とうっ」
敵はどうやら濠端の広い道まで敗走していくようだ。
いや、それは梟組の計略で、鶴七郎に短筒の弾を撃ちつくさせ、広い道に出たところで包囲

してしまおうという腹なのかもしれない。
「清太郎、待て」
馬場大膳の屋敷の築地塀にかかろうとしたところで、鶴七郎は清太郎を呼びとめた。
「たぶん、この右の築地塀が大膳の屋敷だ。塀内からまたどんな小細工をやらないものでもない。――ぴよ、塀の上にのぼって、そっと中の様子をうかがってみろ」
「はい」
「鳥、この左の築地塀は、家老深尾沢右衛門の屋敷と聞いている。沢右衛門は江戸家老神谷民部の一門だ。お前、この印籠を証拠に持って、わしに味方をする心があるかどうか、きいてみてきてくれ」
「かしこまりした」
鳥松は鶴七郎から印籠をうけとって、左の塀ぎわへ行って立つ。
「松つぁん、肩を貸そう」
芳公に肩を貸した清太郎が、こんどはそっちへ行ってしゃがんだ。
「すまねえ、清さん」
鳥松はその肩を踏み台にして、深尾家の塀の上へのぼったと見るまに、すっと塀内へ姿を消した。
「あっ、殿さま、きやがった」
こっちの築地塀の屋根の上へ、ぴたりと腹ばいになっている芳公が、いそいで知らせる。
濠端の角の方から、梟組の黒装束が三人一組になって三組ばかり、堂々とこっちへ押し出してきたのである。いよいよ決戦に出るつもりだろう。
「清太郎、しばらくわしにまかせておけ」
鶴七郎は、一発しか残っていない短筒に、ちょうど五発の弾をこめおえたところだ。
「ぴよ、屋敷うちをよく見張っているんだぞ」
「はい」
黒装束どもは、ほう、ほうっ、ほう、ほうっと、口々に呼びかわしながら、距離が十間ばか

りにせまると、急に抜刀をふりかざして、黒い突風のように突撃をはじめた。忍者たちは声を立てないだけに、夜潮がふくれあがって押し寄せてくるような無気味さがある。

だあん。

とたんに、鶴七郎が火ぶたを切った。

だあん。

先頭の二人はのけぞるようにしてぶっ倒れたが、後ろの備えの一人は、それを飛びこえるようにして前へ出る。

だあん。

あっと、そやつがのけぞる。

さすがに、次の三人は、一瞬ためらうように立ちどまった。

だあん。

だあん。

すかさず二発で前の二人を倒すと、もう弾をうちつくしたと見ていたらしい敵は、愕然としたように、三、四間ばたばたと後ろへさがって、浮き足立ちながらこっちを見ている。

「行けっ、清太郎。長追いはするなよ」

「はっ」

待ち構えていた清太郎が、一気にそっちへ走り出す。

「塀の上だ、殿さま」

屋根の上から芳公が叫んだ。

築地塀の上へ半身のり出したやつが、火なわ銃の筒口をいま清太郎に向けたところである。

だあん。

とっさに、こっちが最後の一発をぶっ放すと、

だあん。

敵は思わず引き金をひいたらしく、弾はあらぬほうへはずれ、そやつはどっと庭うちへ転落していった。

それと入れかわるように、黒装束が一人、ひらりと築地塀の上から、鶴七郎の前へ身軽に飛びおりてきた。

「お命ちょうだい――」

ひやかすようにいって、さっと抜刀をふりかぶる。

「梟十郎、三度目だな」

鶴七郎は短筒を懐へいれて、すらりとわき差しを抜く。

梟十郎は鶴七郎の短筒の腕前は知っているが、剣術のほうはたかが殿さま芸ぐらいに、あまく踏んでいたのだろう。一刀をいきなり上段にふりかぶったのは、むろん一挙に切って出て勝敗をきめる腹だったのだろうが、逆にあっと一足うしろへさがっていた。

一尺八寸のわき差しを右手で正眼につけた公子の構えは、相当以上の腕前で、なによりもこわいのは、少しも恐れというものを知らないような、ゆうゆうたる気魄である。

しかも、梟十郎は忍者だから気合いを声には出さないが、鶴七郎もまためったに気合いを口に出さず、無言でじっと相手の仕かけを待っている刀法なのだ。

勝負は一撃一刀できまるはずだが、こうなると相手をどうしても切ろうとする梟十郎のほうが、あくまでも相手の仕かけを待っている鶴七郎よりも、時が長びけば自然にあせりが出てくる。

「あっ、こん畜生」

突然塀の上の芳公が叫んで立ちあがるなり、どこかへ必死に屋根がわらを投げつけたようだ。

だあん。

近くで鉄砲の音がして、まただれか、がらがらどすんと庭内へ転落していったようだ。

その物音に、梟十郎は思わず殺気を誘われたらしく、一気に切って出ようとした。が、ふいの物音を耳にしただけ、剣のほうがおくれたのだ。

「えいっ」

風のように躍りこんでいく鶴七郎のわき差しが、剣をふりおろそうとする敵の左の籠手を、さっと切りおろしていた。

「う、うっ」
さすがによろめいた梟十郎は、素早くきびすをかえして、濠端のほうへつむじ風のように走りだす。それは鶴七郎が唖然とするほど早い逃げ足だった。
清太郎は四人の敵を追って、とうとう濠端まで出ていってしまったらしい。
「殿さま、あぶなかったなあ。また鉄砲が出てきやがったんだ」
芳公が築地塀の上へ突っ立ったまま、ほっとしたように青くなっている。
「あぶない、ぴよ。こっちへおりてこい」
鶴七郎がしかるように呼ぶ。
「はい」
芳公が身軽に、ひらりと道へ飛びおりたとたん、案の定、矢が一筋、ひゅうとそのあたりをかすめて飛び、深尾家の庭のほうへおちていったようだ。
「わあッ、おどかしやがる」
芳公は思わず首をすくめた。
「ここは敵の中なのだ。少しの油断も禁物だぞ」
「はい」
鶴七郎は手早く血刀を懐紙でぬぐって、鞘におさめ、短筒を取り出して、もう一度新しい弾をこめはじめる。
「殿さま、その短筒はよく働きますねえ」
「うむ、もう一働きだ。来い、ぴよ、清太郎が心配になる」
弾をこめおわると、鶴七郎は大股に濠端のほうへ歩き出した。

悪人の処分

清太郎は逃げ足の早い敵のあとを追って、うっかり濠端の広い道に出てしまった。
右へ行けば大膳屋敷の表門、左へ行けば深尾家の表門だ。
四人の敵は、急にそこで立ちどまって、剣陣を作ってきた。どうやら、大膳屋敷のほうに新

手がまだ七、八人待機しているようである。
「えいっ——とうっ」
新手に背後を突かれてはふせぎようがないので、清太郎は思いきりよく前の四人の剣陣の中へ切って出た。
白刃が火花を散らして、敵はさっと左右へわかれる。そこを突破して、清太郎は濠端まで走り、くるりと向きなおって濠を背にする。
ほう、ほうっ。
ほう、ほうっ。
梟組は口々に鳴きかわしながら、正面の敵は四人だが、その後ろへ新手が三人一組になって、いつでも剣陣へ加われるように陣取る。ほう、ほうっという鳴き声は、後ろの三人が前の四人をはげますための鳴き声らしい。
——ひょっとすると、こんどはあぶないかもしれぬ。
味方が二つにわかれたのがいけなかったのだ。むろん、敵はこっちを一人一人にさそって片づける策に出ているのだから、浜町さまもあっちで敵に取りかこまれているにちがいない。
ここを切りぬけていっても、おそらく浜町さまと一つになるのはむずかしいだろう。
それに、さっきから数度の切りあいで、かすり傷ではあるが、衣類がずたずたになるほど数ヵ所に切っ先をうけている。気力がつきてくるのは、もう時間の問題のようだ。
——よし、どうせ死ぬなら、一人でも多く切って、切り死にをしてやろう。
清太郎が覚悟をきめて切って出ようとした時、
だあん。
だあん。
ふいに二発銃声が濠の水にこだまして、うしろ備えの新手が二人、がくんとそこへ両ひざをついたようだ。
ふくろうの鳴き声がぴたりとやんで、正面の敵四人はぎょっとしたようにうしろをふりかえ

る。
「えいっ、――とうっ」
そのすきに、清太郎は猛然と切って出た。
「あっ」
切られた二人は、たわいもなくのけぞり、後ろの二人と新手の一人は、さっと大膳屋敷のほうへ逃げだす。
「清太郎、無事か」
走り寄ってきたのは鶴七郎であった。
「殿さま、殿さまも御無事で――」
あまりの喜びに、清太郎は一瞬茫然と立ちつくす。
「清太郎、だいぶ切っ先をうけているようだが、大丈夫か」
「はい、ほんのかすり傷だけです」
「それはよかった。戦いはこれからだが、ここは地の利が悪いな」
万一、大膳が門を開いて、弓、鉄砲などを向けてくると、身をかくす場所がないから、ひとたまりもない。
「あっ、殿さま、おじさんが帰ってきたようです」
なるほど、さっきの道から烏松がいっさんに走りだしてきたようだ。
「おじさあん」
「やあ、やっぱりそこか」
烏松はたちまち近づいてきて、
「殿さま、うまくいきやした。いや、御家老さまがごあいさつに出るそうです。実は、浜町さまがおいでくださるのを待っていたんだって話です」
と、ほっとしたように告げる。
「御苦労だった」
「話しているうちに、深尾屋敷の表門があいて、中からちょうちんが四つ五つこっちへ出てくるようだ。
「烏、ここはあぶない。門内で待っているようにと伝えろ」

「へえ」
烏松は言葉の下から走り出す。
「清太郎、歩けるか」
「大丈夫です」
鶴七郎はゆっくりと深尾家の表門のほうへ歩きだす。
深尾沢右衛門はすでに五十を越した年輩で、せがれ沢之助とともに鶴七郎を丁重に出迎えた。
このことがそれからそれへと知れると、今まで大膳をはばかって鳴りをしずめていた一藩の忠義派が、続々と深尾屋敷へ集まってくる。
ここでもし隣の大膳屋敷へ一味の者が集結するようだと、両屋敷は隣あって流血の惨事がまきおこったかもしれないが、それを恐れた鶴七郎は、沢右衛門にすすめて、時を移さず城へのぼらせ、総登城の太鼓を打たせた。
時刻はすでに夜明けで、藩士たちの間にはすわ百姓一揆がおこったなと考えた者も多いらしく、倉皇として登城をいそぐ。
日ごろは一藩のうちほとんどが大膳党と見られていたが、こうして総登城を行ってみると、登城をしない大膳の一味はほんの少数で、その一味のうちにも、大勢が大膳に不利とわかると、おくればせながら知らん顔をして登城してくる者もあって、結局病気を理由として登城しなかったのは、大膳父子とその一門の者数人にしかすぎなかった。
そこで、沢右衛門は重臣たちと協議の上、当主信濃守の入国まで沢右衛門が主君名代として藩政を執ることになり、大膳の息のかかった諸役を罷免して、忠義派でかため、大膳以下、その日登城をしなかった者は、主君入国の時まで自邸に謹慎を命じた。
一方、百姓一揆のほうは、その夜、前の郡奉行前川房右衛門が、主君のお墨付きを総代名主にわたして、主君入国の上で悪税はことごとく領民の希望どおり免ずることを約し、この事件

で入牢中の百姓は、その日のうちに全部放免したので、百姓たちはともかくも信濃守入国までは決して騒動はおこさぬと誓って、総代百姓はいずれも安心して自分の村へ帰っていった。

「これみな浜町さまのおかげにて、沢右衛門お礼の言葉もございません」

沢右衛門が、あれ以来ずっと自分の屋敷に逗留して、外出さえひかえている鶴七郎に、あらましの報告をして、心から礼をのべたのは、あの晩から五日ほどすぎてからのことだった。それまで沢右衛門は、ずっと城中の御用部屋に詰めたきりだったのである。

「さようか、万事無事におさまったのはよろこばしい。如才もあるまいが、江戸へも知らせは行っているのだろうな」

「はい、毎日早飛脚を立てて、申し送っております」

「そこでなあ、沢右衛門、わしは道楽息子で、藩政などというものはなんにもわからぬが、一つだけ、わしの意見として耳に入れておきたいことがある。聞いてくれるか」

「はい、なんなりと仰せきけくださいますように――」

「ほかでもないが、それは今日まで大膳党と見なされていた者たちの処分のことだ。人というものは、だれしも時の勢いにつく弱点を持っているものだ。身をまもり、一家をまもろうとすれば、よほど優れた人物でないかぎり、それが普通なのだ。相なるべくは不問に付して、けが人は出さぬ、その方針でのぞんでもらいたいと思う。どうだろうな」

「ありがたいお言葉をうけたまわりました。手前一存にもまいりませんが、御当主さまお国入りの節は、必ずお言葉を取りつぎまして、その方針で処理するように努力いたす所存でございます」

「そうか。――そういってくれると、わしもうれしい」

「つきましては、念のためにおうかがいいたしますが、大膳儀の処分はいかが計らいますのが一番よろしいでございましょうか」

「これが一番むずかしいだろうな」

鶴七郎はおだやかにわらいながら、

「こんどの餓鬼大将は大膳だ。大膳のために、ずいぶん迷惑をした者が多い。その点からいえば、重罪はまぬがれない。しかし、大膳はもうすっかり後悔しているようだな」

と、なぞのようなことをいう。

「さようでございましょうか」

沢右衛門はけげんそうな顔をしている。

「これはわしの想像だが、大膳ははじめから、自分のやろうとすることは、相当無理があると承知していたはずだ。だから、わしがいよいよ上田へ乗りこむと聞いたとき、途中でわしをなきものにできれば自分の勝ち、できなければ自分の負けときめて、できるだけのテを打ったのだ」

「なるほど――」

「しかし、たった五人で上田へ向かったわしたちを、大膳党はとうとう討つことができなかった。そこで、大膳はあきらかに自分の負けを悟ったのだろうと思う。その証拠には、あの晩の闘いに大膳は梟組を使ったが、自分の一味の者は一人も使っていない。もし、大膳が先に立って、自分の一味を集め、城へ立てこもって戦えば、おそらくわしの命はなかったろう。そのかわり、勝っても負けても上田家は断絶する。そのくらいのことはちゃんと承知している大膳なのだ」

「実は、手前が一番心配したのもそれでございました」

「大膳は決してバカではないのだ。ただ、お山の大将だから、自分の才知にうぬぼれて、ちょっと山を張ってみる気になったのだろう。少しひどい言い方かもしれないが、それを未然におさえられなかったのは、留守をまもる重臣一同にも責任がないとはいえぬ」

「赤面のいたり、恐れ入りましてございます」
「そこで大膳の処分だが、あまり過ぎたことは洗い立てせず、しかりおくの程度がよい。それで隠居という手もあるが、おそらく大膳は自分から必ず隠居届けを出すだろう」
「お言葉ではございますが、大膳は浜町さまとよく存じていて、途中であなたさまを再三なきものにしようとたくらみました。この罪は不問に付せぬと存じますが」
「いや、このたびの道中、わしは信濃どのから頼まれて出てはきたが、松平鶴七郎と名乗ってきたのではない。陰陽師風来堂松鶴の身分で歩いてまいったのだ。今もそのつもりで当家に逗留(とうりゅう)している。松平鶴七郎の名は、あくまでも伏せておくがよいのだ」
　松平鶴七郎の名を出せば、むろん、馬場大膳は死罪だし、一門の者もただではすまぬ。その点を鶴七郎は考慮のうちに入れているのだ。
「ありがたき仰せ、それにてわれわれどももようやく安心つかまつりました。浜町さまのお心づかい、沢右衛門ありがたくちょうだいさせていただきます」
　律義な沢右衛門は思わず涙を流していた。
　その夕方、沢右衛門がまだ城からさがってこないうちに、鶴七郎は清太郎、烏松、芳公の三人をつれて、深尾屋敷の裏口から、そっと上田の城下を逃げ出したのである。
「殿さま、房の字に黙って逃げだしていいんですか。後でうらまれますぜ」
　烏松が心配そうにいった。
　房之助とつばめは、父房右衛門が郡代屋敷のほうへ詰めているので、そっちへ行っていて、その後、一度房之助が城中へ用事に出向いた時、深尾屋敷へたずねて帰ったきりなのである。
「いや、房の字にはいずれ江戸で会えるだろう。いまはそっとしておくほうがいいのだ」
　鶴七郎はそう言ってわらっていた。

油断大敵

　上田城下の入り口にできていた新関の柵門(さくもん)は、すでにきれいに取り払われていた。
　そこを出ると、両側は、やがてとりいれの近い麦畑が広々とひらけて、まだ夕日があかるく流れていた。
　しかし、上田から海野(うんの)へ二里、海野から田中へ十八町、そのどっちへ宿をとるにしても、途中で日が暮れて、旅籠(はたご)へつくころは、もうすっかり夜になるはずである。
「殿さま、いよいよ江戸へ帰るんですね」
　鶴七郎とならんで先を歩いている芳公は、いかにもうれしそうだ。
「ぴよはそんなに江戸が恋しいか」
「恋しいのなんのって、おいらまだ、こんなに長い間わらじをはいたことはないんです。田舎はどこへ行っても寂しくていけねえや」
「そうだな。わしもこんなに長い道中ははじめてだが、こうして歩いてみると、日本もなかなか広いな」
「殿さまは江戸が恋しくありませんか」
「それは、住みなれたところだから、やっぱり江戸は恋しい」
「そうでしょう。駄々姫(だだひめ)さまがきっと待ちかねていますよ。よろこぶでしょうねえ」
「うむ、ともかくも、これで約束は果たしたのだ。しかし、ずいぶん危ない旅だったな、ぴよ」
　鶴七郎はさすがに感慨無量なものがあるようである。
「おいらね、殿さま、みんながこうして無事だったんで、ほっとしてるんでさ。もし、清あにいにでもひょっと間違いがあったら、おいら江戸が恋しくたって、江戸へ帰れませんからね。お蓮ねえさんにあうのがつらいや」
「そういえばなあ、ぴよ、お前を養子にほしいという者があったんだ」
「おやおや、上田でですか、殿さま」

「うむ、立派な侍の家柄でな、わしも悪い話ではないと、ちょっと迷ったが、やっぱりことわることにした」
「ありがとうござんす。おいら、御家老さまにしてやるといっても、おことわりだ。殿さまやみんなと別れて暮らすなんて、考えただけでも情けなくなりまさ」
「まず、そんなところだろうな」
「そんなところですってさ。一つ釜（かま）の飯を食って、命がけでいつもいっしょに仕事をして、おいら、もったいないけれど、殿さまだって兄弟分だと思っているんです。親にも兄弟にも縁がうすかったが、こんないい兄弟分がたくさんできたんで、おいら、うれしくってしようがないんです。本当ですぜ、殿さま」
「わかっている、ぴよあにい」
鶴七郎は冗談のように言いながら、なにか胸あたたまるおもいである。
「そこへいくと、殿さま、房あにいはちょいとかわいそうですね。そりゃ太夫はついているが、おいらたちが江戸へ帰ってしまうと、きっと、がっかりしますよ。太夫は房あにいのおとっつぁんとうまくいくでしょうかねえ」
芳公は房之助たちのことが心配でたまらないようだ。
「いや、房の字はそのうちに浪人して、夫婦で江戸へ出てくるだろう」
「へえ、じゃ、やっぱり太夫がうまくいかないんですね。あのおとっつぁん、牢屋へ入れられるくらいだから、がんこなんでしょうからね」
「ところが、それが少し違うのだ、ぴよ」
「はあてな。じゃ、殿さま、太夫の方が強情なんですか。あの太夫は育ちがちがうからなあ。侍の花嫁には少し無理でさ」
「それがな、房右衛門はせがれにいいお嫁ができたといってよろこんでいるし、太夫も一生懸命に舅（しゅうと）に孝行している。だから家の中はうまくいっているんだが、房之助のほうが侍がいやに

なってしまったんだ」
「おやおや、どうしてなんでしょうねえ」
「ぴよあにいがさっき申したな、一つ釜（かま）の飯を食って、みんなで命がけの仕事をした、その兄弟分の味が忘れられないんだな。どうせ一生なら、兄弟分のいる土地で、仲よく暮らしたい。それに、さんざ兄弟分にやっかいをかけたのだから、その恩がえしもしたいと考えているのだろう」
「うれしいなあ。だから、おいら房あにいが好きなんだ。一本気ですからねえ、房あにいは――けど、それじゃ、おとっつぁんが困りゃしないかな。房あにいは一人息子なんでしょう」
「うむ。しかし、房右衛門は、せがれがこんどのことで世話になった兄弟分に、恩をかえしたいという気持ちがよくわかってくれたそうで、その時がきたら浪人してもよいと許してくれた。それについて、前川の家名をついでもらう養子がいる、ぴよをもらいうけるわけにはいかないだろうかと、この間、相談をうけたのだ」
「あれえ、養子の口ってのは、前川さんとこだったんですか。ずるいなあ、房あにいは。おいらだって、兄弟分とは一生別れたかありません。あぶねえ、あぶねえ」
芳公は思わず首をすくめていた。
少し離れてうしろにつづく清太郎と烏松は、また別の話をしていた。
「清さん、うかない顔をしているようだが、どうかしたんかね」
「いや、べつにどうということはないんだが、ちょっと気になることがあるんだ」
「というと――」
「これはわしの取り越し苦労かもしれないが、どうだろうな、松つぁん、馬場大膳は本当にお家乗っ取りの野心をあきらめたんだろうか」
「なんだ。すると、清さんは、やつはまだすっかり後悔したんじゃないと見ているんかね」
「うむ」

「しかし、今じゃもう、深尾さんがちゃんとお城へすわって、一切の実権ってやつを握っているんだろう。そいつをうまく引っくりかえす手があるかね」
「それより、松つぁん、大膳がいま一番恨んでもいるし、じゃまにもなるのは浜町さまだと思うんだ。浜町さまは今日深尾さんに、処罰はなるべく寛大にと注意しておられた。しかし、その気持ちはまだ大膳のほうへたぶん通じていない。大膳のほうでは、このまま浜町さまを無事に江戸へ帰さしては、自分は軽くても切腹だと見ていやしないかと思う。どうせ命がないんなら、あくまで浜町さまをやっつけよう、浜町さまさえいなければ、もう一度お城を引っくりかえす手段はいくらもあると、そんな気になりゃしないかな」
「なるほど――」
「それに、梟十郎は片手を落とされたが、梟組はまだ無傷のやつが何人か残っている。大塚組残党もどこかにかくれているはずだ。両方とも大膳から相当の軍資金が出ているだろうから、たとえ大膳から命令はされなくても、機会さえあれば、自分たちのしかえしをしてやろうと、浜町さまをねらっていやしないかと思う」
「わかった、清さん。つまり、梟組と大塚組がどこかで待ち伏せしていることを、勘定に入れておけっていうんだろう」
「そうなんだ」
「よし、じゃ、おれが露払いをつとめるから、清さんにはこのましんがりをつとめてもらおうか」
「心得た」
「けど、気をつけてくんなよ。むろん、殿さまに間違いがあっちゃ大変だが、清さんにだって江戸じゃ首を長くして待ちかねている人がいるんだからな」
烏松は、にこりとわらってみせておいて、さっと前へ足を早める。

「烏、どうした」
急にそばを追いぬいて烏松が前へ出たので、鶴七郎はけげんそうに聞いた。
「いろはかるたに、油断大敵ってことがありますからねえ、殿さま」
「ああ、そうか、ころばぬ先のつえというわけか」
「まず、そんなところでござんす」
日はとっくに山のかなたへ沈んで、野良にはしだいに夕やみがひろがってきている。
「梟なら夜だろう、烏」
「いいえ、大塚組もまだ残っています」
「なるほど。――大塚組もいたな」
「しかしなあ、烏、わしたちは、今日ふいに上田を立ってきたのだ。それをさぐって追撃をかけるとしても、まだ先まわりはしていない。いずれにしても、決戦は夜になる」
と、判断をくだした。
「すると、今夜があぶないってわけですね」
「うむ」
それっきり鶴七郎は黙ってしまう。なにかしきりに頭の中で考えているようだ。
やがて、途中で日が暮れて、芳公がちょうちんの用意をした。晦日に近いころだから、空に星あかりはあるが、道は暗い。
海野の宿にかかったのは、六ツ半（七時）に近い時刻だったろうか。宿へはいるとまもなく、左側に「お泊まり、田中屋」という行灯をかけた小さな商人宿が目についた。
そこから二、三町ほど進むと、こんどは右側に「脇本陣、笹屋」と書いた掛け行灯が見えてきた。ここでは一番大きな旅籠らしい。
鶴七郎はその前に立ちどまって、
「ぴよ、お前、腹がすいているだろうが、しばらくわしに体を貸してくれぬか」
と、いつもの明るい顔にかえっていった。
「はい、お使いですか、殿さま」

「いや、どこかその辺にかくれて、一刻ほどここを見張っているのだ。敵はたぶん、わしたちがここへ泊まっているかどうか、聞きにくる。そしたら、そやつの後をつけておくれ」
「大役ですねえ、殿さま」
「うむ。後でな、握り飯をそっととどけてやるから、しっかりたのむぞ」
「はい」
芳公は目を輝かせながら、笹屋の横手へかくれ場所をさがしに行く。
鶴七郎は清太郎と烏松をうながして、笹屋の土間へはいっていった。

逆　転

「殿さま、どういう計略か知りませんが、飯を食う間だけ、あっしが見張りをかわってやっちゃ都合が悪いんですか」
奥の上座敷へ落ちつくとすぐ、烏松が遠慮そうに鶴七郎にきいた。
「そうだな。それでもいいのだが、ぴよにできることはなるべくぴよに手柄をさせてやろう」
「まいりやした。たしかにそのとおりでござんす。ぴよも一生懸命なんですからねえ」
「うむ。わしはな、さっき烏に油断大敵といわれて、ふっと気がついたのだ」
「そういえば、殿さまはあれからだいぶ考えこんでおいでになりやしたね」
「わしも彼らのしかえしを忘れていたわけではないが、そうたいしたことはあるまいと、高をくくっていた。というのは、こんど執拗な梟組を敵にまわして、ともかくも彼らを再三敗走させることのできた理由は、新式オランダ短筒の威力がこっちにあったからだ。彼らもその威力は十分知っているはずだから、わしがこの短筒を持っているかぎり、彼らには必勝の攻め手がないはずだし、また、どうふいに襲撃をかけられても、こっちは少しも恐れるにたらぬと、わしは考えていた」

「たしかにそのとおりでさ。殿さまは浜町の火薬さまでございますからね」
「ところがなあ、烏、わしの短筒があまり役に立たない攻め方、そういうテがありはしないかと、わしはさっきから道々それを考えていたのだ」
「なるほど。——そんなテがあるでしょうかねえ、殿さま」
「彼らにできそうなテが、一つだけあるようだ」
「へえ、どんなテでござんす。こいつは聞きずてならねえ」
烏松も清太郎も思わず目を光らせる。
「梟組も大塚組も、やり方が残忍で、人の迷惑など少しも考えないほうだ。目的のためには手段をえらばない。今まで何度もそれをくりかえしている。その伝でいけば、今夜わしたちがまくらについた寝入りばなをはかって、寝所近くへ火をかける。これなら、うまくいけばわしたちを焼き殺すことができるし、たとえ逃げだしても狼狽しているから、短筒を使わないうちに、なんとか始末がつくと考えることだ」
「やりかねやせんねえ、あいつらのことだから。——なあ、清さん」
「恐ろしいことです。油断していると、取りかえしのつかないことになるところでした」
清太郎は顔色をかえながら、うめくようにいった。
「わしもな、烏に油断大敵といわれて、やっとそこへ気がついた。万一、わしの考えがはずれていれば、これに越したことはないが、まず見ていなさい。今ぴよが必ずその答えを持ってきてくれるだろう」
そこへ女中が丹前を持ってきて、おふろがあいておりますと告げたが、むろん、ふろにはいるどころか、だれも丹前に着替えようとさえしなかった。
そして、ようやく夜食の膳が出たところへ、芳公が目を丸くして飛びこんできたのである。

「殿さま、大変です」
「もどったか。御苦労だったな、ぴよ。まあ、落ちついて話してごらん」
「ああ、そうだ、落ちつかなくちゃいけなかった」
芳公はそこへすわりなおして、
「敵が二人でやってきやがったんです」
と、いきなり切り出す。
「侍が二人か」
「そうなんです。一人が番頭を呼び出して、殿さまのことを聞いて、そうか、お泊まりになっているならそれでいい、われわれは公儀の役人だが、その方は身分のあるお方で、お忍びの旅なのだから、粗略にしないように、といって、あまり仰々しくしてもおきらいなさる、知らん顔が一番よいのだ。われわれが陰供をしていることも決してお耳に入れてはいかんと、そんなうまいことをいって、帰っていきやがるんです」
「そうか、役人を気どったわけだな」
「そうなんです。それから、おいら、そっと二人の後をつけていくと、さっき田中屋って安宿がありましたね、あそこへはいっていきました。中に仲間がいるようでしたが、あんまり近づいて見つかると大変だから、すぐに引きかえしてきたんです。なんなら、もう一度行って、人数をしらべておきましょうか」
芳公はもう中腰になりながらきく。
「いや、それだけわかれば大手柄だ。よくすぐに帰ってきた」
鶴七郎は芳公の労をねぎらってから、
「清太郎、早いほうがいいと思うが、どうだ」
と、清太郎のほうへ相談する。
「わたしもそう思います。二人でこっちをさぐりにきて、二人とも引きあげたのは敵の間違いで、ぐずぐずしていますと、また見張りに引きかえしてくるおそれがあります」
「よし、すぐに決行しよう。鳥、宿へは金をつかわしてな、ちょっと用たしに出るが、帰って

きて飯にするから、ここはこのままにしておくように、帳場へうまく話しておいてくれ」
「合点です」
鳥松が廊下へ出て行く間に、鶴七郎はふところの短筒を出して弾薬をしらべ、颯爽として立ちあがった。
ちょうどそのころ——。
前川房之助はつばめといっしょに、鶴七郎たちの後を追って、海野の宿へかかろうとしているところだった。
房之助は、公子が夕方黙って上田を去ったのを城中から早馬で知らされ、せめて江戸まで見送らなくては侍の義理が立つまいと、父房右衛門とも相談して、すぐ郡代屋敷を立ってきたのであった。
「あたしねえ、あんた、今夜おとっつぁんの寂しそうな顔を見たら、あんたに浪人をすすめるのがつらくなっちゃった」
つばめはしょぼんとして、道々何度もそれをくりかえしていた。
「それはむろん、おやじさまはわしたちをそばへおきたいだろうが、浜町さまに恩をかえすということは、上田藩としての大きなつとめなんだからな。おやじさまも、江戸へ行って御当主さまにお目にかかったら、よくその点をおうかがいしてみるようにといっているんだ」
「じゃ、おとっつぁんは、もう半分ぐらい覚悟しているのかしら」
「それは侍だからな、覚悟はしているだろう。嫁がしっかりしているから、どこでお前が暮らそうと、わしは安心だと、この間もいっていた」
「うれしいわ。そんなこと聞くと、一人でおいてきたのが、なおつらくなってくる」
「だから、わしは、せめて芳公うじでもと思ったんだが、それはぴよが承知すまいとことわられてしまったんだ」
「それは無理よ。あたしでさえ侍ぐらしは窮屈だと思うんですもの。それに、芳ちゃんも浜町

さまに姉さんの敵を討ってもらっているんですからね」
「まあ、まあ、そのことは江戸へ行って、御当主さまにお目にかかってからきめることにしよう」
「あら、ここに旅籠屋があるけど、まさかここじゃないでしょうね」
　田中屋の掛行灯を見て、つばめが房之助のそでをひいた。
「いや、ここは商人宿で、もう少し行くと笹屋という脇本陣がある」
　そう房之助が教えながら、田中屋の前を通りすぎようとすると、急にがらりとそこの油障子があいて、
「やあ、前川――」
　ぎょっとしたように、そこへ棒立ちになったのは、大塚組の西野森之助だった。
　――はてな。
　店の土間にまだ何人か仲間がいるようである。こんなところへ彼らが集まっているのは、むろん鶴七郎たちの後を追ってきたにちがいない。
「妙なところで会ったなあ、森之助」
　房之助はとっさにつばめを背にかばって、じりじりと後へさがる。
「なにッ、前川だって――」
　案の定、店から西野森之助を先頭にして、三人ばかりどかどかと往来へ出てきた。
　先頭の西野は同藩で顔見知りだが、あとの二人は、はじめて見る顔だ。目つきが妙に鋭いのは、梟組の者かもしれない。
「なあんだ、房の字、お前まだそんな女とつるんで歩いているのか」
　西野は頭から冷笑をあびせかけてくる。
「貴公たちこそ、こんなところで、なにをねらっているんだね」
「気の毒だなあ、前川。ここでおれたちの目にとまったからは、地獄の一丁目だとあきらめてもらおうか」
　西野はとっさに短筒を出して、房之助の胸へぴたりと銃口を向けながら、
「裏切り太夫、変な小細工をすると、五寸くぎより鉄砲弾のほうが早いぜ」
と、抜け目なく先手を打って出る。
「畜生――」
　つばめはすでに帯の間の五寸くぎを一本手にしているが、それを投げることができない。手をあげれば、ずどんとくるにちがいないからだ。
「だいぶ手下ができたようだな、西野」
　敵の弾は一発なのだ。ずどんとくれば、同時につばめの手から五寸くぎが飛ぶから、西野もめったに引き金はひけまいと、高はくくっているものの、房之助はじっとりとわきの下へ冷や汗をかいてきた。
「おい、よけいなことを言わないで、二人とも手をうしろへまわして、向こうをむくんだ。おとなしくこっちのとりこになれば、命だけは助けてやる」
　森之助は油断なく二人をにらみつけながら、急に冷酷な目の色になってきた。
「とりこになれば、本当に命だけは助けてくれるかね」
　わざと房之助は念をおす。うしろを向けば、左右にいる手下どもがいきなり切って出るとわかっているから、その前になんとか西野の手の短筒をたたき落としてしまわなければならない。
「くそッ、おれはうしろを向けと命令しているんだぞ。いいか、三つだけ数えてやる、三つ目が最後だぞ――。一つ」
　できるだけ短筒はうたない算段らしい。
「二つ」
　西野の左右の四人が、いっせいに刀の柄に手をかける。
「三つ」
　だあん。

意外のほうから銃声が起こって、あっと西野はよろめきながら、手から短筒を取り落とす。
「えいっ」
同時に踏みこんだ房之助が、抜き打ちに、西野の胴へ切りつけていた。
「う、うっ」
がくんと、森之助はそこへ両ひざをつく。
「畜生め、これでもくらえ」
つばめの手から五寸くぎが二本、房之助に切りつけようとする二人の敵の顔面へ飛んだ。
「わあッ」
「くそッ」
二人が思わず片手で顔をおさえて立ちすくむ間に、残る二人は、ばたばたと店の土間へ逃げこんでいく。
「動くな、動くと撃つぞ」
それを追って、叱咤するように戸口に立ち、短筒を突きつけたのは鶴七郎だった。
土間にいるのは五人、鶴七郎の短筒の威力はよく知っているので、茫然と顔を見あわせるばかりだ。
「帯刀をはずして、そこへおけ」
五人はいうなりになるほかはない。
「一人ずつ表へ出ろ。一番はお前だ」
形勢はまったく逆転して、一人ずつ往来へ出てくるやつを、清太郎と房之助が当人の下げ緒をとって、うしろ手に縛りあげる。
「太夫さん、よかったなあ」
芳公がつばめのそばへ走り寄って、目にいっぱい涙をためていた。
「ありがとう、芳ちゃん。今夜こそ、もうだめだと、あたしは覚悟していたのよ」
つばめはそで口で涙をふきながら、いまさらのように身ぶるいをしている。
「房あにいも、太夫さんも、いったいどこへ行く気だったんだろうな」
「ひどいわ、芳ちゃん。浜町さまがあたしたちを置いてけぼりになさるから、一生懸命後を追

ってきたんじゃありませんか」
「兄貴のおやじさまが、行ってもいいっていったのかい」
「ええ、江戸までお送りするようにって、言いつけられて出てきたのよ」
「それならいいけど、太夫さんが無理に房あにいを引っぱり出したんじゃ、おやじさまに悪いからな」
「そんなこと、あたしがするもんですか。あたしは、これでもあの人のおとっつぁんに、いい嫁だってほめられてるのよ」
「あっ、おじさんが宿役人をつれてきた」
烏松が呼んできた宿年寄りたちは、鶴七郎を見ると、みんなそこへ土下座して、
「これ、それにはおよばぬ。それでは話ができぬ」
と、鶴七郎を当惑させていた。
その夜、即死したのは西野森之助一人だった。だから、なわ目をうけたのは梟組の残党六人だけで、彼らの持ち物の中から焼き玉が三個出てきた。
「本当にあぶないところだったんだなあ、清さん」
それを見た烏松は、おぞけをふるって、そっと清太郎にささやいていた。清太郎は清太郎で、
「これで、松つぁん、やっと無事に江戸へ帰れそうだな」
と言いながら、はじめて、しみじみとお蓮の顔を思いだし、急に江戸の空が恋しくなるのだから、われながら正直なものだなと思った。

●江戸おもしろ事典

将軍家とご落胤

ご落胤って何なのか

ご落胤って何？　と不意に聞かれても、とっさには返事ができない。分かっているようで、案外たしかなことは分かっていないからだ。おとしだね、だよ、では返事にならない。そこで広辞苑をひいてみる（ただし、ご落胤でなく落胤でひかないと出てこない）。

落胤＝貴人の嫡妻でない賤しい女の腹から生まれた子。おとしだね。――ばら〔落胤腹〕落胤として生まれたこと。また、その人。

となっている。しかし、これだけの説明ではまだ腑に落ちない。たとえば、落胤の母親は賤しい女でなければならないのか、という点だ。妻帯している貴人と、独身の貴人の娘とのあいだに生まれた子供は、落胤とはいわないのか？　さらには妾、側室から生まれた子供は、落胤とはどう違うのか？　まだある。女の腹から生まれた子、となっているが、男の子も女の子も同様なのか？　普通慣習的には、ご落胤というと男の子のみを指すが、本来は男女の別がないのか？　いろいろ疑問が出てくる。

しかし、それは別にして、このご落胤という出来事？は、洋の東西を問わず存在した。封建制度につきものであったからであろう。だが、西にくらべると東のほうが、ご落胤に対してどちらかというと好意的だ。ことに、日本人はご落胤好き？　で、軽蔑どころか、一種の憧憬みたいなものさえ持っている。後にのべる天一坊みたいな、偽ご落胤に対してさえも、憎悪など持たず、今もって語られている。

その気分は、ご落胤などという身分も、言葉

さえもなくなった現代でも、まだまだ脈々と生きている。

たとえば、あまり有能でないA君のことを噂する。

「あいつは間ぬけで、のんびりしていて、使い物にならないよ。若いくせにもっとハキハキすればいいんだ」

と、B氏が言う。するとC氏が、

「だが、あれはK氏（貴人または伝統ある大財閥当主あるいは一代の成功者）のご落胤なんだよ」

と答えたとする。するとB氏は、

「なるほど、それでどこかおっとりしているんだな。するとそのうち、血が目覚めて、偉大なことをやるかもしれないな」

と、にわかに好意を持ったりする。いってみれば、ご落胤という言葉自体に、夢にも似たロマンを抱いているのであろう。

ちなみに、この会話の中にある、血、というのは、無論父親の血であって、母親のそれではない。昔は「腹は借りもの」といって、男子が出産しても、その母親が何者であるかは、その子の才能、能力と無縁のものと考えていた。つまり、父親さえすぐれていれば、母親は多少劣っていても、その子は必ず父親の能力をうけつぎ、発揮する、と信じられていたのである。

この事は遺伝学的にも充分に立証されているようだ。たとえば、この例を最も端的にしめし、かつ存分に応用されているのが、競馬ウマである。競馬ウマの生産、育成の窮極の目的は、一秒でも速く走るウマをこの世に出すことである。その目的にそって、過去速く走ったウマをえらび、子を作り、その子を訓練する。この場合、父ウマの速く走った、丈夫であった、などという記録は非常に重大視され、尊重されるが、母ウマのほうは、遅く走ったのより速く走っていたほうが良いだろう、という程度のもので、その持っている過去の栄光や記録はあまり重要視されない。つまり、父ウマの血のみが

問題であって、母ウマの血は早くいえばどうでもよいのである。かくて競馬ウマは、年々優秀（速く走る）なのが生産、育成されて今日に至っている。

　こうした父性の重要性を、昔の人は、ウマなどだけでなく、人間も同じ動物であるからあるにちがいない、と科学的にではなく、生き物の知恵として、また人類としての長年の経験をプラスして理解し、営々として今日の人間をつくりあげたのではないか。こういう話、ウーマンリブの人々にとって怒りの種であろうが、天然の摂理なのだからしかたがなかろう。

　ともあれ、こうしたことも加味され、日本人はご落胤にロマンを抱いた。そして、やたらにご落胤を生産し、また自称ご落胤があちこちに存在した。今日、何々のご落胤の子孫でございます、という人が数多く存在するのもそのためか？

　では、どういう人々がご落胤を生産したかというと、やはり何といっても公卿であり、ついで大名たちである。公卿は貧乏ではあったが暇があった。子作りには金はいらない。時間と体力さえあればいいのだし、それに彼らは地位や容貌が女に好かれるようにできていたので、せっせとご落胤づくりに励んだのであろう。

　そこへゆくと、大名は暇があったが、自分の時間がないのと、監視の目が多いのとで、ご落胤づくりには、その気があっても励めなかった。たとえば、腰元の中に気に入ったのがいても、人目を忍んで口説くということができなかったのだ。たえずだれかがくっついていたからである。それで、どうしてもその女が欲しくなると、老女（腰元取締役）にそっと耳うちし、準備万端ととのえさせてから、抱く、という順序を踏む。だから、こうしてできた子は、ご落胤とはいわない。脇腹ということになる。

　将軍家（徳川）となると、これがもっと厳しくなる。ご落胤どころか、脇腹の子ですらそう容易に生産できない。その一つの理由は、あん

まり子供ができすぎると、その処置に困るからである。

天一坊は本当にご落胤か

　歴代の徳川の将軍の中で、第一番の子作りの名人は、第十一代家斉であった。

　なにしろ世の中が文化・文政という、徳川の治世の中でも第一等に頽廃し、享楽主義がはびこった時代だから、朝に夕に、そして夜に、子作りに励まないほうがおかしい。フリー・セックスとかスワッピングなどという言葉こそなかったが、実際でそれを行っていたのである。

　したがって、人妻の浮気なども珍しくなかった。当時、人妻が浮気した場合、亭主が発見し、まぎれがなかったら、亭主の権限で、姦夫、姦婦を煮ても焼いても自由だった。つまり、生殺与奪の権をあたえられていたのである。

　だけど、余り殺さなかった。七両二分、後世になるともっと安く、五両くらいで両方とも許してやってしまった。七両二分というのは、当時十両盗むと斬首の刑、つまり首が飛んだ。姦通は盗みは盗みだけど、別に使ってへるものを盗んだのではないから、十両よりすこし下、七両二分くらいで首をつないでやる、という考えから出た数字のようだ。これほど性の倫理観がおちていた時代だったのだ。

　家斉は一代で、四十八人とか七十四人とかの子供を作ったと伝えられている。この子をほとんど、各大名家や高家などへはめこんだのだから、はめこまれたほうも大騒動であったろうが、はめこみに走りまわった重臣たちも大汗をかいたことであろう。

　しかし、それにしても、この四十八人ないし七十四人を、ご落胤とはいわない。みんな母親こそいろいろ違うが、れっきとした認知された子供たちである。

　では、歴代の徳川の将軍の中で、正式な？　ご落胤をつくったのはだれだろう？　これが一

人もいないのである。あるいはいても、名乗り出なかったり、ひそかに抹殺されてしまったのか、とにかく公式記録として残されていない。

たった一人、いるとすれば、八代将軍吉宗であろうか。かの有名な紀州天一坊である。

吉宗がまだ紀州にいて、徳太郎といっていた時分、ある女を愛し、男子を産ませた。その子が成長して、将軍吉宗のご落胤を名乗って江戸へ出てきた、という事件である。

しかし、この天一坊事件も、真相は混沌とした靄の中で、わからない。第一、天一坊は、巷説として二人いる。一人は天一坊宝沢であり、一人は天一坊快行である。

天一坊宝沢のほうは『温故実録』や『絵本天一坊実記』に書かれていて、吉宗に愛され男子を産んだ澤の井の母お三が、娘と孫に死なれ、ある日訪ねてきた宝沢が、孫と同年同月の生まれと知って、悲しみの余り、証拠の品を見せて身の上を語った。

もともと、悪心の強い宝沢は、話を聞くと、

「これはいい金儲けになる」

と悪心を起こし、お三婆さんを殺して、証拠の短刀を奪った。この時は宝沢はまだ、ご落胤を名乗って天下を乗っとろうとまでは考えていなかったらしい。

その後、赤川大膳、僧天忠、山内伊賀亮などと知り合い、その入れ知恵で、

「どうせ死ぬなら、一か八か、大バクチを打ってやれ」

と度胸をすえ、徳川天一坊と名乗って、金を集め、人を集め、堂々と江戸へ乗り込んだのである。

一方、天一坊快行のほうは、これまた紀州の生まれではあるが、そしてご落胤はご落胤だが、単なる紀州侍の不義の子で、のち母子で江戸へ出、いろいろあって品川の常楽院の弟子坊主になった。

快行は酒ぐせが悪く傲慢な男で、つねづね、

「オレはお前たちと違って、由緒ある生まれなのだぞ」

と、ご落胤を自慢していた。

なるほど快行は酒ぐせが悪く、性格もよくないが、色が白く、どことなく品のある容貌をしており、体ぜんたいにも気品がただよっていた。

これに目をつけた常楽院は、一パツ金儲けをしてやれと、還俗して名を赤川大膳とあらため家老になり、南部権太夫、本多源左衛門らと語らって、

「天一坊快行さまこそ、実は将軍家のご落胤である。いま仕官しておけば、のちのち天一坊さまが将軍さまと親子の対面をなし、大大名におなりになったあかつき、相違なく出世ができるであろうぞ。その証拠に日光御門主も天一坊さまをご落胤とお認めになり、一万俵の合力米をくだされたほどである」

などと嘘八百をならべ、天下に満ちあふれた浪人たちに呼びかけた。

浪人たちはその言葉を信じたのか、あるいはひょっとしたらという賭のつもりか、とにかく金銀を算段して、天一坊に献上し、家来にしてもらった。その数、三十とも五十ともいわれている。

そして、これを裁いたのは、名奉行のほまれ高い大岡越前守だ、となっている。

なっている、というのは、果たして宝沢にしろ快行にしろ、天一坊事件というのがあったのかなかったのか、公式の記録にはあまりに簡単にしか記載されていないからだ。

これは誠に奇怪至極といわなければならない。なぜなら、すくなくとも事は天下の将軍家にかかわる問題である。たとえそれが偽者であろうが、大事件で、一町奉行の身分でかたづけられる問題ではなく、老中、大目付など、上級役人も騒ぎにまきこまれたであろう。

それが、たった一行か二行しか記録されていないというのは、あるいはひょっとして、天一

坊は本物で、ただ天下のため、将軍家のためにならないと判断され、闇から闇へほうむられてしまったのではないか、と勘ぐられても仕方がないのではないか？

ご落胤を名乗るのも命がけ

現在は四民平等、いや大体四民なんて考え方すら存在しないし、家族制度そのものも否定されて、家なんて夫婦単位で、先祖も子孫もない世の中だから、「オレは何々のご落胤だぞ」とか、「オレは何々のご落胤の末裔だ」と言っても、「ほう、結構ですね。どうりでお顔立ちがどこか品があると思っていました」

と、くすぐられて終わってしまう。ほめる人も、うらやむ人も、憎悪する人も、軽蔑する人もいるかもしれないが、すくなくとも暗殺されることはない。

徳川時代もそうだった。市井に埋もれて、安酒を飲みながら、同じ酔っぱらい仲間に、

「やい、オレは××のご落胤だぞ」

と威張っている限りは、別に問題にもならず、命にも別状はなかった。

しかし、これがひとたび、世間の大評判を呼んだり、あるいは先の天一坊ではないが、金儲けをたくらんだりすると、大事件どころか命まで危険にさらされることになる。

安永の末年のころ、神田多町の八百屋に、野介という十七歳になる小僧がいた。

野介は浪人の子供であったが、父母が七歳のとき死亡し、以来、八百屋にひきとられ、自分も商人になるつもりで、商いに励んでいたのである。

野介は頭もよく、動作も機敏で、しかも顔立ちにも気品があったので、八百屋夫婦はむろん近所の人からも、「やはりサムライの子はどこ、か違う」という評判があり、かわいがられていた。

その野介が、ある日、どういうつもりか、ひょっとしたら自分の評判にさらにハクをつけた

いと思ったのか、主人夫婦に、

「実はわたしは、亡くなった父母の本当の子供ではなく、田沼意次の隠し子です」

と告白した。

八百屋夫婦はびっくり仰天した。田沼といえば、老中として肩をならべる者もない権力者である。田沼がクシャミをすると、大名が五人はカゼを引く、といわれたくらいだ。その最高権力者のご落胤だ、というのだから、驚いたのは当然である。

「本当か。まさか冗談じゃないだろうね」

夫婦は何度も何度も念をおした。

「本当です。これが何よりの証拠です」

野介は古びた短刀まで持ち出して見せた。

これが近所の評判になった。八百屋夫婦もだまっていられず、つい近所中にふれまわってしまったのである。これを聞いた近所の者は、「やはりね。どうりでどこか品が違うと思っていたよ」と頭から信じ、また違う者に話す。

こうして、噂は噂をよんでひろまっていった。

昔は現代のように新聞や週刊誌や、ラジオ、テレビのような情報伝達機関がまるでなかったが、しかし噂の伝播力は、現代におとらず速かった。たとえば、浅野内匠頭の松の廊下での刃傷事件が、二日後には噂として赤穂へ伝わっていたというのである。早駕籠より速かったわけである。

それはとにかく、野介の噂も、近所中だけの噂で止まっていたのだったら、あるいは何事もおきなかったかもしれない。

が、世の中、そう悪心がなくても、自分の金儲け、あるいは出世のためなら、利用できるものならなんでも利用してやろう、と考えているやつは大勢いる。

そういう人間が野介の周囲に集まってきて、野介ばかりか、八百屋夫婦もたきつけて、野介をまつりあげはじめた。

野介は非常にそれをきらった。次第に怖くな

ってきたのである。八百屋夫婦も、ためらいながらも、野介をまつりあげる勢力にひきずられていった。

商売もやっていられず、裏の空地に立派な家屋を新築し、そこへ野介を住まわせ、いろいろの人から献上された金銭物品で、善美を尽くした衣服、食事を与えた。いってみれば家老、執事役というところである。

野介は初めのころは、いやがったり遠慮していたが、そしてその時、実はあれはわたしの口から出まかせです、と告白してしまえばよかったのだが、慣れとは恐ろしいもので、次第に野介はそういう生活を嫌悪したりしりごみしなくなって、反対に、

「今日は××が食べたい」

などと威張って注文するようにさえなっていった。そして、信者（?）に対して、

「今にわたしが世間に出たら、必ずおぬしの事はよきにはからうであろう」

などと、気をもたせることを口にするようになった。

この事が町奉行所の耳に入らないはずはなかった。ひそかに同心の探索の手が野介の周辺にのびはじめた。

が、それとほとんど同時に、ある夜を境にして、野介の身が、寝室から忽然として消えてしまった。人々は、

「神かくしにあったのだ」

「いや、ひそかに田沼さまにひきとられたのだ」

と、いろいろ噂したが、真相は不明だった。

おそらく田沼の手によって闇にほうむられたのではないか。偽者であれ本物であれ田沼家にとっては、利益になる存在ではないからだろう。

ともあれ、こうして神かくしの名のもとに、闇から闇にほうむられた〝ご落胤〟は、野介だけでなく、もっとほかにも大勢いたかもしれない。それもまた〝ご落胤〟のロマンの種か――

（郡　順史）

山手樹一郎長編時代小説全集41

わんぱく公子

発行――一九七七年一二月一〇日初版第一刷
一九八二年　四月一五日初版第八刷
著者――山手樹一郎©
装画――国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁――玉井ヒロテル
発行者――和田欣之介
発行所――株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三　☎東京二七一―〇〇五一　振替東京〇―一六一七
印刷製本――城北印刷製本センター
◆――定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします